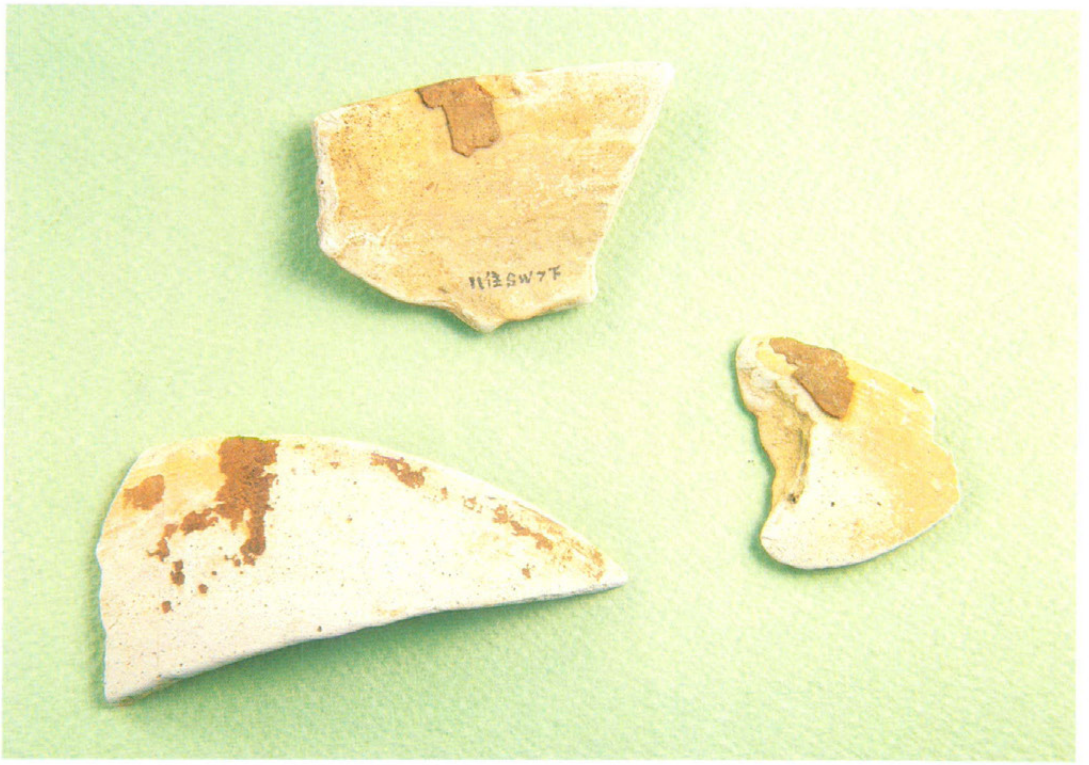
松本市島立条里的遺構Ⅲ

—県営ほ場整備事業に伴う緊急発掘調査報告書—

1989・3

松本市教育委員会

町区地内　漆



永田地内　漆付着土器

永田地内　第14号住居址カマド

町区地内　竪穴状遺構５　炭化米の状況

序

昭和59年に始まった島立条里的遺構の発掘調査も今年で4回目をむかえました。

今回の調査も、今までと同様島立地区のほ場整備事業に伴うもので、松本市教育委員会が松本地方事務所からの委託を受けて実施しました。

発掘調査は市教委職員を中心に地元考古学研究者、地区の皆様の御協力により昭和62年8月から翌年1月にかけて行われ、その後の整理作業とあわせてその結果を無事ここにまとめることができました。

島立条里的遺構は古代からの水田の計画開発の跡ではないかと言われて来ましたが、残念ながら今回もそれら旧水田の跡は発見することができず、集落の一部を確認したにとどまりました。しかし今回までの調査が今後の調査と共に積み重ねられることにより、島立地区の歴史がより明らかになることは十二分に期待できるものであります。

現在島立地区では中央自動車道をはじめ大型開発があいついでおり、同地区の遺跡の多くは消えゆく運命にあるのかもしれません。それらの遺跡保存と地区の歴史解明に微力を尽くすことが私どもの責務であると考えております。

最後にこの調査にあたり多大な御理解と御協力をいただいた島立土地改良区、島立公民館、そして地元の皆様に心から感謝の意を表しまして序といたします。

平成元年3月

松本市教育委員会教育長　中　島　俊　彦

例　言

1、本書は、昭和62年９月１日から21日まで（小柴地内）、同年11月24日から12月18日まで（永田地内）、12月21日から翌63年１月13日まで（町区地内）それぞれ実施された、島立条里的遺構の緊急発掘に関する報告書である。

2、本調査は、松本市が長野県松本地方事務所より委託をうけ、松本市教育委員会が調査を行なったものである。

3、現場作業は、高桑俊雄（小柴地内）と竹原学（永田・町区地内）が担当した。

4、本書の執筆は下記の通りであり、下記以外のものについては高桑が行なった。

第１章　事務局

第２章　第１節　　太田守夫

第３章　第２節　　２　松沢利幸　　３－１）土橋久子　　２）神沢昌二郎　　４竹原学

　　第３節　　２－１）・２）竹原　　３）松沢　　３－１）野村一寿　　２）神沢

　　４　竹原

5、本書作成に関する作業の分担は次の通りである。

編集作業：滝沢智恵子

遺構図作成：丸山恵子、百瀬二三子

遺構図整理、トレース：石合英子、松沢利幸

遺物復元：乾靖子、上條尚美

遺物実測、トレース：土橋久子、松尾明恵（土器）、神沢昌二郎（鉄器）、赤羽包子（石器）

一覧表作成：神沢ひとみ、川窪命子

写真撮影：宮嶋洋一（遺物）、高桑俊雄、竹原学（遺構）

6、出土遺物及び図類は松本市教育委員会が保管している。

7、なお県埋蔵文化財センターの石上周蔵・野村一寿両調査研究員には、遺物に関してお世話になり記して感謝申し上げたい。

8、本書内で使用したスクリーントーンは、次のとおりである。

焼土（カマド内被熱部）　灰、もしくは藁状炭化物　確認できた柱痕跡

目　次

第１章　調査経過

第１節　調査に至る経過……5

第２節　調査体制……8

第３節　調査日誌……9

第２章　遺跡の環境

第１節　遺跡の立地と地形・地質……11

第２節　周辺遺跡……13

第３章　調査結果

第１節　小柴地内

１．調査の概要……15

２．遺構と遺物……15

３．小結……16

第２節　永田地内

１．調査の概要……17

２．遺構……21

１）竪穴住居址

第４号住居址……21　第５号住居址……21

第６号住居址……25　第７号住居址……26

第８号住居址……26　第９号住居址……29

第10号住居址……29　第11号住居址……29

第12・18号住居址……30　第13号住居址……32

第14号住居址……33　第15号住居址……34

第16号住居址……35　第17号住居址……35

第19号住居址……36　第20号住居址……37

２）掘立柱建物址・柵列……39

３）土壙・溝址……48

３．遺物

１）土器……52

２）鉄器……89

３）石器・土製品等……91

4．小結……93
第3節　町区地内
1．調査の概要……94
2．遺構
1）竪穴状遺構……96
2）池状遺構……107
3）土壙……110
4）ピット……114
5）溝址……115
3．遺物
1）陶磁器・土器……116
2）鉄器・銅製品・古銭……119
3）石器……121
4．小結……127
第4章　調査のまとめ……128

表　目　次

表1　永田地内住居址一覧表……38
表2　建物址一覧表……46
表3　柵列一覧表……47
表4　土壙一覧表……51
表5　土師器器種・器形一覧表……53
表6　須恵器器種・器形一覧表……54
表7　住居址外遺構器種・器形別土器出土量一覧……63
表8　土器出土量一覧（1）……64
表9　土器出土量一覧（2）……65
表10　出土土器観察表……83
表11　鉄器・銅製品・古銭一覧表……89
表12　石器・土製品等一覧表……91
表13　町区地内竪穴状遺構一覧表……106
表14　土壙一覧表……110
表15　陶磁器・土器一覧表……117
表16　鉄器・銅製品・古銭一覧表……119
表17　石器一覧表……122

挿図目次

第1図　調査地の位置（1）……6
第2図　調査地の位置（2）……7
第3図　周辺遺跡……14
第4図　小柴地内調査範囲……15
第5図　土層概略……16
第6図　出土遺物……16
第7図　永田地内調査範囲……17
第8図　遺構配置・土層概略……18
第9図　第4号住居址……22
第10図　第5号住居址……23
第11図　第6号住居址……24
第12図　第6号住居址遺物出土状況……25
第13図　第7号住居址……26
第14図　第8・9号住居址……27
第15図　第10号住居址……28
第16図　第11号住居址……30
第17図　第12・18号住居址……31
第18図　第13号住居址……32
第19図　第14号住居址……33
第20図　第15号住居址……34
第21図　第16号住居址……35
第22図　第17号住居址……36
第23図　第19・20号住居址……37
第24図　建物址1……40
第25図　建物址2……41
第26図　建物址5……42
第27図　建物址6・7……43
第28図　建物址4、柵列1・4……44
第29図　柵列2・3・5・6……45
第30図　土壙（1）……49
第31図　土壙（2）……50
第32図　溝址……51
第33図　出土土器（1）……66
～
第49図　出土土器（17）……82
第50図　鉄器・銅製品……90
第51図　石器・土製品……92
第52図　町区地内調査範囲……94
第53図　調査地と小字名……95
第54図　遺構配置・土層概略……97
第55図　竪穴状遺構1・2・3……103
第56図　竪穴状遺構4……104
第57図　竪穴状遺構5……105
第58図　竪穴状遺構6・8……106
第59図　池状遺構……108
第60図　池状遺構遺物出土状況……109
第61図　土壙（1）……111
第62図　土壙（2）……112
第63図　ピット（1）……113
第64図　ピット（2）……114
第65図　溝址……115
第66図　陶磁器・土器……118
第67図　鉄器・銅製品・古銭……120
第68図　石器（1）……123
～
第71図　石器（4）……126

付図　町区地内ピット配置図

第１章　調査経過

第１節　事業の経緯と文書記録

昭和61年８月29日　埋蔵文化財保護協議を市役所及び現地にて実施。出席者は長野県教育委員会、松本地方事務所、松本市教育委員会。

12月23日　昭和62年度補助事業計画書提出。

昭和62年８月５日　昭和62年度県営ほ場整備事業島立地区島立条里的遺構埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約を結ぶ。

８月７日　昭和62年度国宝・重要文化財等保存整備補助金（国庫）計画変更承認申請書提出。

８月25日　島立条里的遺構埋蔵文化財発掘調査の通知提出。

９月７日　昭和63年度埋蔵文化財保護協議を市役所及び現地にて実施。出席者は長野県教育委員会、松本地方事務所、松本市教育委員会。

９月24日　島立条里的遺構埋蔵文化財取得届及び同保管証提出。

11月６日　島立条里的遺構埋蔵物の文化財認定通知。

12月９日　昭和62年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）変更交付決定通知。

12月21日　昭和63年度補助事業計画書提出。

12月24日　昭和62年度文化財保護事業補助金（県費）計画変更承認申請書提出。

12月25日　昭和62年度文化財保護事業補助金（県費）変更交付決定通知。

昭和63年１月28日　島立条里的遺構埋蔵文化財取得届及び同保管証提出。

４月５日　島立条里的遺構埋蔵物の文化財認定通知。

４月７日　昭和63年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金内定。

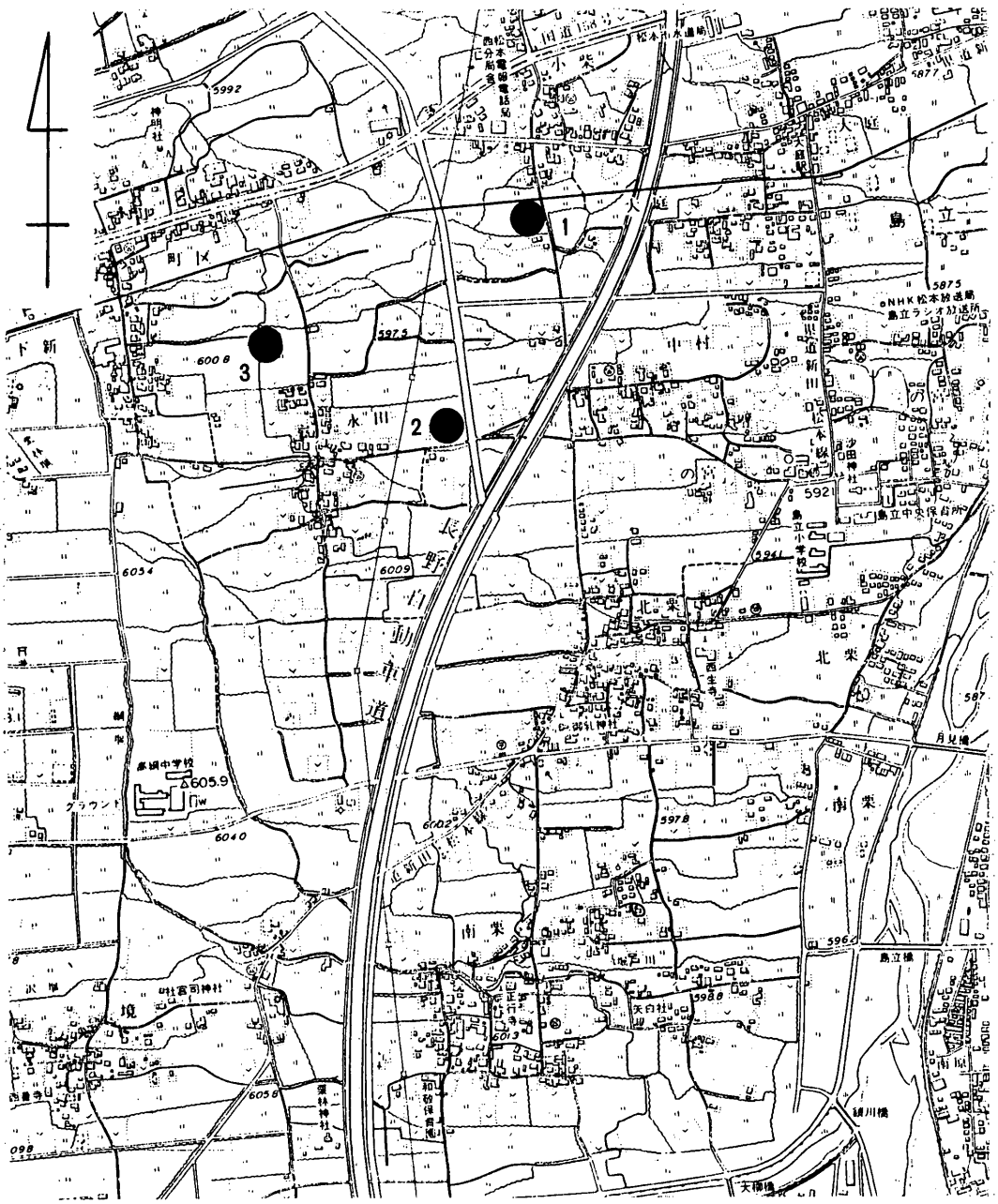
４月27日　昭和63年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）交付申請書提出。

５月31日　昭和63年度文化財保護事業補助金（県費）内示。

６月14日　昭和63年度文化財保護事業補助金（県費）交付申請書提出。

６月21日　昭和63年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）交付決定通知。

８月25日　昭和63年度文化財保護事業補助金（県費）交付決定通知。



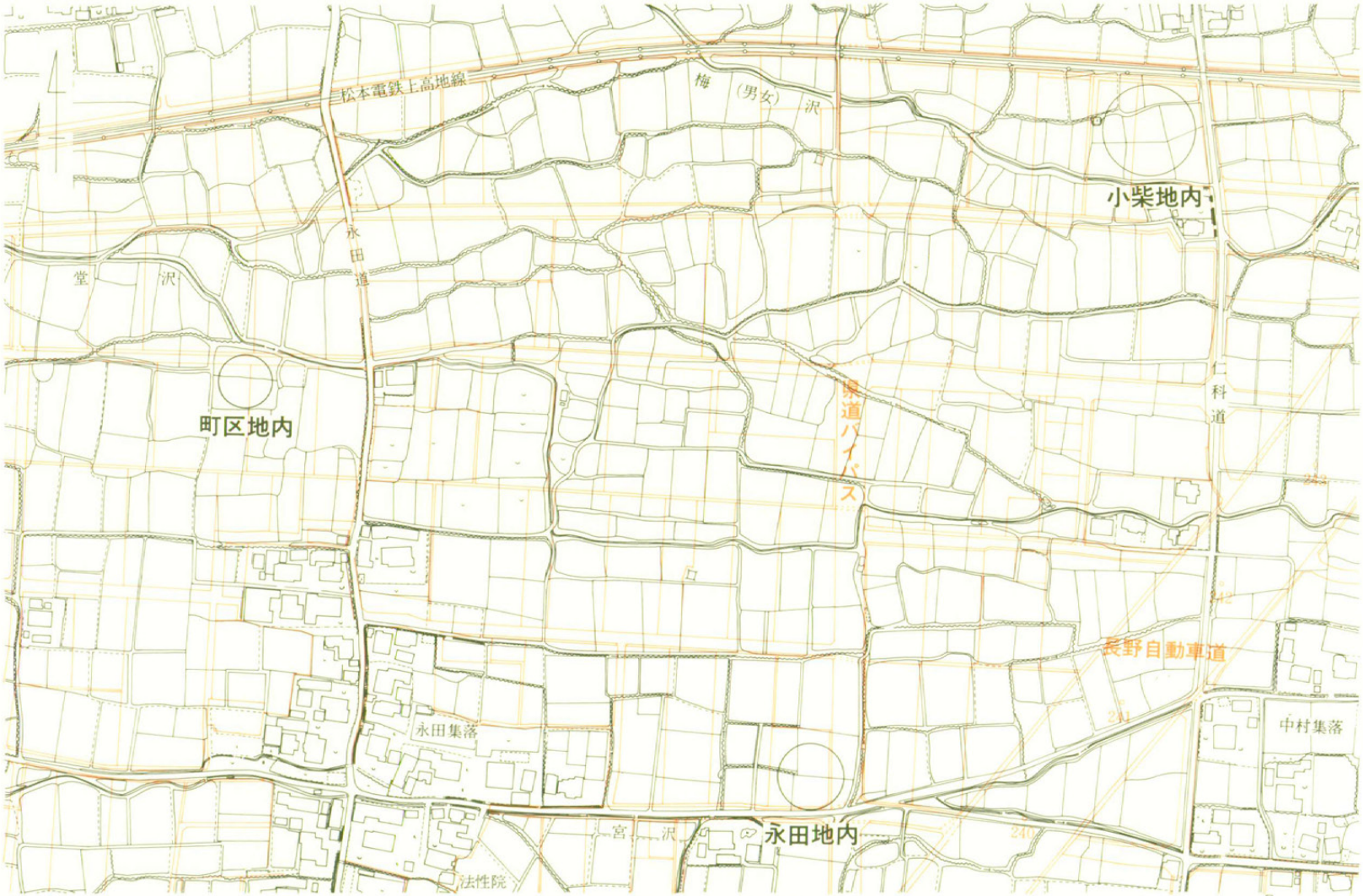
1．小柴地内

2．永田地内

3．町区地内

0　500　1,000m

第１図　調査地の位置（１）


松本電鉄上高地線
梅（男女）沢
小柴地内
永田道
堂沢
町区地内
東道バイパス
科道
長野自動車道
中村集落
永田集落
宮沢
永田地内
法性院
0
50
100m

第２図　調査地の位置（２）

第2節　調査体制

1．昭和62年度（発掘作業・整理作業）

松本市教育委員会の直営事業として、以下の調査団を結成し行った。

調査団長	中島俊彦（松本市教育委員会教育長）
調査担当者	神沢昌二郎（松本市立考古博物館館長）
現場責任者	高桑俊雄・竹原学（社会教育課埋文担当）
調査員	太田守夫（地形・地質）・土橋久子（考古） 森　義直（自然遺物）
事務局	浅輪幸市（社会教育課長）、小松晃（文化係長）、柳沢忠博（主査） 大村敏博（主査）、熊谷康治（主事）、洞田睦子
作業協力者	浅野房子、浅野八重子、石合英子、石川末四郎、岩坂善郎、岩野公子 今村嘉子、大出六郎、太田千尋、大塚袈裟六、奥原富蔵、小沢清人 小野いつ美、小野勝近、小野まさ子、金子富人、北野三千代 栗原清水、小池直人、神戸巌、坂下しげる、住吉琢磨、瀬川長広 袖山勝美、曽根原令子、高山園子、高山淑三、武井緑、竹中東 田多井うめ子、田多井亘、塚田つた江、塚田文子、土橋久美子 鶴川登、中島新嗣、中島千矢子、中島治香、萩野幸枝、林昭雄 原沢一二三、松本かつよ、松森幸子、丸山恵子、百瀬縫代、百瀬義友 百瀬二三子、矢島利保

2．昭和63年度（整理作業）

前年同様に市教育委員会の直営事業として実施したが特に調査団は編成しなかった。

雪降る日も、霧濃い日も、御苦労様でした。

第３節　調査日誌

小柴地内

昭和62年９月１日　（火）　晴　　重機による表土剝ぎ　市教委：高桑（以下同）　作業員：百瀬義友他１名（以下作業員数のみ記載）

９月２日　（水）　晴　　重機による表土剝ぎ　作業員：２名

９月３日　（木）　曇　　重機による検出作業　検出作業開始　作業員：２名

９月７日　（月）　曇時々晴　　検出作業　作業員：４名

９月８日　（火）　晴　　検出作業　作業員：11名

９月９日　（水）　晴後曇　　検出作業　作業員：14名

９月10日　（木）　晴後曇　　トレンチ掘り下げ開始　作業員：15名

９月16日　（水）　曇　　トレンチ掘り下げ継続　作業員：９名

９月17日　（木）　曇　　トレンチ掘り終る　土層図作成　ピット掘り下げ開始　作業員：９名

９月18日　（金）　曇　　ピット掘り下げ　検出作業　作業員：10名

９月19日　（土）　晴　　全体図作成　テント撤去　発掘資材搬出　作業員：５名

９月21日　（月）　晴　　全体図作成　本日にて現場作業終了　作業員：１名

永田地内

昭和62年11月24日　（月）　晴　　重機削平　検出開始　市教委：竹原（以下同）　作業員：14名

11月25日　（水）　晴　　検出作業継続　作業員：22名

11月26日　（木）　晴　　検出作業継続　作業員：20名

11月27日　（金）　曇　　引き続き検出作業、ほぼ終了する　作業員：25名

11月28日　（土）　曇　　６、13、15、17住掘り下げ開始　トランシット測量　作業員：21名

11月30日　（月）　晴　　13、15、17住土層図作成　写真撮影　全体図作成　作業員：27名

12月１日　（火）　晴　　７～11住、19住　土壙６掘り下げ　作業員：20名

12月２日　（水）　曇後晴　　９住より刻書碗出土　７～11住、19住、土壙６土層図作成　写真撮影　作業員：21名

12月３日　（木）　晴　　10、13住カマド精査　写真撮影　６住土層図作成　写真撮影　土壙１、３、６、８掘り下げ　作業員：21名

12月４日　（金）　晴　　土壙掘り下げ継続　４、５、20住掘り下げ　作業員：19名

12月５日　（土）　曇　　土壙４、５住土層図作成　土壙11～15掘り下げ　作業員：20名

12月９日　（水）　曇後雨　　５、15住カマド精査　写真撮影　20住土層図作成　写真撮影　土壙４　柱列１、３、４、６掘り下げ　作業員：19名

12月10日　（木）　曇　土壙４、柱列　土層図作成　写真撮影　12、14住掘り下げ　土壙１～３、７、９掘り下げ　土層図作成　作業員：15名

12月11日　（金）　曇　12、14住土層図作成　写真撮影　12住カマド精査　土層図作成　建物址２、４、５、７掘り下げ　土層図作成　作業員：32名

12月12日　（土）　曇　６、14住カマド精査　写真撮影　溝１、３と建１、６掘り下げ　平面図作成開始　作業員：34名

12月14日　（月）　晴　溝１、３と建１、６の土層図作成　15、16住カマド精査　柱列２、５と溝２、４、５掘り下げ、土層図作成　全員で記念撮影　作業員：34名

12月15日　（火）　晴　平面図、測量継続　作業員：５名

12月16日　（水）　曇時々晴　平面図、測量継続　作業員：３名

12月18日　（金）　晴　本日にて現場作業終了　道具整理　遺物運搬　作業員：１名

町区地内

昭和62年12月19日　（土）　晴　検出作業　市教委：竹原（以下同）　作業員：22名

12月21日　（月）　晴　検出作業継続　作業員：22名

12月22日　（火）　晴　トランシット測量　全体図作成　溝１掘り下げ開始　作業員：24名

12月23日　（水）　晴　溝１継続　土壙２、16と竪穴状遺構１（以下竪○とする）掘り下げ　土層図作成　作業員：23名

12月24日　（木）　晴　溝１土層図作成　竪１と土壙２、16写真撮影　土壙１、５、６、８～10掘り下げ　土層図作成　作業員：21名

12月25日　（金）　晴　土壙３、４、７、12、13と池状遺構掘り下げ　土層図作成　作業員20名

12月26日　（土）　晴　掘り下げ継続　土壙３、４、７、12、13と池状遺構写真撮影　竪５掘り下げ　土層図作成　作業員：23名

12月28日　（月）　晴　道具整理　遺物運搬　62年の作業本日にて終了　作業員：２名

昭和63年１月６日　（水）　曇　竪５、北方へトレンチを入れる　竪２～４、６、８と土壙14掘り下げ　作業員：14名

１月７日　（木）　晴　遺構掘り下げ継続　土層図作成　土壙15掘り下げ　作業員：15名

１月８日　（金）　晴　土壙15土層図作成　ピット掘り下げ　土層図作成　平面図作成開始　作業員：18名

１月９日　（土）　晴　遺構写真撮影　土壙16、17掘り下げ　土層図作成　作業員：８名

１月11日　（月）　晴　測量継続　土壙、ピット掘り下げ　作業員：４名

１月13日　（水）　晴　道具整理　遺物運搬　本日にて現場作業終了　作業員：２名

調査終了後は報告書の作成のため遺物洗浄、注記、復元、拓影、実測、トレース、図版整理、原稿執筆を行なっている。

第２章　遺跡の環境

第１節　遺跡の立地と地形・地質

１．各地区内の位置と地形

永田地内（標高596m）、町区地内（標高599m）は松本市島立永田集落のそれぞれ東と北に位置している。既報の新設県道の発掘調査地（松本市文化財調査報告No.63－松本市島立条里的遺構）の西際（永田地内）400m（町区地内）に当たる。小柴地内（標高594m）は島立小柴集落の南、松本電鉄上高地線の南沿いに位置し、新設県道発掘調査地の東200mに当る。

地形上は梓川扇状地に属する沖積扇状地性の堆積で、新村安塚－南新－東新と続く地形面の一段下位の、上新－北新－下新南－町区南に連なる地形面に位置し、地形面の平均傾斜は９である。この付近一帯は、土壌深度60cm以上と報告されている水田地帯（東筑摩郡松本市誌第一巻自然土壌）であるが、実際に発掘してみると、前記の文化財調査報告書No.63にも述べたように、地層断面は同時異相と考えられる砂礫層と土層の介在が繰り返されている。また土壌深度に変化が著しく、複雑な扇央のはん濫原の様相を示している。

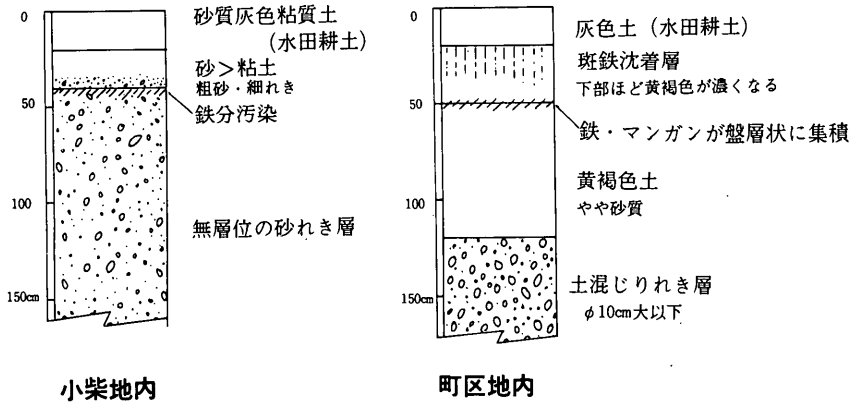
この中扇状地面では、永田地内と町区地内は、新設県道発掘調査地の上手域（上流）、小柴地内は下手域（下流）に当る。したがって永田地内は、新設県道発掘調査地の２～５地区に連続し、町区地内は土層域に当り厚さ１mを越える。小柴地内は砂礫層域に当り、25～40cmの薄い土層となっていて榑木川のはん濫原に近づく。

２．各地内の立地と堆積層

小柴地内では、表面の土層が20～30cmと薄く、発掘面は全般にれきが分布し、N－80°－Eの堆積方向を示す三条（北から幅４m、２m、１m）のれき層がみられる。表面は中れきであるが、挿図１に示すように１mを越える（砂、細れき、中れき、大れきの混在した）無層理のれき層である。

れきの種類は、砂岩、硬砂岩、れき岩、花崗岩、安山岩、チャート、ひん岩、粘板岩のホルンフェルス等で、いずれも梓川系統のものである。れき径は30×20、25×20cmを最大とし、10cm前後が多数である。

これらを地層の断面でみたのが挿図１である。北西隅、北東隅、南東隅、中央のトレンチでみた断面もまた同様で、いずれも地表から40×50cmのところで、れきが鉄分に汚染されている。介在する土壌は薄く砂質である。またこれらの地層を上手（上流）へ延長すると、新設県道発掘調査地の７地区へ連続し、はん濫（流れ）方向が考えられる。７地区と同様、本遺跡も遺物の発見がなく遺跡の空白地帯となっているのは、表土が薄く砂れき層の発達が著しい地形に原因があるように思わ



挿図１　柱状図

れる。

次に永田地内についてであるが、前述したように新設県道の調査地２地区と接しており土層等についても全く同様であった。[注]

町区地内の堆積層は図２に示したように1.2mに達する厚い土層である。この土層は環濠（南北約40m　東西約35m）を含む発掘地区全体に及んでいる。土層は地表から耕土20cm、鉄分、マンガンの沈着した斑鉄層30cm、鉄分・マンガンによる盤層状の黒褐色土50cm、黄褐色土層70cm、その下底から土混じりのれき層に変わる。

遺構は斑鉄層から黄褐色土層にわたって存在する。環濠はほぼ正方形と考えられ、溝の最大深60cm、最大幅110cm、発掘された西側の部分でみると、北方で浅く南方で深い。溝内には鉄分の沈着がみられ、一部にわずかの細れきが点在している。

また東側にはほぼ円形の池状遺構（直径5.4×5.8m、断面すり鉢形）があり、その周囲に縁どりとして、高さ40cm、二段積みの石群が発見されたが、これらの石は径43×30、50×20、15×30cmほどの円れき（砂岩、硬砂岩、花こう岩）で、明らかに搬入されたものである。この遺構の内部は砂質土で、前記の環濠といっしょに利用されたものであろう。

北側に焼けたモミや炭が出土したピットが発見されたが、やはり黄褐色土層中である。

地形面の傾斜は一般に東であるが、微地形的にみると、南東を示している。これは地形形成上の上流が西北西、下新駅の方向にあったと考えられる。ただれき層が厚い土層の下底の一部にしかみられないため、堆積方向を知ることは難しい。

環濠への取水は、地形的にみて北西隅と考えられる。

下底のれき層は、れき径10cm以下の細、中、大れきで、土砂を混じえている。いづれも梓川系統の円礫で、砂岩、硬砂岩、チャート、花崗岩、安山岩である。

注　松本市教育委員会　1988『松本市島立条里的遺構』

（太田　守夫）

第2節　周辺遺跡

島立地区及び近隣の和田、新村、そして奈良井川、鎖川の河岸段丘上と周辺の遺跡、さらに近年の発掘例をひろいながら時期別に概観してみよう。

まず縄文時代では中期の遺構が奈良井川の段丘上、牛の川、神戸、くまのかわ遺跡にみられ、島立地区でも南栗、北栗遺跡発掘（松本市文化財調査報告　No.35）の際に、また現在行なっている南栗地籍の下水管埋設工事の時に同様遺物を得ている。それらは地表下50cm（久保川添い）～350cmくらいと地点により埋設状況がかなり差のあることが知れる。

弥生時代になると山形村境に境窪遺跡、奈良井川東岸の宮渕本村遺跡などが知られているが、いずれもここからはかなり遠い。島立では堀川添いに中期の住居址の存在が明らかになったが集落としてはまだ判然としていない。

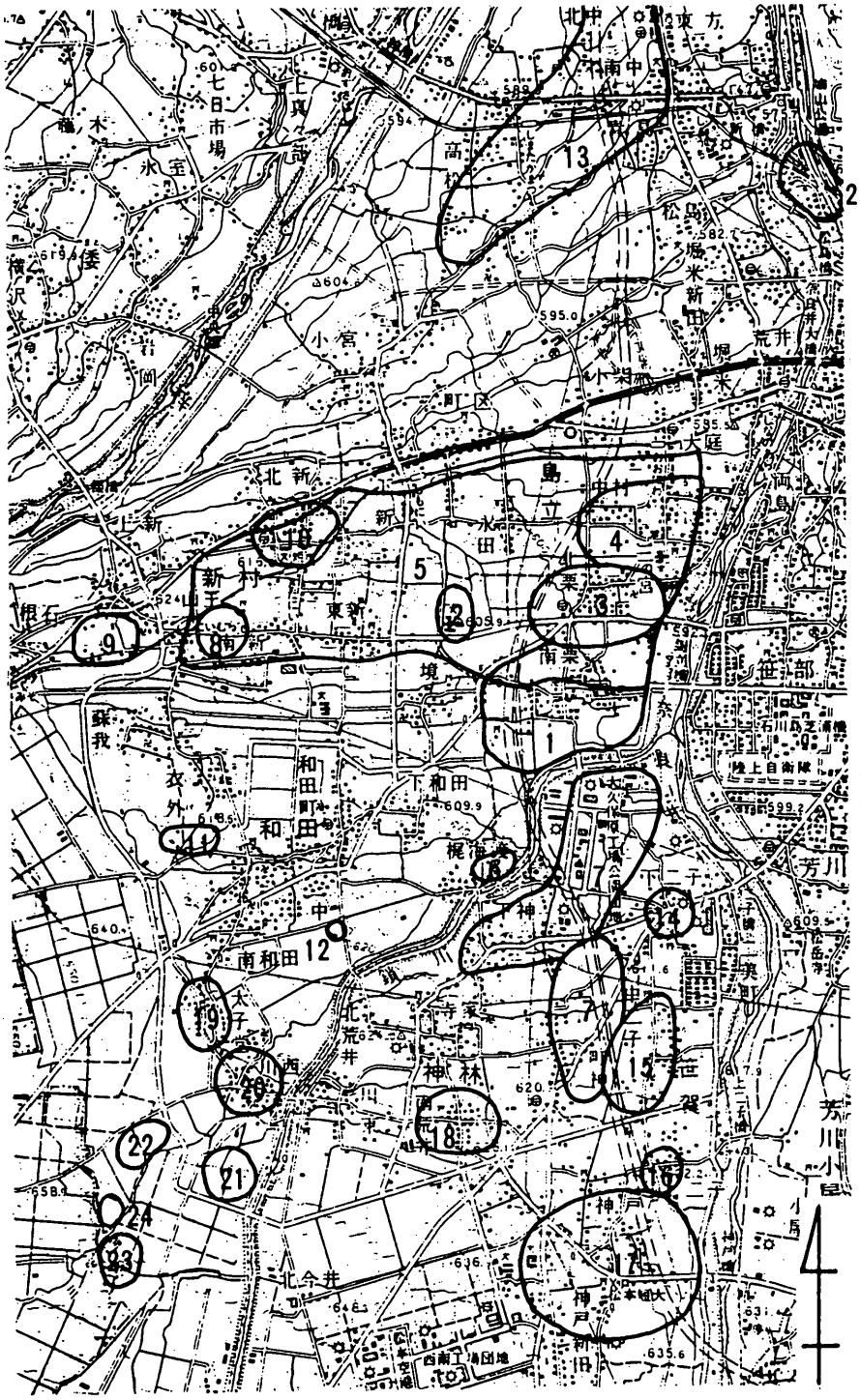
古墳時代では新村で安塚、秋葉原の終末古墳があるが、三の宮遺跡の調査でも弥生時代終末～古墳時代初頭の住居址を11基検出、調査することができた。島立では今まで空白だった時期であり新たな資料として注目に値する。

奈良時代から平安時代にかけては奈良井川沿で下神、町神、下二子、中二子、くまのかわ、神戸や島内遺跡群などをあげることができるが、島立では古墳時代後期から時期的に一部を欠きながらも中世まで存続する遺跡が目につき、未報告ではあるが島立小学校南東部に古墳時代中期からの住居址が、また高綱中学校遺跡でも古墳時代の住居址を調査している。

又昨年まで2度に亘り実施した三間沢川左岸遺跡では、平安時代前期末頃を中心とした270基の住居址と溝等を調査し、これらからの遺物として銅印、銅鋺、八稜鏡、帯金具と多量の緑釉陶器などを得ており、地方荘園の様相を見せ(注)今後予定される調査を一層興味あるものとした。

昨年の島立地区での調査は2遺跡、4箇所であった。北栗遺跡は遺跡としてとらえている東端（奈良井川段丘上）と北栗集落の北部である。前者から奈良～平安時代の住居址40基を検出、後者からは奈良時代～中世までの住居址21基、建物址14棟、他に中世の大きな方形区画の溝があった。又三の宮遺跡では島立小学校のグランド部分で、奈良時代～中世の住居址8基と古墳時代前期の生活面らしき土層を確認している。沙田神社の社殿北側の調査では、明治時代の神仏分離令による廃仏毀釈でなくなった神社の別当寺、普明院神宮寺の礎石とこれに関わる江戸時代の井戸址を調査し得た。なお北栗の奈良井川段丘と、三の宮の2箇所の調査地では地表下3.0m位まで深掘りし、縄文、弥生の生活面を探したが両者とも遺物を得てはいない。土質も砂層ないし礫層となっており、沖積平野扇端部の水流と堆積による影響であろうと考える。

注　松本市教育委員会　『三間沢川左岸遺跡（Ⅰ）』　1988



1．南栗遺跡（1983.84）
2．高綱中学校遺跡（1984.85）
3．北栗遺跡（1985～89）
4．三の宮遺跡（1986～88）
5．新村島立条里的遺構（1984～88）
6．梶海渡遺跡（1985）
7．下神・町神遺跡（1983.88）
8．秋葉原遺跡（1982）
9．安塚古墳群（1978）
10．新村遺跡
11．西和田遺跡
12．和田町遺跡
13．島内遺跡群（1984～88）
14．下二子遺跡
15．中二子遺跡
16．くまのかわ遺跡（1981）
17．神戸遺跡群（1979）
18．南荒井遺跡
19．太子堂遺跡
20．川西遺跡（1987）
21．川西開田遺跡
22．三間沢川左岸遺跡（1987.88）
23．境窪遺跡
24．西原南遺跡
25．宮渕二ツ塚遺跡（1964）
宮渕本村遺跡（1985.86.88）

（　）内は松本市調査年度

第3図　周辺遺跡

第３章　調査結果

第１節　小柴地内

１．調査の概要

本調査地は小柴集落の南端に位置する。北側には松本電鉄上高地線が通り、又通称仁科街道が東際にあり、更に東200mのところには長野自動車道が既に完成している。現状は水田として利用されており、今回調査面積は2700㎡である。約40cm程の耕土を除去すると、鉄分等が多量に沈澱するのが見られるか、或いは自然礫が広がっている。用地隅を試掘するが現地形を形成した礫層が厚く堆積しており、結局この深さを検出面として調査を行った。西側は水田の区画跡が明瞭に残り、処々直径８cm程の稲かけ用ハゼ杭の突き刺し痕も見えて、更に刺した木片も遺存している。

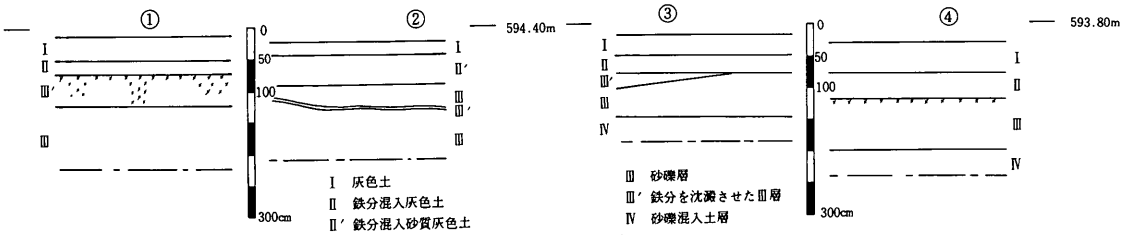
遺構としてはこの水田耕作の結果の小ピットが10個程有ったが、あえて取り上げてはいない。又、少量の土器、陶・磁器と鉄器、銭等を得たが、これらはすべて他から搬入されたものと考える。

２．遺構と遺物

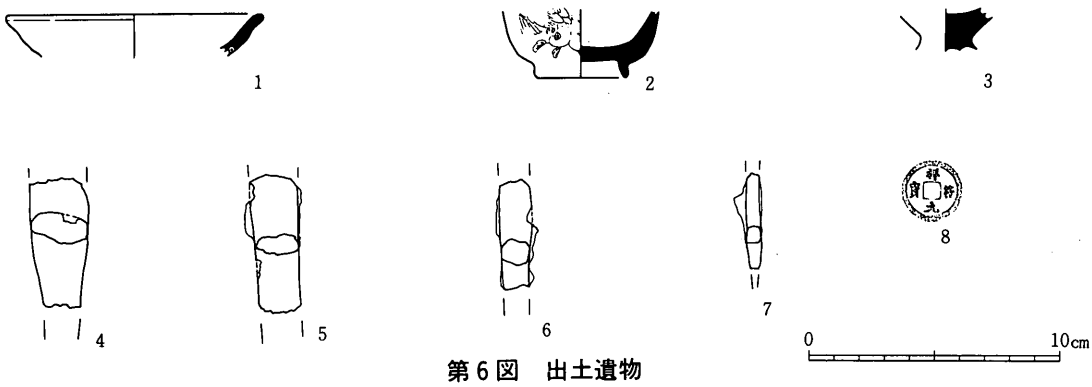
遺構についてはさきに述べたように耕作に関しての小型のピットを認めたのみである。

遺物としては、まず土器類に須恵器１片、内耳鍋20片、陶磁器片30片があるが、器形の判別する

第４図　小柴地内調査範囲



第5図　土層概略



第6図　出土遺物

ものは陶磁器の3点のみである。

1は灰釉の皿片で暗灰茶色を呈している。釉だまり部分にはそれに緑色が加わる。瀬戸系の16～17Cのものである。2は緑色の銅版もので花と鳳が描かれている。素地・釉は白色で産地は瀬戸美濃系である。20C前半。3は黒色の仏飯器の皿部分の基部である。素地は灰白色である。瀬戸美濃系の19C後半のものであろう。

他には鉄器が4点ある。いずれも器種の判明しないものである。4・5は幅2cmあまりの板状を呈するもので、4の芯はかまぼこ型、5は薄く3枚に割れている。6は断面がほぼ円形になるが、重量がある。7は釘状であるが断面形は四角でその中心は丸みを持った長方形の空洞になっている。

又銭が1点出土した。8は北宋銭の祥符元宝（初鋳1008年）である。

以上は検出面及び周囲の排土中より得られたが、概して中世～現代の様相を呈している。

3．小結

当調査地は島立条里的遺構の北限とされている(注1)梅沢（大庭せぎ）の北外際に位置している。耕作土下の砂利層は今までの調査(注2)で既に予想していたが、この厚い礫層は梓川が直進していた時代に堆積していたものらしく、ここより北へ徐々にその流れを変えていく過程での一地点の様相とみたい。それにしてもこの悪地を水田にした努力を感じることができる。若干得られた遺物類はその際に搬入されたものや、或いはせぎ等によって上流から当地へ運ばれたものであろう。

注1　『信濃』第36巻第7号「島立条里の中間報告概要」小穴芳美他（1984）

注2　松本市教育委員会『松本市島立条里的遺構』(1988)

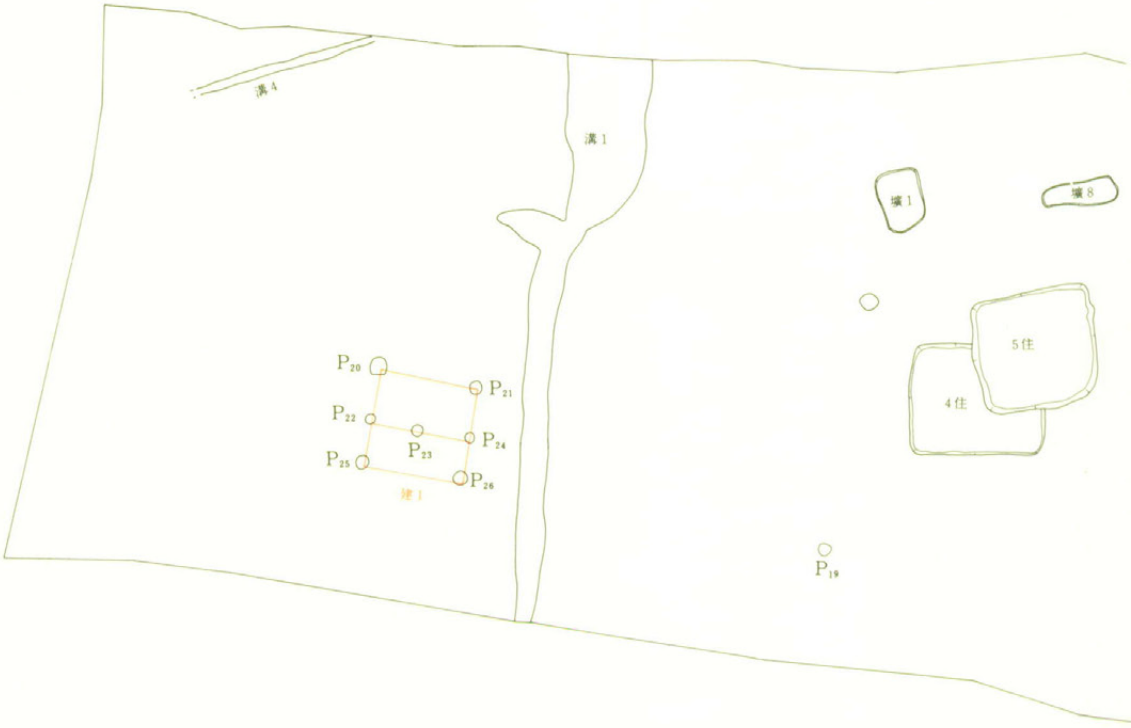
第2節　永田地内

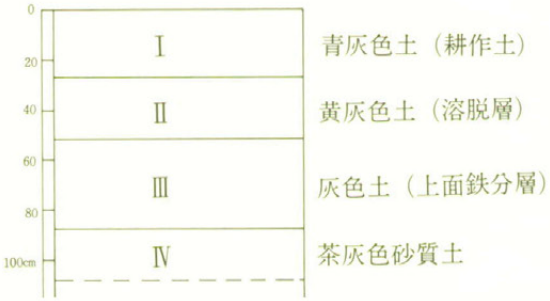
1．調査の概要

調査地は一昨年行った島立条里的遺構（松本市文化財調査報告№63）の2地区南半部のすぐ西際である。その時には南北に長く調査地を設けたが、今回は東西に長く、実質調査した面積は3350m²に亘る。現状は水田となっており検出面は地表より105（南東部）から80（北東部、中央部）ないし70cm（西部）下げたレベルとなっている。

検出した遺構は住居址を確認したのみの1件を含め17件、掘立柱建物址6棟、柵列が6棟、それらを除いたピットが100余基、土壙16基、溝址が5本等であった。又、これらの遺構から得られた遺物には各種の土師器、須恵器、灰釉陶器などの土器のほか、鉄器、石器、土製品などがみられる。特に奈良期に属する12号住居址から出土した土器は器種も、量も他を抜き多く、この奈良時代前～中期頃を今回調査した遺構の上限と見ており、11世紀代の14号住居址を下限に近いものと考える。時間的制約もあり、検出した調査面はこの1面にとどめているが、この高さまで下げる途中、明らかにもっと新しい遺構も認めてはおり、今回のピット、建物址などにも中世に含まれる時代のものもあろう。

第7図　永田地内調査範囲





第８図　遺構配置・土層概略

7住
9住
6住
11住
10住
8住
13住
12住
14住
15住
16住
17住
18住
19住
20住
溝5
溝2
溝3
土層観察地
0
5 m

2．遺構

1）竪穴住居址

第4号住居址

本址は発掘区中央西寄りに位置する。覆土上層は灰色を呈し、下部には拳大程の円礫が多く含まれている。北東部に5号住居址があり、本址の4半部分を破壊している。規模は東西4.40m、南北3.48mを測り、プランは方形である。主軸方向はN－91°－Eを示す。壁は直状をなしていて高さは37～46cmとかなり高く、遺存状況はとても良好である。床面は砂利層の上に薄く土が乗せられ、茶褐色を呈し、堅い状態であった。

カマドは東壁中央に位置する。5号住居址との切合部分に当たる南半分は破壊されておらず、遺存状態の良い石組が見られる。袖の形状は石芯と考える。なお5号住居址の貼床下にはこのカマドの一部が遺存していた。

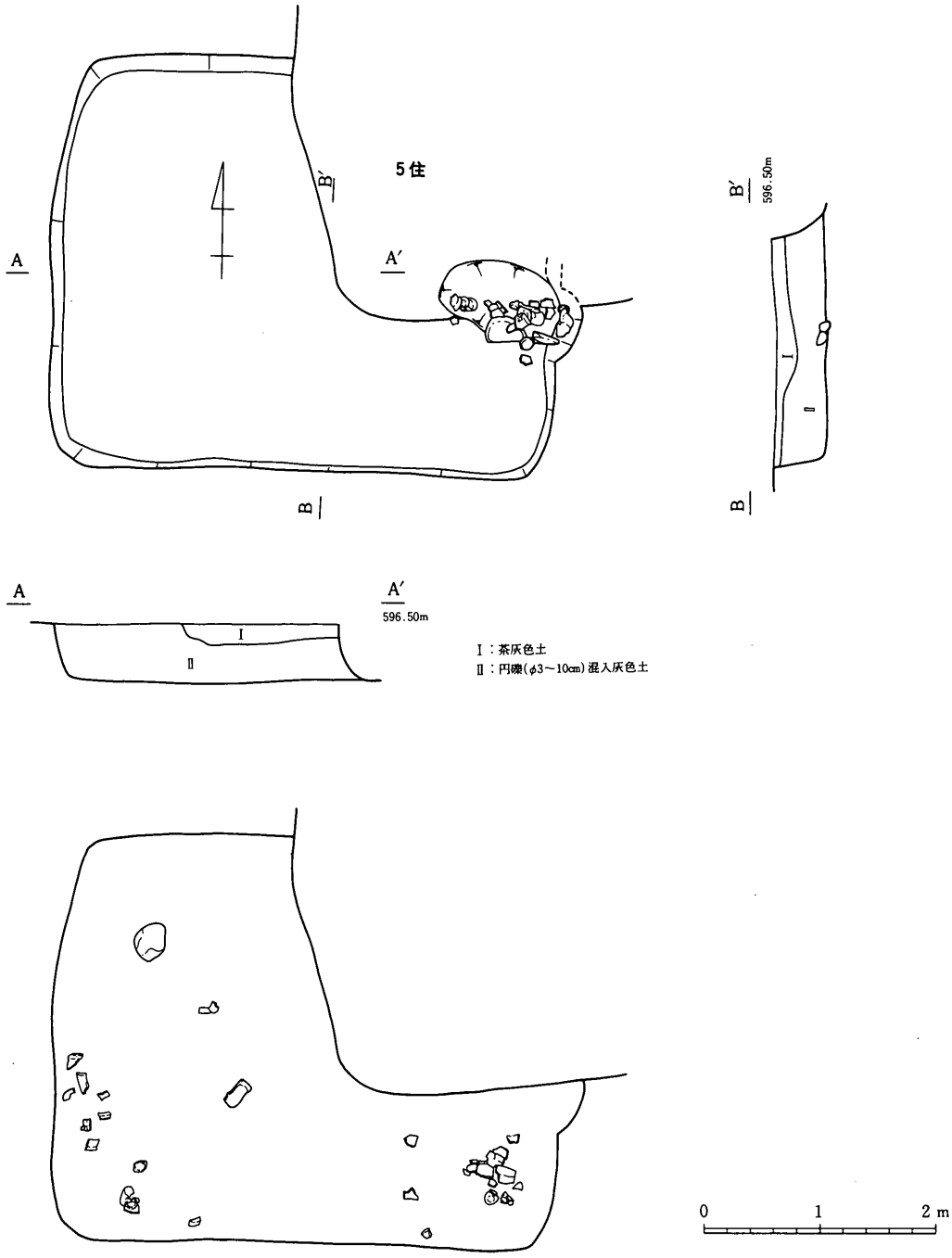
遺物は、鉄器類が1点、鈎状のものを出土し、又、土器類は土師器で黒色処理された坏・埦・皿と小形甕・甕、須恵器では生焼け坏、灰釉陶器長頸瓶がみられた。土師器内黒の坏・埦が、供膳形態の中心をなしている。本址は遺物より南栗X期の遺構であると思われる。

第5号住居址

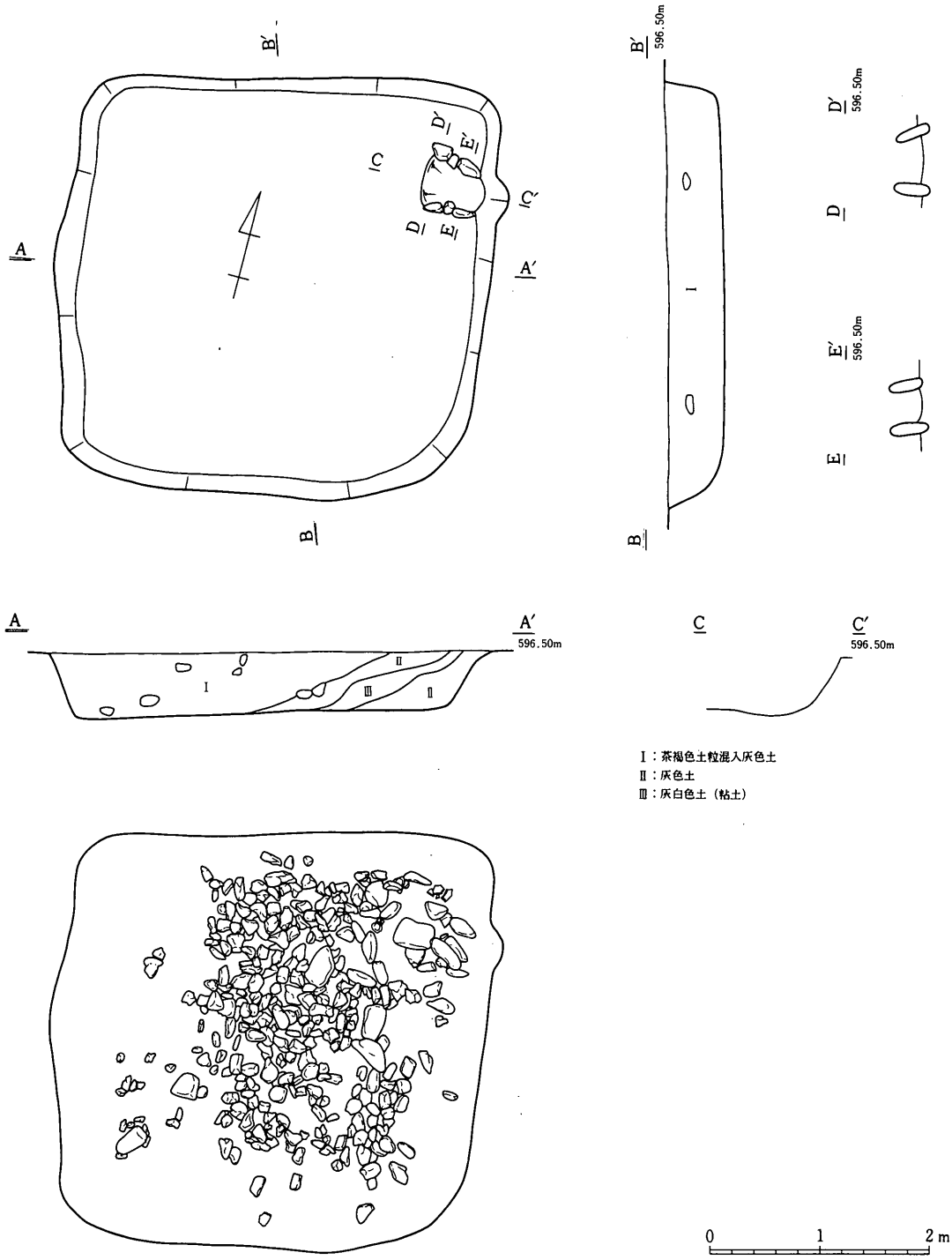
本址は発掘区中央西寄りに位置する。覆土の大半は茶灰色土であり、図より本址は東からの土の流れ込みで埋没した傾向が強い。又、4号住居址の北東部を破壊している。規模は東西3.94m、南北3.70mを測り、概形は隅丸方形を呈する。主軸方向はN－81°－Eを示す。壁の遺存状況はかなり良好で、やや斜めに掘り込まれており、壁高は45～53cmとかなり高い。床面は黄褐色土で堅く良好である。遺物は床面に土師器内黒坏の一括品を見る。尚、灰釉陶器はほとんど出土しなかった。

カマドは東壁北寄りに位置する石組カマドである。袖石は左右に3個ずつ堅固に据えられていた。焼土は顕著ではなく、カマド内には天井石と思われる細長い大礫があった。

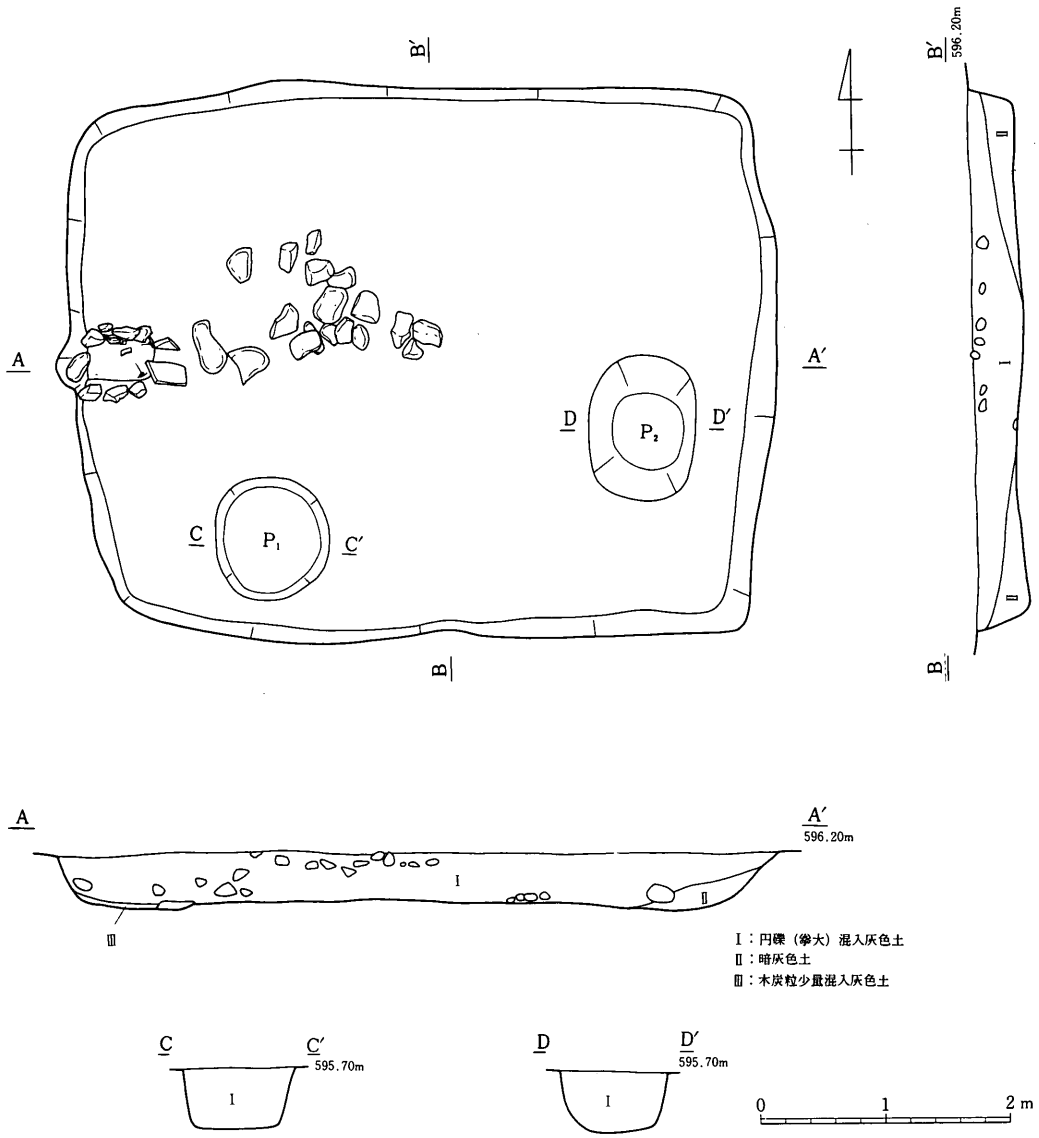
遺物は、土師器で小形の坏・足高高台が付く盤・甕、灰釉陶器瓶等の出土をみた。これらの遺物と、4号住居址との切合から、本址は南栗XII～XIII期以降10C後半代の遺構と考えられる。



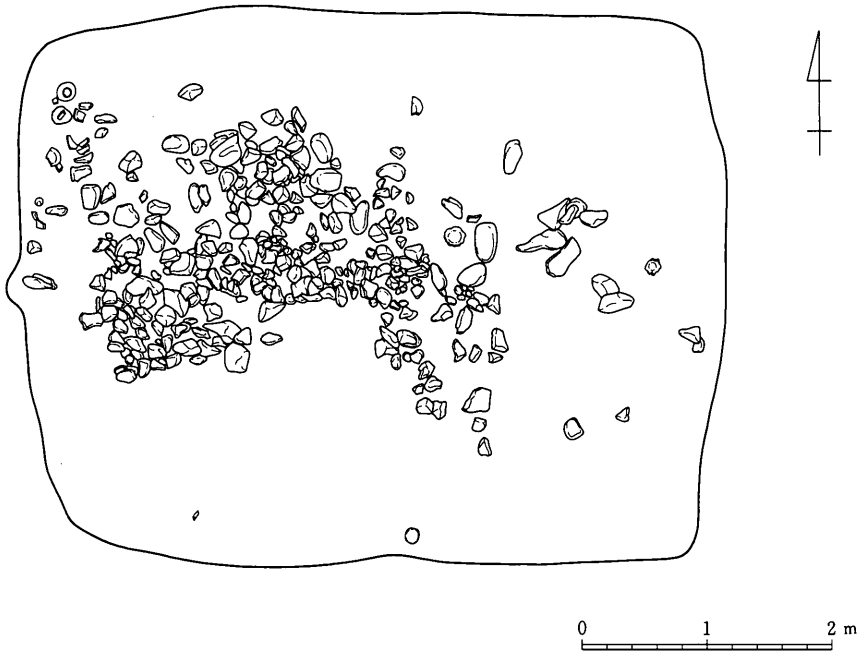
第9図　第4号住居址



第10図　第５号住居址


B′
B′
596.20m
A
A′
D
D′
P₂
C
C′
P₁
B
B
A
A′
596.20m
Ⅰ
Ⅱ
Ⅲ
Ⅰ：円礫（拳大）混入灰色土
Ⅱ：暗灰色土
Ⅲ：木炭粒少量混入灰色土
C
C′
595.70m
Ⅰ
D
D′
595.70m
Ⅰ
0
1
2 m

第11図　第６号住居址



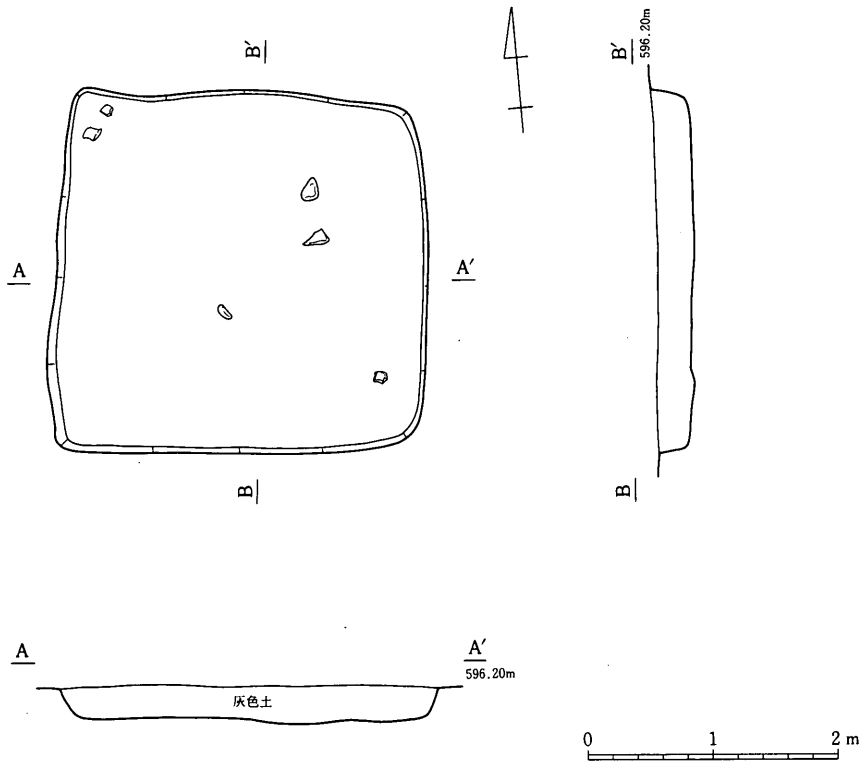
第12図　第６号住居址遺物出土状況

第６号住居址

本址は調査区中央部に位置する。覆土はほとんどが灰色土で壁際下層には暗灰色土が堆積する。図にも見るように、拳大よりやや大きめの円礫が多出したがそのほとんどが覆土上層からのものである。規模は東西5.70m、南北4.32mを測り、今回調査した住居址の中では比較的大形のものである。プランは胴張り隅丸方形ともいうような形状である。主軸方向はN－91°－Wを示す。壁は東西が緩やかに外湾し、南北はほぼ直に床から立ち上がる。残存壁は良好で37～41cmの壁高となる。床面は黄褐色で平坦に広がるが軟弱である。

カマドは西壁中央に位置する石組カマドである。焼土は奥壁側に、又炭化物は少量であるが遺存している。袖石は深く据えられ堅固に配置されている。ピットは本址内に２個検出した。P_1（100×90×50cm）、P_2（114×84×50cm）である。両者とも深く掘り込まれているが、位置からみて柱穴用とは思えない。

遺物は、土師器の内黒・埦、灰釉陶器の段皿・碗の一群と、土師器盤・やや深めの土師器埦、灰釉陶器碗の一群があるが、各器種・器形別の出土量の比率より本址は南栗XII～XIII期10Ｃ後半代にわたるものと考えられる。



第13図　第７号住居址

第７号住居址

本址は調査区中央に位置する。覆土は灰色の単層で明瞭に検出することができた。規模は東西2.98m、南北2.82mと今回調査した住居址の中では最小のものである。平面形は方形を呈し、長軸方向で示す主軸方向はN－80°－Wを測る。壁は比較的急激に床から立ち上がりその高さは25～36cmである。床面は礫層上につくられ黄色と茶褐色の砂質土で中央部は堅さが見られ、周囲では軟弱な状態となっている。

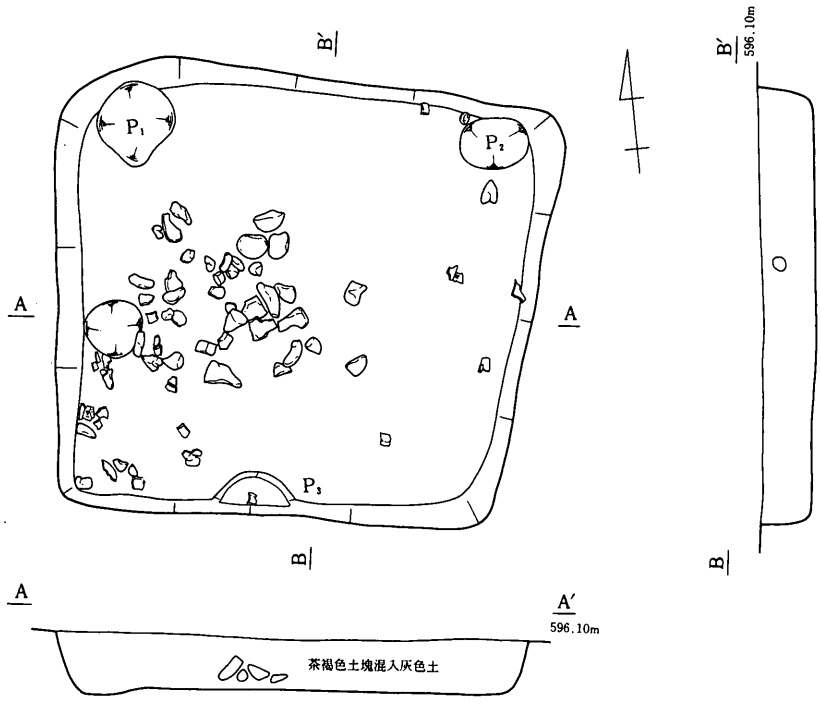
焼土、炭化物は全く見られずカマド等の施設については不明である。

遺物は、土師器内黒の坏・埦・甕、須恵器甕がみられた。供膳形態は土師器内黒が中心をなす。これらの土器から与えられる本址の時期は南栗Ｘ期のものであろう。

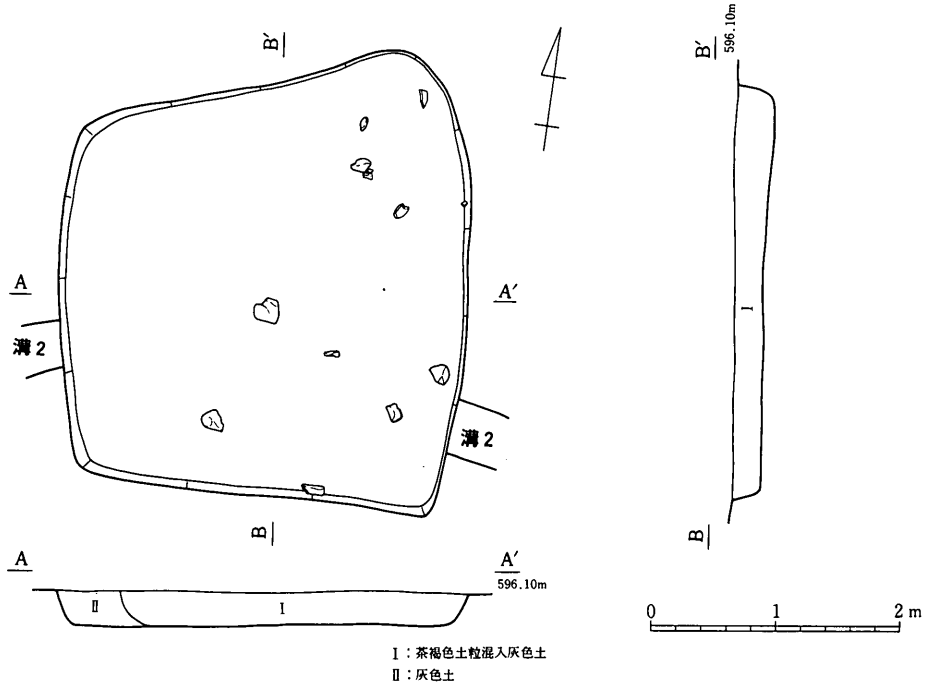
第８号住居址

本址は調査区中央に位置する。覆土は灰色土一層である。又、同覆土中層には拳大よりやや大きい礫があり、住居址埋没時の投入によるものであろう。遺物を見ると住居址南半部の覆土中～下層に須恵器四耳壺・甕、土師器内黒・埦・坏のやや大きい破片が出土するが一括品は見られない。本址の規模は東西3.80m、南北3.48mを測り、プランは隅丸方形を呈する。主軸方向はN－79°－Wを示す。壁はほぼ垂直に掘り込まれていて、高さは39～47cmと遺存状態は特に良い。床は礫層に達し砂質黄茶褐色土を呈し、周囲は軟弱であるが中央部分は堅く良好であった。

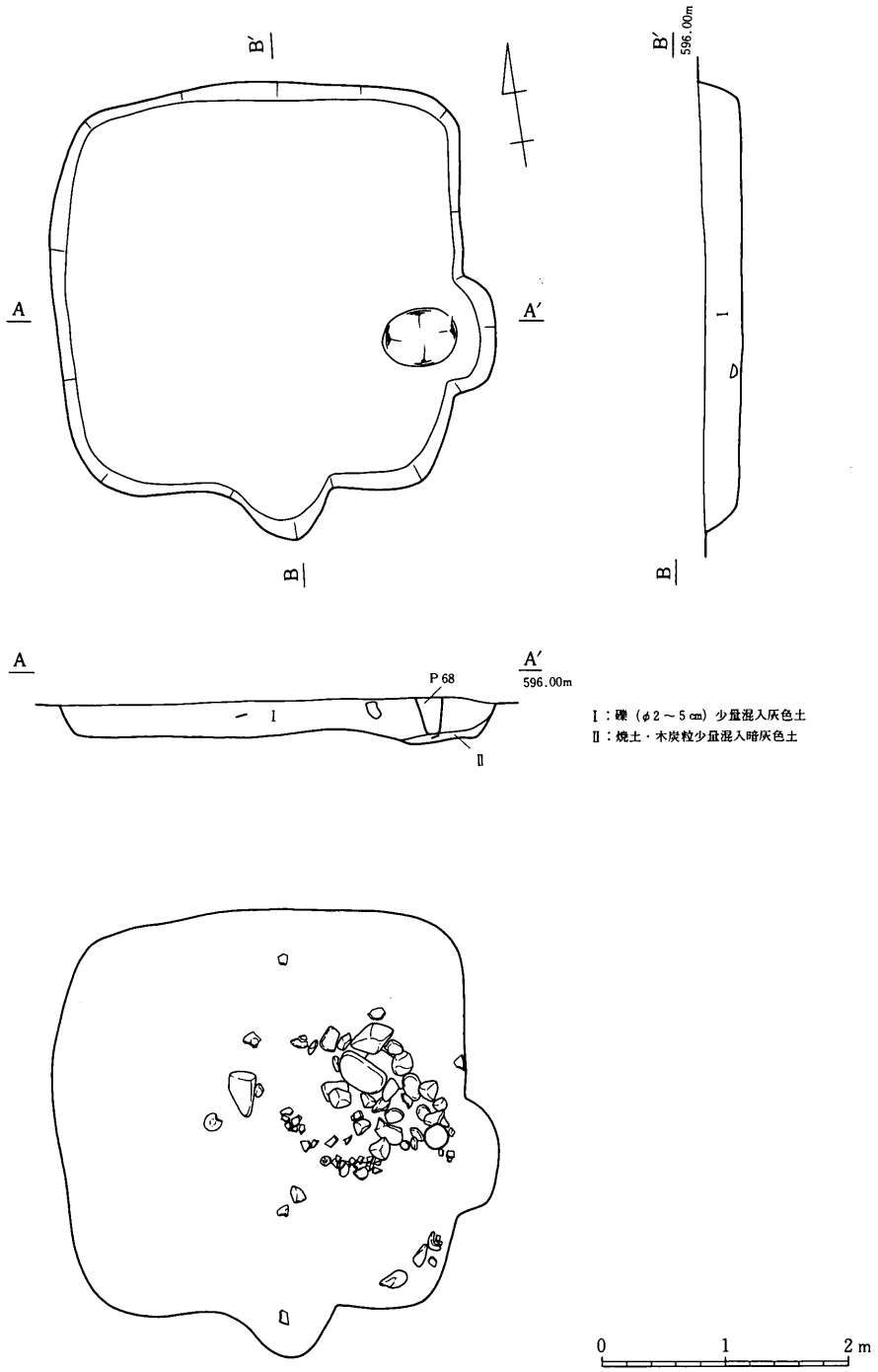
8住



9住



第14図　第8・9号住居址



第15図　第10号住居址

カマドは西壁中央に位置しよう。径40cm、深さ7cmのピットがここにあり、検出時の所見においてはカマドと推定したが焼土あるいは施設等は全く見当らなかった。ピットは3個あり、P_1（70×60×6cm）、P_2（50×40×7cm）、P_3（64×28×11cm）をそれぞれ検出する。いずれも壁際にあり又、用途は収納用のためであろうか。

遺物は、土師器内黒坏・椀・小形甕・甕、須恵器坏・四耳壺・短頸壺が見られる。又、鉄器も釘が出土している。供膳形態は、土師器内黒の坏・椀が中心となる南栗X期が、本址の帰属時期と思われる。

第9号住居址

本址は中央北寄りに位置する。東西に伸びる溝址2より新しい。覆土は茶褐色土粒を含む灰色を呈する。規模は東西3.28m、南北3.24mを測り、プランは北東隅が北へ膨らむ不整方形である。壁高は24～29cmを測り、壁は直状に床から立ち上がる。床面は茶褐色土で中央部のみ堅さが見られる。焼土、炭化物等は確認できなかったが、本址北東隅のやや張り出した部分をカマドと想定すると主軸方向はN－89°－Eとなる。

遺物の量は全体に少なく、土師器坏・甕、灰釉陶器等の土器類のみが出土している。図示し得たものは5点程であるが、灰釉陶器には刻書がある。本址は、これらの遺物より、南栗XII～XIII期以降10C後半代の住居址と考えられる。

第10号住居址

本址は調査区の中央に位置する。覆土中には小礫を若干量含んでおり、又、投棄したと思われる石も含む。規模は東西3.32m、南北3.58mを測り、プランは隅丸方形で南壁と西壁の一部が、緩やかに張り出す。主軸方向はN－95°－Eを示す。壁は斜めに立ち上がり、高さは28～33cmである床面は礫層面にあり堅く良好で、わずかに砂質の部分が見られる。

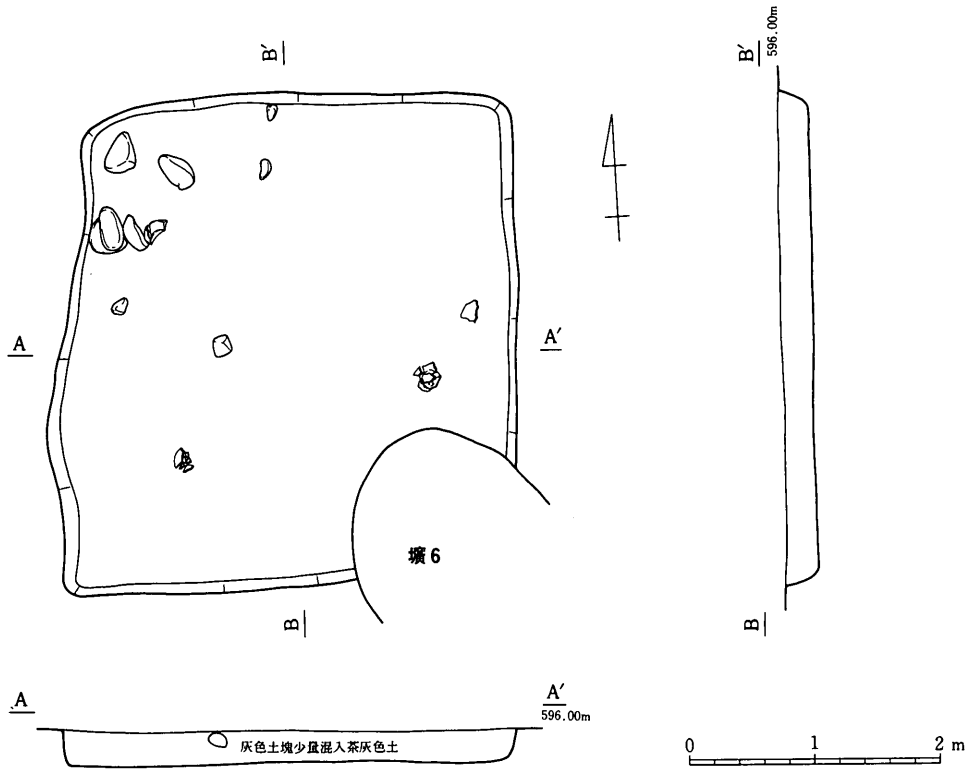
カマドは本址北東部の張り出しと考えるが、燃焼室と思われる浅い落ち込みと、焼土が少量確認されたのみである。

遺物は、土器類のみで、土師器の内黒坏・椀と鉢・小形甕・甕、生焼けの須恵器坏等が出土している。供膳形態は土師器内黒坏が中心をなす。これらの遺物よりみて、本址は南栗X期の遺構と考えたい。

第11号住居址

本址は調査区中央北寄りに位置する。住居址西壁際覆土下層には大きな円礫が5個あったが、カマドではない。又、土壙6が本址南東部を壊す。規模は東西3.72m、南北3.88mを測り、プランは西壁がやや膨らむ不整方形を呈する。壁は直状をなし、壁高は24～30cmと残存状態は良い。床は礫上にあり砂質土でやや堅い。

カマドはその施設が検出できなかった。ただ東壁際に炭化物が少量認められる。遺物より見ると壁中央部に位置するものと考えたい。このように仮定すると主軸方向はN－91°－Eとなる。



第16図　第11号住居址

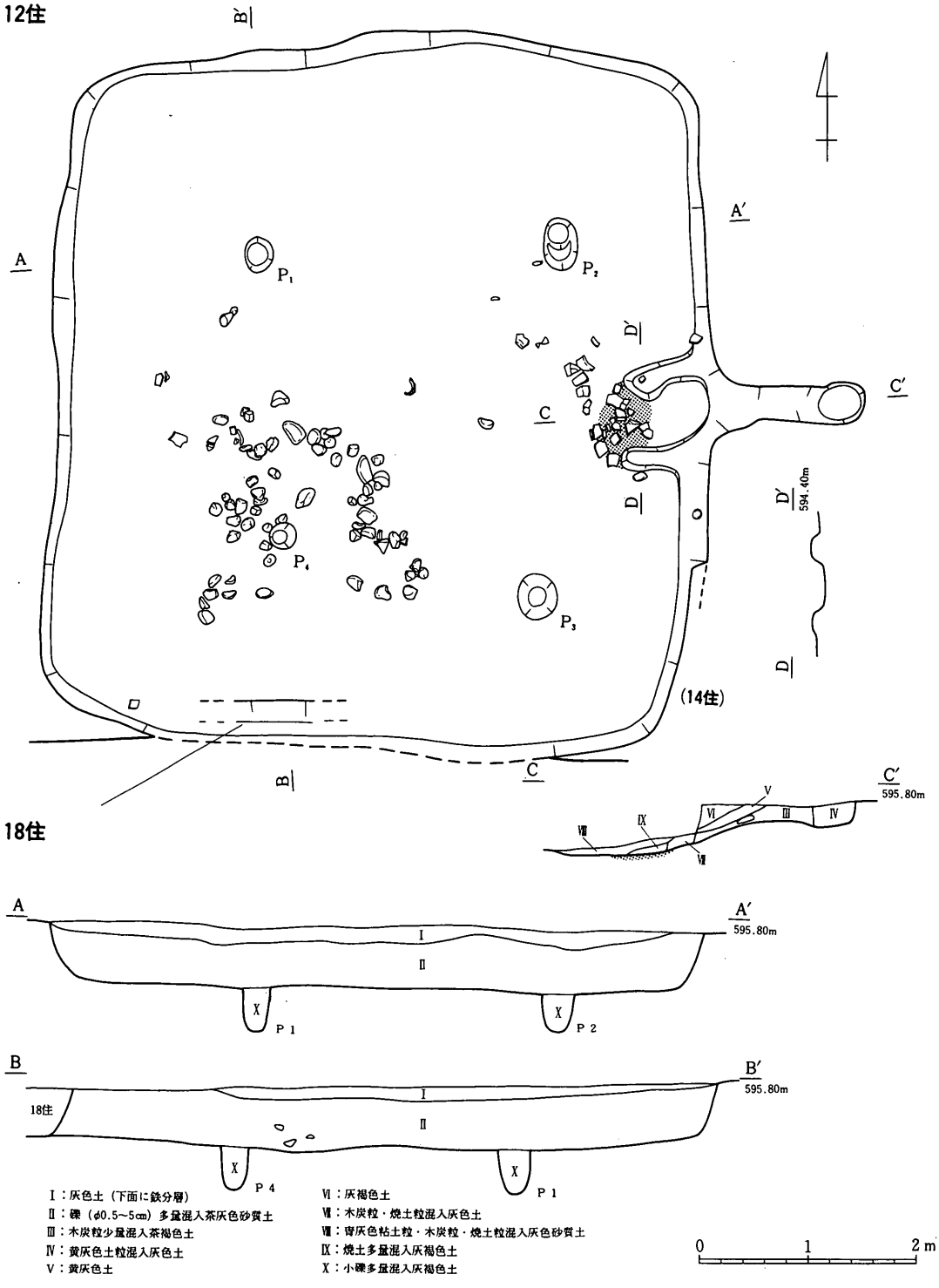
遺物は、土師器坏・甕、須恵器坏・蓋・広口甕が出土している。本址の時期は遺物よりみて、南栗VI期と考えたい。

第12号住居址

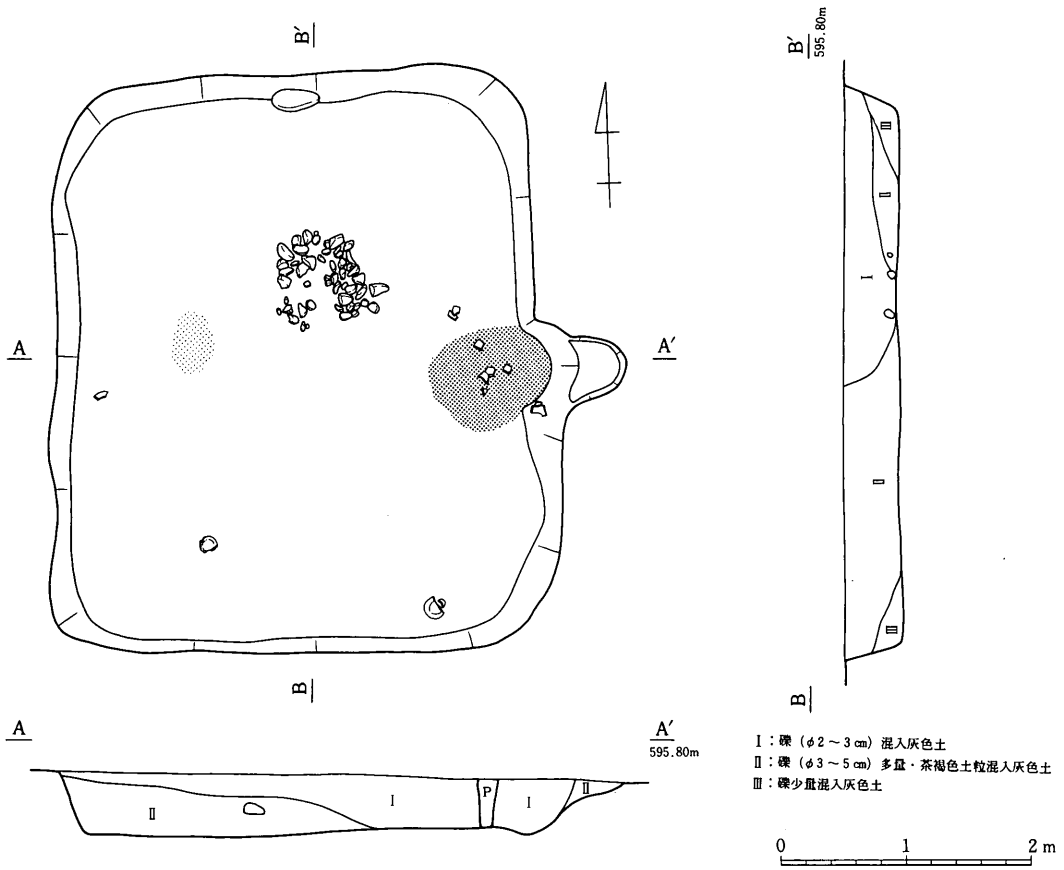
本址は発掘区中央南際に位置する。茶灰色で砂質状を呈する覆土には直径5㎝迄の礫が多量に含まれている。また、やや大きい礫が、住居址中央南西寄りの覆土下層から出土していた。おそらく本址埋没過程で投棄したものと考える。住居址南側は途中で検出した18号住居址に壊されているであろうが、用地外の為詳細は不明である。南東部には先行する14号住居址がある。本址の規模は東西6.00m、南北6.33mと今回調査したもののうち最大である。プランは隅丸方形で北側がやや膨らむ。主軸方向はN－90°－Eを示す。壁の遺存状態は非常に良好で、高さは48～56㎝を計る。床面は黄灰色を呈しやや軟弱でわずかに起伏がある。

カマドは東壁中央に位置する。構築状況は、袖部を残して地山に削り込んだ後、粘土で袖を固めたものである。煙道は1mでその先に煙出しのピットが見られる。ピットは4個が容易に検出できた。これらは位置からして主柱穴と考える。

遺物は、土師器甕・甑・小形甕、須恵器坏・蓋・鉢・擂鉢・長頸壺・瓮・横瓶等が出土している。これらの遺物より、本址は今回でもっとも古い遺構と考えられ、南栗IV期をその時期としたい。



第17図　第12・18号住居址

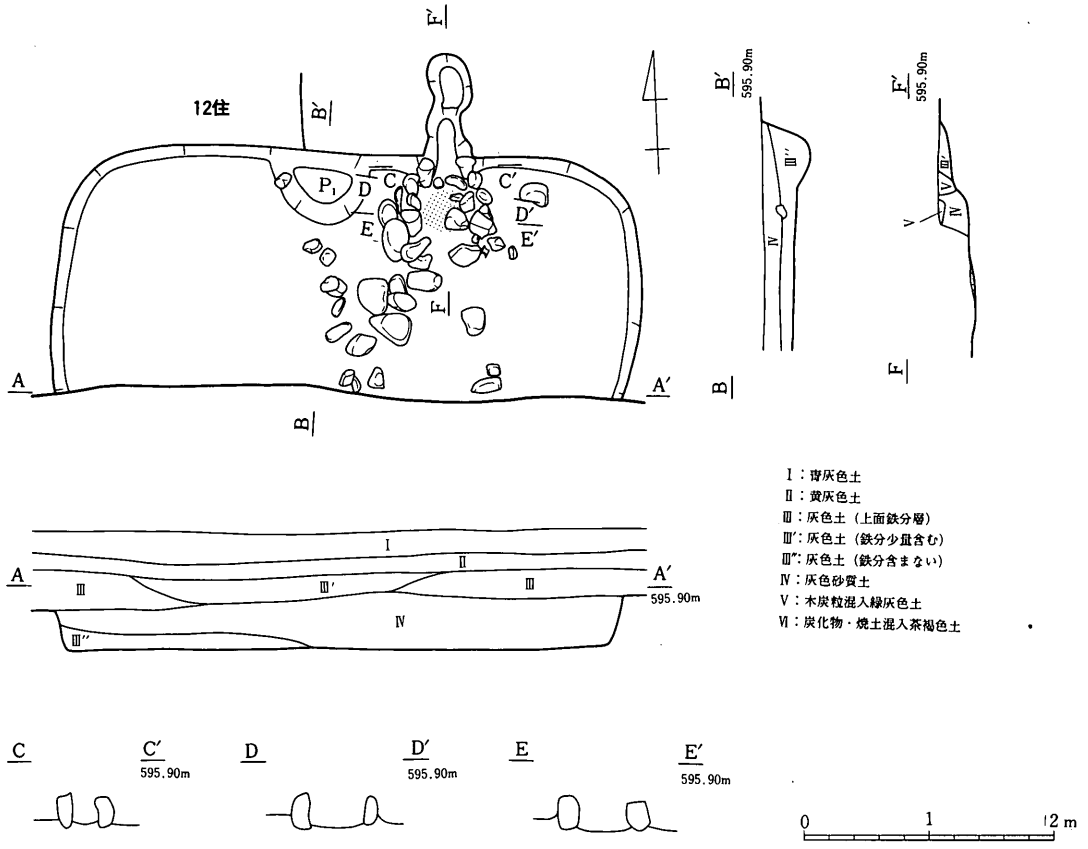


第18図　第13号住居址

第13号住居址

調査地中央やや南寄りに位置する。覆土は灰色で下層程小礫を多量に含んでいる。規模は東西4.46m、南北4.50mを測り、プランは典型的な隅丸方形を呈している。主軸方向はN－90°－Eを示す。壁は斜めに直状をなし30～50cmと高く残存している。床面は茶褐色となっており固く良好な状態であった。なお、図に見られるように覆土中の小礫よりやや大きめの拳大の円礫が、径80×80cmの範囲で覆土中層に認められたが、これは本址埋没途時の投入による結果と考える。

カマドは東壁中央に位置する。壁を少し掘り込み、短い煙道もみられる。焼土もあり、その上面には土師器甕片が遺存していた。遺物は土師器坏・甕・小形甕・甑、須恵器坏・蓋・長頸壺・広口甕があり、これらよりみて本址は南栗VI期の遺構と考えられる。



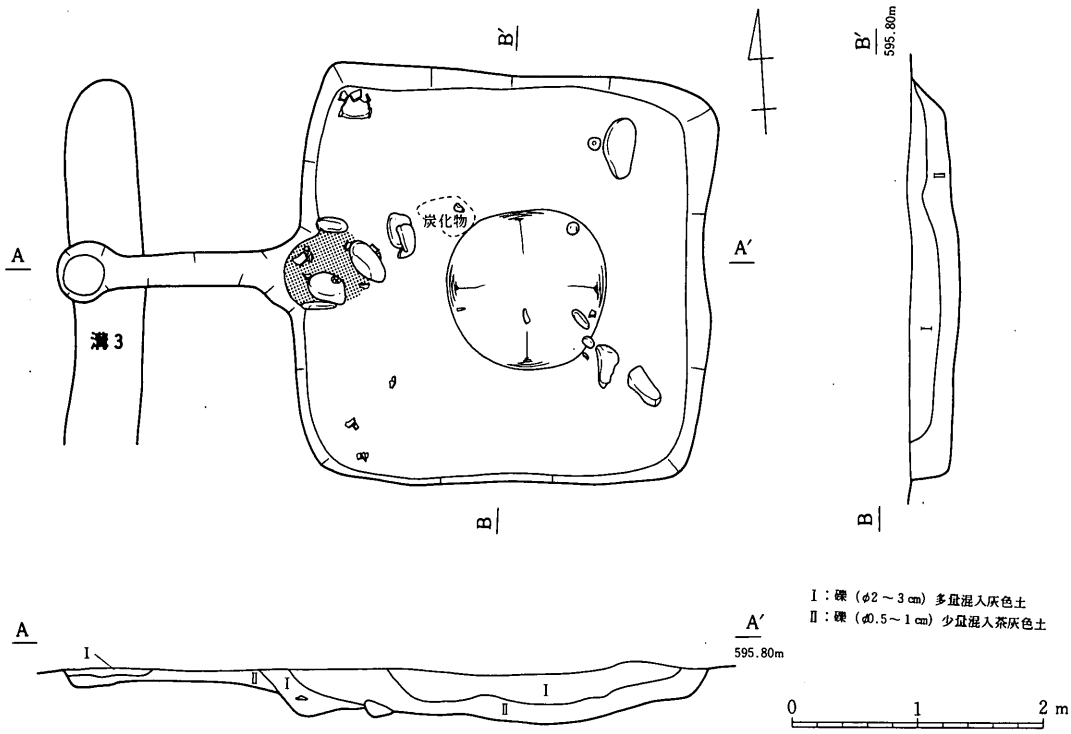
第19図　第14号住居址

第14号住居址

本址は調査地南際に位置する。南半部は調査区域外の為北半部のみの調査にとどまった。覆土は灰色を主体としており、下層程砂質を呈する。北東側には本址に先行する12号住居址があり、同住居址調査中に確認した18号住居址は、12号住居址よりは新しいが、規模不明の為本址との切合は分からなかった。規模は東西4.54mで隅丸方形のプランと考える。主軸方向はN－2°－Eを示す。壁は直状をなし、壁高は20～24cmを測る。床は黄色土を用い、堅く良好であり、12号住居址との切合部分は他の部分よりも高まるほど貼床を施してあった。

カマドは今回調査した中で唯一北壁中央部に位置するものである。煙道をもつ石組カマドで、その焚口部分床面上には数個の人頭大の石があり、やはりカマド施設に使用したものであろうか。又、ピットは1個（80×44×12cm）が北壁に検出できた。カマド際であり貯蔵穴とも考える。

遺物は、12号住居址との切合の為、あきらかに混入物と思われるものもあるが、それらをのぞいた土師器坏・埦・甕・小形甕、灰釉陶器の出土から、本址は南栗XII～XIII期以降10C後半代と考えられる。



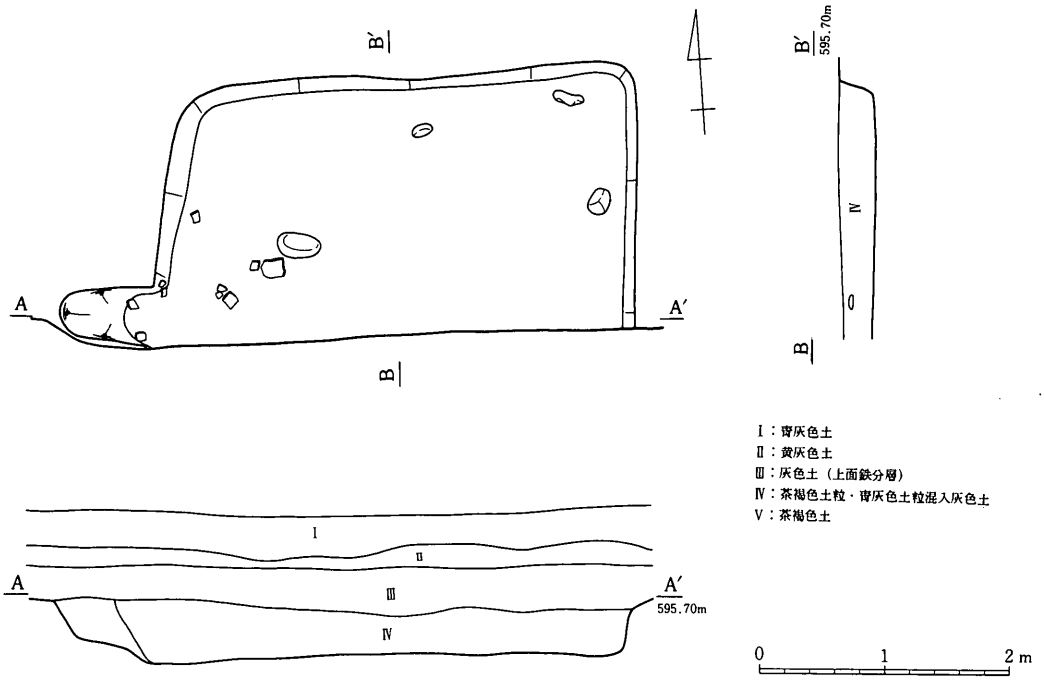
第20図　第15号住居址

第15号住居址

本址は調査区中央部に位置する。覆土は灰色が強く上層程礫大きく多量に、下層では小礫となり量も少なく混入する。土層図を見るとレンズ状堆積がよく現われ本址が自然埋没であることを明瞭に示している。規模は東西3.34m、南北3.18mを測り、プランは方形を呈する。主軸方向はN－86°－Wを示す。壁はやや緩やかではあるが直状に立ち上がり、高さは27～39cmである。床面は砂利層上で軟弱である。中央付近が直径1mの円形をなして周囲の床面から7cm程窪んでいる。尚完形に近い小形甕が床面上から得られている。

カマドは西壁中央に位置し、袖石を南北に各1個ずつ配している。カマド内に人頭大の平石が2個転入していたが、おそらくカマドとは関係ないものであろう。煙道は今回検出したもののうち2mと最長で先端には煙出しのピットがあり、溝址3を切って設けられている。カマドの底は、住居址の床面とほぼ同じ高さを示していた。

遺物の出土量は僅かであるが、土師器甑・小形甕・甕、須恵器坏等がみられた。土師器甕には武蔵型のものもあり、これらの遺物からすると南栗Ⅵ期の住居址と考えられる。



第21図　第16号住居址

第16号住居址

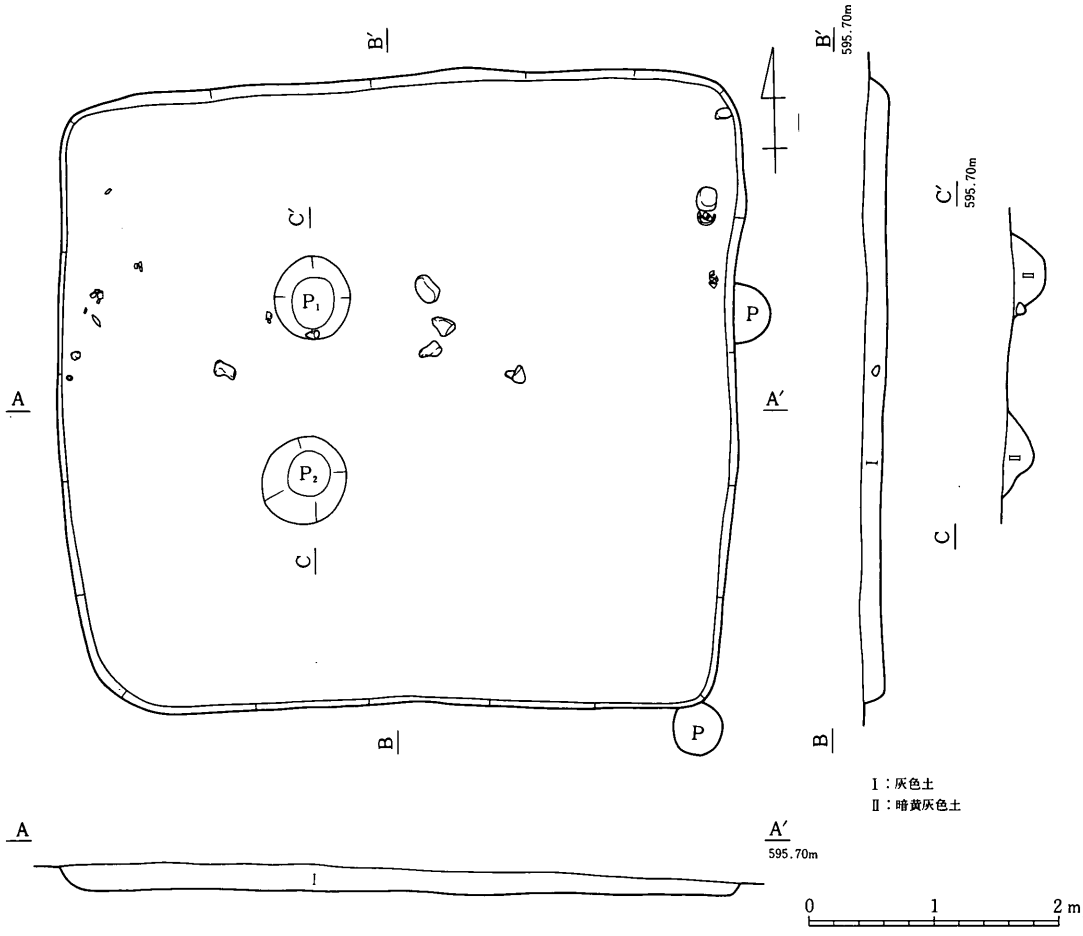
本址は調査地南部に当たり南北に伸びた溝址３の東側に検出した住居址である。南半部は調査区域外とするが、丁度北半分の面積を調査し得たものと思われる。灰色味の強い土を覆土とするが西側の突出した部分は茶褐色土を見せて、明瞭にプランをとらえる事ができた。規模は東西4.08m、概形は隅丸方形となろう。壁は暗黄褐色土で壁高は26～28cmである。床面は鉄分等が沈澱したことも手伝い茶色を呈し、かなり堅緻となっている。

カマドは西壁中央にある突出部と考えた。壁を掘り込み50cm程の短い煙道を付属させている。焼土などは見当らないがこれに主軸方向をとるとN－90°－Wとなり周囲の住居址と比較しても平均的な数値を得る事ができる。

遺物は土器類のみで、そのほとんどが土師器甕片である。量が少なく時期の決定は困難であるが、南栗Ⅳ期～Ⅴ期の住居址と考えられる。

第17号住居址

本址は調査区南に位置する。覆土は灰色土一層である。規模は東西5.42m、南北4.84mと12号住居址に次ぐ大きさで、プランは隅丸方形を呈する。壁は直状をなし、高さは11～18cmを測る。床面は茶色土で堅緻である。



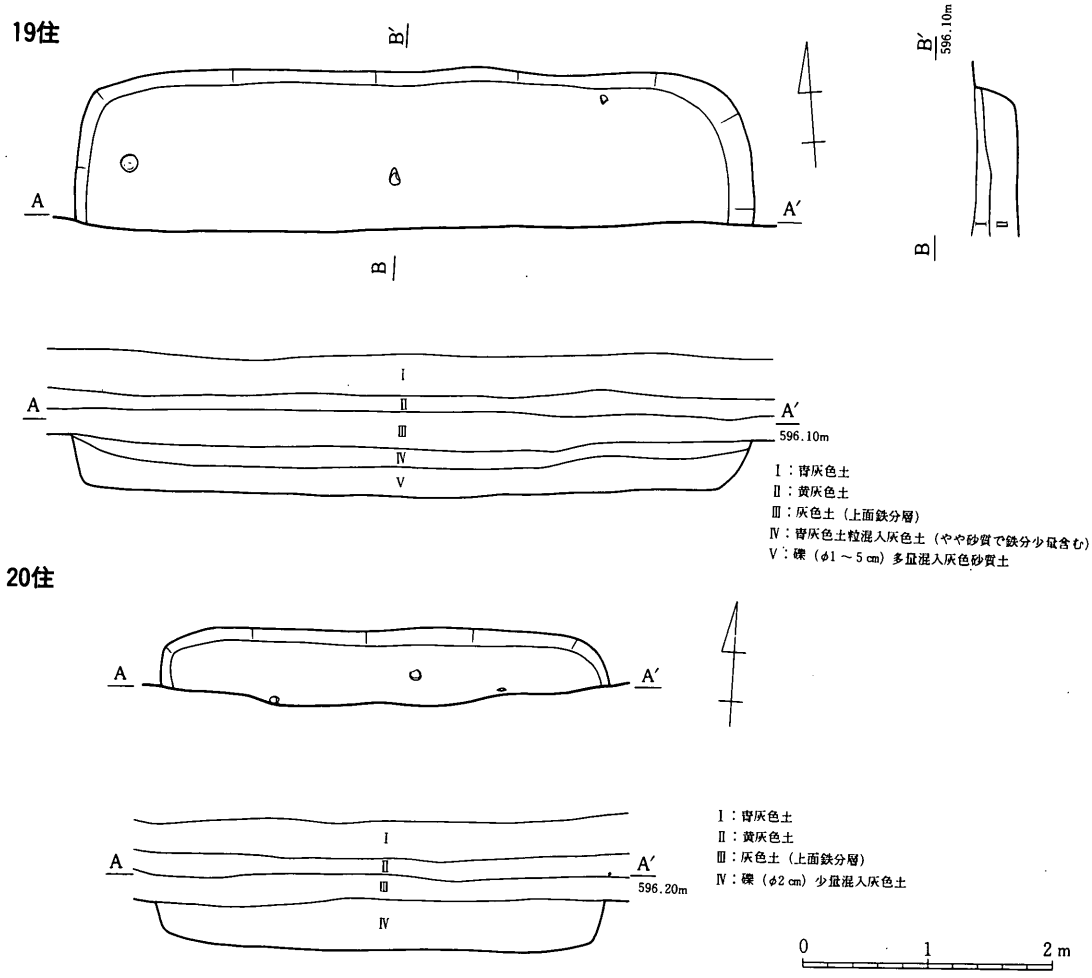
第22図　第17号住居址

カマドと認定する根拠には乏しいが、住居址北東隅の床面にわずかであるが炭化物が見られるためこの位置をカマドと考えたい。そうすると主軸方向はN－90°－Eを示す。尚ピットは中央やや西寄りに2個検出し、P_1（65×60×25cm）、P_2（70×70×24cm）で西壁に平行して並ぶ。

遺物は、土器類が土師器坏・埦、灰釉陶器段皿・瓶等があり、鉄器類は、遣鉋・刀子他に銭1点がみられた。量が少なく時期の決定は困難であるが南栗XII～XIII期以降10C後半代の遺構と考えられる。

第19号住居址

本址は発掘区南部に位置する。大半が調査区域外となってしまい実際調査したのは四半部程であった。覆土は砂質灰色土を主体としており明瞭に確認できた。プランは隅丸方形を呈すると思われ、面積はおそらく17号住居址に匹敵する大形の住居址となろう。壁高は34～37cmとかなり遺存状況が良好であった。床面は黄褐色土であるが軟弱となっている。又、検出した床面中には焼土、柱穴につながるものは皆無であった。



第23図　第19・20号住居址

遺物は、覆土上層より銅製品が出土し、土器類については土師器皿・甕・小形甕、須恵器坏・蓋・広口甕等が見られる。これらより本址の帰属時期は南栗Ⅵ期と考えられる。

第20号住居址

本址は調査区南部に位置する。遺構の大半が用地外の為わずかな部分しか調査できなかった。覆土は灰色土であり、直径２㎝程の礫の混入が目につく。本址東側は暗黄灰色土が広がるが、遺構ではなく、狭い凹地が生じていたものと理解した。調査部分が狭いため、全体形は分らずプランも部分的にしか分らない。その一部を窺う限りには壁は、直状をなし、壁高は21㎝と遺存状態が良いことが分かる。

ただ19号住居址同様に用地外にかかる為地表（耕土面）より堆積状況をつぶさに見る事ができたのは何よりの収穫であった。

遺物は、鉄鏃が１点、土器類は、土師器、須恵器等が出土した。これらの遺物から、本址は南栗Ⅹ期の遺構と考えられる。

表 1

住居址一覧表

住居 No.	平面形 (大きさ南北×東西)	主軸方位	面積 (m²)	残存壁高 (cm)	カマド 位置	カマド 形態	ピット	遺物 (数字は土器番号)	備考 (切合)	時期	図
4	方形 3.48×4.40	N−91°−E	10.42	37〜46	東壁中央	石芯か		1〜23	5号住居址に切られる	X	9
5	隅丸方形 3.70×3.94	N−81°−E	13.77	45〜53	東壁北寄	石組		24〜38	4号住居址を切る	XII〜XIII	10
6	隅丸長方形 4.23×5.70	N−91°−W	23.28	37〜41	西壁中央		2	39〜51		XII〜XIII	11・12
7	方形 2.82×2.98	N−80°−W	8.20	25〜36				52〜59		X	13
8	隅丸方形 3.48×3.80	N−79°−W	13.11	39〜47	西壁中央	?	3	60〜75		X	14
9	不整方形 3.24×3.28	N−89°−E	10.20	24〜29	北東隅?	?		76〜80	溝址2を切る	XII〜XIII	14
10	隅丸方形 3.58×3.32	N−95°−E	10.38	28〜33	東壁中央	壁掘り込み?		81〜102		X	15
11	不整方形 3.88×3.72	N−91°−E	13.61	24〜30	東壁中央	?		103〜111	土壙6に切られる	VI	16
12	隅丸方形 6.33×6.00	N−90°−E	37.73	48〜56	東壁中央	粘土	4	112〜144	14住・18住に切られる	IV	17
13	隅丸方形 4.50×4.46	N−90°−E	17.70	30〜50	東壁中央			145〜170		VI	18
14	隅丸方形 (1.85)×4.54	N−2°−E	8.60	20〜24	北壁中央	壁掘り込み	1	171〜177	12号住居址を切る	XII〜XIII	19
15	方形 3.18×3.34	N−86°−W	10.88	27〜39	西壁中央	石組み、壁掘り込み		178〜182	溝址3を切る。	VI	20
16	隅丸方形 (2.04)×4.08	N−90°−W	8.01	26〜28	西壁中央	石袖		183		IV〜V	21
17	隅丸方形 4.84×5.42	N−90°−E	26.12	10.5〜18	東壁北寄	壁掘り込み	2	184〜189		XII〜XIII	22
19	隅丸方形 (1.20)×5.44		6.43	34〜37				190〜193		VI	23
20	隅丸方形 (0.60)×3.55		1.86	21				194〜196		X	23

2）掘立柱建物址・柵列

今回の調査で検出した掘立柱建物址・柵列は、それぞれ6棟を数える。これらは、ピットを数多く検出した調査区中央東北部と東部に集中しており、建物址1と柵列1は他のものから離れた西の地区に位置している。これらの規模、構造、柱穴の掘り方、周囲の遺構との切り合い等について概要を簡単にふれてみたい。

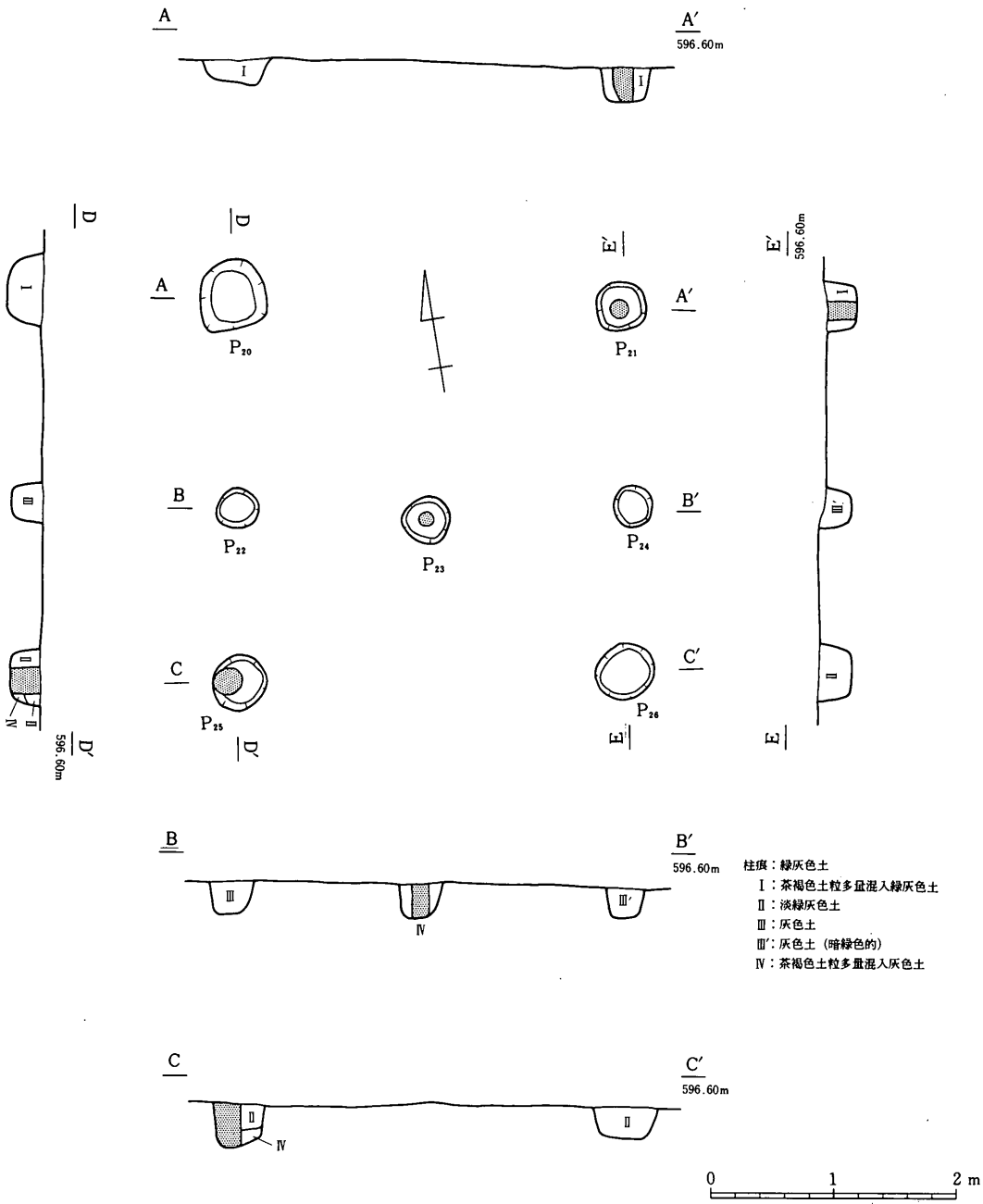
まず建物址であるが、規模でみると1間×1間が2棟、2間×2間が2棟、残りが3間×3間と4間×2間となる。平面形は圧倒的に長方形が多く建物址4（以下番号のみ）のみが方形を呈する。構造は、総柱式3棟（1・2・5）、側柱式3棟（4・6・7）であった。柱間寸法は、それぞれ異なる。柱穴平面形は、ほとんどが円形である。その規模は1と6が直径50cm前後に対しそれ以外のものは15～30cm程と2つに分かれる。また、覆土中には1と6に柱痕が認められる。

遺物・切り合いからある程度時期が求められるものをみてみたい。5からは土師器埦・甕、須恵器坏・蓋等の遺物が得られており奈良時代後半から平安時代初期に位置づけられる。6は10号住居址より新しく、柱穴の規模、覆土の色調から中世以降に属する。5は土壙5を取り囲むように柱穴の一部が配置しており、両遺構が同時に存在していた可能性が考えられる。

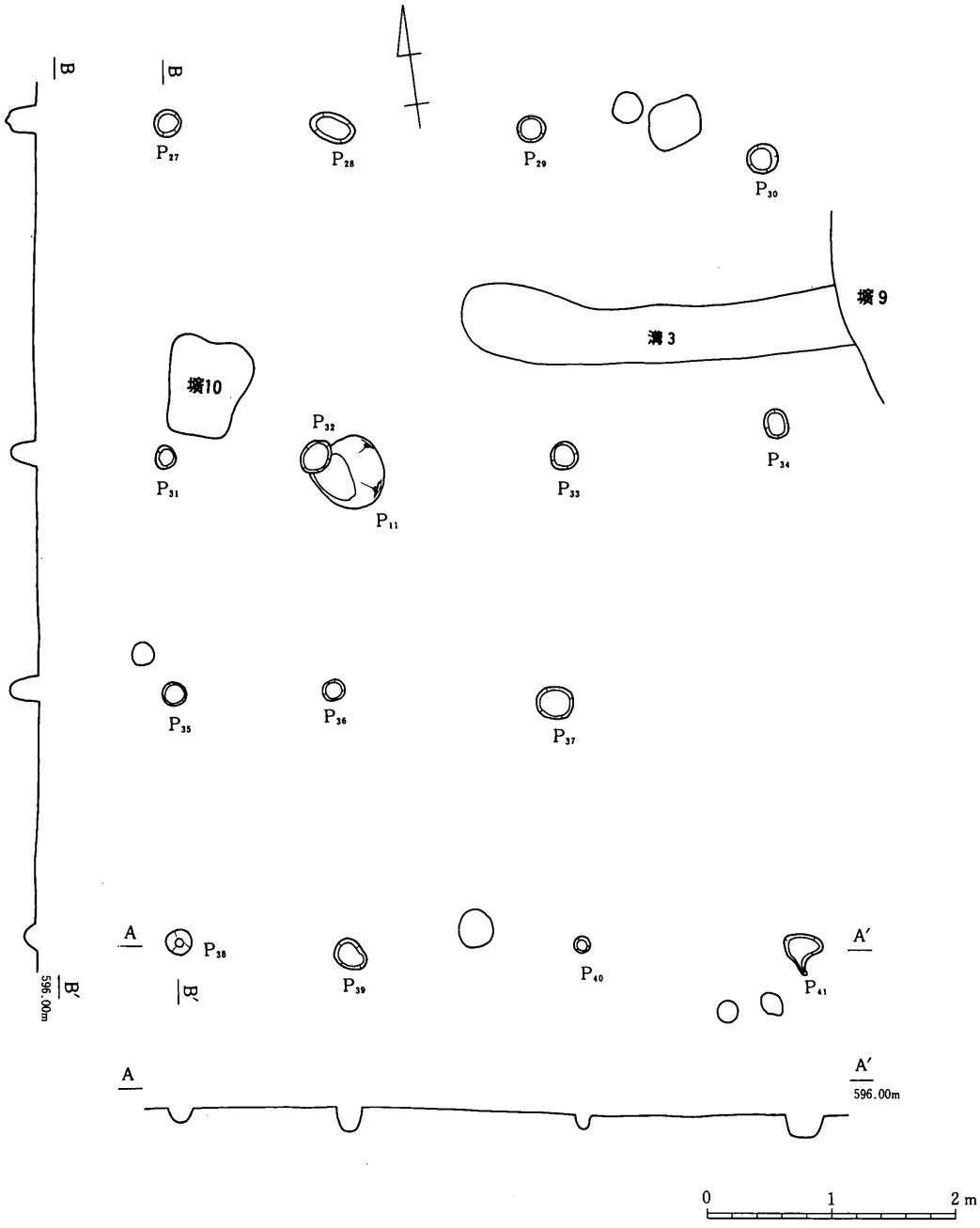
次に柵列であるが、規模は2間が2棟、3間が3棟、5間が1棟となる。6棟のうち5棟のピットが円形あるいは楕円形でその規模も小形であるのに対し1は方形で大形である。この顕著な特徴は、今までの島立の発掘例によりその時期を奈良～平安時代と予想したい。遺物を出土したピットは全くなかった。ただ4と5に礫1個を含むものがあったのみである。覆土中に柱痕が認められたものは、1・3・4・6でその直径は10cm程であった。6の東脇には溝3が平行しており、溝を意識しての並びが見える。発掘の所見では溝3に先行するとも思えるが、切り合い部分が僅かであり両遺構が同時存在したものと考えたい。

ピットは総計180個で、うち80個が上記の遺構として一括に扱っている。これら一群のものとして扱えない個々のピットについて見る。これらは調査区の中央から東部にかけての範囲に集中し建物址の分布と重なり、西半部にはまばらな状態であった。個々でみると建物址・柵列と比較しても規模・深さ・覆土の様子は見劣りするものではない。今までの当地区の発掘所見によると小径で灰色を示すものの多くは中世以降と考えられよう(注)。

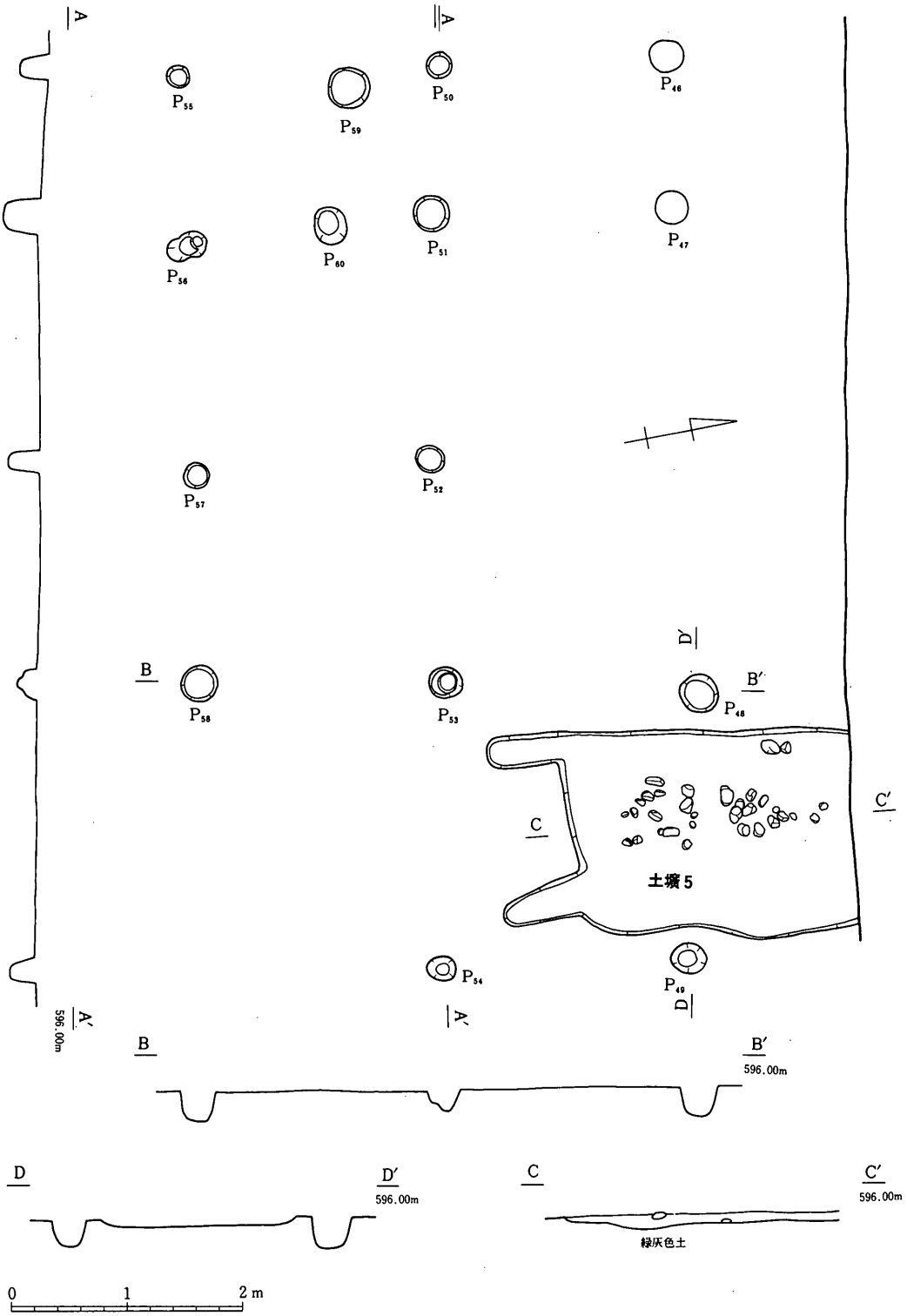
（注）松本市教育委員会『松本市島立南栗遺跡』1987


A
A′
596.60m
D
D′
596.60m
E′
E
596.60m
B
B′
596.60m
C
C′
596.60m
P20
P21
P22
P23
P24
P25
P26
柱痕：緑灰色土
Ⅰ：茶褐色土粒多量混入緑灰色土
Ⅱ：淡緑灰色土
Ⅲ：灰色土
Ⅲ′：灰色土（暗緑色的）
Ⅳ：茶褐色土粒多量混入灰色土
0
1
2 m

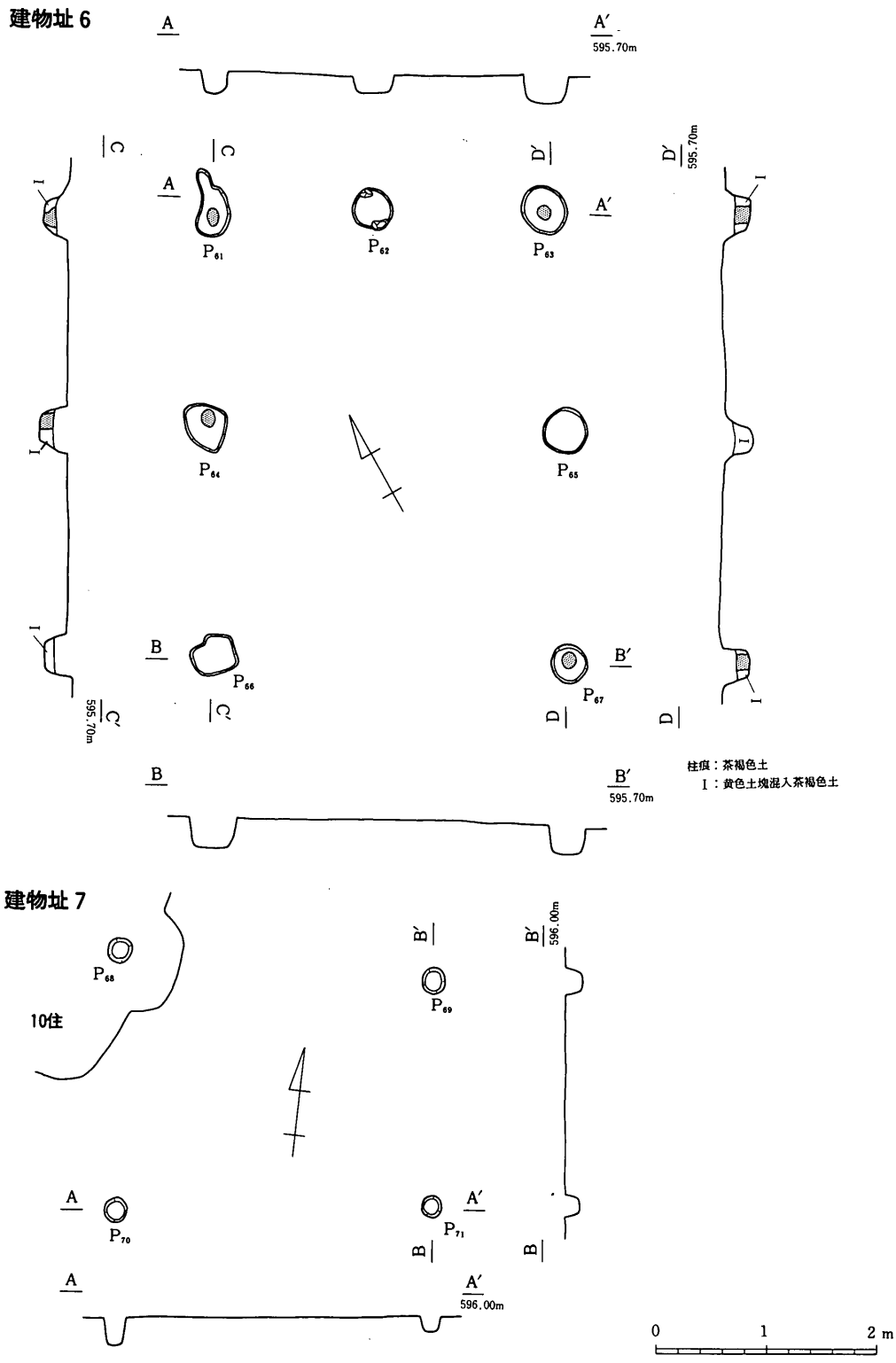
第24図　建物址 1


B
B
P27
P28
P29
P30
溝9
溝3
溝10
P32
P31
P11
P33
P34
P35
P36
P37
A
P38
P39
P40
P41
A′
B′
B′
596.00m
A
A′
596.00m
0
1
2 m

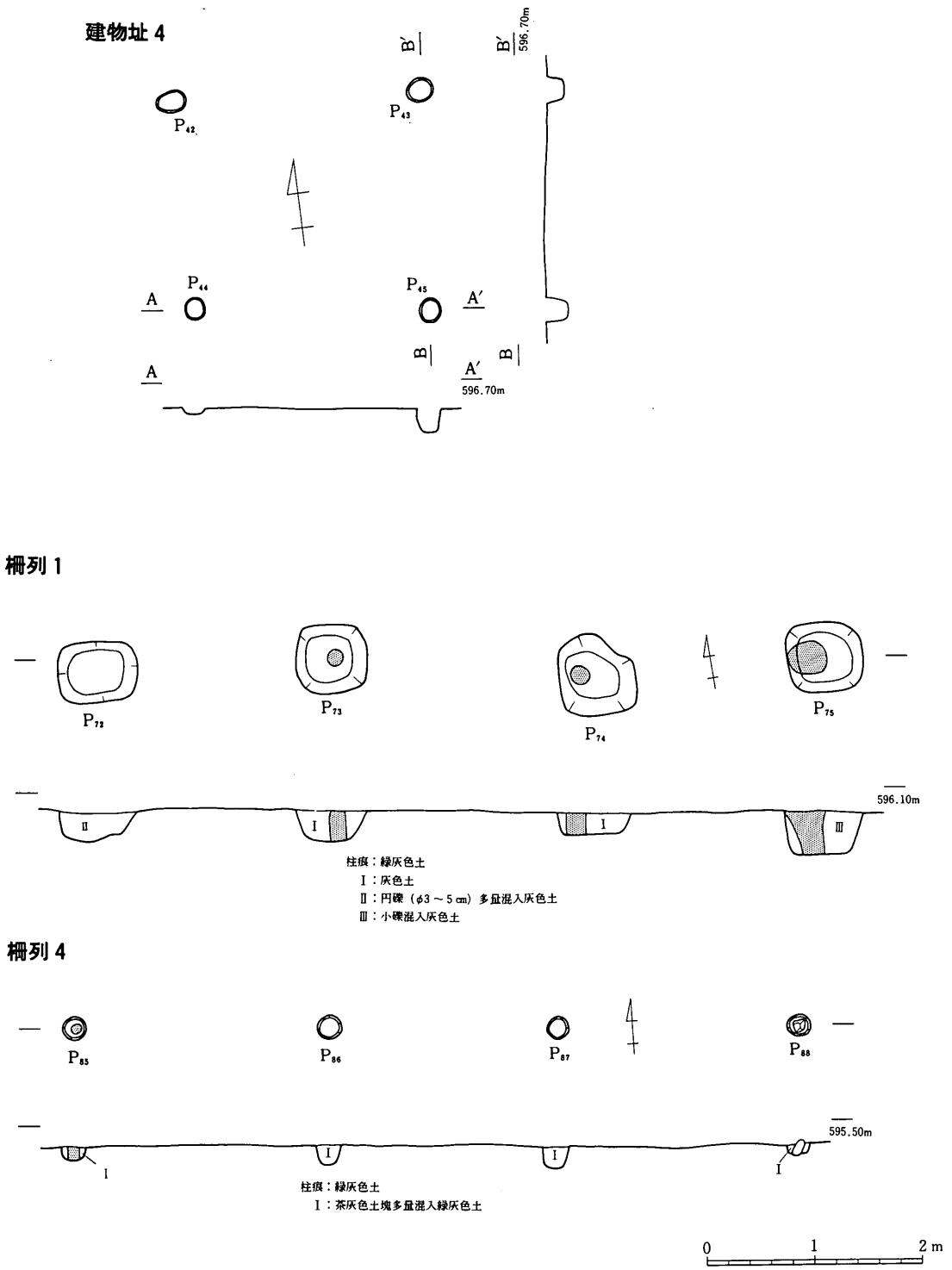
第25図　建物址 2


A
A
P55
P59
P50
P46
P56
P60
P51
P47
P57
P52
B
P58
P53
D
B′
P48
C
C′
土壙5
P54
P49
D
A′
A′
596.00m
B
B′
596.00m
D
D′
596.00m
C
C′
596.00m
緑灰色土
0
1
2 m

第26図　建物址 5

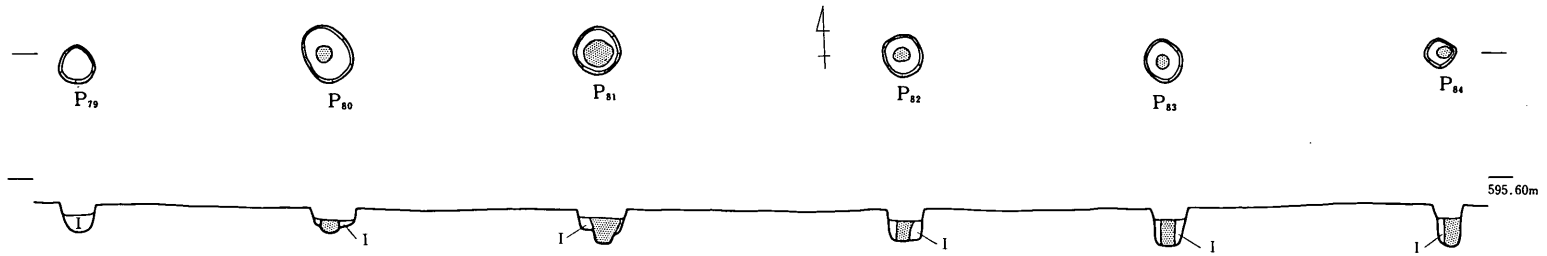

建物址 6
A
A′
595.70m
C
C
D′
D′
595.70m
A
A′
P61
P62
P63
P64
P65
B
B′
P66
P67
C
C
D
D
595.70m
B
B′
595.70m
柱痕：茶褐色土
I：黄色土塊混入茶褐色土
建物址 7
P68
10住
B′
B′
596.00m
P69
A
A′
P70
P71
B
B
A
A′
596.00m
0
1
2 m

第27図　建物址 6 ・ 7

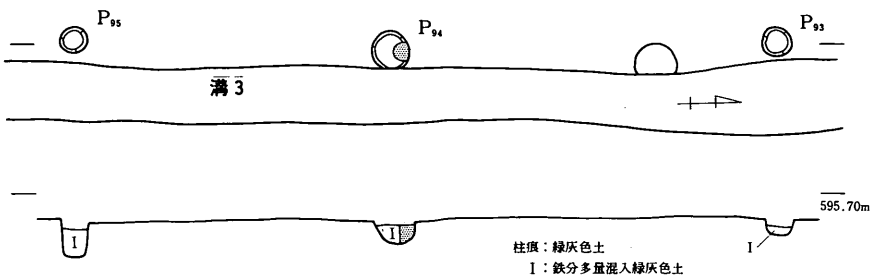


第28図　建物址 4、柵列 1・4

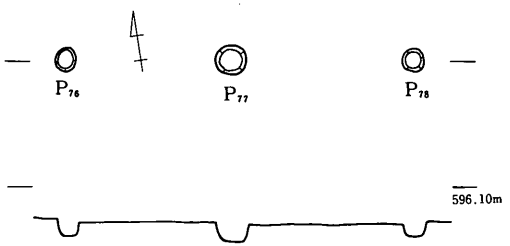
柵列 3



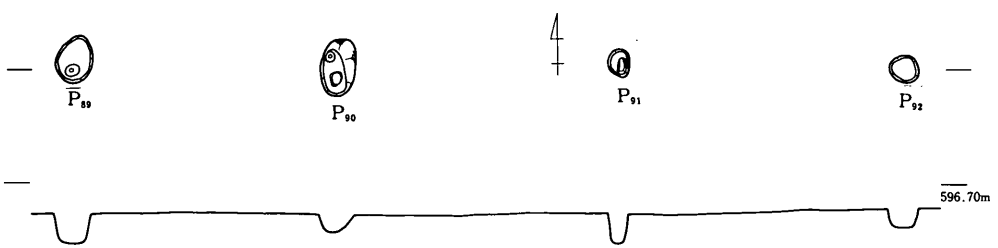
柵列 6

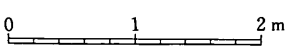


柵列 2



柵列 5





第29図　柵列 2・3・5・6

表 2

建物址一覧表

No.	平面形 柱配り	主軸方向	規模（m）	柱間寸法(m)	柱穴規模（cm）No.	長径	短径	深さ	柱穴平面形	柱穴備考	建物址所見
1	長方形 総柱式	N－80°－W	2間×2間 3×3.2	桁 1.7～3.2 梁 1.3～1.7	20	55	53	27	不整楕円形		
					21	40	39	27	円形	柱痕あり	
					22	35	33	26	円形		
					23	41	38	26	円形	柱痕あり	
					24	33	31	24	円形		
					25	46	44	26	円形	柱痕あり	
					26	50	45	26	円形		
2	長方形 総柱式	N－6.5°－E	3間×3間 6.5×4.8	桁 1.9～2.7 梁 1.2～1.9	27	21	20	37	円形		
					28	31	25	18	楕円形		
					29	22	21	20	円形		
					30	25	23	33	円形		
					31	18	16	22	円形		
					32	25	23	25	楕円形		
					33	23	22	38	円形		
					34	22	17	16	楕円形		
					35	19	19	24	円形		
					36	19	17	24	円形		
					37	32	26	22	楕円形		
					38	20	19	13	円形		
					39	26	23	19	不整円形		
					40	13	12	10	円形		
					41	31	30	18	不整形		
4	方形 側柱式	N－81.5°－W	1間×1間 2.3×2.0	桁 2.2～2.3 梁 1.9～2.0	42	28	20	3	楕円形		
					43	24	23	14	円形		
					44	18	18	4	円形		
					45	21	19	21	円形		
5	長方形 総柱式	N－83.5°－W	4間×(2間) 7.7×(4.2)	桁 1.3～2.5 梁 2.2～0.9	46					測定せず	土壙5が付近に位置する
					47					〃	
					48	33	32	26	円形		
					49	32	27	21	円形		
					50	23	22	25	円形		
					51	32	31	30	円形		
					52	25	24	28	円形		
					53	29	26	18	円形	二段底	
					54	25	23	21	円形		
					55	19	18	14	円形		
					56	35	21	29	不整形	二段底	
					57	23	22	11	円形		
					58	32	30	25	円形		
					59	35	34	18	円形		
					60	32	26	16	楕円形		

No.	平面形 柱配り	主軸方向	規模（m）	柱間寸法(m)	柱穴規模（cm） No.	長径	短径	深さ	柱穴平面形	柱穴備考	建物址所見
6	長方形	N－28.5°－E	2間×2間	桁 1.9～2.1	61	55	35	27	不整形	柱痕あり	
			4.1×3.1	梁 1.4～1.6	62	39	35	18	円形		
	側柱式				63	45	38	26	円形	柱痕あり	
					64	48	38	27	不整円形	〃	
					65	41	40	26	円形		
					66	40	36	28	不整形		
					67	35	32	31	円形	柱痕あり	
7	長方形	N－85.5°－E	1間×1間	桁 2.8～2.9	68	24	21		円形		10号住居址より新しい
			2.9×2.2	梁 2.1～2.3	69	23	22	5	円形		
	側柱式				70	23	19	25	円形		
					71	19	17	13	円形		

※建物址3は欠番である。

表3　柵列一覧表

No.	主軸方向	規模（m）	柱間寸法(m)	柱穴規模（cm） No.	長径	短径	深さ	柱穴平面形	柱穴備考	柵列所見
1	N－82°－W	3間	2.1～2.4	72	74	58	28	長方形		
		6.8		73	68	65	28	方形	柱痕あり	
				74	75	71	28	不整形	〃	
				75	70	64	39	長方形	〃	
2	N－83.5°－W	2間	1.3～1.4	76	20	16	13	円形		
		2.8		77	25	22	15	円形		
				78	20	17	9	円形		
3	N－82°－W	5間	2.0～2.4	79	30	28	22	円形		
		10.8		80	46	38	19	楕円形	柱痕あり	
				81	37	37	28	円形	〃	
				82	33	30	23	円形	〃	
				83	35	29	29	楕円形	〃	
				84	25	25	38	方形	〃	
4	N－87°－W	3間	2.1～2.4	85	22	21		円形	〃	
		6.7		86	22	22		円形		
				87	20	19	20	円形		
				88	22	19	14	円形		
5	N－89°－W	3間	2.2～2.3	89	38	30	24	楕円形		
		6.6		90	45	28	30	楕円形		
				91	22	17	27	不整楕円形		
				92	23	21	15	円形		
6	N－2°－E	2間	2.5～3.1	93	23	14	13	円形		溝3との関係あり？
		5.6		94		29	25	円形	柱痕あり	
				95	20	20	30	円形		

3）土壙・溝址

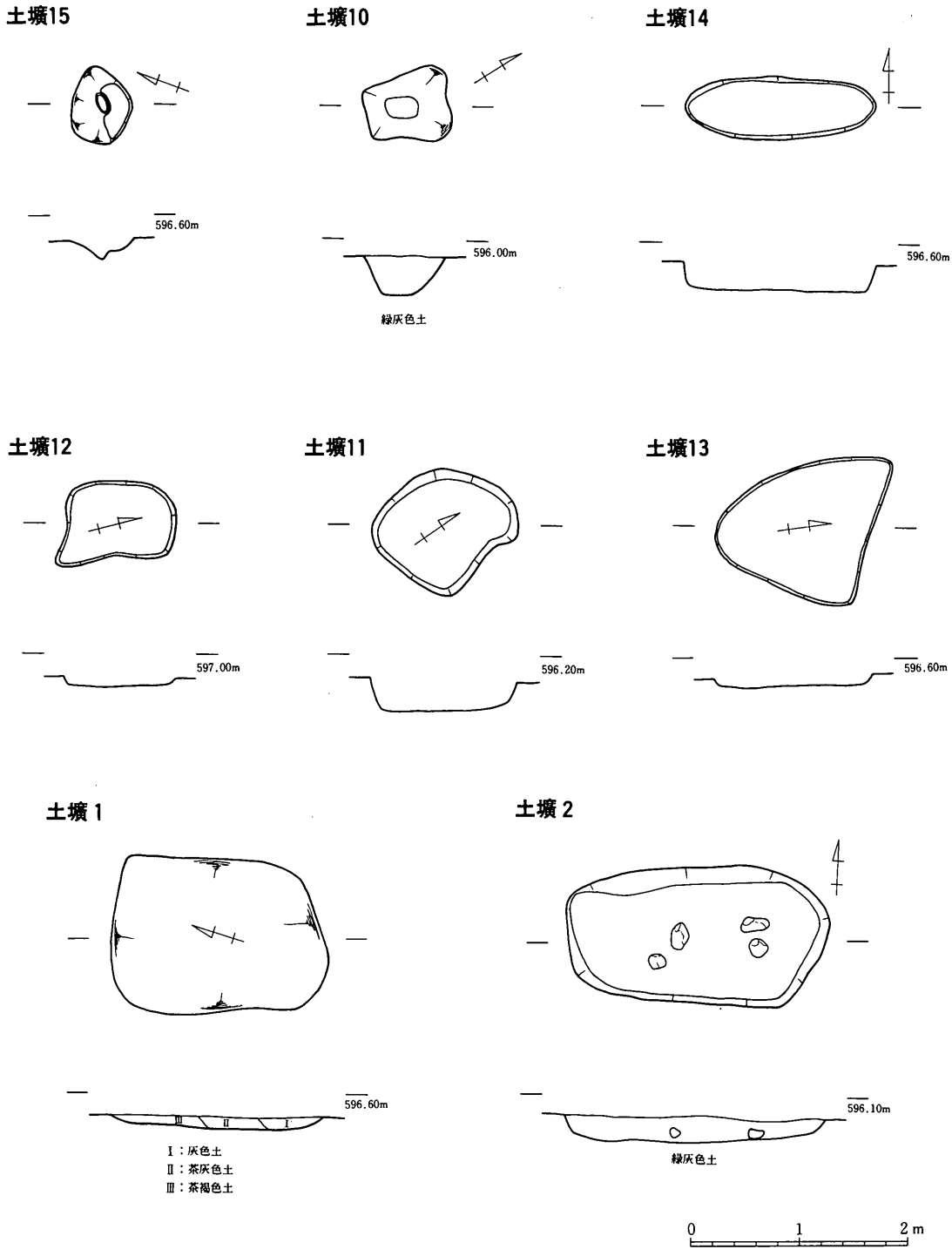
土壙は総数16基である。これらは全域で散在していた。以後特徴的なものについてのみふれてみたい。

土壙1・8・9・13（以下番号のみ）は、覆土が茶灰を主体としており周囲の土との区別がつきにくく検出時においてプランが不明瞭であった。3・4・6には、拳大程の礫が多量に含まれており、特に平面形・規模の点で4と6は類似する。ただし4は礫が中央部覆土下層に多出するのに対し6では床面に接している。両床面とも鉄分が沈澱しやや堅さが見られた。これらの埋没の状況は、自然堆積とは異なるものであった。3は南北に長い楕円形を呈し礫は上層より多出する。5は平面形が南壁2箇所で突出しており床面は凹凸が激しく、鉄分が沈澱していた。おそらく建物址5に付属する施設と思われる。

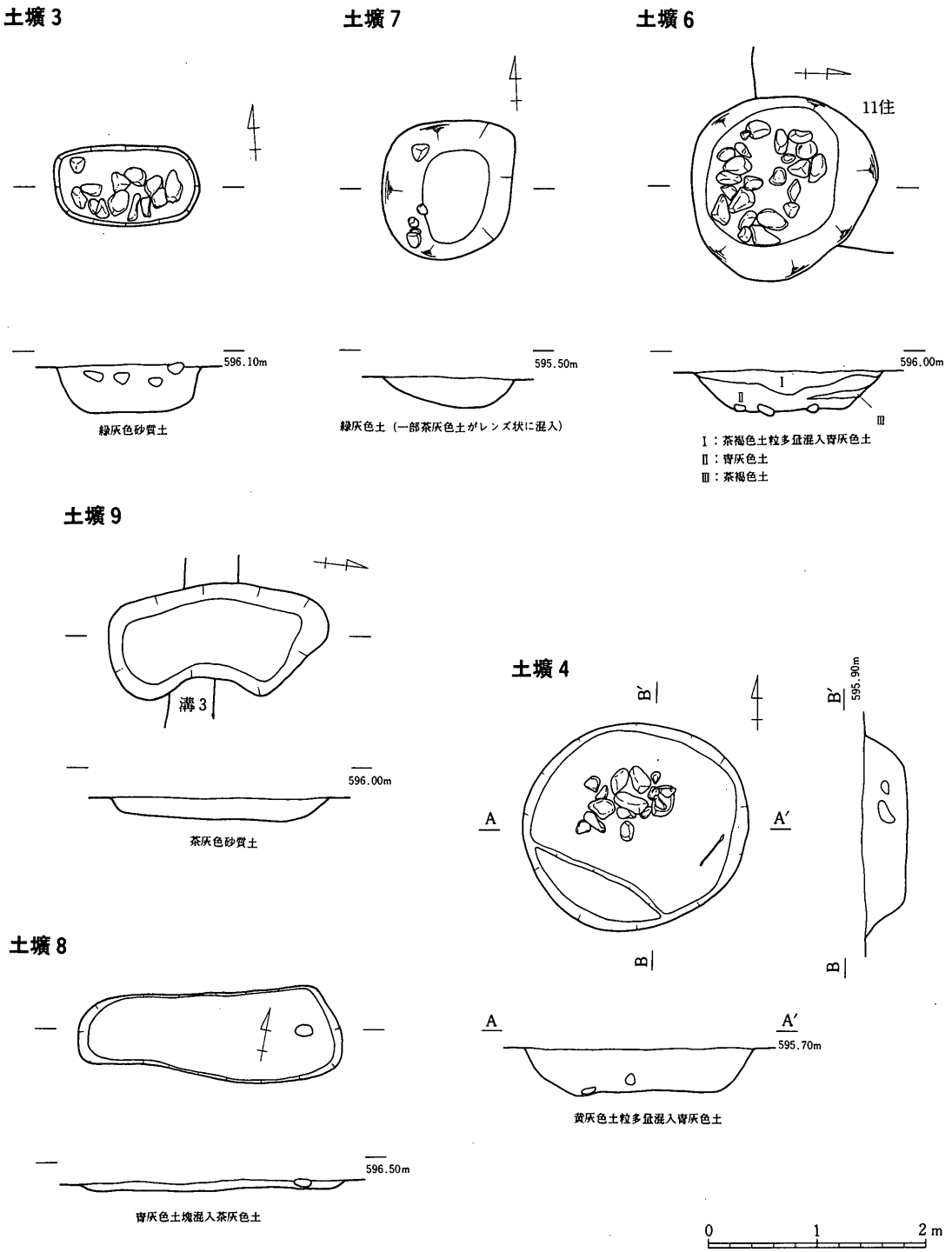
切り合いよりおおよその時期を知ることができるものがある。9は溝址3との関係から平安時代以後の遺構と考えられ、6は11号住居址との前後関係より奈良時代以降のものとされる。なお、遺物を出土したものは7基あったが、遺構内には時期の異なる土器片の混在が甚だしく、それぞれの時期を明確に求めることは不可能である。

溝址であるが、全部で5条検出した。このうち遺物はどの溝においても全く見当らなかった。各溝ごとに概要を簡単にふれてみたい。

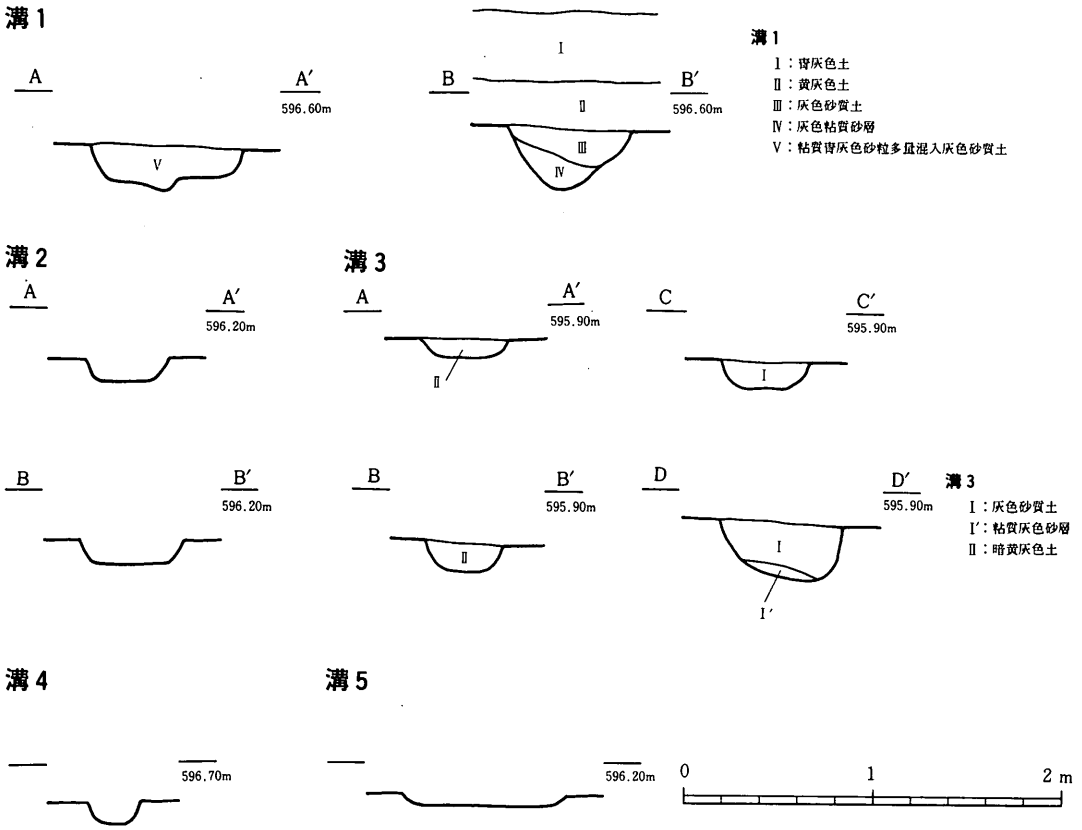
まず溝1（以下番号のみ）は、北部が特に広く、ここには礫の堆積が下層に見られ鉄分が沈着している。大変硬く床面まで掘り下げなかったが、水が流れた痕跡と判断した。2と3は検出面が低かったため途切れているが、方向・規模の点からみて一連のものである。特徴的なことは、11号住居址西南で直角に折れ西および南方に直線的に伸びており、明らかに人為的に作られた跡がある。断面形は壁がなだらかに落ち込み底部は丸味をおびていた。覆土は灰色を基調としていて場所により砂質を呈する。底面は鉄分の沈澱はなく軟弱な面で、水を伴っていたとは思えない。おそらく区画溝としての性格をもつものと考えられる。時期は切り合い関係よりして奈良時代以前のものである。4は方向が北東―南西へ走る。東北部分は調査区域外へ伸びているため検出は一部にとどまる。巾は細く浅い。性格等は不明である。5は底面だけが残存していたが、本来かなり上面から検出できたものである。方向は南北に伸びているのがわかる。断面形よりみて水が流れていたのか痕跡は明らかではないが、現水田のせぎに丁度一致する。これらのことと、灰色の覆土とを考え合わせれば、5の時期は中世以降のものとなるであろうか。


土壙15
596.60m
土壙10
596.00m
緑灰色土
土壙14
596.60m
土壙12
597.00m
土壙11
596.20m
土壙13
596.60m
土壙 1
596.60m
Ⅲ
Ⅱ
Ⅰ
Ⅰ：灰色土
Ⅱ：茶灰色土
Ⅲ：茶褐色土
土壙 2
596.10m
緑灰色土
0
1
2 m

第30図　土壙（1）


土壙 3
596.10m
緑灰色砂質土
土壙 7
595.50m
緑灰色土（一部茶灰色土がレンズ状に混入）
土壙 6
11住
596.00m
Ⅰ
Ⅱ
Ⅲ
Ⅰ：茶褐色土粒多量混入青灰色土
Ⅱ：青灰色土
Ⅲ：茶褐色土
土壙 9
溝 3
596.00m
茶灰色砂質土
土壙 4
B′
B
A
A′
595.90m
595.70m
黄灰色土粒多量混入青灰色土
土壙 8
596.50m
青灰色土塊混入茶灰色土
0
1
2 m

第31図　土壙（2）



第32図　溝　址

表4　土壙一覧表

番号	平面形	規模（cm）長径×短径×深さ	長軸方向	遺物（数字は土器番号）	備考
1	不整長方形	204×98×6	N－18°－W		
2	不整長方形	242×128×23	N－88°－W		石は4個とも覆土下層中
3	長方形	132×75×43	N－88°－W		石は覆土上層中
4	円　形	207×195×42	N－88°－E	198、199、鉄器あり	石は覆土中～下層
5	不整形	307×179×13	N－3°－E		建物址5と関係あるか
6	円　形	172×157×37	N－1°－E		11号住居址より新、石は床面密着
7	不整円形	125×119×26	N－9°－E		
8	不整長方形	241×88×8	N－80°－E		
9	不整楕円形	197×95×20	N－5°－W		溝址3を切る
10	不整方形	83×72×37	N－31°－E		
11	不整方形	118×104×30	N－35°－E		
12	不整方形	115×73×7	N－16°－E		
13	不整形	150×135×11	N－8°－E		
14	楕円形	175×68×36	N－90°－W		
15	不整円形	64×55×22	N－77°－E		底面不安定
16	円　形	64×54×47	N－2°－W		（詳細図なし）

3．遺物

1）土器

(1) 概要

今回の調査では、各遺構の覆土・底面および検出面から多量の土器の出土をみた。総量は約77.1kg。種別の構成についてみると、土師器が59.8kg、須恵器が15.8kg、灰釉陶器が1.5kgで、土師器と須恵器がそのほとんどを占めている。これらは、微量の混入品を除き、その形態および製作技法の特徴からみて、当地方の奈良時代から平安時代にかけての土器様相中に位置づけられるものと考える。

(2) 出土土器の提示

各遺構および検出面から出土した土器は、実測図作成可能なもののみ、出土地点ごとにまとめて提示した。（第33～49図）図中では、土器の製作過程で残される成形・調整痕の表現を、すべて模式化し統一性を持たせた。また、図中の通し番号の横には、H：土師器、S：須恵器、K：灰釉陶器と、土器の種別を表記し、各個体についての詳細は観察表にまとめ、一覧が可能にしてある。図化不可能な破片については、各遺構ごとに器種・器形を細かく分類し、図化したものも含め、重量を計測することによって、出土土器群の様相が把握できるよう努めた。

(3) 器種・器形の分類と様相

過去5年間の島立地区発掘調査で得られた膨大な資料により、当該時期の土器については、器種組成のあらましが明らかとなってきている。本調査における出土土器の器種・器形の分類方法および呼称については、松本市南栗遺跡調査報告（第1～3次、文献5・6・7）同北栗遺跡調査報告（文献8）を基調にしながら、最終的には松本市島立条里的遺構調査報告（文献10）によるものとした。（表5・6は文献10のものを掲載する。）

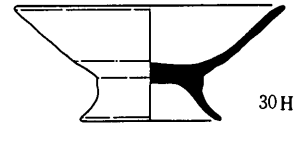
①土師器

器種は、坏・埦・皿・盤・鉢・甕・小形甕・壺・甑・羽釜がある。坏・埦・皿・鉢の中には、内面に黒色処理されたものを含む。

坏　ロクロ使用の坏C・坏D・坏Eがある。坏Dはその口径においてⅠ（口径15～20cm）、Ⅱ（同12～15cm）、Ⅲ（12cm以下）と細分した場合、坏CⅠ・同Ⅱ、坏DⅡ・同Ⅲがみられる。坏Cには金属器を模したと思われる図10がある。

埦　埦A・埦Bがある。ほとんどが口径10～16cm以内におさまる。図71は口径18cmとかなり大形ではあるが、胴部下半に回転ヘラケズリがみられる事から埦Aに含めた。

盤B　挿図2に示す高台が足高となるものをいう。（文献13）



挿図2　盤B

表5　　土師器器種・器形一覧表

番号	器種・器形	製作技法等の特徴	出典・出土遺構
1	坏A（有稜）	ヨコナデ・体部外面下半ケズリの後、内外面ミガキ。	文献6　77住
2	坏A	ヨコナデ・体部外面下半ケズリの後、内外面ミガキ、内面黒色処理。	文献6　38住
3	坏BII	ロクロナデ、体部外面下半および底面ケズリ。底面と体部の境界に稜を作る。	文献7　18住
4	坏BII	ロクロナデ、体部外面下半および底面のケズリにより境界の稜を失う。内面ミガキ・黒色処理。	文献7　19住
5	坏BI	ロクロナデ、底面ケズリ。内面ミガキ・黒色処理。	文献8　13住
6	坏CII	ロクロナデ、底面糸切り痕。内面ミガキ・黒色処理。	文献7　9住
7	坏CI	ロクロナデ、底面糸切り痕。内面ミガキ・黒色処理。	文献7　9住
8	坏DIII	ロクロナデ、底面糸切り痕。	文献8　20住
9	坏DII	ロクロナデ、底面糸切り痕。	文献8　20住
10	坏E	ロクロナデ、底面中央に糸切り痕を残し外周ケズリ、体部下半ケズリ。体部内面縦ミガキ、外面横ミガキ。	文献6　75住
11	椀A	ロクロナデ、底面糸切り痕・付け高台。内面ミガキ・黒色処理。	文献7　9住
12	椀B	ロクロナデ、底面糸切り痕・付け高台。	文献8　23住
13	椀B（足高）	ロクロナデ、底面糸切り痕・付け高台。	文献8　20住
14	椀C	ロクロナデ、底面糸切り痕・付け高台。内面ミガキ・黒色処理。	文献2　1住
15	椀D	型押し、口縁ヨコナデ、付け高台。内面ミガキ・黒色処理。	文献8　29住
16	皿A	ロクロナデ、底面糸切り痕・付け高台。内面ミガキ・黒色処理。	文献7　6住
17	皿B	ロクロナデ、底面糸切り痕・付け高台。内面ミガキ・黒色処理。	文献7　6住
18	皿X	ロクロナデ、底面糸切り痕。	文献8　20住
19	皿X	ロクロナデ、底面糸切り痕。	文献8　20住
20	鉢	ロクロナデ、底面糸切り痕。内面ミガキ。片口が一か所に付される。	文献8　21住
21	鉢	ロクロナデ、底面糸切り痕。内面ミガキ・黒色処理。口縁端部肥厚。	文献7　6住
22	高坏	口縁ヨコナデ、脚部外面ミガキ、坏部内面ミガキ・黒色処理。	文献3　2号墳
23	小形甕B	内外面ヘラナデ。器肉が厚い。	文献7　8住
24	小形甕C（丸底）	口縁ヨコナデ、胴部外面ハケメ・内面ヘラナデ。	文献7　16住
25	小形甕C（平底）	口縁ヨコナデ、胴部外面ハケメ・内面ヘラナデ。底部下端ケズリ。底面に木葉圧痕。	文献7　5住
26	小形甕E	ロクロナデ、底面糸切り痕、胴部外面と口縁内面にカキメ。	文献8　検出面
27	小形甕F	ロクロナデ、底面糸切り痕。	文献8　19住
28	小形甕F′	口縁ヨコナデ。胴部および口縁内面ハケメ・ナデ・指頭圧痕。底部平で若干あげ底。	文献7　18住
29	小形甕G	口縁ヨコナデ、胴部外面ケズリ・内面指頭圧痕。非常に薄い。	文献4　4住
30	甕A	口縁強いヨコナデ、胴部ナデ・ヘラナデ。底面に木葉圧痕。	文献6　68住
31	甕A（ハケメ）	口縁強いヨコナデ、胴部外面縦のハケメ、胴部内面ナデ・ヘラナデ。	文献10　15住
32	甕C	口縁ヨコナデ、胴部内外面縦のハケメ。頸部くびれず、丸底。	文献7　8住
33	甕D	胴部外面縦のハケメ・内面縦横のハケメ。口縁内面・胴部上半外面カキメ。	文献7　17住
34	甕E	胴部外面縦のハケメ・内面縦のナデによる浅広で長い溝状痕。口縁内面（一部胴部上半内面）カキメ。底面ナデ。	文献6　4住
35	甕E（内ハケメ）	胴部外面縦のハケメ・内面横のハケメ、口縁内面カキメ。	文献8　2住
36	甕F	口縁ヨコナデ、胴部外面ケズリ・内面指頭圧痕（一部にハケメ）。非常に薄い。	文献4　4住
37	甕G	口縁ヨコナデ、胴部外面ハケメ・ナデ、内面ハケメ・ナデ・ヘラナデ。	文献6　11住
38	羽釜	口縁雑なヨコナデ、胴部ナデ。	文献10　6住

ロクロ使用で内外面ともミガキがなく、外形は体部が直線的に口縁に向って立ち上がり、高台は「ハ」の字状に外側に開く。従来の器種・器形区分においては「椀B」として扱ってきているものである。（表5．No.13がそれである。）

鉢　土師器坏Cと同様の外形・手法を取っているが、口径が20cmを越えるものをあてている。図示したものは101のみである。口縁端部がやや厚くなり平らな面をもち、片口がつくと考えられる。

甕　甕A・甕C・甕D・甕E・甕F・甕Gと多種に亘る出土をみた。このうち甕Eが7割近くを占めている。甕Aは口縁部の強いヨコナデと、厚手でナデ・ヘラナデ調整を行なう雑な胴部をもつものと、胴部外面にハケメが残されるものとがある。今回は、後者に値するものが多い。図132・144がその例である。甕Aハケメの形状と厚さは、甕Aのそれよりもむしろ甕Eに近いと思われる。甕Eは口縁内面カキメと、胴部外面に縦のハケメを持つもの（図21・22・20等）と、胴部内面に縦

表6　　須恵器器種・器形一覧表

番号	器種・器形	製作技法等の特徴	出典・出土遺構
39	蓋A	『坏蓋』ロクロナデ、天井部回転ケズリ。肩部に稜、口縁内側に僅かな沈線。	文献7　11住
40	蓋B	『カエリ蓋』ロクロナデ、天井部回転ケズリ後つまみ。口縁内側にかえり。	文献10　14住
41	蓋C	ロクロナデ、天井部回転ケズリ後つまみ。端部屈曲。	文献8　14住
42	蓋D	ロクロナデ、天井部回転ケズリ後環状つまみ。	文献6　75住
43	蓋E	ロクロナデ、天井部回転ケズリ後つまみ。端部下方へやや長く屈折。	文献11　27住
44	坏A	『蓋坏』ロクロナデ、底面回転ケズリ。蓋受部と立ち上がりを有す。	文献7　11住
45	坏BII	ロクロナデ、底面ヘラ切り痕または回転ケズリ。箱形。	文献6　11住
46	坏BII	ロクロナデ、底面ヘラ切り痕または回転ケズリ。逆台形。	文献8　13住
47	坏BI	ロクロナデ、底面ヘラ切り痕または回転ケズリ。	文献6　11住
48	坏CII	『有台坏』ロクロナデ、底面回転ケズリまれに糸切り痕を残し付け高台。箱形。	文献7　10住
49	坏CIV	『有台坏』ロクロナデ、底面回転ケズリまれに糸切り痕を残し付け高台。箱形。	文献8　溝1
50	坏D	ロクロナデ、底面糸切り痕。	文献6　75住
51	坏D	ロクロナデ、底面糸切り痕。	文献8　5住
52	坏E	ロクロナデ、底面糸切り痕。坏Dに似るが、胎土粗悪、焼成不良で軟質。	文献8　25住
53	高坏	ロクロナデ、坏部底面回転ケズリ。脚部中央に沈線、端部短く屈曲。蓋B・Cの作りかけに脚を付けたようなもの。	文献3　1号墳
54	埦	ロクロナデ。口縁短く外反。体部中央に沈線。	文献7　建9
55	盤	ロクロナデ、底面ケズリ、付け高台。	文献6　75住
56	長頸壺A	ロクロナデ、三段成形。肩部と胴下部に回転ケズリ、底面糸切り痕、付け高台。頸部内面しぼり痕。	文献4　10住
57	長頸壺B	ロクロナデ、三段成形。胴部に回転ケズリ、底面圧痕、付け高台。肩部に稜。	文献3　2号墳
58	長頸壺C	ロクロナデ、底面糸切り痕。	文献7　墳80
59	広口壺	ロクロナデ、底面糸切り痕、胴部下端回転ケズリ。	文献12　1住
60	短頸壺	ロクロナデ、底面糸切り痕。	文献6　47住
61	短頸壺	タタキメ、一部ロクロナデ、付け高台。胴部に沈線。把手（耳）4か所。	文献3　1号墳
62	平瓶	ロクロナデ、底面一帯回転ケズリ。頸部に沈線。	文献10　14住
63	フラスコ形瓶	ロクロナデ、胴部側面（成形時の底面）回転ケズリ、他方側面粘土板貼付け痕。頸部内面しぼり痕。口縁直下に段。	文献1　8号墳
64	瓶	ロクロナデ、胴部・底面回転ケズリ、付け高台。注口1か所貼付け。	文献10　15住
65	甕（広口）	タタキメ、口縁ロクロナデ。平底。	文献9　3住
66	甕（長頸）	タタキメ、口縁ロクロナデ。	文献3　2号墳

ないし横のハケメを持つもの（図143）がある。又、甕Dは、口縁部が厚く「く」の字形に外反し、同内面と胴部上半にカキメが施されるが、図111に示す胴部下半に縦方向のケズリがみられるものもある。甕Eにおいても胴部下半を縦方向にケズるものがある。（図75）

小形甕　ほとんどが小形甕C・小形甕E・小形甕Fに属し、口径8～20cmの範囲に収まる。小形甕Cは、否ロクロで胴部外面にハケメのもの、内面にハケメのもの、内外面ともハケメのものを含めた。図180は内外面ハケメで、胴部下半は縦方向のケズリがみられる。小形甕Eの図80においても、胴部下半を縦方向にケズリ込んでいるものがある。

壺　表5にはない。内外面ともヘラミガキが成されているが、僅かに出土をみただけである。

甑　表5には記載されていない。図中138・182は内外面にハケメを持つ甕の底部に貫通孔を有するものであり、図131は胴張り型の甕の底部に複数の貫通孔を持つものと思われる。出土例は少ない。

羽釜　図示したものはない。鍔部分、胴部の一部が出土したのみである。

②須恵器

器種は、坏・蓋・盤・鉢・擂鉢等がある。出土量は全体の2割であるが、盤・鉢・擂鉢はあまり出土例をみない。

坏　坏B・坏C・坏D・坏Eの4種がみられる。坏Dがこのうち6割近くを占める。坏Bの比率は低く、比較的平らな底部から体部が大きく外開し逆台形をなす同II（図114・116）がある。坏Cの外形は箱形で、その口径と底部より同II（図118・162・158・159等）が主体となり、これよりも大形になると思われるもの（図161）も混る。坏Dは、二次底部面をもつもの（図117等）、底部より強い外傾度で直線的に外開する体部をもつもの（図4・154）、底部を糸切りした後その外周を手持ちヘラケズリしているもの（図153）がみられる。又、図108には内外面の一部に「漆」と思われる付着物があった。坏Eは、粗悪な胎土と軟弱な焼成で「生焼け」と呼ばれるものである。

蓋　蓋Cのみがみられる。口径13～20cmの範囲にある。

盤　大きく平らかな底部より、短い体部が屈折して立ち上がり、やや高めの高台が付く従来のものとは少し異にする。図176高盤がそれである。図より全形を知り得る事はできないが、高坏の脚とも思われる高台は、やや短くラッパ状に外反、その端部は短く下方へ屈曲する。

鉢　図128である。須恵器坏B類よりも口径に対する器高の割合が高い為に、鉢として扱う。丸味を帯びた底部から外傾度の弱い体部が直線的に外開している。底部にはヘラ記号があり、体部下半は回転ヘラケズリを加え、上半部には雑な沈線と思われるものが巡っている。南栗遺跡（文献7）での鉢類とはやや異なる。

擂鉢　底部を除く体部が出土した。（図125）　焼成段階でのゆがみがみられ外傾度の弱い体部が直線的に外開し、鉢よりも器高が高い。口縁端部を面取りしてある。出土例は少ない。

その他の器種　長頸壺（図123）・短頸壺（図73）・広口壺（図129）・瓶（図122）・横瓶（図124）・長頸甕（図58）・広口甕（図126・127等）・四耳壺（図74）がある。長頸壺はその頸部に沈線がみられる。横瓶には図示し得なかったが、その体部内面には、成形時に付着したと思われる節足動物の痕跡がある。広口甕（図126）は、その条の太いタタキメに特徴がある。

③灰釉陶器

器種は、碗・皿・長頸瓶がある。土師器、須恵器に比して出土量は少ない。図47皿は、内面に「朱」が塗られており、図49皿は口縁外周部分を人為的に欠いていると思われる。

(4)　遺構出土土器群の様相

各遺構から出土した土器を、器種・器形に分類して重量を計測した結果が、表7～8である。又挿図3・4の円グラフで、その出土量を視覚的にとらえてみた。土器群の様相とは、基本的に器種・器形の組成と量的な比率（供膳形態・土師器甕の種別、器種・器形の組成と構成比）によって示されるという視点に従い、以下、遺構毎に概観してみたい。

第4号住居址　土師器坏C・坏D・椀A・椀B・皿A・甕E・小形甕E・小形甕F、須恵器坏E・坏D・甕、灰釉陶器長頸瓶が出土している。土師器「坏・椀」欄の数字は坏C・椀Aの双方に該当すると推定する。土師器「甕不明」欄は摩滅により判別できない甕Eの小破片と思われる。坏・椀類では、土師器坏C（21.7%）・椀A（13.4%）・皿A（6.9%）、須恵器坏E（20.1%）が主

体をなす。土師器甕類は甕Eが、小形甕はEが主体となる。

図示したものは、土師器坏CⅠ1点・坏CⅡ3点・椀A3点・坏CⅠか椀A1点・皿A2点・小形甕E3点・甕E3点・甕E内ハケ1点、須恵器坏E4点、灰釉陶器長頸瓶2点の計23点である。

第5号住居址　土師器坏C・坏D・椀A・椀B・盤B・皿A・甕D・甕E・小形甕E・小形甕F、須恵器坏E・坏C・蓋C・甕、灰釉陶器瓶類が出土している。土師器「坏・椀」欄の数字は、内黒のものは坏Cあるいは椀Aに、そうでないものは坏Dあるいは椀Bに該当する。土師器甕「不明」欄は摩滅や小片のため判然としないが甕Eに該当すると思われる。坏・椀類の構成は、土師器坏DⅢ（12.8%）・盤B（27.9%）、須恵器坏E（9.5%）が主体をなす。土師器甕類は僅かに甕Dを混じえるが、他は全て甕Eである。盤Bは島立条里的遺構（文献10）まで椀Bの中に便宜的に含めてきた足高の高台をもつそれである。

図示したものは、土師器坏CⅡ1点・坏DⅢ3点・椀A2点・椀B1点・盤B3点・皿A1点・甕E2点、須恵器坏C1点、灰釉陶器瓶1点の計15点である。

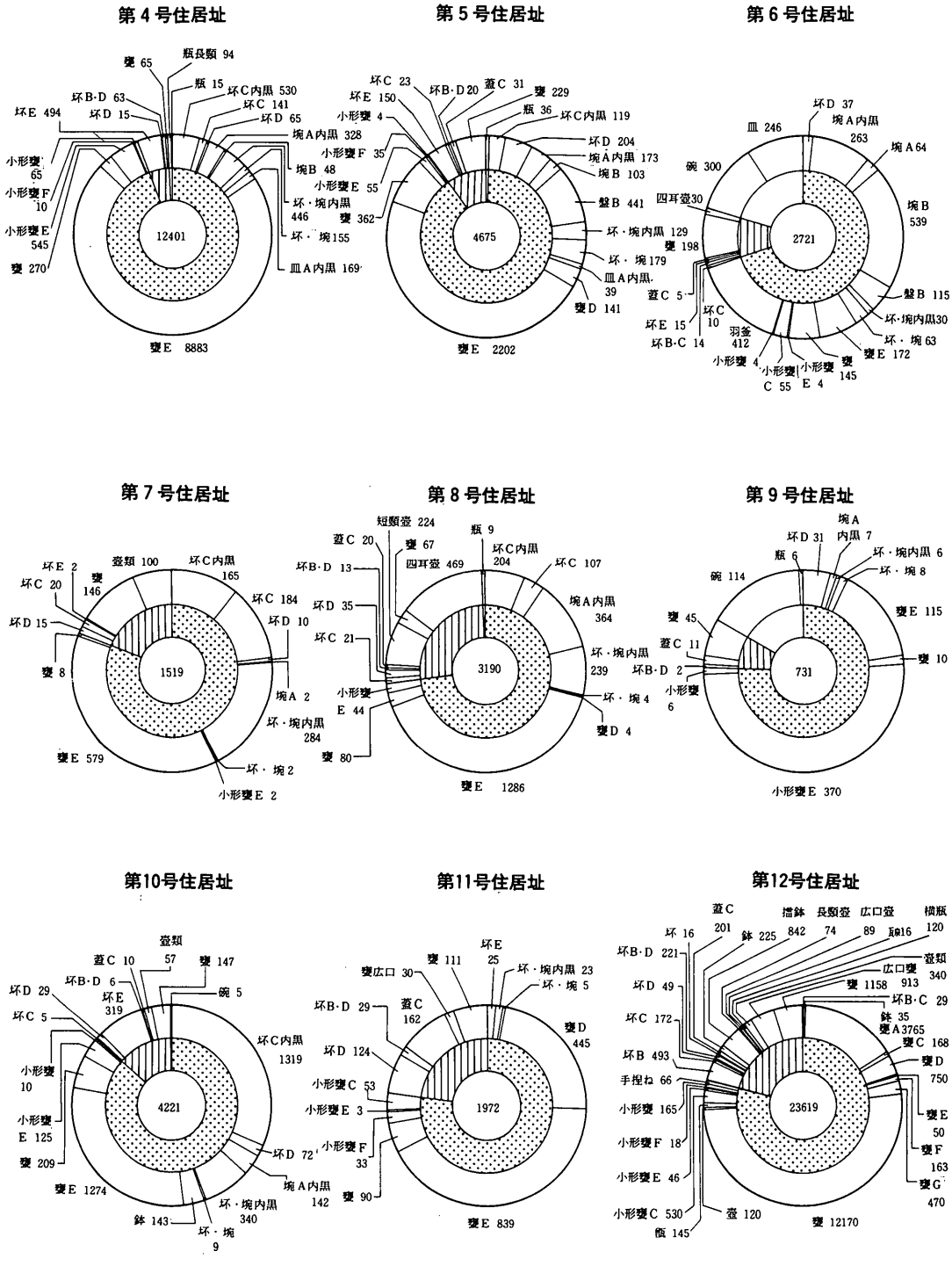
第6号住居址　土師器坏D・椀A・椀B・盤B・甕E・小形甕E・小形甕C・羽釜、須恵器坏C・坏E・蓋C・甕・四耳壺、灰釉陶器碗・皿が出土している。土師器「坏・椀」欄の数字は、内黒のものであれば椀Aに、内黒でないものは坏D・椀Bのいずれかに該当する。土師器甕「不明」欄は、甕Eの破片と考えられる。坏・椀類は土師器椀B（31.7%）・盤B（6.8%）、灰釉陶器碗（5.9%）が主体となる一方、土師器椀A（15.5%）、灰釉陶器碗（11.8%）・皿（14.5%）もかなりの出土量を占めている。土師器甕類は甕Eが主体をなす。灰釉陶器には、碗図51のように高台が外反し断面が三角形を呈するものと、碗図49・皿図49、48のように高台部がやや内湾し三日月状を残すものの2種類が含まれている。前者には、土師器椀B（深形）・盤Bが伴い、後者には椀A内黒が伴っている。この観点より前者は、後者よりも新しい時期のものであると推定できる。

図示したものは、13点ある。土師器椀A3点・椀B5点・盤B1点、灰釉陶器碗2点・皿2点である。

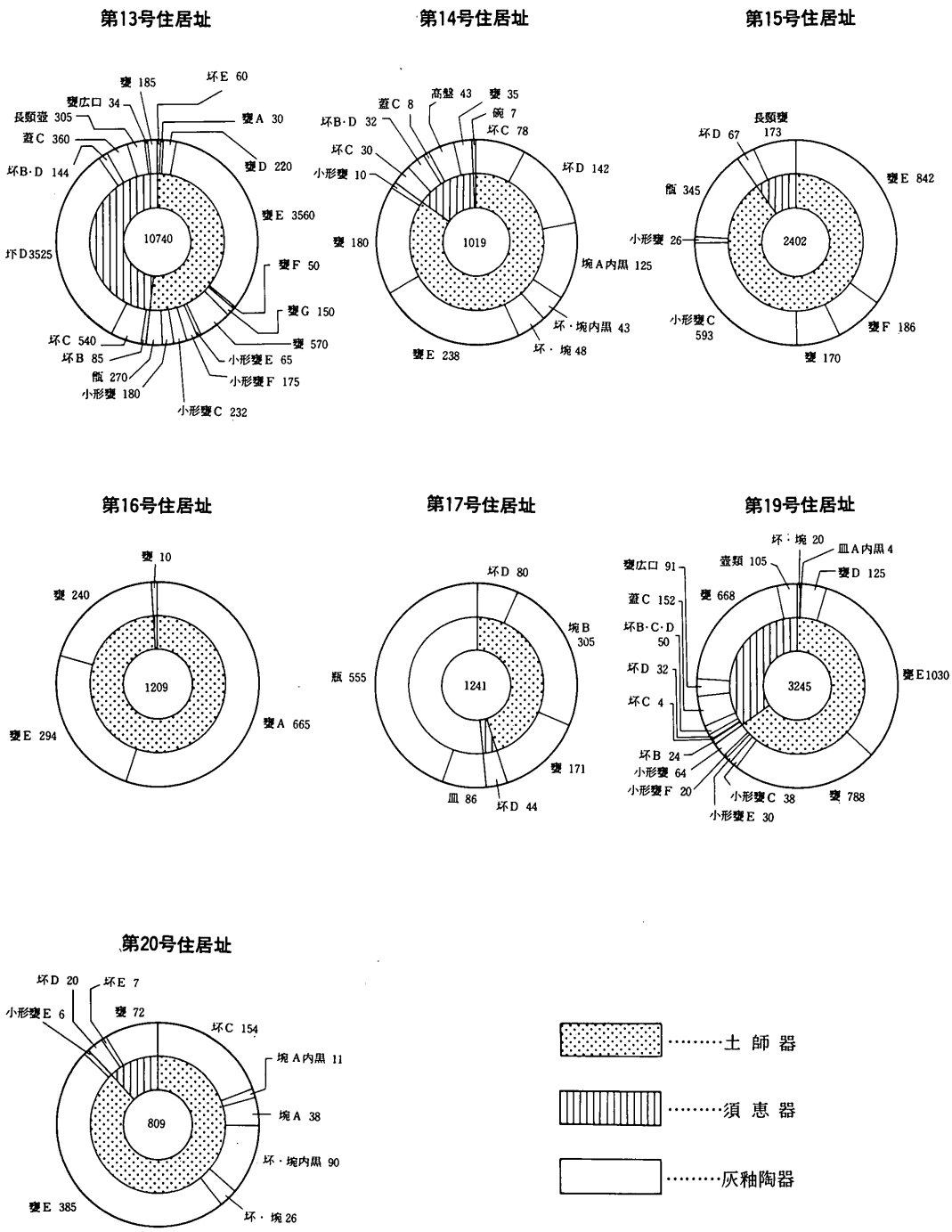
第7号住居址　土師器坏C・坏D・椀A・甕E・小形甕E、須恵器坏B・坏C・坏E・甕・壺類が出土している。土師器「坏・椀」欄の数字は、内黒のものは坏C・椀Aに、又内黒でないものは坏D・椀Bに該当する。土師器甕「不明」欄は甕Eの破片と推定される。坏・椀類は、土師器坏CⅡ（51%）が主体となる。土師器甕類は全て甕Eである。

図示したものは、土師器坏CⅡ3点・甕E2点、須恵器坏C1点・坏D1点・甕1点の合計8点である。

第8号住居址　土師器坏C・椀A・甕D・甕E・小形甕E、須恵器坏C・坏D・蓋C・短頸壺・甕・四耳壺、灰釉陶器瓶類が出土している。土師器「坏・椀」欄は、内黒のものは坏C・椀Aに、そうでないものは坏Dに該当する。土師器甕「不明」欄は、摩滅によってはっきり判別できない甕Eの小破片と推定する。坏・椀類は、土師器坏CⅡ（31.6%）・椀A（36.9%）が主体をなす。土


第4号住居址
12401
甕E 8883
第5号住居址
4675
甕E 2202
第6号住居址
2721
第7号住居址
1519
甕E 579
第8号住居址
3190
甕E 1286
第9号住居址
731
小形甕E 370
第10号住居址
4221
甕E 1274
第11号住居址
1972
甕E 839
第12号住居址
23619
甕 12170

挿図3


第13号住居址
甕 185
坏E 60
甕広口 34
長頸壺 305
甕A 30
壺C 360
甕D 220
坏B・D 144
甕E 3560
10740
坏D3525
甕F 50
甕G 150
坏C 540
甕 570
坏B 85
小形甕E 65
甑 270
小形甕F 175
小形甕 180
小形甕C 232
第14号住居址
高盤 43
甕 35
壺C 8
碗 7
坏B・D 32
坏C 78
坏C 30
坏D 142
小形甕 10
甕 180
1019
塊A内黒 125
坏・塊内黒 43
坏・塊 48
甕E 238
第15号住居址
長頸甕
173
坏D 67
甕E 842
甑 345
小形甕 26
2402
小形甕C
593
甕F 186
甕 170
第16号住居址
甕 10
甕 240
1209
甕E 294
甕A 665
第17号住居址
坏D 80
塊B
305
瓶 555
1241
甕 171
皿 86
坏D 44
第19号住居址
坏・塊 20
皿A内黒 4
甕広口 91
壺類 105
甕D 125
壺C 152
甕 668
坏B・C・D
50
坏D 32
甕E1030
3245
坏C 4
坏B 24
小形甕 64
小形甕F 20
小形甕C 38
甕 788
小形甕E 30
第20号住居址
坏D 20
坏E 7
小形甕E 6
甕 72
坏C 154
塊A内黒 11
809
塊A 38
坏・塊内黒 90
甕E 385
坏・塊 26
土 師 器
須 恵 器
灰釉陶器

挿図 4

師器甕類は甕Eが主体となる。甕Eの中には外面胴部下半にタテ方向のケズリを行なうものも含まれている。

図示したものは、土師器坏CⅠ6点・椀A4点・甕E1点・小形甕E1点、須恵器坏D2点・短頸壺1点・四耳壺1点の合計15点である。

第9号住居址　土師器坏D・椀A・甕E・小形甕E、須恵器蓋C・甕、灰釉陶器碗・瓶類を出土している。土師器「坏・椀」欄は、内黒のものは椀Aに、内黒でないものは坏Dに該当すると思われる。土師器甕「不明」欄と小形甕「不明」欄は、摩滅した小破片の為器形の判別ができないものである。坏・椀類の構成は、土師器坏DⅢ（18.5%）、灰釉陶器碗（67.7%）が主体をなし、土師器甕類は、ほとんどが甕Eであり、小形甕Eである。小形甕Eは、胴部外面下半に縦方向のケズリ痕がみられた。

第10号住居址　土師器坏C・坏D・椀A・鉢・甕E・小形甕E、須恵器坏C・坏D・坏E・蓋C・甕・壺類、灰釉陶器碗が出土している。土師器「坏・椀」欄の数字は、内黒のものは坏Cか椀Aに、又内黒のないものは坏Dに該当する。土師器甕「不明」欄の数字はすべて甕Eであると思われる。坏・椀類は、土師器坏C（55.2%）、須恵器坏E（13.4%）が主体をなし、土師器椀A（5.9%）・土師器坏D（3.0%）を伴っている。土師器甕類は、甕Eが主体をなす。土師器鉢は、片口を呈するものがみられる。又土師器坏D（図85）はその焼成と胎土から須恵器坏Eの可能性もある。

図示したものは、土師器坏CⅠ4点・坏CⅡ8点・坏D1点・椀A1点・鉢1点・甕E1点・小形甕E2点、須恵器坏E3点・壺類1点の合計22点である。

第11号住居址　土師器坏E・甕D・甕E・小形甕C・小形甕E・小形甕F、須恵器坏D・蓋C・広口甕が出土している。土師器「坏・椀」欄の数字は、坏Bか坏Cに該当する。土師器甕「不明」欄は、胴部内外面にハケメを持つ甕Dと甕E内ハケメのいずれかの破片と思われる。坏・椀類は、須恵器坏D（60.2%）が大半を占め、これに土師器坏E（12.1%）が少量伴う様相を呈する。土師器の甕類は、甕Dと甕E内ハケメが主体をなしている。甕Dは、胴部上半はロクロ使用、下半は縦方向のケズリが行なわれているものも含めている。

図示したものは、土師器坏E1点・小形甕C1点・甕D1点・甕E1点、須恵器坏D2点・蓋C2点・広口甕1点の合計9点である。

第12号住居址　土師器坏・鉢・甕A・甕C・甕D・甕E・甕F・甕G・壺・甑・小形甕C・小形甕E・小形甕F・手捏ね、須恵器坏B・坏C・坏D・蓋C・鉢・擂鉢・長頸壺・短頸壺・広口壺・瑞・横瓶・広口甕が出土している。土師器甕「不明」欄は厚さや焼成、内外面のハケメの有無などから、甕Aか甕Eあるいは甕E内ハケメか甕Dに該当すると思われる。坏・椀類は、須恵器坏B（39.9%）・鉢（18.1%）が主体をなしている。土師器甕類は、甕Aが主体として甕Dや甕Gが伴う形になるが甕「不明」の欄には、かなりの量の甕D・甕E内ハケメが含まれていると考えられる。

それを併せると甕A・甕D・甕E内ハケメが主体になるといって間違いないと思われる。土師器壺も僅かではあるが認められる。又、須恵器鉢・擂鉢など珍しい器種が存在する。

図示したものは、土師器小形甕C 1点・甕A 7点・甕C 1点・甕D 1点・甕E 1点・甑2点・手捏ね1点、須恵器坏B 3点・坏C 3点・坏D 1点・蓋C 3点・鉢1点・擂鉢1点・長頸壺1点・広口壺1点・瓶1点・横瓶1点・広口甕3点の合計33点にもおよぶ。

第13号住居址　土師器坏・甕A・甕D・甕E・甕F・甕G・小形甕C・小形甕E・小形甕F・小形甕F′・甑、須恵器坏B・坏C・坏D・蓋C・長頸壺・広口甕が出土している。土師器甕「不明」欄の数字は、甕E・甕E内ハケメに該当すると思われる。小形甕「不明」欄は、ロクロ使用の可能性があり、小形甕Eか小形甕Fと思われる。坏・埦類は、須恵器坏D（81%）が主体をなし少量の須恵器坏Cを伴う。又、僅かではあるが坏Eが出土していることもみのがせない。土師器甕類については、甕E・甕E内ハケメが主体で、少量の甕D・甕F・甕Gが伴っている。

図示したものは、土師器坏E 1点・甕D 1点・甕E 2点・小形甕C 2点、須恵器坏B 3点・坏C 7点・坏D 5点・蓋C 3点・長頸壺2点の合計26点である。

第14号住居址　土師器坏C・坏D・埦A・甕E・小形甕、須恵器坏C・蓋C・高盤・甕、灰釉陶器碗が出土している。土師器「坏・埦」欄は、内黒のものは坏Cか埦Aであり、内黒でないものは坏Dに該当する。土師器甕「不明」欄は、摩滅した甕Eの小破片と思われる。坏・埦類は、土師器坏C（14.2%）・坏D（26.0%）・埦A（22.8%）が主体をなし少量の灰釉陶器碗を伴なう。埦Aは、深形の内黒埦である。土師器甕類は甕Eが主体をなす。又、僅かではあるが須恵器坏C（55%）・高盤（7.8%）等もみられるがこれらは本址が第12号住居址と切り合っている事から推測して、12住からの混入品とも考えられる。

図示したものは、土師器坏D 2点・埦A 1点、須恵器坏C 1点・蓋C 1点・高盤1点、灰釉陶器碗1点の合計7点である。

第15号住居址　土師器甕E・甕F・小形甕C・甑、須恵器坏D・長頸甕が出土している。土師器甕「不明」欄は、甕E内ハケメに該当すると思われる。小形甕「不明」欄についても、摩滅した小破片の為、判別はむずかしいが、おそらく小形甕Cであろう。供膳形態の出土量が少なく須恵器坏Dの出土がみられたのみであり、その比率をもって本址の様相を語る事は危険であると考える。土師器甕類は甕E内ハケメを主体に少量の甕Fが混る。小形甕は、すべて否ロクロの小形甕C内外面ハケメである。

図示したものは、土師器甕F 1点・小形甕C 2点・甑1点、須恵器坏D 1点の合計5点である。

第16号住居址　土師器甕A・甕E、須恵器甕のみが出土している。土師器甕「不明」欄は、その厚さと胴部の小破片で内外にハケメを持つ甕E内ハケメに該当すると思われる。甕E内ハケメには、胴部下半に縦方向のケズリを行なったものや内面ハケメが縦方向のものも含まれる。本址も第15号住居址同様、供膳形態の出土が認められず、その様相はさだかではない。あえて語るならば、

土師器甕類では、甕Aと甕E内ハケメが主体になると推定されるのみである。

図示したものは、土師器甕A１点である。

第17号住居址　土師器坏D・埦B・盤B・甕、須恵器坏D、灰釉陶器皿・瓶が出土している。土師器甕「不明」欄は、全て甕Eの破片と思われる。量が非常に少なく、土器群の統計的な分析は不可能である。坏・埦類は、坏DIII（15.5%）・埦B（30.1%）・盤B（29.1%）が主体をなし、灰釉陶器皿（16.7%）が混じる。土師器甕は、甕Eが主体をなす。

図示したものは、土師器坏DIII１点・埦B１点・盤B１点、須恵器坏D１点、灰釉陶器皿１点・瓶１点の合計６点である。

第18号住居址　僅かに検出をみたのみであり、出土遺物はない。

第19号住居址　土師器皿・甕D・甕E・小形甕C・小形甕E・小形甕F、須恵器坏B・坏C・蓋C・広口甕・壺類が出土している。土師器甕「不明」欄は、摩滅した小破片でよくわからないが、厚さなどからみて甕Eに該当すると考えられる。坏・埦類の出土量が少なく、土器群より本址の様相を導き出すことはむずかしいが、本結果をみる限りにおいては須恵器坏B（17.9%）・坏D（23.9%）が主体となり、土師器甕類は、甕Eを主体とし内面ハケメの甕Eと僅かに甕Dが伴なう。

図示したものは、土師器小形甕C１点、須恵器蓋C２点・広口甕１点の合計４点である。

第20号住居址　土師器坏C・坏D・埦A・甕E・小形甕E、須恵器坏D・坏E・甕が出土している。土師器「坏・埦」欄の数字のうち内黒のものは坏Cあるいは埦Aに、そうでないものは坏D・埦Bに該当する。坏・埦類は、土師器坏CII（44.5%）・埦A（14.2%）を主体とし少量の土師器坏D、須恵器坏C・坏Eなどを伴う。土師器甕類は、すべて甕Eである。

図示したものは、土師器坏CII１点・甕E２点の合計３点である。

土壙・ピット　土器を出土している土壙・ピット（建物址６も含む）名と、土器の種別・器種・器形・重量は、表７に記すとおりである。「建物址６」欄は、建物址６の中のどのピットから出土したのか不明の為、ピット名の記入はしていない。又、その他のピットは全て建物址とはかかわりのない、単独のものである。各遺構の時期については、それぞれの土器出土量が少なすぎる。よほど意図的な廃棄や埋納がなされていない限りは、土器群として取り上げ、その様相や性格を語るには無理があると考える。このためここでは表７を掲げるに留める。

図示したものは、土師器深形の埦B１点、須恵器坏C１点（共に土壙４）・蓋C１点（建物址６）の合計３点のみである。

(5)　土器群の時期

各遺構出土土器群の相対的な時期を、器形・器種とその重量による構成比から導き出してみたい。具体的な方法として、食膳具の主体をなす坏・埦類と、煮沸具である土師器甕類の構成比を比較してゆく。

坏・埦の構成

①段階：須恵器坏Bをもつ土器群（須恵器坏Bが減少し、同坏C・坏Dが量を伸ばす）

供膳形態の土器の中で須恵器坏Bを10%以上持つ住居址は、第12号住居址である。12住は、須恵器坏B（23.7%）を主体とし、同坏C（8.3%）、同坏D（2.4%）が後続する。須恵器坏Bに対する比率が今回出土した土器群中一番高い数値を示す。尚第16号住居址は、供膳形態の出土をみず、どの土器群に含まれるか決定はむずかしいが、定形化されていない甕等の出土比率より本段階から次段階までに属するものと考えた。

②段階：須恵器坏Dをもつ土器群（須恵器坏Dが主体となり、同坏Bが減少、同坏Cが伴う）

供膳形態の土器の中で須恵器坏Dが20%以上を占める土器群を取り上げてみる。第11・13・15・19号住居址の土器群が該当する。このうち19住は須恵器坏B（17.9%）の占める割合が減少し同坏D（23.9%）が勝っている。①段階からの後続と考えられる土器群である。須恵器坏Dが60%以上の高率を占めるものは、11住土器群（60.2%）・13住土器群（81%）・15住土器群（100%）である。11住土器群は須恵器坏C（12.4%）と組み合い同坏Dが首位を占める中、僅かではあるが同坏B（2.0%）を伴う。19住土器群同様①段階とのつながりが考えられる。15住土器群については、供膳形態全体の出土量が少ない為、かなり誤差が大きく時期を決定する事はむずかしい。

③段階：土師器坏Cをもつ土器群（土師器坏Cが過半を占めるが、同埦Aもかなりを占める）

供膳形態の土器の中で土師器坏Cが30%以上の比率を占める土器群は、第4・7・8・10・20号住居址がある。組成比率の上位を占めるものの組み合わせがいくつかある。土師器坏C・埦Aを主体とする8住土器群（土師器坏C31.6%・埦A36.9%）、20住土器群（土師器坏C44.5%・埦A14.2%）。土師器坏C・埦A、須恵器Eを主体とする4住土器群（土師器坏C27.4%・埦A13.4%、須恵器坏E20.1%）、10住土器群（土師器坏C55.2%・埦5.9%、須恵器坏E13.4%）。土師器坏Cを主体とする7住土器群（土師器坏C51%）である。いずれも②段階に後続する要素はもち合わせておらず、②段階と本段階には一部空白期間があると思われる。

④段階：土師器坏Dをもつ土器群（土師器坏Dが構成の主体の一部をなす。小形化が進む）

供膳形態の土器群中、土師器坏Dが10%以上を占めるものは、第5・9・14・17号住居址がある。構成比率の組み合わせで土師器坏D・埦B・盤Bを持ち合わせているものには、5住土器群（土師器坏D12.7%・埦B6.6%・盤B27.4%）、17住土器群（土師器坏D15.5%・埦B30.2%・盤B29.1%）がある。又6住土器群（土師器坏D2.2%・埦B31.7%・盤B6.8%）は、土師器坏Dが10%にも満たないが、埦B・盤Bの占める割合が高い為、本段階に含まれるものと考える。9住土器群（土師器坏D18.5%・埦A4.2%）、14住土器群（土師器坏D26.0%・埦A22.8%）は、土師器坏Dと埦Aが主要な組成となっている。これ等の土器群に含まれる土師器坏Dは、いずれも小形化の進んだ坏DIIIである。坏Cの比率は減少しほとんど無となる土器群もある。本段階は、③段階から土師器坏Cと同坏Dの逆転段階をへた次段階のものと考える。

土師器甕の構成

甕Aをもつ土器群（古墳時代後期より発生、奈良時代も残るもの）

本遺跡では、甕Aの中でも外面にハケメを持つ新しい段階のものが主体をなす。該当する土器群は第12・16号住居址である。このうち12住土器群には、明らかに甕Aハケメなしと思われるものが含まれることから、坏・埦類の検討で導き出した①段階と一致する。

甕Eをもつ土器群（平安時代の典型的なもの）

甕Eを主体にもつ土器群は第4・5・6・7・8・9・10・11・13・14・15・16・17・19・20号住居址である。このうち甕Eの前段である甕Eハケメをもつものは、11・13・15・19住があり、坏・埦類の検討で導き出した②段階と一致し、他の土器群は、③、④段階に相当すると考える。

土器群の順序　以上の事柄より各土器群の相対的な順序を示した。

12→16→〔11・13・15・19〕→〔4・7・8・10・20〕→〔5・6・9・14・17〕

南栗遺跡（文献7）の編年に対比させると、12：Ⅳ期、16：Ⅳ～Ⅴ期、11・13・15・19：Ⅵ期、4・7・8・10・20：Ⅹ期、5・6・9・14・17：XII・XIII期以降10世紀後半代に亘るものと考える。

参考文献

1　松本市教育委員会　1981　『松本市新村条里的遺構』
2　松本市教育委員会　1981　『松本市笹賀神戸遺跡』
3　松本市教育委員会　1983　『松本市新村秋葉原遺跡』
4　松本市教育委員会　1984　『松本市下神・町神遺跡』
5　松本市教育委員会　1984　『松本市島立南栗遺跡』
6　松本市教育委員会　1985　『松本市島立南栗・北栗遺跡、高綱中学校遺跡、条里的遺構』
7　松本市教育委員会　1986　『松本市島立南栗遺跡』
8　松本市教育委員会　1987　『松本市島立北栗遺跡、条里的遺構』
9　松本市教育委員会　1987　『推定信濃国府一第五次調査報告書』
10　松本市教育委員会　1988　『松本市島立条里的遺構』
11　塩尻市教育委員会　1983　『吉田向井』
12　塩尻市教育委員会　1986　『君石遺跡』
13　原　明芳　1987　「信濃における食器の系譜――古代から中世へ――」『文化財信濃』14－3

表7　住居址外遺構器種・器形別土器出土量一覧　（　）内の数字及び「合計」は重量：単位g

出土地点	土師器	須恵器	合計
土　壙　2	坏C内黒（7）、甕不明（18）		15
〃　3	甕不明（14）		14
〃　4	坏C内黒(25)、埦B(深)(90)、坏・埦(12)、甕E(110)、甕F（2）、甕不明（85）	坏C（30）、坏D(5)、甕不明(17)	376
〃　6	甕E内ハケ（15）、甕E（56）、甕不明（45）	甕不明(122)	238
〃　7	坏C内黒（6）		6
〃　10	甕不明（5）、小形甕不明（3）		8
〃　12	甕A（98）、小形甕不明（5）		103
建物址　6	坏D（3）、埦A内黒（48）、甕E内ハケ(156)	坏B・C（5）、蓋C（69）	281
ピット　16	坏B・C（11）		11
〃　17	甕E内ハケ（10）、甕不明（6）、小形甕C（25）、小形甕不明（10）	甕不明(202)	253
〃　18	甕F（5）、甕不明（4）		9
〃　19	甕不明（7）		7
総重量			1,321

表 8

土器出土量一覧（1）

（単位：g）

器種	器形		遺構	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	19	20	土壙	ピット	器種・器形別計
土師器	坏	C	内黒	530 21.7	119 7.6		165 24.1	204 20.8		1319 55.2										38		2375
				141 5.7			184 26.9	107 10.8						78 14.2					154 44.5			664
		B・C	内黒																			
												29 2.3									11	40
		D		65 2.6	204 12.8	37 2.2	10 1.5		31 18.5	72 3.0				142 26.0			80 15.5				3	644
		E									25 12.1		60 1.4									85
	椀	A	内黒	328 13.4	173 10.9	263 15.5		364 36.9	7 4.2	142 5.9				125 22.8					11 3.2		48	1461
						64 3.8	2 0.3												38 11.0			104
		B		48 2.0	103 6.6	539 31.7											155 30.2			90		935
	坏・椀		内黒	446 18.1	129 8.1	30 1.8	284 41.5	239 24.2	6 3.6	340 14.2	23 11.2			43 7.8					90 26.0			1630
				155 6.3	179 11.3	63 3.7	2 0.3	4 0.4	8 4.8	9 0.4	5 2.4			48 8.8				20 14.9	26 7.5		12	531
	皿	A	内黒	169 6.9	39 2.5													4 3.0				212
	盤	B			441 27.9	115 6.8											150 29.1					706
	鉢		内黒									35 2.8										35
										143 6.0												143
	不明																					
	甕	A										3765	30			665				98		4558
		C										168										168
		D			141			4			445	750	220					125				1685
		E		8883	2202	172	579	1286	115	1274	839	50	3560	238	842	294		1030	385	181	166	22096
		F										163	50		186					2	5	406
		G										470	150									620
		不明		270	362	145	8	80	10	209	90	12170	570	180	170	240	171	788		157	17	15637
	小形甕	C				55					53	530	232		593			38			25	1526
		E		545	55	4	2	44	370	125	3	46	65					30	6			1295
		F		10	35						33	18	175					20				291
		不明		65	4	4			6	10		165	180	10	26			64		8	10	552
	壺											120										120
	甑											145	270		345							760
	羽釜					412																412
	その他不明											66										66
土師器合計				11655	4186	1903	1236	2332	553	3643	1516	18690	5562	864	2162	1199	556	2119	710	586	285	59757

※供膳形態は、上段出土量（g）、下段遺構内での比率（%）を示す

（土壙・ピットは合計）

表9

土器出土量一覧（2）

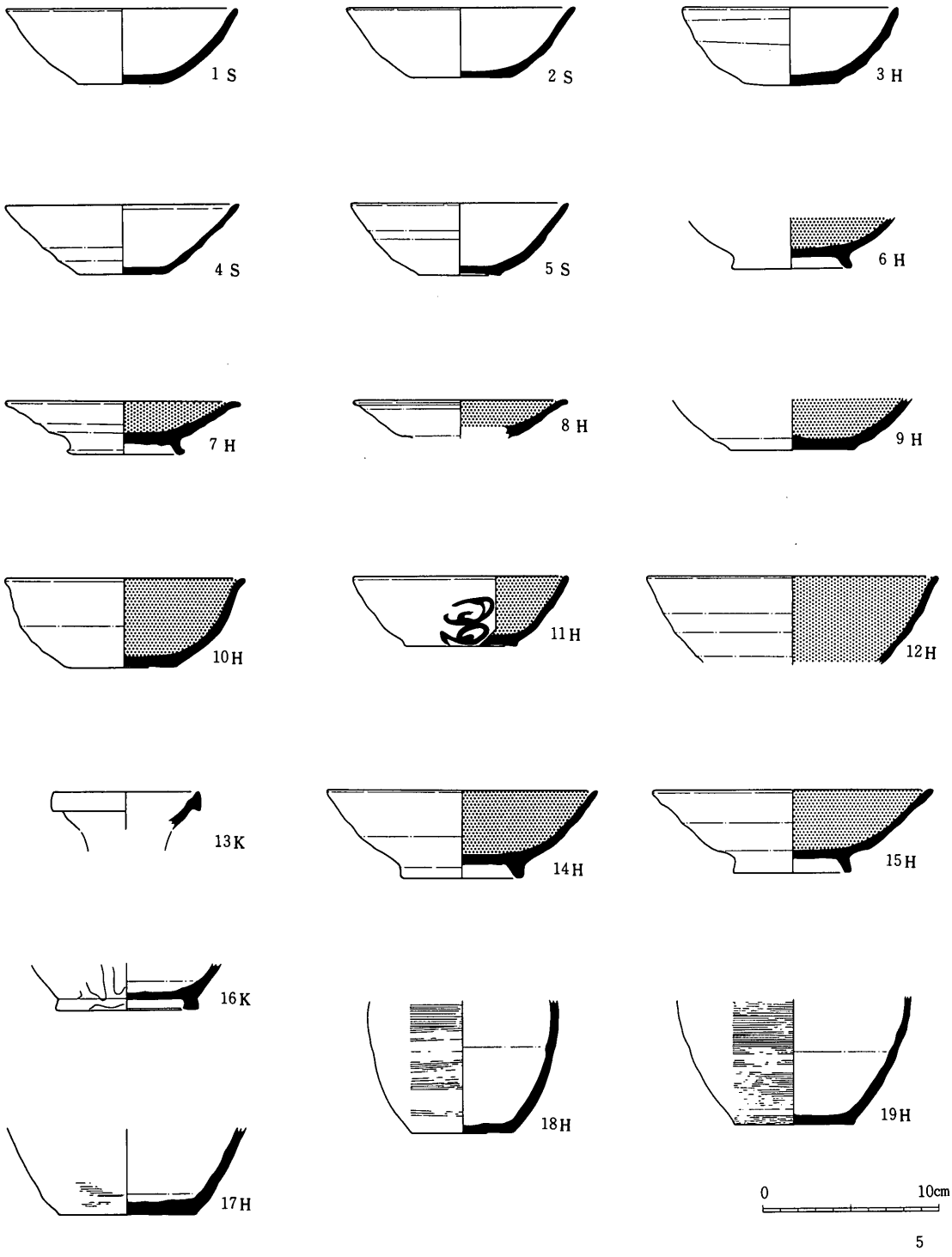
（単位：g）

			4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	19	20	土壙	ピット	器種・器形別計
須恵器	坏	B									493 39.9	85 2					24 17.9				602
		C		23 1.5	10 0.6	20 2.9	21 2.1		5 0.2		172 13.9	540 12.4	30 5.5				4 3.0		30		855
		D	15 0.6			15 2.2	35 3.5		29 1.2	124 60.2	49 3.9	3525 80.9		67 100		44 8.5	32 23.9	20 5.8	5		3960
		B・D	63 2.6	20 1.3	14 0.8		13 1.3	2 1.2	6 0.3	29 14.1	221 17.8	144 3.3	32 5.8				50 37.3			5	599
		E	494 20.1	150 9.5	15 0.9	2 0.3			31.9 13.4									7 2.0			987
		不明									16 1.3										16
	蓋	C		31	5		20	11	10	162	201	360	8				152			69	1029
	盤	（高盤）											43 7.8								43
	鉢										225 18.1										225
	擂鉢										842										842
	壺	長頸									74	305									379
		短頸					224														224
		広口									89										89
		不明				100			57		340						105				602
	瓶										16										16
	横瓶										120										120
	甕	長頸												173							173
		広口								30	913	34					91				1068
		不明	65	229	198	146	67	45	147	111	1158	185	35		10		668	72	139	202	3477
	四耳壺				30		469														499
	その他不明																				
	須恵器合計		637	453	272	283	849	58	573	456	4929	5178	148	240	10	44	1126	99	174	276	15805
灰釉陶器	碗				300 17.7			114 67.7	5 0.2				7 1.3								426
	皿				246 14.5											86 16.7					332
	瓶	長頸	94																		94
		不明	15	36			9	6								555					621
	その他不明																				
	灰釉陶器合計		109	36	546		9	120	5				7			641					1473
総計			12401	4675	2721	1519	3190	731	4221	1972	23619	10740	1019	2402	1209	1241	3245	809	760	561	77035

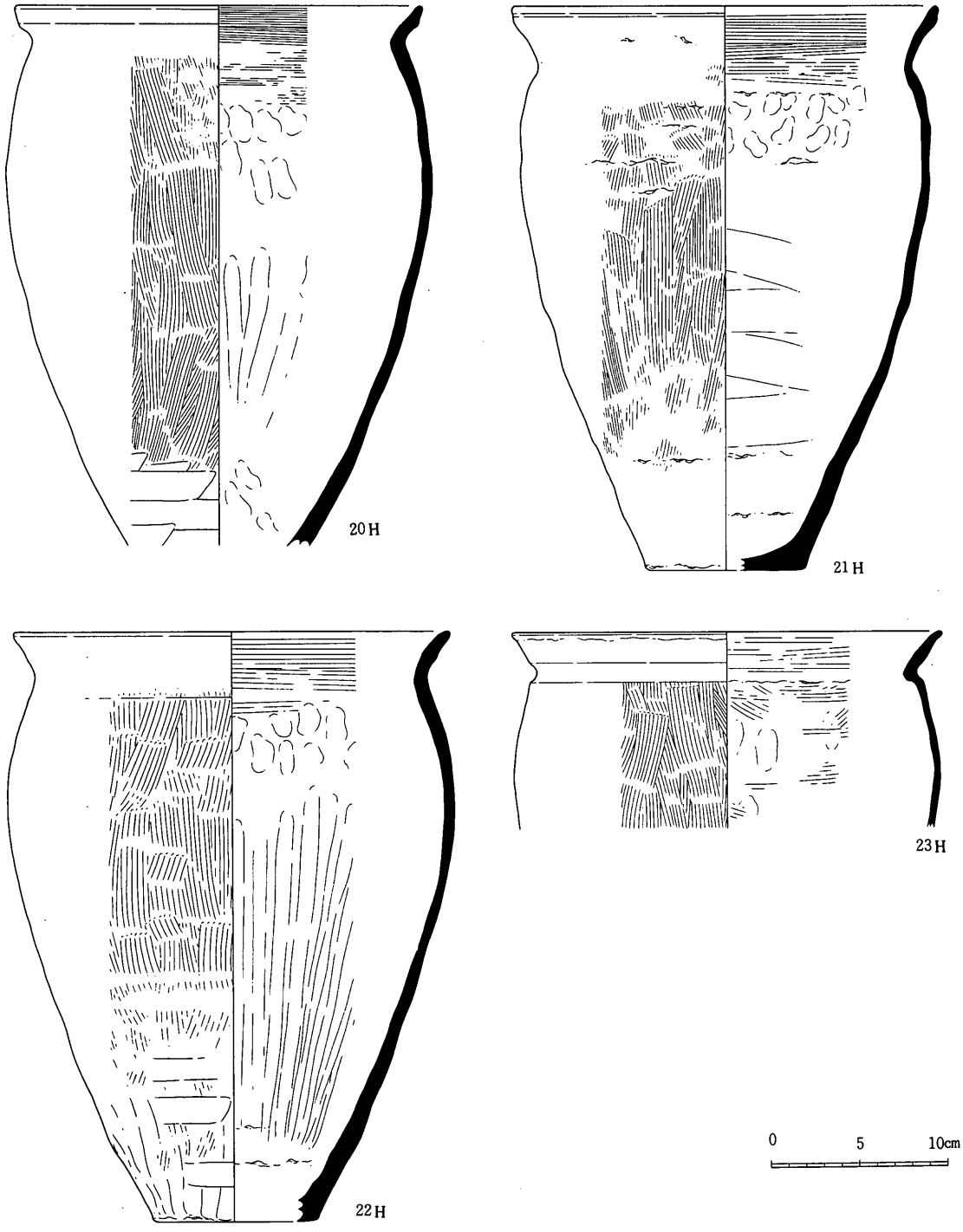
※供膳形態は、上段出土量（g）、下段遺構内での比率（%）を示す

（土壙・ピットは合計）

第４号住居址

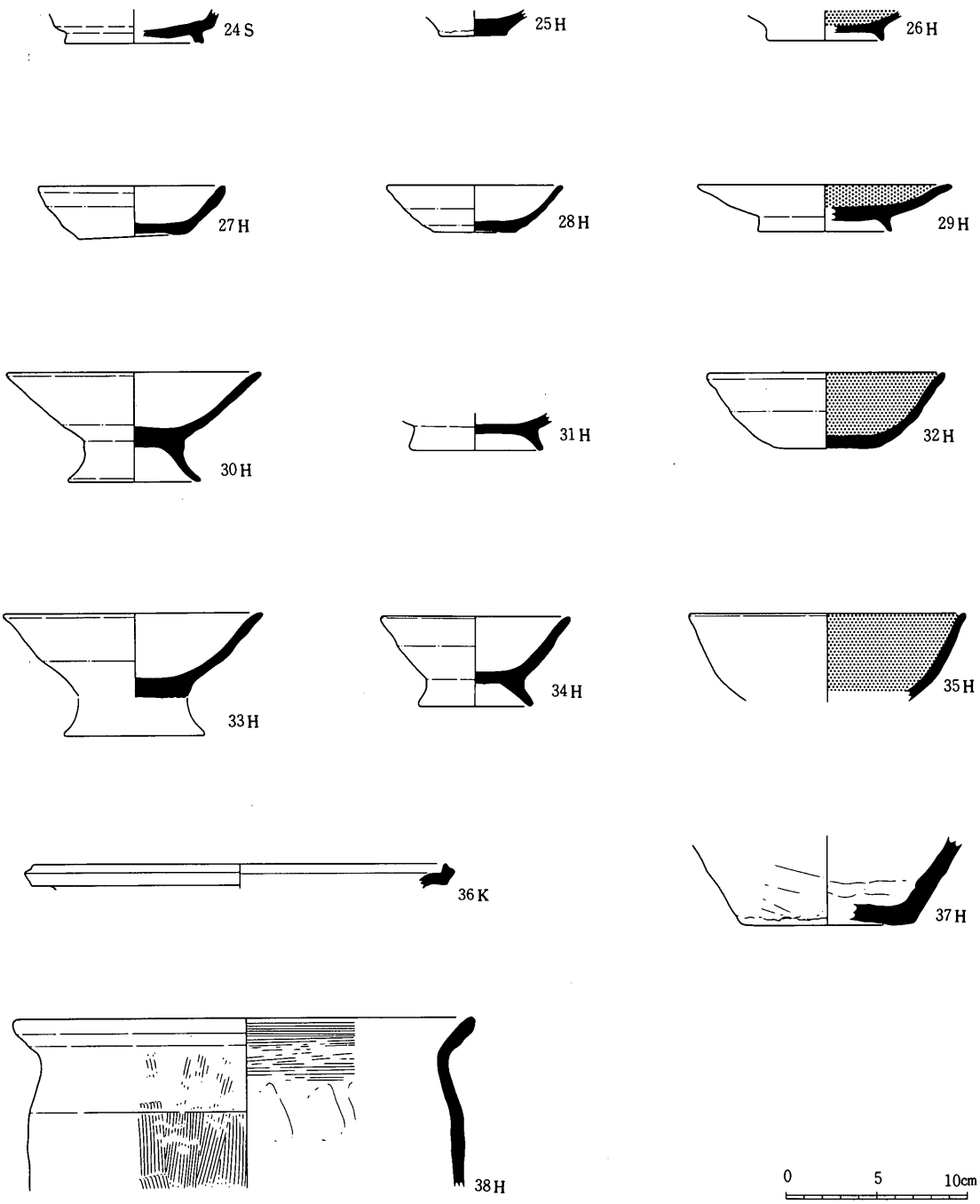


第33図　出土土器（１）



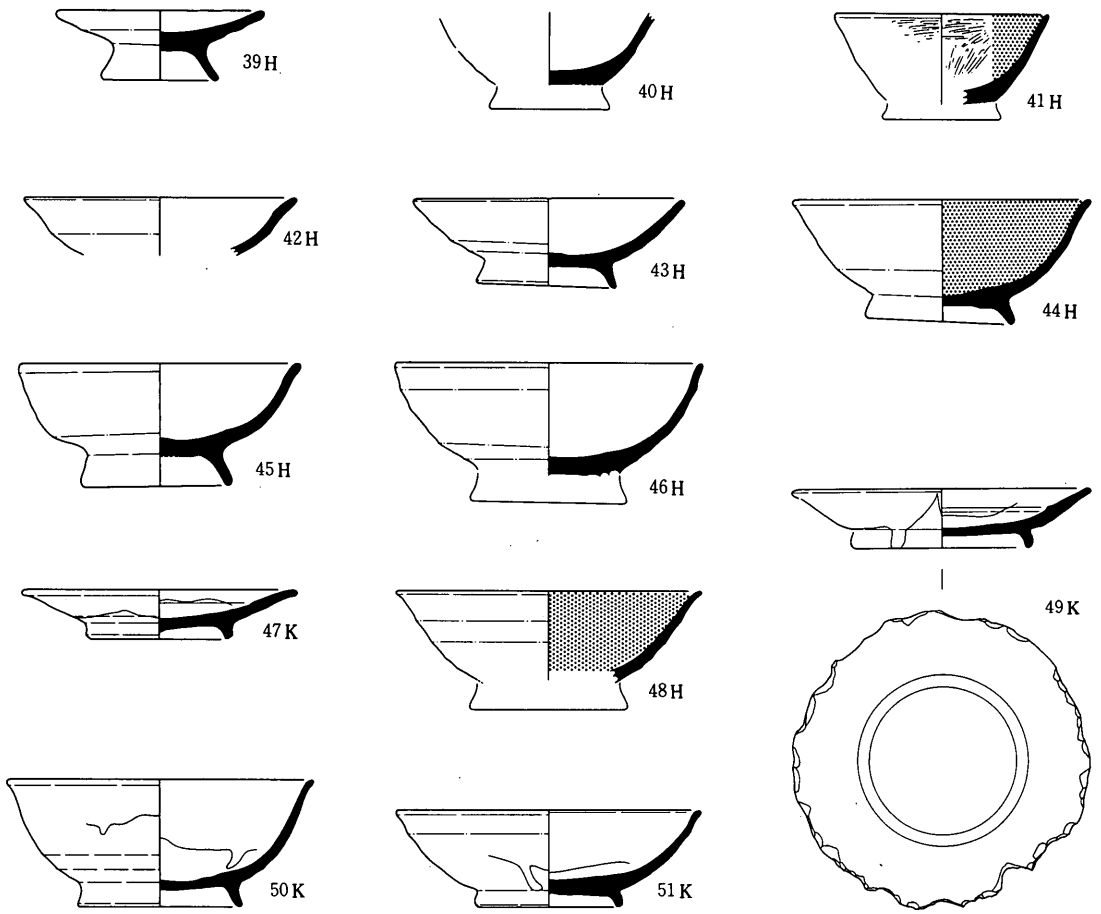
第34図　出土土器（2）

第５号住居址

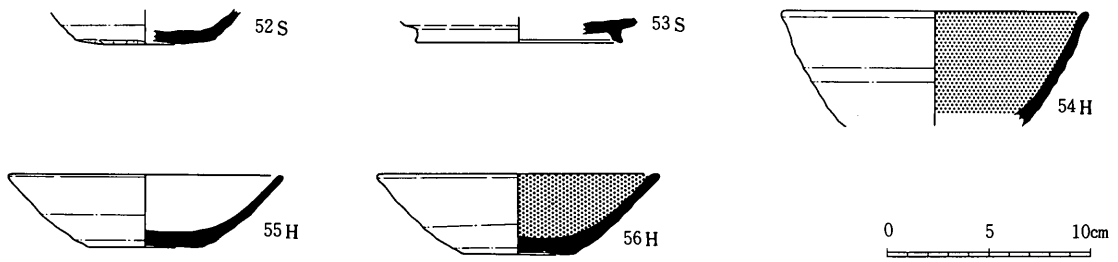


第35図　出土土器（３）

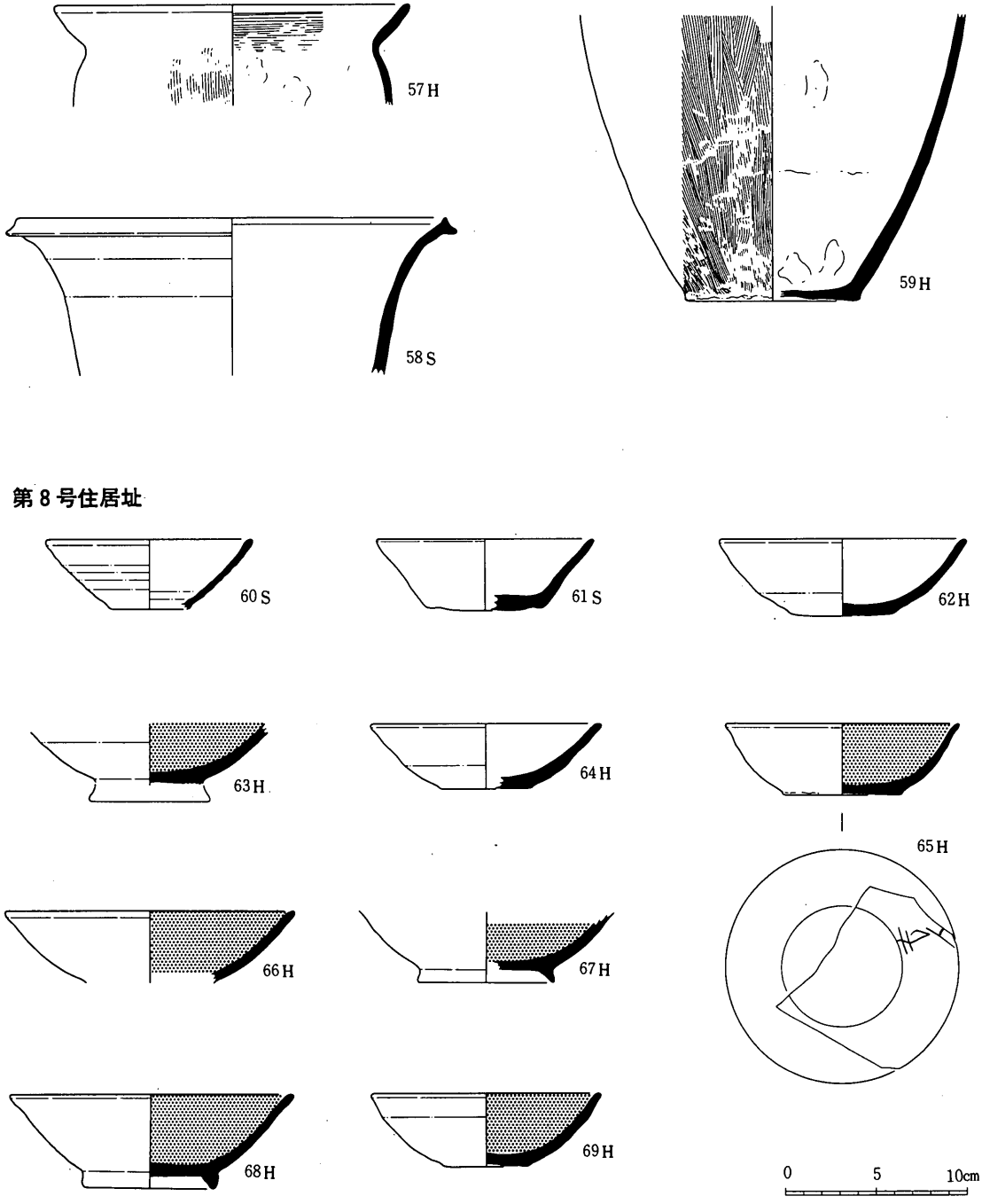
第６号住居址



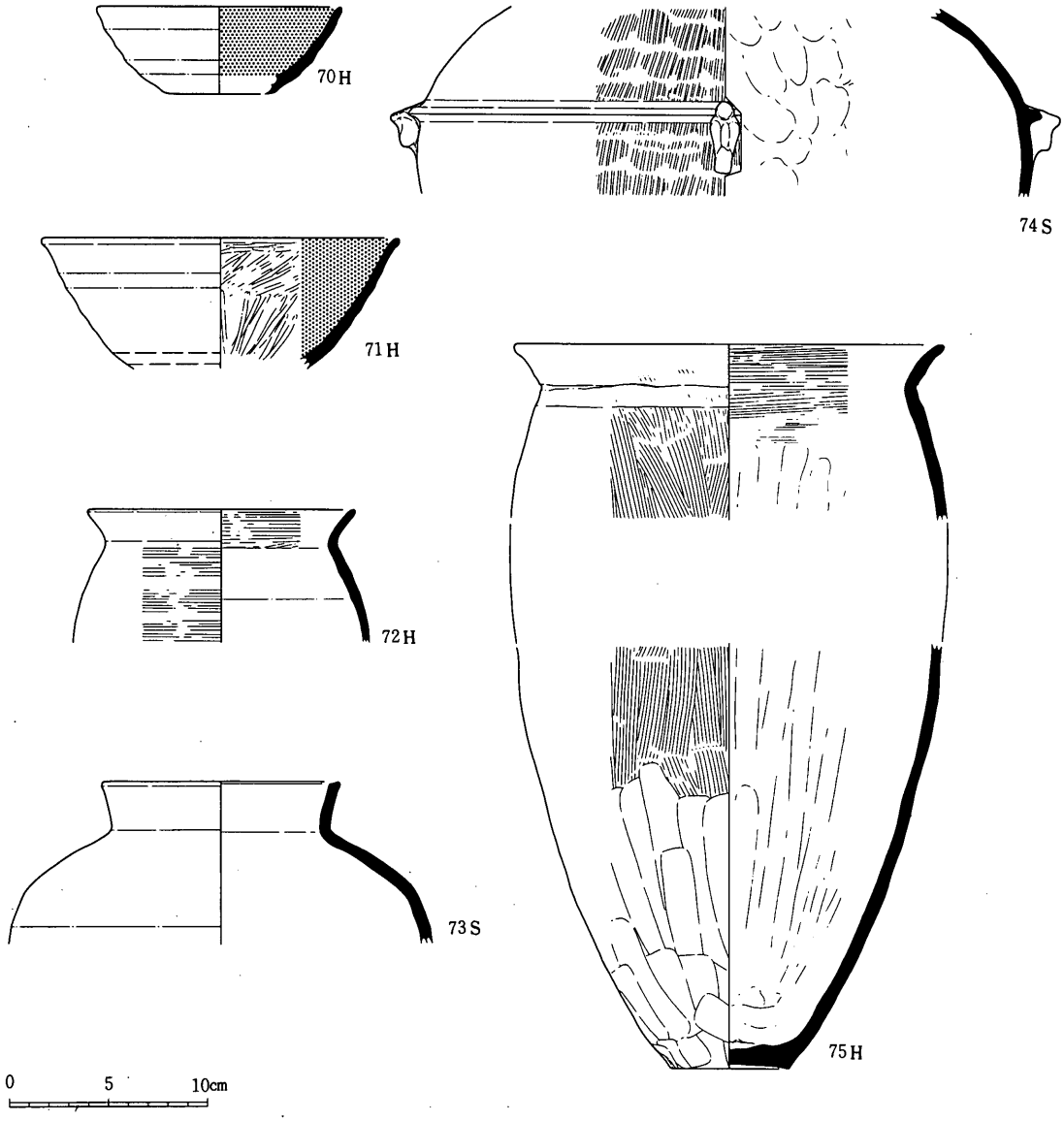
第７号住居址



第36図　出土土器（４）

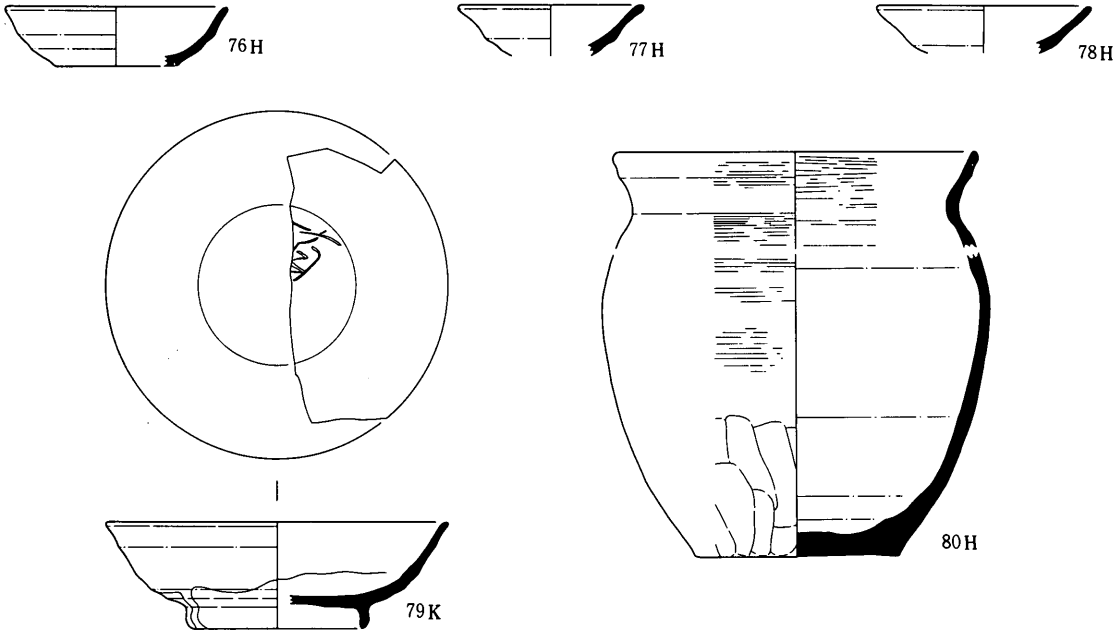

57H
58S
59H
第8号住居址
60S
61S
62H
63H
64H
65H
66H
67H
68H
69H
0
5
10cm

第37図　出土土器（5）

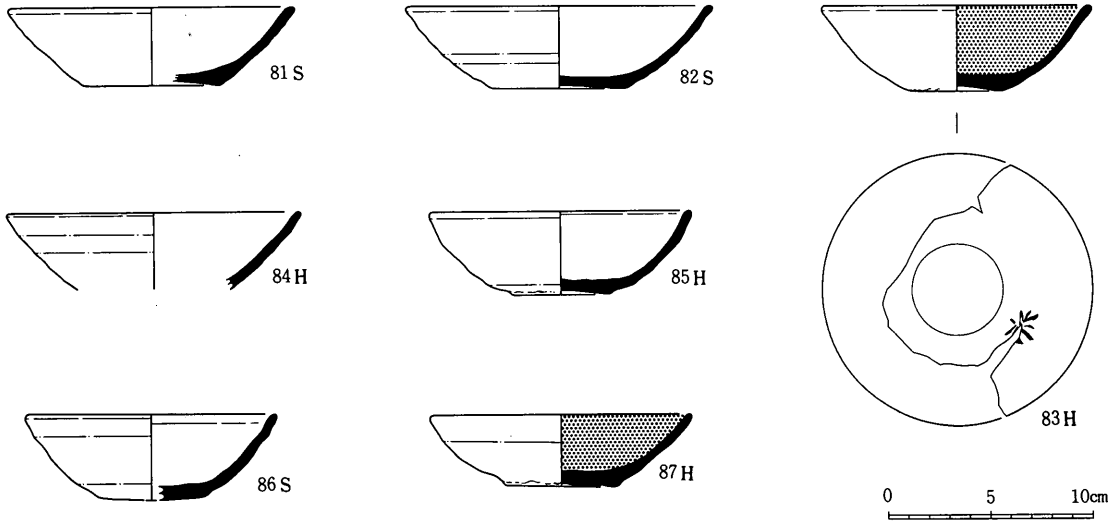


第38図　出土土器（6）

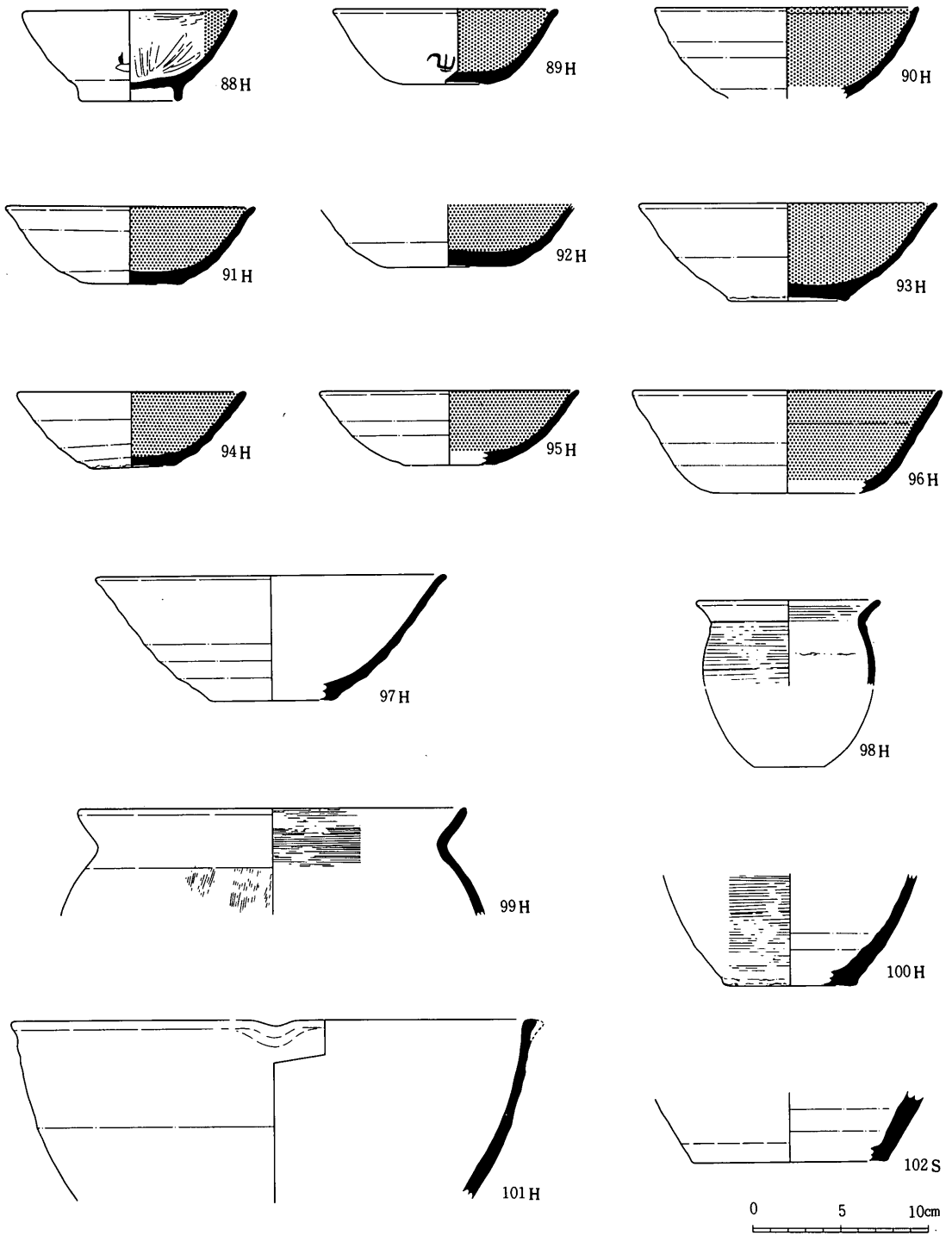
第９号住居址



第10号住居址

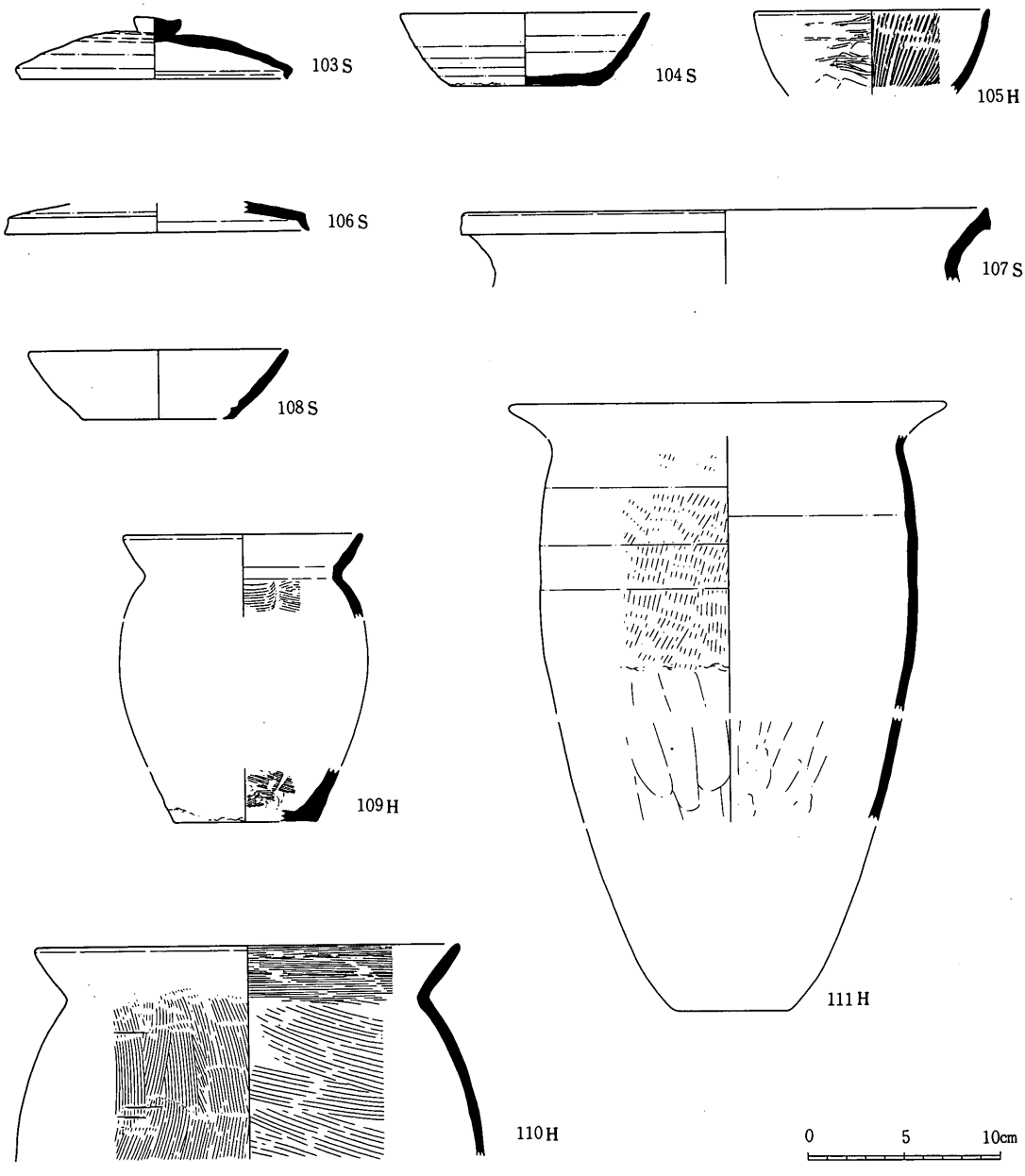


第39図　出土土器（７）


88H
89H
90H
91H
92H
93H
94H
95H
96H
97H
98H
99H
100H
101H
102S
0
5
10cm

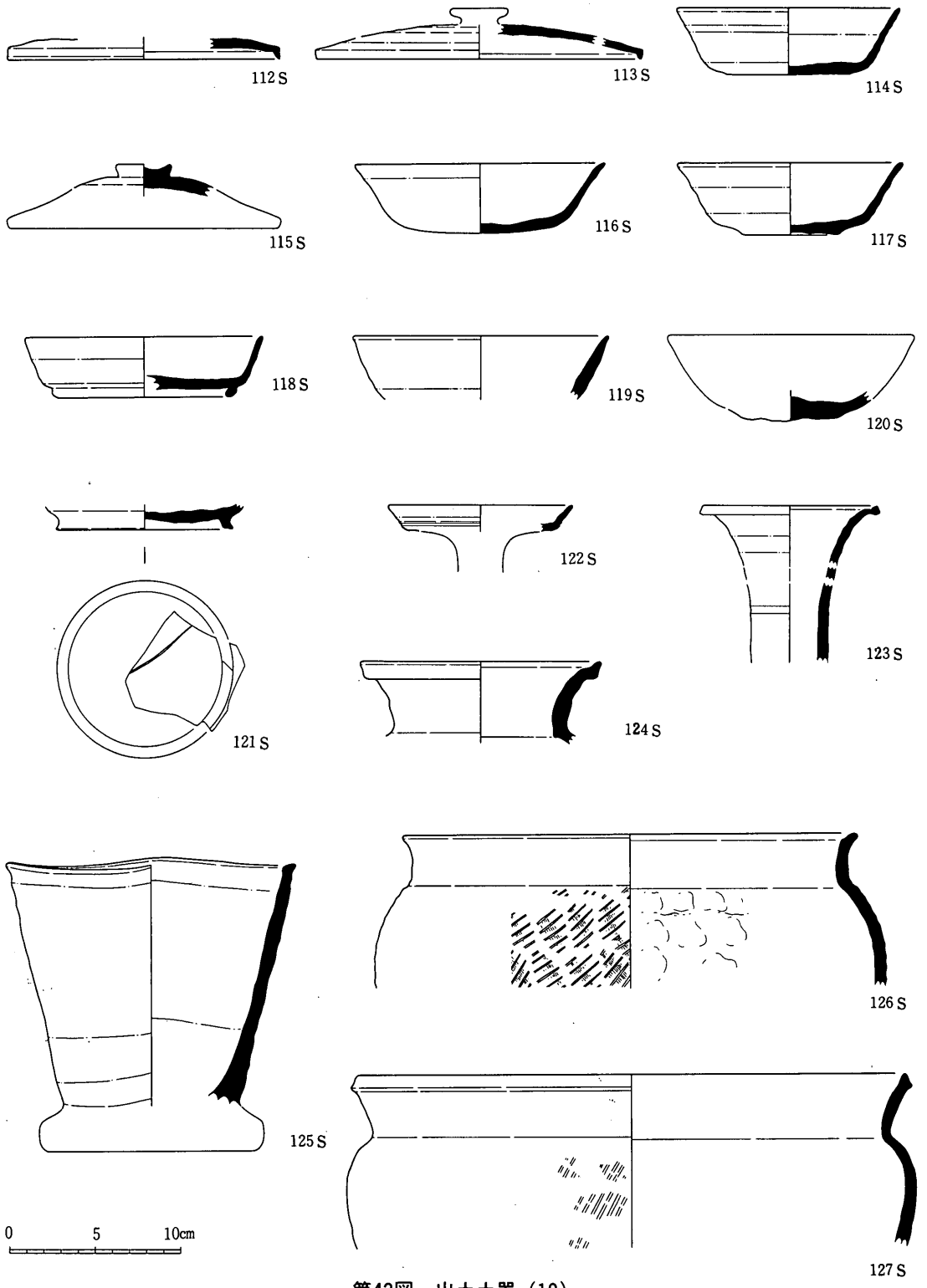
第40図　出土土器（8）

第11号住居址

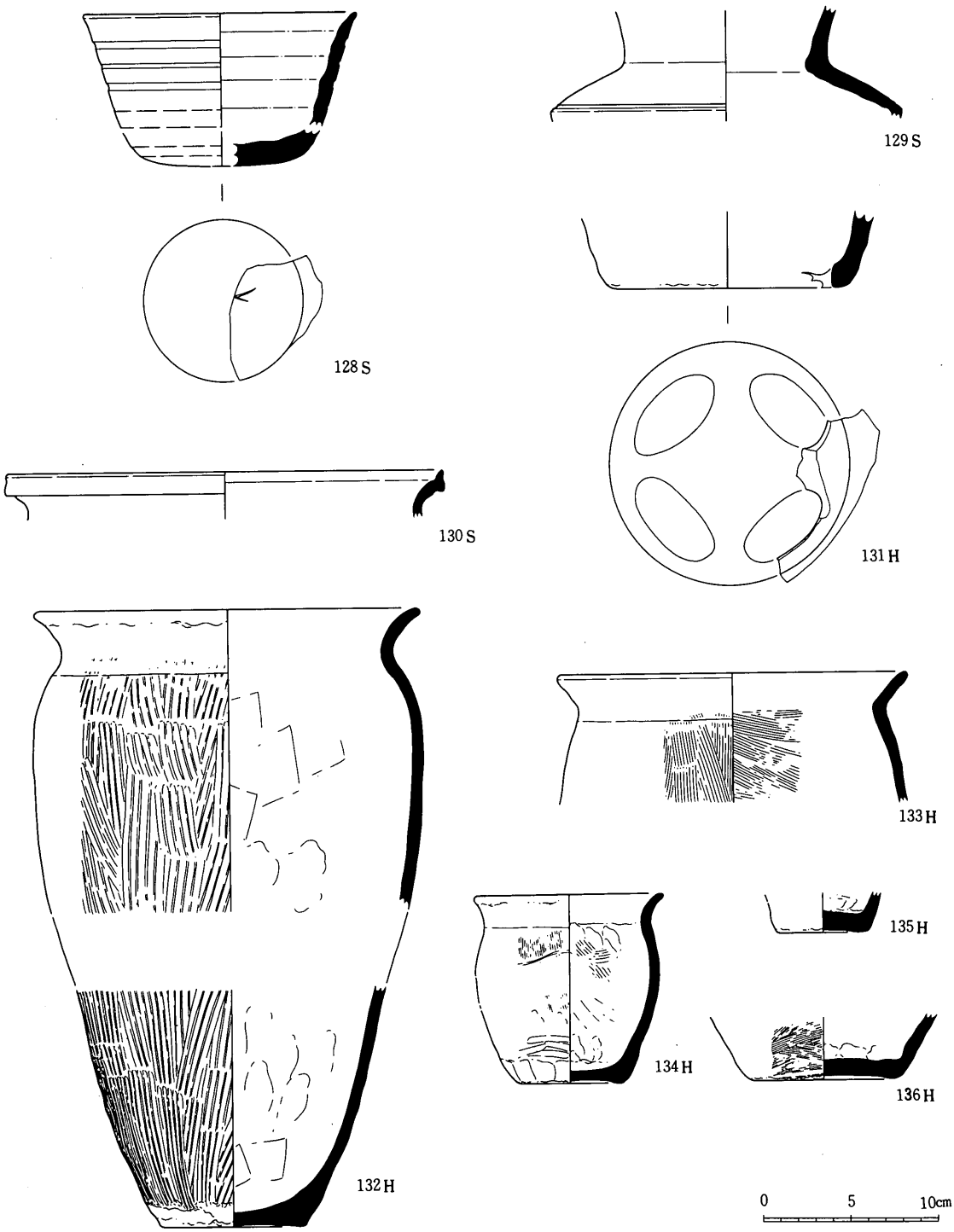


第41図　出土土器（9）

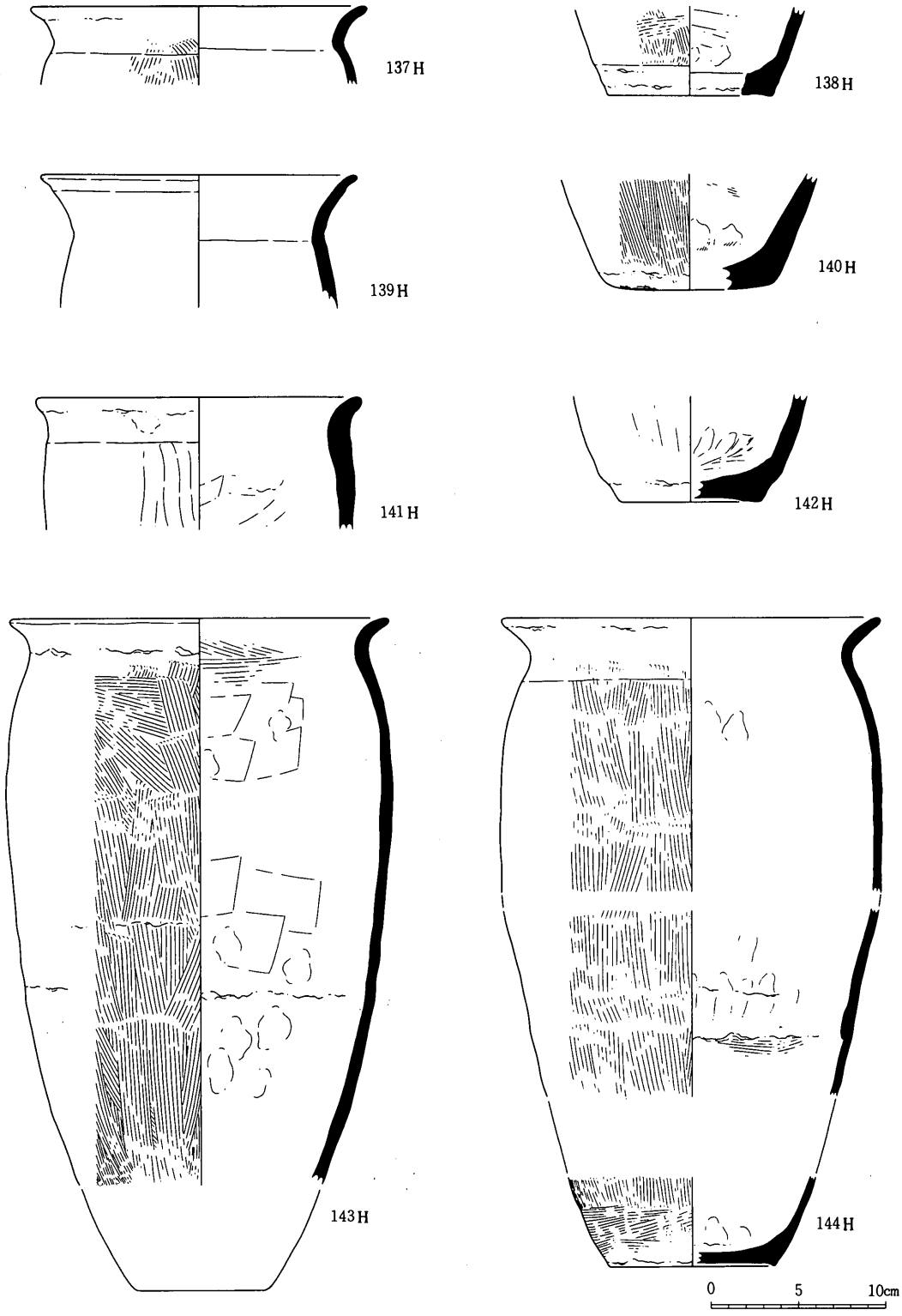
第12号住居址



第42図　出土土器（10）

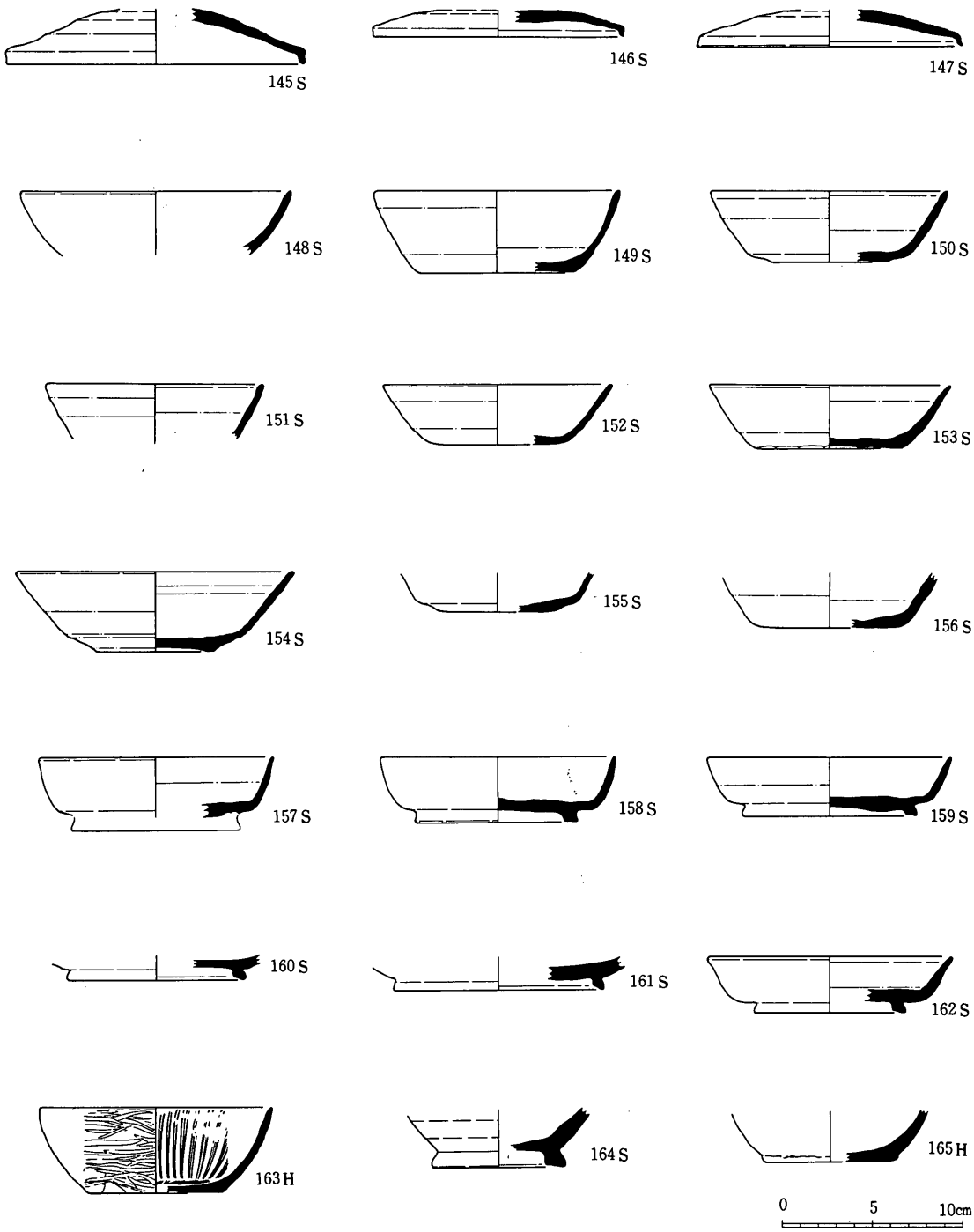


第43図　出土土器（11）

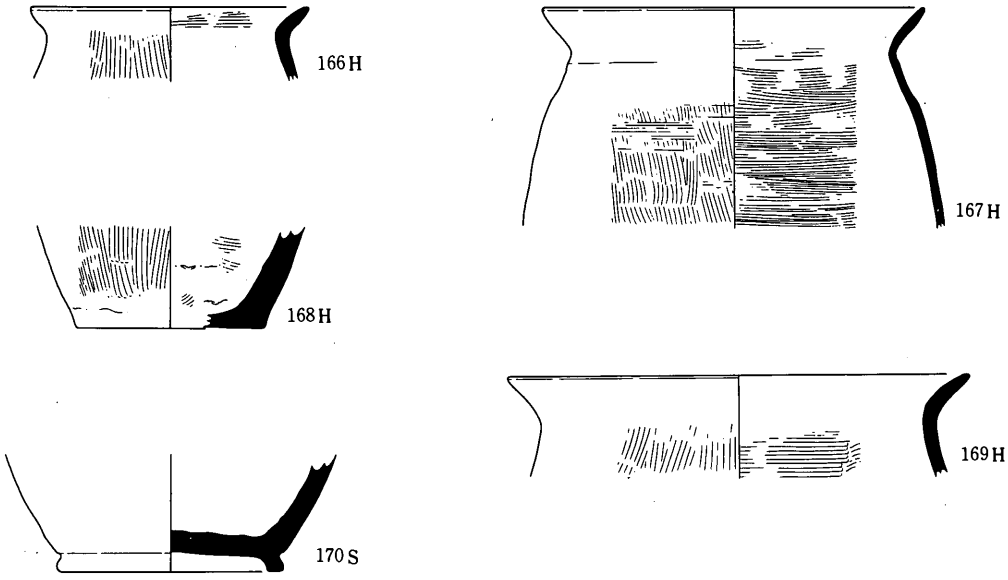


第44図　出土土器（12）

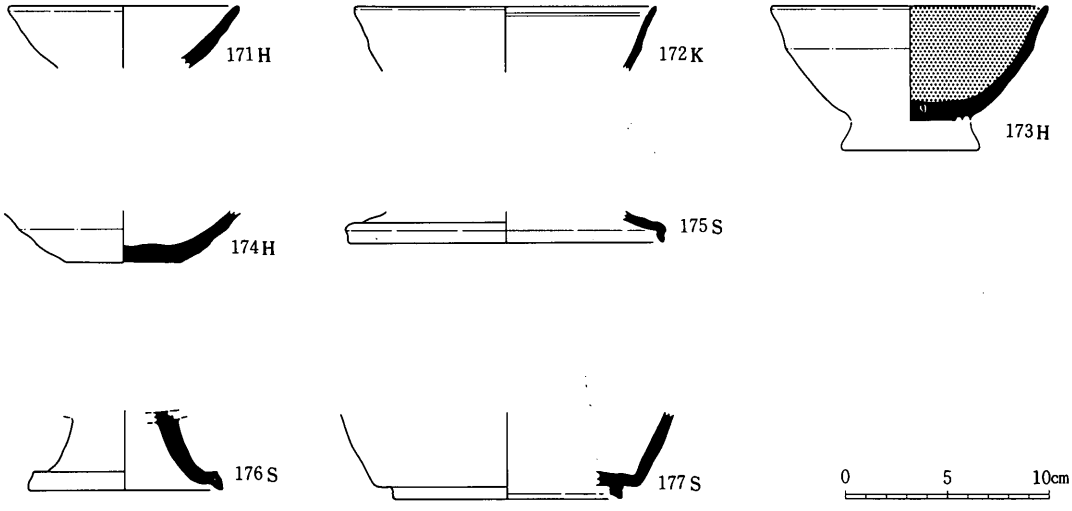
第13号住居址



第45図　出土土器（13）

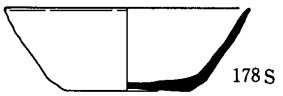


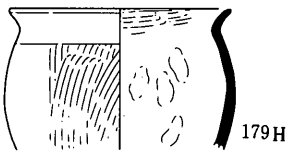
第14号住居址

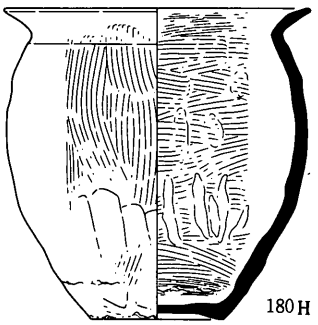


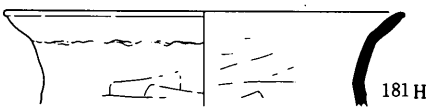
第46図　出土土器（14）

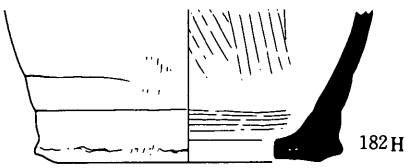
第15号住居址



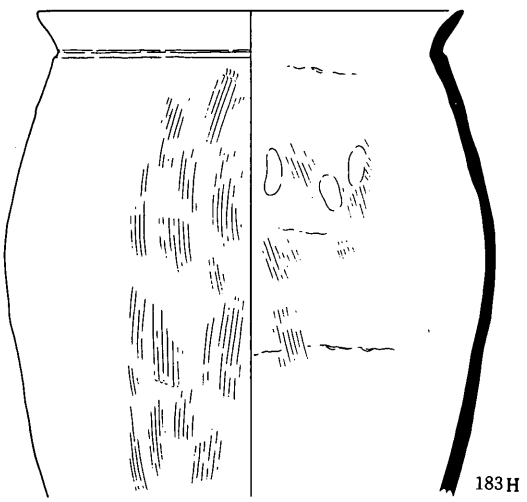


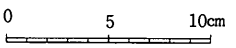






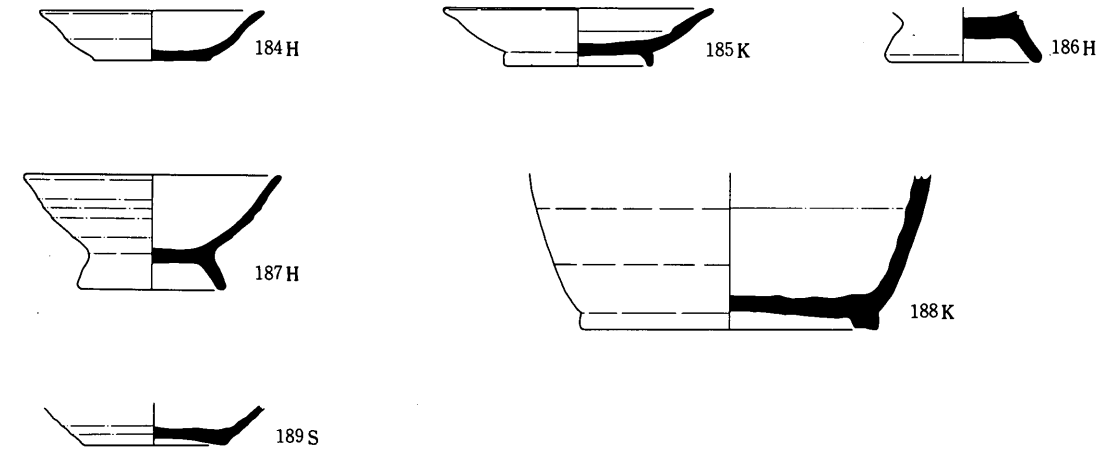
第16号住居址



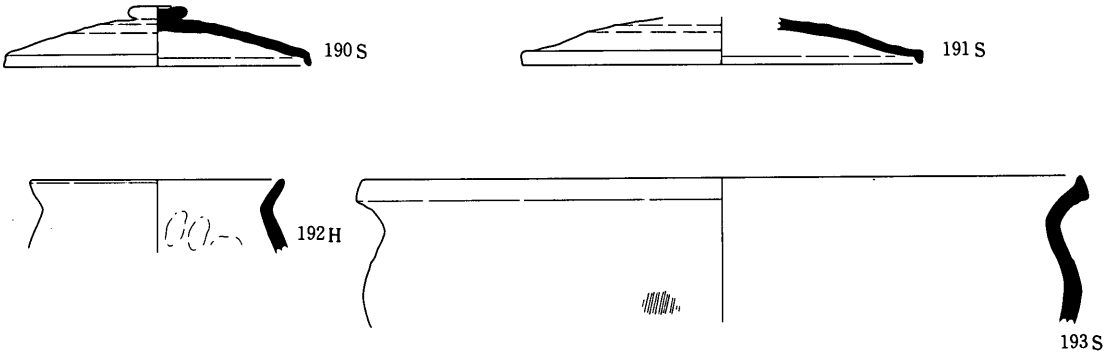


第47図　出土土器（15）

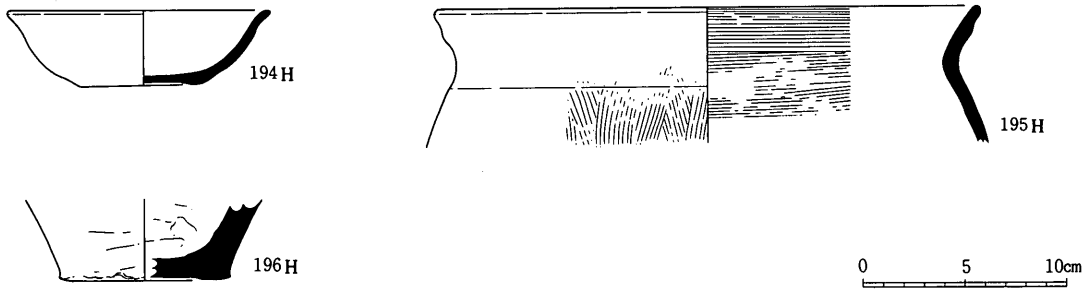
第17号住居址



第19号住居址



第20号住居址

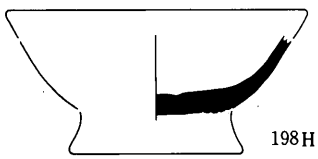


第48図　出土土器（16）

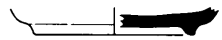
建物址 6

197 S

土壙 4

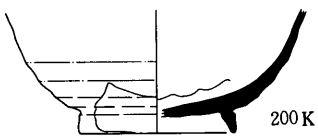


198 H

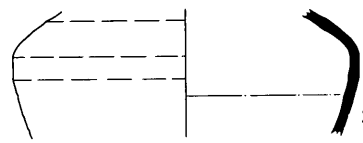


199 S

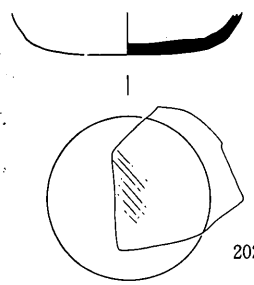
検出面



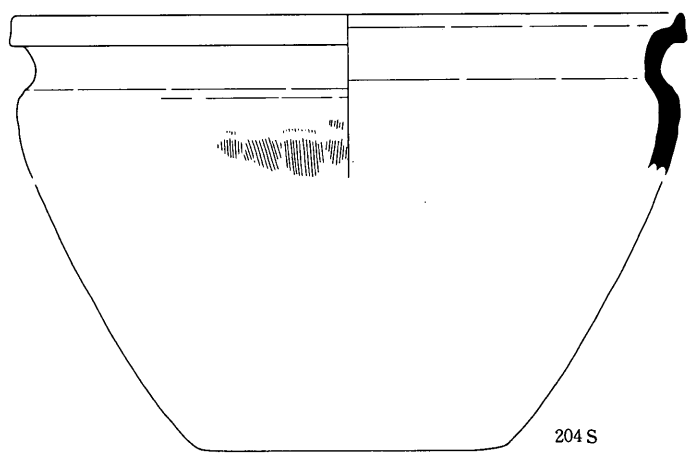
200 K



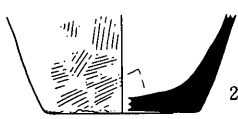
201 S



202 S



204 S



203 H

0 5 10cm

第49図　出土土器（17）

表10

出土土器観察表

No	出土地点	種別	器形	寸法（cm）			残存度 口径（底部）	色調		成形・調整・形態の特徴	備考	実測No
				口径	底径	器高		外面	内面			
1	4住	須恵器	坏E	13.2	4.6	4.2	（完）	淡茶黒	淡茶黒	ロクロナデ、底部回転糸切り		1
2	〃	須恵器	坏E	13.0	5.8	3.9	（完）	淡黄褐～暗灰	淡黄褐～暗灰	ロクロナデ、底部回転糸切り		4
3	〃	土師器	坏C	12.2			（完）	淡黄茶	淡茶～黒	ロクロナデ、底部回転糸切り、内面ミガキ（横方向）		19
4	〃	須恵器	坏E	13.4	5.0	3.9	（3／4）	淡黄褐～黒	淡黄褐～黒	ロクロナデ、底部回転糸切り		3
5	〃	須恵器	坏E	12.4	4.6	4.0	（完）	淡褐～黒	淡黒	ロクロナデ、底部回転糸切り		2
6	〃	土師器	椀A		6.8		（完）	淡茶	黒	ロクロナデ、底部回転糸切り、付高台のちナデ、内面雑なミガキ、黒色処理		10
7	〃	土師器	皿A	13.6	6.7	3.0	（完）	白茶～淡黒	黒	ロクロナデ、底部回転糸切り、付高台のちナデ、黒色処理		9
8	〃	土師器	皿A	12.2			1／6	淡茶	黒	ロクロナデ、内面雑なミガキ、黒色処理		7
9	〃	土師器	坏CⅠ		7.0		（完）	淡赤	黒	ロクロナデ、底部回転糸切り、内面ミガキ（放射状）、黒色処理		12
10	〃	土師器	坏C	13.6	6.3	5.1	（完）	橙褐	黒	ロクロナデ、底部回転糸切り、内面ミガキ（下半放射状、上半横方向）黒色処理		5
11	〃	土師器	坏C	12.2	6.4	3.95	（完）	赤褐	黒	ロクロナデ、底部回転糸切り、内面雑なヘラミガキ後黒色処理	体部外面墨書	6
12	〃	土師器	坏CⅠ？	16.6			1／4	淡黄茶～黒	黒	ロクロナデ、内面ミガキ（横方向）、黒色処理		15
13	〃	灰釉陶器	長頸瓶	8.2			1／8	白灰	白灰	ロクロナデ		17
14	〃	土師器	椀A	15.4	7.0	5.0	（5／6）	橙褐	黒	ロクロナデ、底部回転糸切り、付高台のちナデ、内面ミガキ（放射状）、黒色処理		16
15	〃	土師器	椀A	16.0	6.6	4.7	（完）	淡黄褐～黒	黒	ロクロナデ、底部回転糸切り、付高台のちナデ、内面ミガキ（横斜め）、黒色処理		11
16	〃	灰釉陶器	長頸瓶		8.2		（完）	白灰	白灰	ロクロナデ、底部回転ヘラケズリ、付高台のちナデ、漬け掛け	底部糸切り痕残す	18
17	〃	土師器	小型甕E		6.8		（完）	濃橙褐	濃橙褐	ロクロナデ、底部回転糸切り		14
18	〃	土師器	小型甕E		5.8		（完）	橙褐	橙褐	ロクロナデ、外面カキメ、底部回転糸切り		8
19	〃	土師器	小型甕E		6.8		（完）	橙褐～暗茶	橙褐	ロクロナデ、外面カキメ、底部回転糸切り		13
20	〃	土師器	甕E	24.8			1／3	明橙褐	明橙褐	ナデ、口縁内面カキメ、端部外面ヨコナデ、胴部外面ハケメ、下端部ケズリ		23
21	〃	土師器	甕E	24.0	9.0	31.6	1／2	淡～暗褐	淡～暗褐	ヨコナデ、口縁内面カキメ、胴部外面ハケメ		21
22	〃	土師器	甕E	24.2	9.4	32.9	（3／5）	明赤褐	明赤褐	ナデ、口縁内面カキメ、胴部外面ハケメ		22
23	〃	土師器	甕E	10.2			2／5	橙褐	橙褐	口縁ヨコナデ、内面ナデのちハケメ、外面ハケメ		24
24	5住	須恵器	坏C		7.7		（1／8）	青灰	淡青灰	ロクロナデ、底部回転糸切り、付高台のちナデ、外面回転ヘラケズリ		14
25	〃	土師器	坏D		3.7		（完）	淡茶	茶	ロクロナデ、底部回転糸切り		4
26	〃	土師器	椀A		6.4		（1／3）	淡茶褐	黒	ロクロナデ、底部回転糸切り、付高台のちナデ、黒色処理		6
27	〃	土師器	坏D	10.3	6.0	2.7	完	淡褐	淡褐	ロクロナデ、底部回転糸切り		2
28	〃	土師器	坏D	9.7	4.6	2.5	（完）	黄褐	黄褐	ロクロナデ、底部回転糸切り		11
29	〃	土師器	皿A	14.0	7.3	2.5	1／10	淡茶	黒	ロクロナデ、底部回転糸切り、付高台のちナデ、黒色処理		5
30	〃	土師器	盤B	14.0	7.3	6.0	1／4	淡茶	淡茶	ロクロナデ、底部回転糸切りのちナデ付高台のちナデ		9
31	〃	土師器	椀B		7.3		（ほぼ完）	淡茶	淡茶	ロクロナデ、底部回転糸切り、付高台のちナデ		3
32	〃	土師器	坏C	13.1	6.0	4.1	1／8	淡茶	黒	ロクロナデ、底部回転糸切り、黒色処理		12
33	〃	土師器	盤B	14.3			（ほぼ完）	淡茶褐	淡茶褐～淡褐	ロクロナデ、底部回転糸切りのちナデ		8
34	〃	土師器	椀B	10.4	6.2	4.8	（完）	茶褐	茶褐	ロクロナデ、底部回転糸切り、付高台のちナデ		7

No.	出土地点	種別	器形	寸法(cm) 口径	底径	器高	残存度 口径(底部)	色調 外面	内面	成形・調整・形態の特徴	備考	実測No.
35	5住	土師器	椀A	15.2			1／4	淡褐	黒	ロクロナデ、内面雑なミガキ（横方向）、黒色処理		1
36	〃	灰釉陶器	瓶	22.7			1／12	淡黄灰	淡黄灰	ロクロナデ		13
37	〃	土師器	甕E		9.6		(1／4)	茶褐	茶褐～暗褐	ナデ、外面ケズリ状ナデ		10
38	〃	土師器	甕E	25.4		-	1／4	茶褐	茶褐	ナデ、口縁内面カキメ、端部外面ヨコナデ、胴部外面ハケメ		15
39	6住	土師器	盤B	10.15	5.5	3.4	ほぼ完	淡黄褐	淡黄褐	ロクロナデ、底部回転糸切り、付高台のちナデ	足高高台、内面スミ付着	1
40	〃	土師器	椀A？					暗褐	暗褐	ロクロナデ、底部回転糸切り、内面雑なヘラミガキ（放射状）		7
41	〃	土師器	椀A	10.5			1／2	茶褐	黒	ロクロナデ、底部回転糸切り、内面ミガキ、黒色処理		10
42	〃	土師器	椀B？	13.4			1／5	淡黄褐	黒	ロクロナデ		9
43	〃	土師器	椀B	13.3	6.7	4.1	(完)	淡茶褐	淡茶褐	ロクロナデ、底部回転糸切り、付高台のちナデ		2
44	〃	土師器	椀A	14.6	7.2	5.75	(完)	褐	黒	ロクロナデ、底部回転糸切り、付高台、内面ヘラミガキ、黒色処理		6
45	〃	土師器	椀B	13.9	7.1	5.9	(ほぼ完)	淡茶褐	淡茶褐	ロクロナデ、底部回転糸切り、付高台のちナデ		3
46	〃	土師器	椀B	15.1			2／3	淡茶	淡褐	ロクロナデ、底部回転糸切りのちナデか？、付高台のちナデ	付高台はく離	4
47	〃	灰釉陶器	皿	13.5	6.6	2.4	(1／2)	淡黄褐	淡黄褐	ロクロナデ、底部回転ヘラケズリ、付高台のちナデ、漬け掛け	内面朱あり	11
48	〃	土師器	椀A	15.0			1／4	茶褐～暗褐	黒	ロクロナデ、内面ヘラミガキ、黒色処理	高台はく離	8
49	〃	灰釉陶器	段皿	14.6	8.5	2.9	(完)	淡灰	淡黄灰	ロクロナデ、底部回転ヘラケズリ、付高台のちナデ		5
50	〃	灰釉陶器	碗	15.0	7.9	6.2	2／3	乳灰	乳灰	ロクロナデ、底部回転ヘラケズリ、付高台のちナデ、漬け掛け		13
51	〃	灰釉陶器	碗	14.9	7.9	4.7	(完)	乳灰	乳灰	ロクロナデ、底部回転糸切り、付高台のちナデ、漬け掛け	重ね焼き痕あり	12
52	7住	須恵器	坏B		6.9		(1／5)	灰	灰	ロクロナデ、底部回転糸切り、外面下半手持ちヘラケズリ		1
53	〃	須恵器	坏C		10.2		(1／5)	灰	淡灰	ロクロナデ、底部回転ヘラケズリ、付高台のちナデ		2
54	〃	土師器	坏C(?)	15.1			1／5	淡黄褐	黒	ロクロナデ、黒色処理		4
55	〃	土師器	坏C	13.4	5.7	3.5	(完)	淡茶	暗褐～淡黄褐	ロクロナデ、底部回転糸切り、内面ヘラミガキ（下半放射状、上半横方向）		5
56	〃	土師器	坏C	13.8	5.5	3.9	(完)	茶褐	黒	ロクロナデ、底部回転糸切り、内面ヘラミガキ（下半放射状、上半横方向）、黒色処理		6
57	〃	土師器	甕E	19.6			1／10	茶褐	茶褐	ロクロナデ、口縁内面カキメ、外面ハケメ		8
58	〃	須恵器	甕	23.6			1／6	灰	暗灰	ロクロナデ	自然釉付着	3
59	〃	土師器	甕E		9.6		(ほぼ完)	淡褐～褐	淡黄褐	ナデ、外面細かいハケメ	内面指圧痕	7
60	8住	須恵器	坏D	11.4	4.6	3.8	1／8	青灰	青灰	ロクロナデ、底部回転糸切り	外面ひだすき焼成痕	1
61	〃	須恵器	坏C	12.0	6.5	3.85	(1／5)	淡灰白	淡灰白	ロクロナデ、底部回転ヘラケズリ		2
62	〃	土師器	坏C	13.7	5.7	4.15	(1／2)	茶褐	茶褐	ロクロナデ、底部回転糸切り、内面雑なヘラミガキ（放射状）		3
63	〃	土師器	椀A	16.0			1／2	暗褐～暗黄褐	黒	ロクロナデ、内面ヘラミガキ（下半タテ方向、上半横方向）、黒色処理		8
64	〃	土師器	坏C	12.8	5.1	3.5	(1／2)	茶褐	暗茶褐	ロクロナデ、底部回転糸切り、内面ヘラミガキ（下半放射状、上半横方向）		4
65	〃	土師器	坏C	12.9	6.6	3.9	(2／3)	淡茶褐	黒	ロクロナデ、底部回転糸切り、内面ヘラミガキ（下半放射状、上半横方向）、黒色処理	刻書	12
66	〃	土師器	椀A(?)	16.0			1／2	暗褐～暗黄褐	黒	ロクロナデ、内面ヘラミガキ（下半タテ方向、上半横方向）、黒色処理		7
67	〃	土師器	椀A		7.5		(1／4)	茶褐	黒	ロクロナデ、底部回転糸切り、付高台のちナデ、内面ヘラミガキ、黒色処理		9
68	〃	土師器	椀A	15.7	7.1	5.1	(完)	暗褐～茶褐	黒	ロクロナデ、底部回転糸切り、付高台のちナデ、内面ヘラミガキ（下半放射状、上半横方向）、黒色処理		10

No.	出土地点	種別	器形	寸法(cm) 口径	底径	器高	残存度 口径(底部)	色調 外面	内面	成形・調整・形態の特徴	備考	実測No.
69	8住	土師器	坏C	12.7	4.7	4.0	(1/4)	暗褐	黒	ロクロナデ、底部回転糸切り、黒色処理		5
70	〃	土師器	坏C	12.4	5.7	4.3	1/4	茶褐	黒	ロクロナデ、内面ヘラミガキ(下半タテ方向、上半横方向)、黒色処理		6
71	〃	土師器	椀A	18.1			1/6	淡黄褐～暗褐	黒	ロクロナデ、体部下半回転ヘラケズリ、内面ヘラミガキ、黒色処理		11
72	〃	土師器	小形甕E	13.5			1/5	暗褐	暗褐	ロクロナデ、口縁内面カキメ、体部外面カキメ		15
73	〃	須恵器	短頸壺	12.0			1/4	暗灰	暗灰	ロクロナデ、口縁内面ナデ(横方向)	自然釉	13
74	〃	須恵器	四耳壺					淡黄灰	淡黄灰	外面タタキメ、内面あて具痕		14
75	〃	土師器	甕E	21.8	6.0		(完)	茶褐～暗褐	茶褐	ナデ(タテ方向)、口縁内面カキメ、胴部下半ケズリ上半ハケメ		16
76	9住	土師器	坏D	10.9	6.1	2.9	1/5	茶褐	茶褐	ロクロナデ、底部回転糸切り		2
77	〃	土師器	坏D	9.1			1/6	淡茶褐	淡茶褐	ロクロナデ		4
78	〃	土師器	坏D	10.5			1/5	茶褐	茶褐	ロクロナデ		3
79	〃	灰釉陶器	碗	16.8	8.7	5.1	(1/2)	淡黄灰	淡黄灰	ロクロナデ、底部回転ヘラケズリ、付高台のちナデ	刻書　釉はハケぬり	1
80	〃	土師器	小形甕E	17.5	10.0		(1/2)	暗茶褐	淡茶褐	ロクロナデ、口縁カキメ、胴部下半ケズリ、上半カキメ		5
81	10住	須恵器	坏E	14.0	6.7	3.7	1/3	淡灰～暗灰	淡灰～暗灰	ロクロナデ、底部回転糸切り	焼成不良	1
82	〃	須恵器	坏E	15.1	6.5	4.0	(完)	暗灰～淡灰	暗灰～淡灰	ロクロナデ、底部回転糸切り	焼成不良	2
83	〃	土師器	坏C	13.3	4.6	4.1	(完)	淡茶	黒	ロクロナデ、底部回転糸切り、内面雑なヘラミガキ(下半放射状上半横方向)、黒色処理	墨書	9
84	〃	土師器	坏?	14.4			1/4	淡黄褐	淡茶褐	ロクロナデ、内面ヘラミガキ(横方向)		13
85	〃	土師器	坏D	12.8	4.7	4.0	(2/3)	淡黄	淡茶	ロクロナデ、底部回転糸切り		10
86	〃	須恵器	坏E	12.8	5.2	4.1	(1/2)	黒	黒	ロクロナデ、底部回転糸切り	焼成不良	4
87	〃	土師器	坏C	12.8	5.5	3.5	(完)	茶褐	黒	ロクロナデ、底部回転糸切り、内面ヘラミガキ(下半放射状、上半横方向)、黒色処理		3
88	〃	土師器	椀A	12.2	5.6	5.0	(完)	淡茶褐	黒	ロクロナデ、底部回転糸切り、付高台のちナデ、内面雑なヘラミガキ(放射状)、黒色処理	墨書	14
89	〃	土師器	坏C	12.8	5.2	4.2	(完)	淡茶	黒	ロクロナデ、底部回転糸切り、内面ミガキ(下半放射状、上半横方向)、黒色処理	墨書	15
90	〃	土師器	坏C	15.0			1/3	茶褐	黒	ロクロナデ、内面ヘラミガキ(下半放射状、上半横方向)、黒色処理		10
91	〃	土師器	坏C	14.2	5.7	4.3	(完)	淡黄褐	黒	ロクロナデ、底部回転糸切り、内面ミガキ(下半放射状、上半横方向)、黒色処理		5
92	〃	土師器	坏CI		7.2		(1/3)	茶褐	黒	ロクロナデ、底部回転糸切り、内面雑なミガキ(放射状)、黒色処理		8
93	〃	土師器	坏CI	16.9	6.9	5.9	(完)	茶褐	黒～茶褐	ロクロナデ、底部回転糸切り、内面ヘラミガキ(下半放射状、上半横方向)、不完全な黒色処理		12
94	〃	土師器	坏C	13.0	5.0	4.1	(完)	淡黄褐	黒	ロクロナデ、底部回転糸切り、内面雑なヘラミガキ(横方向のち放射状)、黒色処理		6
95	〃	土師器	坏C	14.8	5.2	4.1	1/3	茶褐	黒	ロクロナデ、底部回転糸切り、内面雑なミガキ、黒色処理		7
96	〃	土師器	坏CI	17.6	8.4	5.7	1/3	淡褐	黒	ロクロナデ、内面ヘラミガキ(下半放射状、上半横方向)、黒色処理		11
97	〃	土師器	坏CI	20.0	7.0	7.1	1/5	淡茶	茶褐	ロクロナデ、底部回転糸切り、内面ヘラミガキ		17
98	〃	土師器	小形甕E	10.5			1/2	淡褐	淡褐	ナデ、口縁内面・体部外面カキメ		20
99	〃	土師器	甕E	21.9			1/3	茶褐	茶褐	ナデ、口縁内面カキメ、体部外面細いハケメ		22
100	〃	土師器	小形甕E		7.5		(1/3)	茶褐	茶褐	ロクロナデ、底部回転糸切りのち一部ナデ、外面工具使用カキメ		21
101	〃	土師器	鉢	30.0			1/5	淡褐	褐	ロクロナデ、内面ヘラミガキ		18
102	〃	須恵器	壺		11.2		(1/6)	茶褐	暗灰	ロクロナデ、底部ナデ、外面下端回転ヘラケズリ		19

No.	出土地点	種別	器形	寸法(cm) 口径	底径	器高	残存度 口径(底部)	色調 外面	内面	成形・調整・形態の特徴	備考	実測No.
103	11住	須恵器	蓋C	13.7		3.1	3／4	淡黄灰	淡黄灰	ロクロナデ、天井部回転ヘラケズリのちつまみ付着、端部ヨコナデ		1
104	〃	須恵器	坏D	12.9	7.8	3.7	1／2	灰	灰	ロクロナデ、底部回転糸切り、外面下半ヘラケズリ、上半一部ヘラミガキ、端部ヨコナデ	ひだすき、焼成痕	3
105	〃	土師器	坏E	12.2			1／5	淡橙褐	淡橙褐	ロクロナデ、内面ヘラミガキ（放射状）	甲斐型	6
106	〃	須恵器	蓋C	15.8			1／6	灰	灰	ロクロナデ、内面回転ヘラケズリ、端部ヨコナデ		2
107	〃	須恵器	広口甕	27.4			1／12	暗灰	暗灰	ロクロナデ、端部ヨコナデ		5
108	〃	須恵器	坏D	13.4	7.9	3.5	1／2	淡灰	淡灰	ロクロナデ、端部ヨコナデ		4
109	〃	土師器	小形甕C?	12.4	7.5		(1／3)	褐～茶褐	淡茶褐	ナデ、胴部下半ケズリ（横方向）?、口縁ヨコナデ		7
110	〃	土師器	甕E	20.1			1／5	茶褐	茶褐	体部内外面ハケメのちナデ?、口縁内面カキメ		8
111	〃	土師器	甕A					淡褐～茶褐	茶褐	内面ナデ（下半タテ方向、上半ヨコ方向）、外面下半ケズリ状ナデ、上半ナナメ方向ハケメのちナデ（横方向）	指圧痕	9
112	12住	須恵器	蓋C	16.0			1／6	淡黄灰	淡黄灰	ロクロナデ、天井部回転ヘラケズリか?、端部ヨコナデ	自然釉	9
113	〃	須恵器	蓋C	19.0			1／5	茶灰	淡茶灰	ロクロナデ、天井部回転ヘラケズリ、端部ヨコナデ		10
114	〃	須恵器	坏B	13.0	7.3	3.9	(3／4)	灰	灰	ロクロナデ、底部回転ヘラ切りのちナデ、端部ヨコナデ		2
115	〃	須恵器	蓋C				つまみ部完	暗灰	淡紫灰	ロクロナデ、つまみ部ナデ、天井部回転ヘラケズリ		11
116	〃	須恵器	坏B	14.7	8.3	4.0	(1／2)	灰白	灰白	ロクロナデ、底部回転ヘラ切りのちナデ、端部ヨコナデ		3
117	〃	須恵器	坏D	13.2	5.7	3.2	(1／3)	灰	灰	ロクロナデ、底部回転糸切り、端部ヨコナデ	2次底部面残す	1
118	〃	須恵器	坏C	13.9	10.2	3.4	(1／3)	暗灰	灰	ロクロナデ、底部回転ヘラケズリ、付高台のちナデ、端部ヨコナデ		5
119	〃	須恵器	坏C・B	15.0			1／12	灰	灰	ロクロナデ、端部ヨコナデ		6
120	〃	須恵器	坏B		5.7		(完)	淡灰	淡灰	ロクロナデ、底部回転ヘラ切り		8
121	〃	須恵器	坏C		10.3		1／5	暗灰	灰	ロクロナデ、底部回転ヘラケズリ、付高台のちナデ	底部ヘラ記号あり	7
122	〃	須恵器	瓦	10.8			1／4	淡灰	灰	ロクロナデ	自然釉	13
123	〃	須恵器	長頸壺		10.2		(1／3)	灰白	灰白	ロクロナデ	内面自然釉付着	12
124	〃	須恵器	横瓶	14.1			1／2	灰	暗灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ	自然釉付着	15
125	〃	須恵器	擂鉢	16.9			3／4	灰	灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、端部面取り	内外面自然釉付着	19
126	〃	須恵器	広口甕	26.7			1／6	灰（青灰）	灰（青灰）	ナデ、口縁ヨコナデ、外面タタキメ		17
127	〃	須恵器	広口甕	30.0			1／6	灰白	灰白	ナデ、口縁ヨコナデ、外面不鮮明なタタキメ	炭化物付着	18
128	〃	須恵器	鉢	15.7	8.5		1／2	灰白	灰白	ロクロナデ、底部胴部外面下半回転ヘラケズリ、上半沈線状ナデ、端部ヨコナデ	ヘラ記号あり	16
129	〃	須恵器	広口壺					淡黄灰	淡灰	ロクロナデ、肩部沈線あり、頸部ナデ		36
130	〃	須恵器	広口甕	24.9			1／12	灰	灰	ロクロナデ、端部ヨコナデ		14
131	〃	土師器	甑		13.1		(1／4)	淡黄茶	茶褐	ナデ、内面指圧痕あり	指圧痕	30
132	〃	土師器	甕A	22.1	8.4		(1／2)	淡黄褐	淡黄褐	口縁ヨコナデ、内面ナデ、指圧痕、外面ハケメ、木葉底		31
133	〃	土師器	甕A	20.1			1／6	茶褐	茶褐	口縁ヨコナデ、内外面ハケメ		22
134	〃	土師器	小形甕C	10.8	6.0	10.8	(完)	淡茶褐	淡茶褐	口縁ヨコナデ、内面ハケメのちナデ外面ハケメ状ナデ(タテ方向)一部ヘラナデ、木葉底	指圧痕	20
135	〃	土師器	小形甕		5.2		(完)	茶褐	茶褐	ナデ（内面横方向）		27
136	〃	土師器	甕A		8.2		(2／3)	茶褐	淡茶褐	内面ナデ指圧痕、外面工具使用ハケメ（横方向）、木葉底のちハケ		28

No.	出土地点	種別	器形	寸法(cm) 口径	底径	器高	残存度 口径(底部)	色調 外面	内面	成形・調整・形態の特徴	備考	実測No.
137	12住	土師器	甕A	19.1			1／5	淡茶褐	淡茶褐	口縁ヨコナデ、内面ケズリ状ナデ、外面ハケメ		23
138	〃	土師器	甑		9.5		(1／4)	茶褐	茶褐	内面ナデ(横方向)、外面ハケメ、底部ナデ		29
139	〃	土師器	甕A	18.0			1／10	茶褐	茶褐	口縁強いヨコナデ、内面ナデ、外面横方向ナデ		24
140	〃	土師器	甕D		9.5		(1／2)	淡褐	茶褐	内面ハケメのちナデ、内部底面ナデ、外面ハケメ、底部ハケメ		26
141	〃	土師器	甕C	18.5			1／10	黄褐	黄褐	口縁強いヨコナデ、内面板状工具によるナデ、外面タテ方向ナデ		21
142	〃	土師器	甕A		8.0		(1／4)	茶褐	暗茶褐	ナデ(外面タテ方向)		25
143	〃	土師器	甕E	21.6			ほぼ完	茶褐	茶褐	口縁強いヨコナデ、頸部内面ハケメ、胴部内面板状工具によるナデ、外面ハケメ	指圧痕、炭化物付着	32
144	〃	土師器	甕A	21.6	9.5		(1／3)	茶褐	茶褐	口縁ヨコナデ、胴部内面ナデ指圧痕、下半ハケメ、外面ハケメ一部横方向ハケメ、木葉底		33
145	13住	須恵器	蓋C	16.4			1／6	淡灰	淡灰	ロクロナデ、天井部外面回転ヘラケズリ、端部ヨコナデ	自然釉付着	18
146	〃	須恵器	蓋C	14.0			1／12	灰白	灰白	ロクロナデ、天井部外面回転ヘラケズリ、端部ヨコナデ		20
147	〃	須恵器	蓋C	14.6			2／3	暗灰	暗灰	ロクロナデ、天井部外面回転ヘラケズリ、端部ヨコナデ		19
148	〃	須恵器	坏B?	15.0			1／8	淡灰	淡灰	ロクロナデ	ひだすき焼成痕	6
149	〃	須恵器	坏D	13.7	8.4	4.4	(1／4)	淡灰	淡灰	ロクロナデ、底部回転糸切り	内外面ひだすき焼成痕	1
150	〃	須恵器	坏D	13.0	6.6	4.0	1／2	灰	灰	ロクロナデ、底部回転糸切り	2次底部面	2
151	〃	須恵器	坏C	7.1			1／6	暗灰	暗灰	ロクロナデ		5
152	〃	須恵器	坏B	12.7	6.5	3.3	3／8	灰	灰	ロクロナデ、底部手持ヘラケズリ		3
153	〃	須恵器	坏B	13.5	10.0	3.9	1／2	灰	灰	ロクロナデ、底部回転糸切り、一部手持ヘラケズリ		4
154	〃	須恵器	坏D	15.5	6.5	4.4	(1／2)	淡灰	淡灰	ロクロナデ、底部静止糸切りか?		10
155	〃	須恵器	坏B?		5.9		(2／3)	淡白灰	淡白灰	ロクロナデ、底部回転ヘラ切りのちナデか?	2次底部面、外面ひだすき焼成痕	12
156	〃	須恵器	坏D		7.6		(1／4)	淡灰	淡灰	ロクロナデ、底部回転糸切りのち一部ナデ		11
157	〃	須恵器	坏C	13.0			1／6	灰	灰	ロクロナデ、底部回転ヘラケズリ	高台部分はく離	9
158	〃	須恵器	坏C	13.0	9.0	3.5	(完)	淡黄灰	淡黄灰	ロクロナデ、底部回転糸切りのち回転ヘラケズリのちナデ、付高台		13
159	〃	須恵器	坏C	13.6	9.6	3.2	(完)	淡灰	淡灰	ロクロナデ、底部回転糸切りのち回転ヘラケズリ、付高台		14
160	〃	須恵器	坏C		9.8		(1／6)	青灰	青灰	ロクロナデ、底部ヘラケズリ、付高台		15
161	〃	須恵器	坏C		11.6			赤褐	赤褐	ロクロナデ、底部回転ヘラケズリ、付高台のちナデ		24
162	〃	須恵器	坏C	13.7	8.5	3.1	(1／3)	灰	灰	ロクロナデ、底部回転ヘラケズリ、付高台のちナデ		30
163	〃	土師器	坏E	12.8	7.4	4.75	(1／2)	赤橙褐	赤橙褐	ロクロナデ、底部手持ケズリのちミガキ、内面ヘラミガキ、底面細いミガキ(放射状)外面ヘラミガキ		25
164	〃	須恵器	長頸壺		7.3		(1／2)	暗灰	灰	ロクロナデ、底部ヘラケズリ、付高台、外面回転ヘラケズリ	内部自然釉	21
165	〃	土師器	小形甕C		7.2		(1／2)	暗橙褐	橙褐	ナデ、内面一部ハケメ、木葉底		23
166	〃	土師器	小形甕C	13.6			3／4	暗橙	暗橙	口縁ヨコナデ(内部ハケメ)、体部内面ナデ(ハケか?)、外面ハケメ		29
167	〃	土師器	甕D?	18.6			1／6	橙褐	橙褐	口縁ヨコナデ(内部カキメ)、胴部内面ハケメ(横方向)、外面ハケメ(タテ方向一部横方向)一部カキメ		28
168	〃	土師器	甕E		5.6		(1／4)	暗褐	赤褐	内外面不鮮明なハケ痕(横方向)		26
169	〃	土師器	甕E	22.6			1／4	橙褐	橙褐	口縁ヨコナデ、内外面ハケメ		27
170	〃	須恵器	長頸壺		11.0		(1／2)	暗灰	暗灰	ロクロナデ、底部圧痕のちナデ、付高台のちナデ、外面回転ヘラケズリ	胎土は赤灰	22

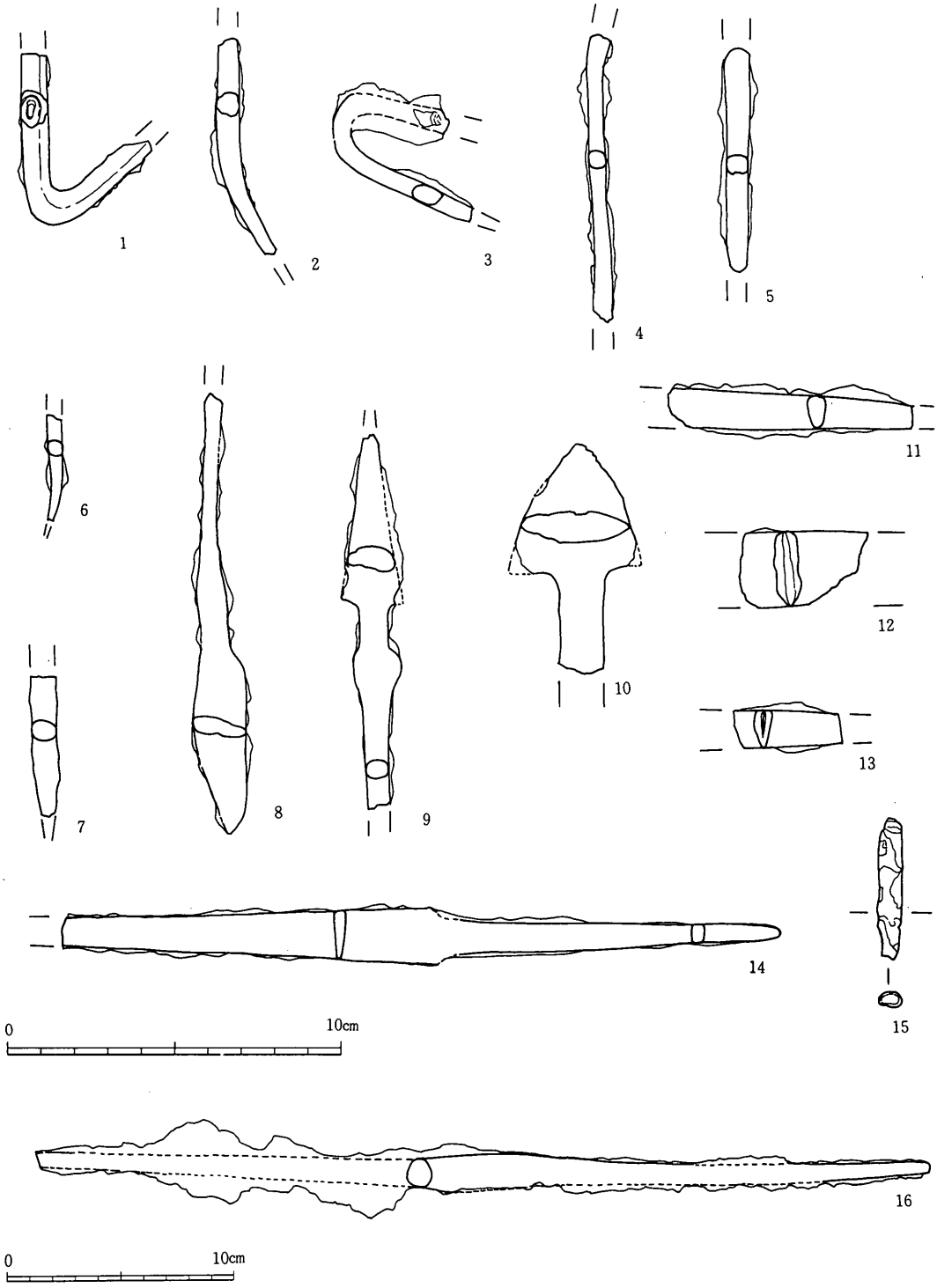
No.	出土地点	種別	器形	寸法(cm) 口径	底径	器高	残存度 口径(底部)	色調 外面	内面	成形・調整・形態の特徴	備考	実測No.
171	14住	土師器	坏D	11.2			1／3	暗橙褐	暗橙褐	ロクロナデ		3
172	〃	灰釉陶器	碗	14.8			1／10	淡灰	淡灰	ロクロナデ		5
173	〃	土師器	椀A	13.6	5.8	5.6	(完)	淡黄茶	淡黄茶～淡黒	ロクロナデ、内面ミガキ(下半放射状、上半横方向)	内黒未完	1
174	〃	土師器	坏D		5.4		(完)	暗黄褐	暗黄褐	ロクロナデ、底部回転糸切り		2
175	〃	須恵器	蓋C	15.4			一部	暗灰	暗灰	ロクロナデ、端部ヨコナデ		4
176	〃	須恵器	高盤		9.4		(1／4)	暗灰	暗灰	ロクロナデ、端部ヨコナデ		7
177	〃	須恵器	坏C		11.2		(1／8)	暗灰	淡灰	ロクロナデ、付高台のちナデ		6
178	15住	須恵器	坏D	12.0	6.0	4.0	(1／3)	暗灰	暗灰	ロクロナデ、底部回転糸切り		3
179	〃	土師器	小形甕C	10.8			1／4	暗橙褐	橙褐	口縁ヨコナデ(内部ハケメのちヨコナデ)、胴部外面ハケメ	表面はく離	2
180	〃	土師器	小形甕C	15.0	6.6	15.0	2／3	暗褐	暗褐	口縁ヨコナデ(内部ハケメのちナデ)、胴部内面ハケメ一部強いナデ、外面ハケメ、木葉底	指圧痕	6
181	〃	土師器	甕F	19.6			1／3	暗橙褐	暗橙褐	口縁ヨコナデ(内部ナデ)、頸部外面ケズリ		1
182	〃	土師器	甑				(1／4)	橙褐	橙褐	内面ハケメ(斜め方向、一部横方向)、外面ハケメ、沈線状横ナデ痕		4
183	16住	土師器	甕A	20.8			1／4	淡橙褐	淡橙褐	口縁ヨコナデ、内面ハケメ、指圧痕、外面ハケメ		1
184	17住	土師器	坏D	11.0	5.6	2.4	(3／4)	淡橙褐	淡橙褐	ロクロナデ、底部回転糸切り		2
185	〃	灰釉陶器	皿	13.2	7.2	2.8	(一部欠)	淡黄灰	淡黄灰	ロクロナデ、底部回転ヘラケズリ、付高台のちナデ	段皿、釉不明	4
186	〃	土師器	椀B		7.3		(完)	橙褐	暗橙褐	底部ロクロナデ、付高台のちナデ		1
187	〃	土師器	椀B	12.6	7.0	5.55	(完)	橙褐	橙褐	ロクロナデ、底部ナデ、付高台のちナデ		3
188	〃	灰釉陶器	瓶		14.4		(完)	淡灰	淡灰	内面ロクロナデ、付高台のちナデ、外面回転ヘラケズリ、底面内外面に釉	釉調　無色透明～半透明淡緑	6
189	〃	須恵器	坏D		6.8		(1／2)	赤灰	赤灰	ロクロナデ、底部回転糸切り		5
190	19住	須恵器	蓋C	15.0		3.0	一部	暗灰	暗灰	ロクロナデ、天井部回転ヘラケズリ、端部ヨコナデ		3
191	〃	須恵器	蓋C	19.6			一部	暗灰	暗灰	ロクロナデ、天井部回転ヘラケズリ、端部ヨコナデ		2
192	〃	土師器	小形甕C	12.4			1／6	暗橙褐	橙褐	口縁ヨコナデ、内面指圧痕		1
193	〃	須恵器	広口甕	35.0			一部	淡黄灰	橙褐	口縁ヨコナデ、外面タタキメ		4
194	20住	土師器	坏C	12.8	6.1	3.7	(5／6)	暗橙褐	橙褐	ロクロナデ、底部回転糸切り、内面ミガキ		1
195	〃	土師器	甕E	26.4			一部	橙褐	橙褐	口縁ヨコナデ(内面カキメ)、外面ハケメ		3
196	〃	土師器	甕E		8.4		(1／2)	暗橙	暗橙	底部ナデ、内面雑なナデ、外面板状工具によるケズリ状雑なナデ		2
197	建物址6	須恵器	蓋C	13.9		2.4	1／12	淡灰	灰	ロクロナデ、つまみ部ナデ、天井部回転ヘラケズリ、端部ヨコナデ	自然釉付着	建6
198	土壙4	土師器	椀B					淡茶	淡茶	ロクロナデ、底部回転糸切りのちナデか?、高台付着跡	高台付着跡にハケメ	2
199	土壙4	須恵器	坏C		7.9		(1／4)	淡灰	淡灰	ロクロナデ、底部回転ヘラケズリ、付高台のちナデ		1
200	検出面	灰釉陶器	碗		7.6		(3／4)	灰白	灰白	ロクロナデ、底部回転ヘラケズリ、付高台のちナデ、浸け掛け	重ね焼き痕あり	1
201	〃	須恵器	壺B					淡黄灰	淡灰	内面ロクロナデ、外面回転ヘラケズリ一部ロクロナデ	沈線状のケズリ?	3
202	〃	須恵器	坏B		8.0		(1／4)	茶～淡茶灰	茶	ロクロナデか?、底部回転ヘラ切りのちハケメ?		2
203	〃	土師器	小形甕C		7.6		(1／5)	橙褐	橙褐	内面板状工具によるナデ、外面ハケメ、木葉底		4
204	〃	須恵器	広口甕	32.5			1／15	灰	淡黄灰	口縁強いヨコナデ、内面ナデ、外面タタキメ		壁1

2）鉄器

16点を図示したが、このほかには古銭１・鉄滓６片201ｇがある。種別では釘あるいは棒状のもの、鉄鏃、刀子、その他がある。１は鈎状に曲がっているが、本来の姿かどうかわからない。断面は芯が楕円形で３重になっているのが観察される。２は先端がやや細くなるが、器種は不明である。断面形は角ばっている。３は１以上に大きく曲がっているが、器形は不明である。４・５は棒状のもので共に断面は楕円形を呈している。６は釘の先端部分である。７は２と似ているが、断面が丸い。８～10は有茎の鏃であるが、８については柳葉状を呈しており、かえりがあったものかどうかわからない。９は三角型の鏃で茎の上部にこぶ状のものがある。10は正三角形をした鏃で茎も太い。11～13は刀子である。11・13は刃幅１cm強と細く、共に断面には鬆が入っている。12は２cmを越す刃幅である。14は刃部に比して長い柄を持つもので、刃幅は最大２cm弱と細い。15は銅製品であるが、管状のものが潰された状態で、中は中空である。部分的にきれいな緑青がふいている。器種・用途など不明である。古銭は２片に割れて銭名不詳であるが径２cmあまりの小型で色調も灰白色を呈する点など他の古銭とは趣きが異る。これらを遺構別に見ると８・９・14・古銭が17号住居址、４・11が12号住居址のほかは単独出土で、10が20号住居址、１が４号住居址等である。16は40cm余りの棒状のもので、断面形は円形であり上下先端は細くなっている。

表11　　鉄器・銅製品・古銭一覧表

No.	出土遺構	種類	寸法（mm）			重量（g）	備考
			長さ	巾	厚さ		
1	４号住居址	鈎状鉄器	51	10.5	10.5	12.2	
2	８号住居址	釘	65	7	6.5	5.1	
3	〃	不明	44	5.5	8	12.2	
4	12号住居址	棒状鉄器	84	5.5	5	7.8	
5	19号住居址	〃	66	7.5	5	8.1	
6	西部検出面	釘	31	4.5	4.5	1.1	頭部欠
7	〃	〃	41	8.5	6	4.1	〃
8	17号住居址	遣鉋？	130	16	5.5	17.2	
9	〃	鉄鏃	111	17	7	20.1	
10	20号住居址	〃	68	36.5	9	22.6	基部欠
11	12号住居址	刀子	73.5	11	5.5	12.6	
12	13号住居址	〃	37	22.5	7.5	9.9	
13	検出面	〃	32	11	5	5.4	
14	17号住居址	〃	215.5	17	4	43.6	先端欠
15	19号住居址	銅管	41.5	7	4.5	2.6	
16	土壙４	棒状鉄器	267.5	11	7	188.3	
	17号住居址	古銭	2.0	2.0	0.2	2.1	



第50図　鉄器・銅製品

3）石器・土製品等

ここで扱うものは7種11点である。1・2は凹石と呼ばれるもので共に住居址から得られている。これらは中世の遺構からの遺物として普遍的なものになってしまった割にはその用途の解明がなされていないものの1つである。

土錘には3～6がある。この種のものとしては大ぶりなもので粘土の質がよく、灰白色を呈し、4個とも均一的な法量を見せている。

7は土製紡錘車である。ロクロによるナデが見られ、上部は段をなし器面は滑らかで丁寧なつくりがうかがえる。直径の割には厚さがなくその用途は例えば木綿というよりは絹の為というように軽く、細い材質用のものと考える。

8は浮石でつくられた浮子である。周囲は上手に面取りされて図の矢印の部分に糸を懸ける為か溝と抉りが施されている。

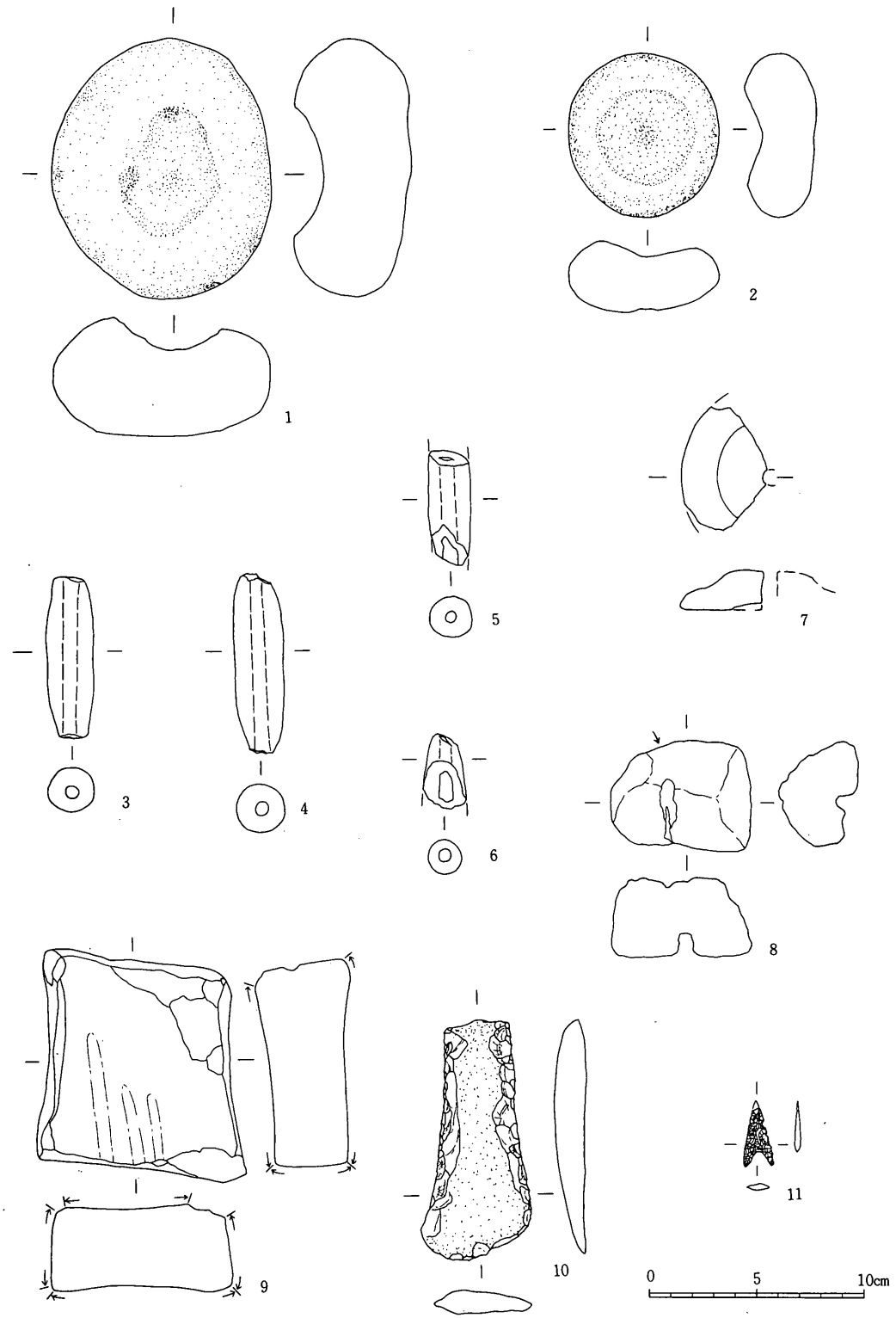
砥石は9の1点のみであった。6面体のうち5面が使用されているが、ごろっとした大きさからして固定用として荒砥ないし中砥用に用いられたものであろう。

これらに対して10は扁刃の打製石斧、11は無茎凹基の石鏃で共に原始時代の石器である。ここより南東1kmには縄文時代初期～後期の遺跡の存在を確認(注)しており、ここからの所産であろうと考える。

注　松本市教育委員会『松本市島立南栗・北栗遺跡、高綱中学校遺跡、条里的遺構』(1985)

表12　　石器・土製品等一覧表

No.	品名	出土地	長さ (mm)	最大巾 (mm)	孔径 (mm)	厚さ (mm)	重量 (mm)	備考
1	凹石	8住	119	102		53		
2	凹石	13住	75	69		31		
3	土錘	12住	74	23	6		36.8	
4	土錘	12住	81	22	6		44.3	
5	土錘	8住	(50)	19	5		(18.5)	
6	土錘	12住	(33)	(16)	5		(7.8)	
7	紡錘車	15住		(38)	6	18	(34.8)	
8	浮子	12住	49	65		36	58.7	
9	砥石	12住	98	95		43	679	
10	打製石斧	検出面	109	43		14	91	
11	石鏃	9住	(31)	7		3	(0.73)	混入遺物



第51図　石器・土製品

4．小結

今回の調査地点は86年調査区に西接している。ここではまとめとして、86年調査結果も含め、土器で示された各時期毎の住居址を中心とした遺構の動きについて見てゆきたい。

古墳時代末～奈良時代前葉（南栗Ⅰ～Ⅲ期）　86年調査14・15住（以後86－○住と表記）がある。2棟共一辺7mを越え、4本柱穴、東壁中央の粘土カマドは長い煙道をもつ。本段階の生活域はより南方に求められ、年度調査区以北には及ばない。

奈良時代中葉～平安時代初頭（南栗Ⅳ～Ⅵ期）　本年調査区東部～86年調査区中央に中心をおく分布を示す。前半（Ⅳ・Ⅴ期）の住居址は散在的で、大小がある。大形は12住、86－9・10住があり、4本柱穴をもつ。他は13・19住、86－5・12住で、大小共に東壁中央に粘土カマドをもつ。尚注意すべき点として、本年調査区内に区画溝と見られる溝3が存在する。本址は後半の15住に切られ、12・13・19住に伴い、これらを区画すると考えられる。3棟の住居址については、遺物、遺構共他と際立った違いは示されないが、やや異なる性格を有していた可能性は考えられよう。

後半（南栗Ⅵ期）の住居址は数、分布域が縮小し、本年調査区内にのみ11・15・16住が存在する。柱穴を有する大形の住居址は見られない。カマドは西壁中央に移り、15住は石組の袖となるが、煙道は前半同様長いものである。

これらの段階に伴う他遺構は、建6を除き決め手に欠ける。86年調査においてやや大径の柱穴をもつ建1～4が本段階から次段階に伴うものであろう。

平安時代前期（南栗Ⅶ・Ⅷ期）　該当する遺構が存在せず、欠落期と考えられる。

平安時代中期（南栗Ⅸ～Ⅺ期）　前半（Ⅸ・Ⅹ期）の遺構分布は、前段階前半と同様である。柱穴のない小形の住居で構成され、カマドは東壁、西壁共に存在、中央ないしやや隅に寄る。86－1住は北カマドである。いずれも石組により構築され、以後煙道は短くなる。

後半は西方に中心が移る。4．7．8．10住、86－6住が挙げられ、規模・カマド等前半と同様である。7住はカマドを欠除し、建1・柵列1は本段階に伴う可能性がある。

平安時代中期後半（南栗Ⅻ～ⅩⅢ期）　本年調査区内に分布、5・6・9・14・17住を挙げる。6・17住はやや大形で、17住には柱穴、銭の出土が見られ、中心的な建物と推察されるが、カマドが判然としない。他住居址のカマドは石組で、壁隅に寄るものが存在、14住は北カマドである。

中世　遺物が少なく明確な時期決定はできないが、覆土の有り方により中世以降と考える。分布の中心は本年調査区東半～86調査区中央で、掘立柱建物址、柵列、土壙で構成される。建2～6、86－6～9は大小あるが柱穴はいずれも小さい。柵列は全て東西に走っている。竪穴状遺構は86調査区に小竪穴があり、その他土壙・ピットが分布域内に集中する。

以上、おおまかな変遷を述べてきたが、本年調査建1と86年10住を結んだ線以西～北では各時期共遺構が希薄となるようだ。これは遺構のベースとなる茶～黄褐色土の分布と重なり、集落の立地が地形と深く関わる事を示している。今後長野道予定地内の成果と合わせ、詳細に検討したい。

第３節　町区地内

１．調査の概要

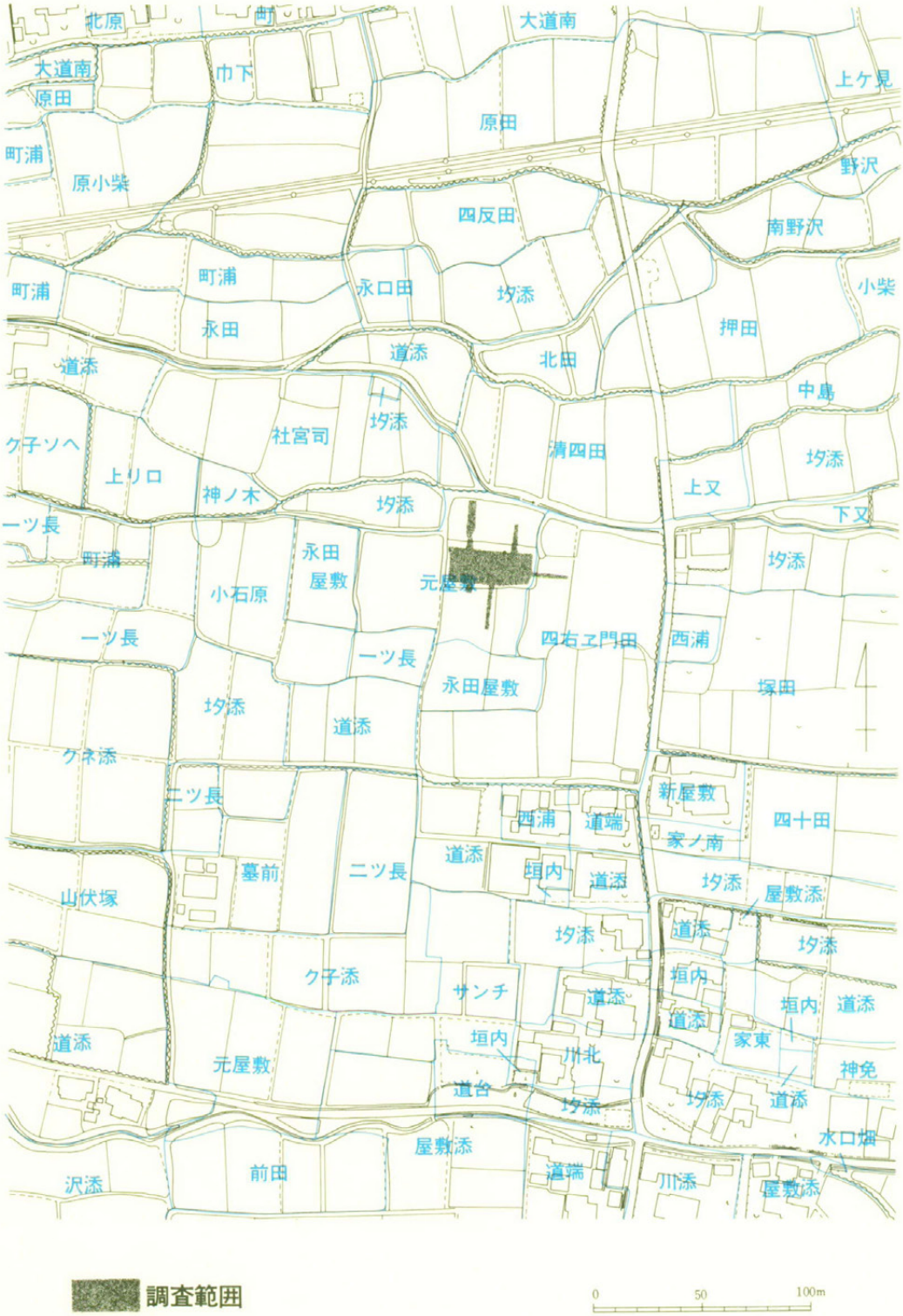
今回の調査は島立地区に伝わる〝島立氏〟(注)の伝承と小字名を検討し、又水路等の状況を考えた結果島立地区の北西部、町区集落の南東の水田地に決定した。検出面は現耕作土、旧耕作土を除去した茶褐色土上層（集積層上部）であり、地表からの深さは中央部分で約50cm、東・北側トレンチは40cm、南側トレンチで30cmであった。

遺構は上記土層中に主として灰色土を覆土とし明瞭に検出することができた。竪穴状遺構７、土壙16、ピット310とそれらを取り囲んで巡る溝、そしてその溝を利用した池状遺構等である。これらは遺物と覆土などからほとんどが同一時期ないし接近した時代に存在したものと考え、その時期は中世末頃と考えられる。

これらから得られた遺物としては内耳土器、土師質土器などが中世の陶磁器類と共に出土。他には古代の土師器、灰釉陶器、あるいは近世の磁器等が少量であった。なお今回は正月を挟んでの真冬の調査であった為、この一生活面しか調査を行なわなかったが、この下約20～30cm程に土師器、須恵器等の遺物を確認している。

注　島立右近貞永――松本市史によると荒井清水ケ城に一時居城、永正14年７月28日城内で没す。法名　寿永萬歳　などとある。

第52図　町区地内調査範囲



調査範囲

0 50 100m

第53図　調査地と小字名

2．遺構

1）竪穴状遺構

溝による方形区画内より7基の竪穴状遺構が検出されている。これらの分布は区画内、溝より2～4m間隔をおいた内側に位置、ピット群の範囲とほぼ一致する。北半部が未調査のため全容は不明だが、方形区画の中心ないしやや南寄りに分布することになろう。

以下個々の遺構について記述し、最後にまとめを行なうが、数値については必要以外第8表に譲る。

竪穴状遺構1　全形は不明であるが、調査部分は不整長方形を呈している。大きく2段階の変遷があるものと考えられ、また他遺構との切合は竪2を切り、3基のピットに切られている。

第1段階の遺構は長方形の掘り方で、直に掘り込まれる壁と、平坦だが軟弱な床面、不整楕円形の浅いP_1により構成される。これらに伴う遺物は全く見られないが、北部床面よりわずかに浮いて4ケの礫が遺存する。

第2段階は第IV層層中に認められる3枚の被熱面である。各面とも良く焼けており、灰、針葉樹の炭化材が遺存する。各層中央で凹面をなし、IV層の堆積過程ないし、第1段階の遺構を埋設して営まれるようである。これらの被熱面に伴う遺構としてP_2がある。不整円形を呈し、竪穴南壁に接している。掘り込みは直ないしやや抉り気味で、底面はすり鉢状になる。壁立ち上がりは覆土中までのびるが、第1段階より存在したものかは不明である。

被熱面及びP_2に伴う遺物としては銭2点、硯2点、鉄製品、かわらけ、内耳土器、陶器があり、他の竪穴状遺構より豊富である。

竪穴状遺構2　やや東西に長い方形を呈し、南北壁には張り出しが見られる。掘り方は二段になり、下段は不整長方形となる。底面はやや凹凸があり、北西隅に細長いピットが見られる。覆土は中層すなわち下段掘り方の上層に炭を多く含む土層が見られた他、全般に砂質土塊を多く含む。

遺物は陶磁器片、刀子2点が出土している。

尚本址は竪穴状遺構の中では竪8とともに最も小さいが、土壙よりはやや深い形状となっている。

竪穴状遺構3　東西に長軸をおく長方形を呈する。壁は直に掘り込まれ、床面は平坦だが軟弱である。覆土は不明瞭ながら基本的に3層に分けられた。各層とも小径の砂質土塊を含んでいる。上面には数個の礫が見られるが、中～下層には見られない。ピットはP_1・P_2が伴う。

遺物はほとんどなく、内耳土器片を得たのみである。

竪穴状遺構4　南北に長軸をとる長方形プランである。四隅の形状は南側と北側で異なり、前者は丸く、後者はやや角ばっている。掘り方下端でも同様である。壁は直に深く掘り込まれ、床面はやや起伏がある。東壁中央に接して径110cm、深さ20cmの掘り込みがあり、炉と見られ灰・炭の堆積が顕著である。床面積の割には大変大きいものであり、炉の西～北にかけての床面は非常に堅くしまっている。他に北西隅にも浅い楕円形のピットが存在する。

覆土は9層からなり、中央で凹む堆積をしている。各層とも砂質土塊を多く含み、炉西側の下層

第54図　遺構配置・土層概略

には礫が多い。

遺物は炉周辺に陶器甕片が見られた他、覆土中より内耳土器片、漆器片、獣骨、木片が出土している。また特記すべきものとして、北西部覆土中よりアスファルト塊が出土している。(森義直氏鑑定)

竪穴状遺構5　全形不明だが、方形のプランを呈するものと推定される。壁は南北がやや傾斜して深く掘り込まれ、東壁は直に近い。床面は黄褐色土中にあり、東壁下の高まりを除けば平坦に構築され、中央部ではややしまっている。

本址の付属施設としては南壁中央の張り出しが挙げられる。平面形は舌状を呈し、貼床のなされる床面は竪穴に向い傾斜している。なお底面はうすく被熱が認められ、灰の堆積が認められる。

覆土は10層からなるが、基本的には4層の大きな堆積と理解される。各層とも中央で大きく堆積状況を呈し、炭・焼土・灰を混えるものが下層を中心に見られる。さらに特記すべき点として、礫面、炭化米層の存在が挙げられる。

礫面は上下2枚が確認された。上層の第1面はI層下面にあり、東西160cm、南北110cmの長方形の範囲に10～30cm大の円礫・角礫・石臼片計38ケが敷いた様に集中している。位置的には竪穴中央に当たる。

下層の第2面はII′層上面にあり、第1面より大きく南北2.8m、東西2.0mの長方形の範囲に集中している。石材も第1面と同様であるが量は多く、2段に集積する部分も見られる。

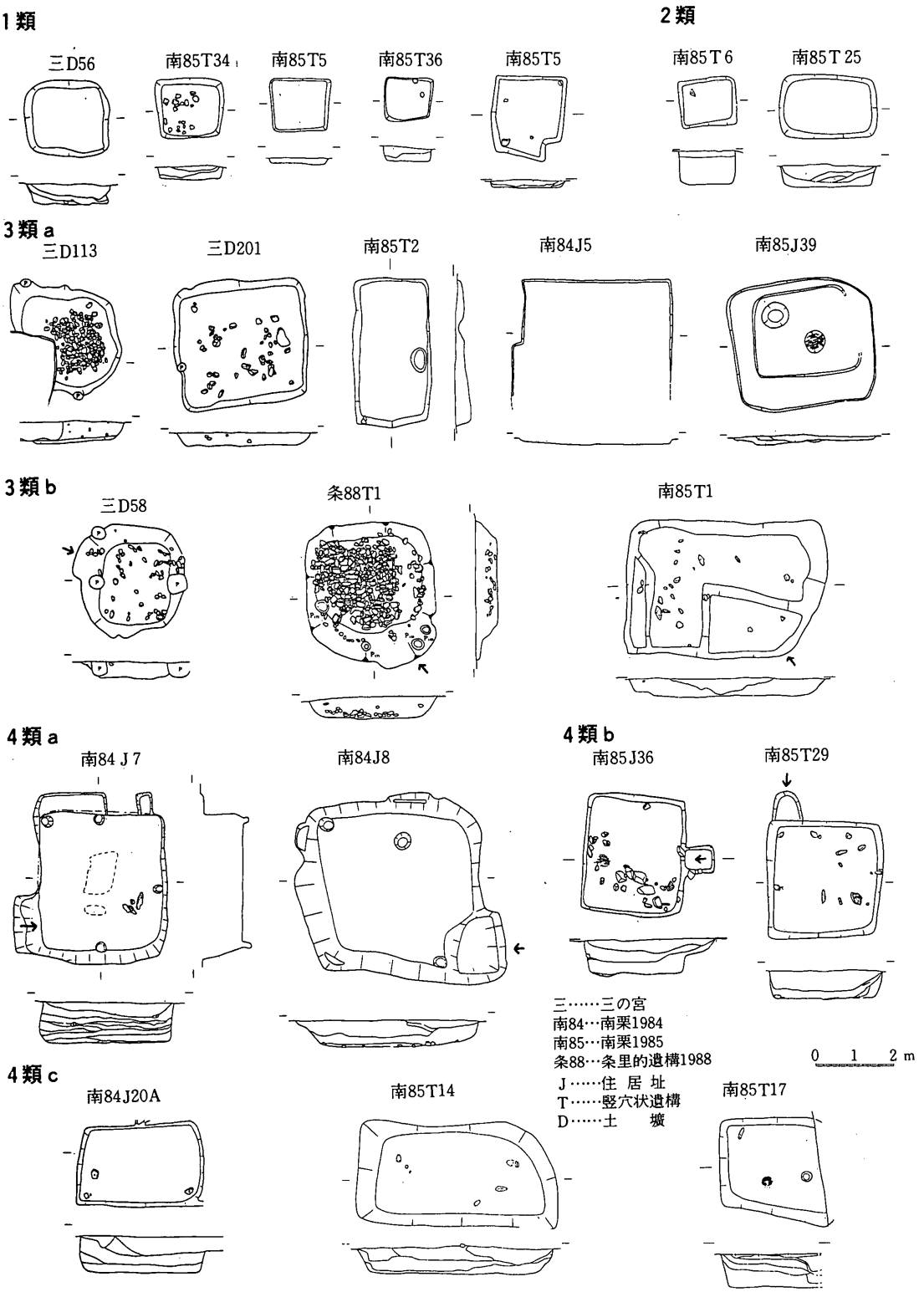
炭化米は床面より薄く灰層を挟んだ上層に6～17cmの厚さに遺存していた。平面的には第2面の礫と重なり、南北205cm、東西170cmの長方形をなしている。さらに炭化米層上面には焼土粒、炭化物を多量に含む砂質土すなわちIII・IV層が覆っている。

炭化米のこの様なあり方から本址は、床面上に板等何らかの敷物をし、米を備蓄していた倉庫的な建物と考えられ、焼失したものと見なしたい。米は何らかの容器に入っていた可能性があるが、その痕跡は検出できない。2面の礫については、流れ込みや投げ込みの状況とは異なり、上屋の屋根上に置かれたものが焼失により落下したか、あるいは本址の焼失後、何らかの理由により石材を敷いた可能性がある。調査の所見からは特に第2面の礫については前者を考えたい。この礫面より下層に炭、炭化材、灰が顕著であり、建物構築材が焼け落ちたものと捉えられよう。ただし柱穴は検出されず、柱の構造は不明である。

遺物は礫面に用いられた石臼、茶臼の他は少なく、内耳土器片を得たのみである。

竪穴状遺構6　平面形は方形を呈し、壁はやや傾斜して掘り込まれている。覆土は基本的には2層からなり、いずれも砂質土粒・塊を含んでいる。床面は平坦だが、堅さはない。北壁中央下には浅い円形ピットがあるが、他に柱穴等見られない。

遺物は覆土中よりかわらけ、内耳土器を少量得たのみである。遺構の深さや覆土のあり方は竪3と比較的近似する。


1類
三D56
南85T34
南85T5
南85T36
南85T5
2類
南85T6
南85T25
3類a
三D113
三D201
南85T2
南84J5
南85J39
3類b
三D58
条88T1
南85T1
4類a
南84J7
南84J8
4類b
南85J36
南85T29
三……三の宮
南84…南栗1984
南85…南栗1985
条88…条里的遺構1988
J……住 居 址
T……竪穴状遺構
D……土 壙
0 1 2 m
4類c
南84J20A
南85T14
南85T17

挿図5　竪穴状遺構集成

竪穴状遺構８　長方形を呈する本址は、その規模・形態から土壙７と顕著な差異を見いだせないものである。あるいは土壙とすべきものか、土壙７も含め竪穴状遺構に含むべきものか判断に迷うものである。覆土は炭をわずかに混ずる砂質土で土壙７と変わらない。壁はやや斜めに立ち上がり、床面は平坦だが堅さはない。西北寄りに灰が薄く認められ、その東方に礫数ケが遺存していた他、付属施設、遺物等見当たらない。

まとめ　松本市内においては、島立地区を中心に近年中世集落の調査が進んできており、竪穴状遺構の調査例も増加している。その形態や構造については様々であり、用語も土壙、小竪穴、竪穴状遺構、住居址等定まっていない。ここでは十分とは言えないが本遺跡の竪穴状遺構および過去島立遺跡群で調査された資料を用い(注1)、竪穴状遺構の分類を行いたい。

竪穴状遺構の定義については工藤清泰氏(注2)、小山岳夫氏(注3)らにより行われているが、ここでは大きく枠を広げ、方形を基調とし、底面が平坦面をなすこと、堆積が人為的であること(注4)、の３条件に合致する遺構を竪穴状遺構として扱った。この定義についてはあくまで便宜的なものであり、今後検討を要するものである。また今回用いた資料は集落址と思われる遺跡の資料を用い、墓址等と混在して存在するものについては用いていない。さらに最近資料が増加しつつある、掘立柱建物址に付属する竪穴状遺構についても、資料として用いていない点を付記しておく。

尚分類に当たっては規模を主眼に行ったが、数値については個々の調査精度や残存状況に左右されるため、多少の誤差は含まれるものと思われる。（挿図５）

１類　長軸長が150cm前後～250cm前後の方・長方形を呈し、掘り込みが50cm以内の浅いもの。

本遺跡竪８・土７(注5)、三の宮遺跡土55・56・112、南栗遺跡（1985）竪３・５・23・26・27・28・33・34・35・36が挙げられる。

いずれも柱穴等の施設は見られないが南栗1985竪３・５には張り出し状のものが見られる。

２類　平面規模は１類と同様だが、掘り込みが著しく深いもの。

本遺跡竪２、南栗遺跡（1985）竪６・25が挙げられる程度で量的には少ない。

付属施設は本遺跡竪２に２段の掘り込み、張り出しが見られるが、他２例には見られない。

３類　長軸長250cm前後～500cm前後の方形、長方形を呈するもので、掘り込みが50cm以内の浅いもの。また付属施設のあり方によりａ．入口施設（張り出し部）をもつもの、ｂ．もたないものに分かれる。

ａ．－三の宮遺跡土59、条里的遺構（1988）竪１、南栗（1985）竪１がある。南栗竪１は竪穴内に入口部のテラスをもつ。

ｂ．－本遺跡竪１・３・６、三の宮遺跡土57・58・113・201、南栗遺跡（1984）５・20Ｂ住(注6)、同遺跡（1985）39住・竪２・13・15がある。

他に重要な付属施設としては南栗（1984）５住、同（1985）39住に炉が見られる。本遺跡竪１は焼土面をもつが炉とは言えず、特異な存在である。

4類　平面規模・形態は3類に準ずるが、掘り込みが著しく深く70～100cmを測るもの。a．柱穴及び入口部の他複数の張り出し部をもつもの、b．入口部張り出しを有するが柱穴のないもの、c．張出し柱穴をもたないものに細分される。

a．－南栗遺跡（1984）7・8住。

b．－本遺跡竪5、南栗遺跡（1985）36住・竪29。

c．－本遺跡竪4、南栗遺跡（1984）20A住(注7)、同（1985）竪14・17。

その他炉を有するものとして南栗（1984）7住、同（1985）36住・竪17、本遺跡竪4がある。

以上4類7種に分類を行ったが、各類は竪穴の上屋も含め竪穴の構造の相違を反映するものと考えられよう。柱、屋根を有する建物としての形状をなしていたか否かについては、それを知る手がかりが少なく不明である。4類aに挙げた建物は柱穴を有する。壁に沿って設けられており、南栗（1984）7住では外方に傾斜して掘り込まれている。同様な例は、県内では佐久市大井城跡(注8)、金井城跡に見られる。(注9)掘立柱により上屋を支えている例と言えよう。

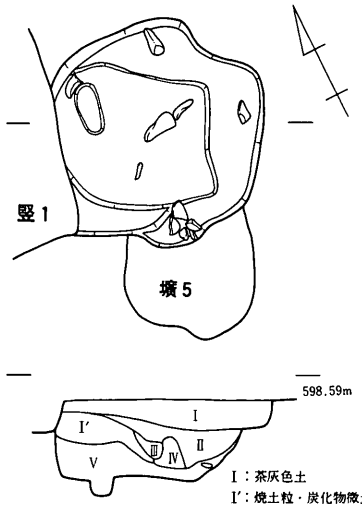
3類や4類b・cについては柱穴が見られないが、規模から見てやはり何らかの形で上屋が存在したものと考えられよう。本遺跡竪5をはじめ、三の宮土58・113、条里（1988）竪1には、覆土内、床面より浮いて礫が一定範囲に集中して存在するが、これらは屋根上に載せられていたものである可能性も考えられる。(注10)柱については全く不明だが、鎌倉市諏訪東遺跡例(注11)の様に竪穴壁下に角材を横たえ土台とし、その上に柱を立てる例があり、佐久市金井城ではそれに関連する可能性のある浅い周溝状のくぼみを有する例が顕著である。上屋構造については、張出し部をもつ竪穴状遺構も含め今後精緻な調査を重ね解明すべき課題であろう。また平安時代の住居からの変遷過程も残された問題と言えよう。

竪穴状遺構の用途については、この分類の他、炉等の施設を考慮すると、3・4類については住居・倉庫・作業場といった機能が考えられよう。多分に住居的な様相を示すものとして、南栗（1984）5・7・8住が挙げられ、土器・陶器類、鉄器等生活用具が比較的豊富に見られ、炉を有している。他の炉を有する例もその可能性があるが、作業場としての機能も考えられ、本遺跡竪4は床面積の割に炉が巨大で、居住空間は見出せない。倉庫としては炭化米を出土した本遺跡竪4が考えられる。

1・2類の機能については不明と言わざるを得ないが、貯蔵等の可能性もあるかと思われる。

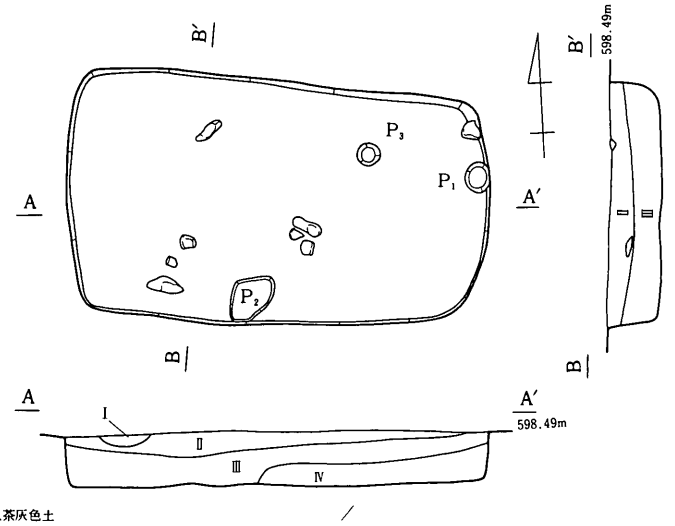
本遺跡では方形区画内にこれら各類の竪穴が存在し、それぞれの役割を担って機能したものと考えられる。ただし、明確な居住遺構は調査範囲内では見出せない。三の宮遺跡でも同様であり、また方形区画が見られない南栗（1985）遺跡においては居住遺構他各類が一定の区域に、土壙やピット（建物址）とともに分布する状況が窺える。これら各種機能の竪穴状遺構および掘立柱建物址が共存し集落ないし屋敷を構成する姿は当地域での中世集落の一般相を示していよう。今後長野道調

竪穴状遺構 2



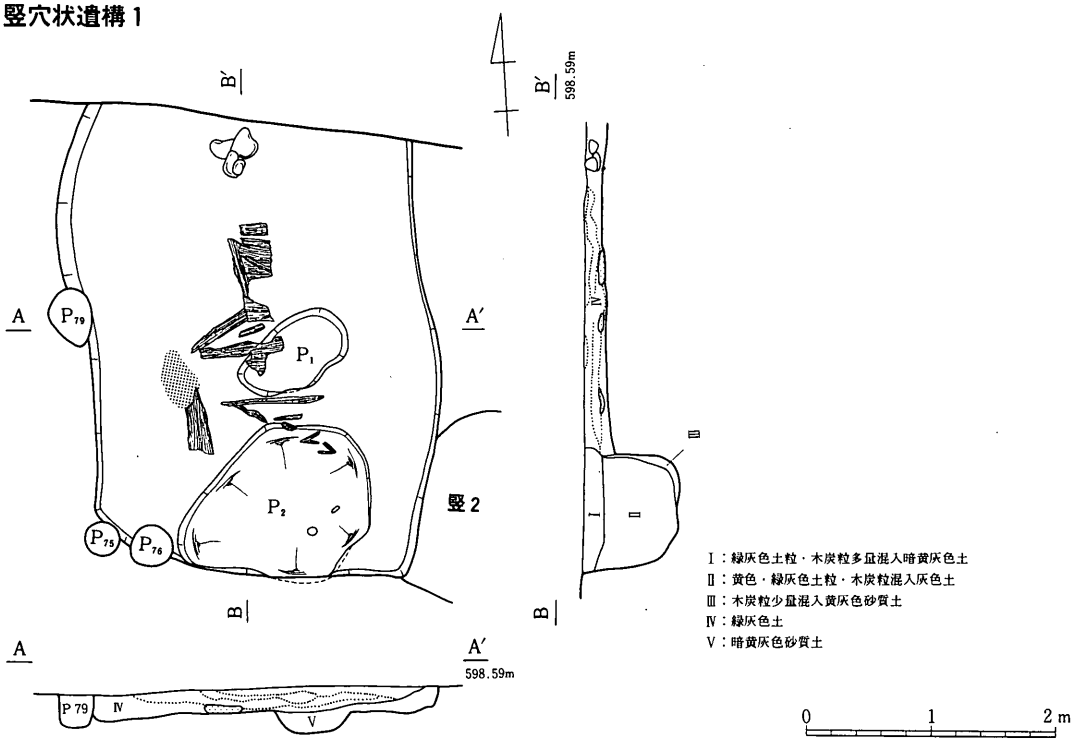
I：茶灰色土
I′：焼土粒・炭化物微量混入茶灰色土
II：緑灰色砂質土塊多量混入茶灰色土
III：炭化物多量混入茶灰色土
IV：緑灰色土
V：茶褐色砂質土

竪穴状遺構 3



I：黄色土塊混入灰色土
II：青灰色土塊混入灰色土
III：青灰色・緑灰色土塊混入茶灰色土
IV：茶灰色土

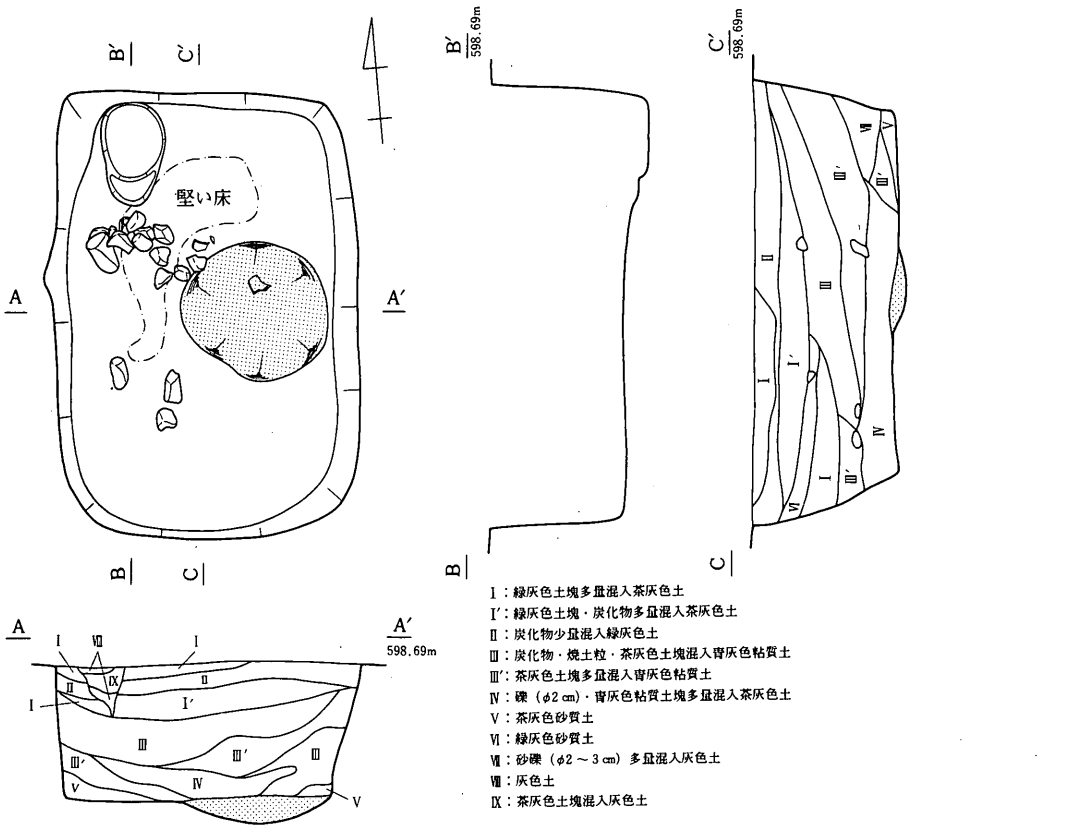
竪穴状遺構 1



I：緑灰色土粒・木炭粒多量混入暗黄灰色土
II：黄色・緑灰色土粒・木炭粒混入灰色土
III：木炭粒少量混入黄灰色砂質土
IV：緑灰色土
V：暗黄灰色砂質土

0 1 2 m

第55図　竪穴状遺構 1・2・3



第56図　竪穴状遺構4

査資料の呈示により平安時代からの集落構造の変化、階層や機能の差による集落構造の違いやそこに占める竪穴状遺構の位置付け(注12)の解明が期待される。

注1　資料収集に当たっては以下の報告を用いた。またこれらの調査時の所見については高桑俊雄氏より御教示頂いた。

松本市教育委員会　1984　『松本市島立南栗遺跡』

同　1985　『松本市島立南栗・北栗遺跡、高綱中学校遺跡、条里的遺構』

同　1988　『松本市島立三の宮遺跡』

同　1988　『松本市島立条里的遺構』

2　浪岡町教育委員会　1983　『浪岡城跡　Ⅶ』

3　佐久市教育委員会　1986　『大井城跡』

小山岳夫　1987　「大井城跡の竪穴状遺構」『長野県考古学会誌　54』

4　実見していないものが多いが、ブロックを多く混入する覆土が多いようである。

5　以後竪（竪穴状遺構）・土（土壙）・住（住居址）と表記する。

6　調査所見では1つの遺構となっているが、プラン・セクションを見る限り2遺構の切合いと捉えられ、A・Bとして切り離した。

7　注6に同じ。

8　注3文献に同じ。

9　佐久埋蔵文化財調査センター　『金井城跡現地説明会資料』

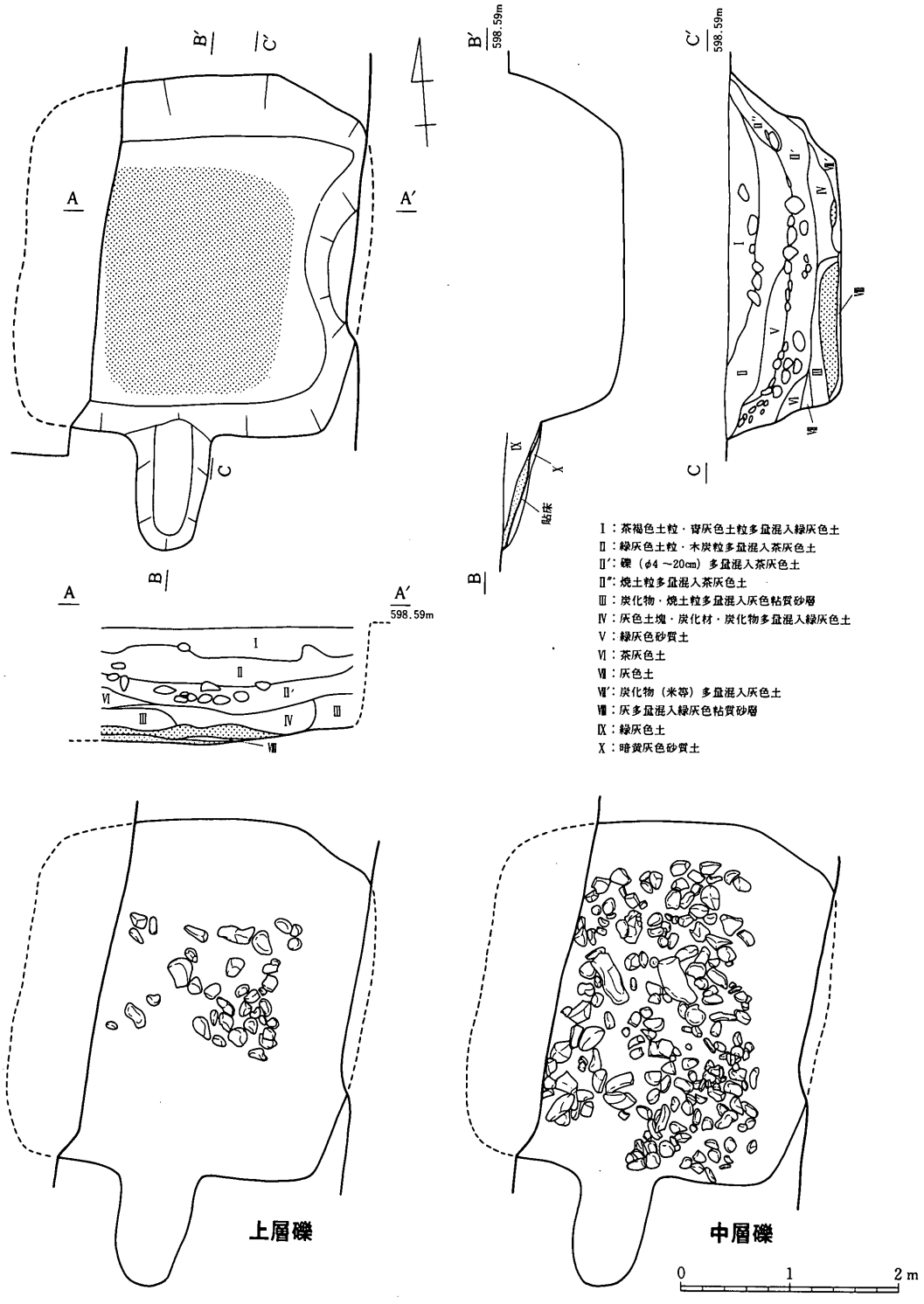
なお筆者も調査に加わっている。

10　金井城跡では焼粘土が床よりやや浮いて検出されており、屋根上に泥を載せたものの可能性も考えられる。

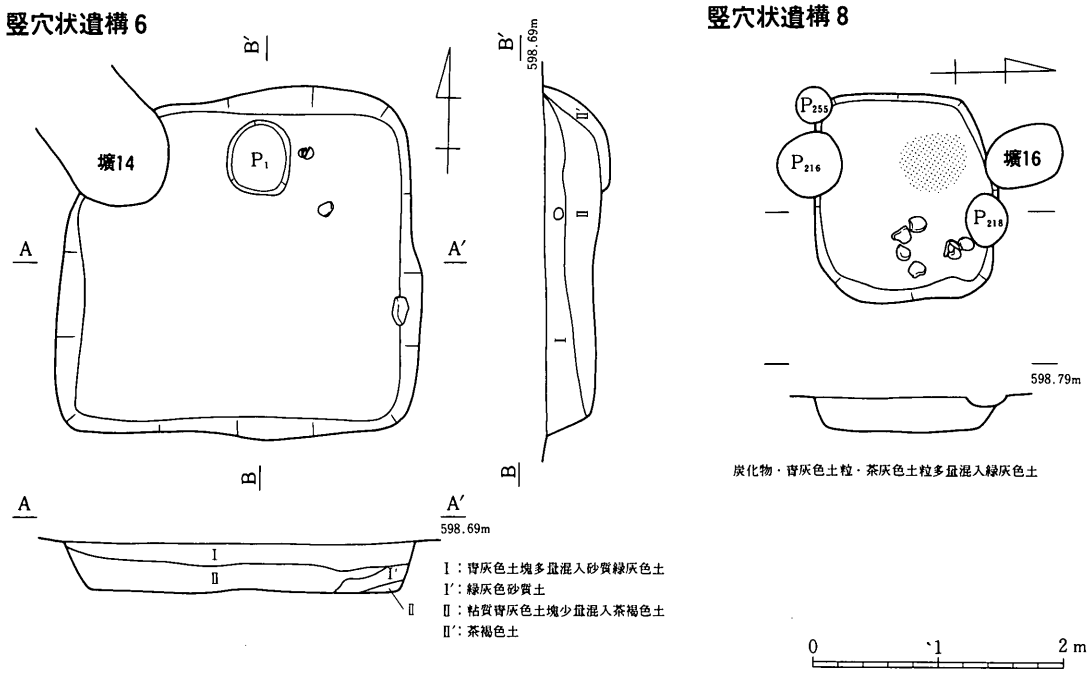
11　諏訪東遺跡調査会　1985　『諏訪東遺跡』

12　13～16世紀代の県内における中世集落、竪穴状遺構と掘立柱建物のあり方については、既に鋤柄俊夫氏が論考を試みている。

鋤柄俊夫　1986　「長野県の中世集落遺跡について」『長野県考古学会誌　50号』


A
A′
B
B′
C
C′
598.59m
貼床
Ⅰ：茶褐色土粒・青灰色土粒多量混入緑灰色土
Ⅱ：緑灰色土粒・木炭粒多量混入茶灰色土
Ⅱ′：礫（φ4～20cm）多量混入茶灰色土
Ⅱ″：焼土粒多量混入茶灰色土
Ⅲ：炭化物・焼土粒多量混入灰色粘質砂層
Ⅳ：灰色土塊・炭化材・炭化物多量混入緑灰色土
Ⅴ：緑灰色砂質土
Ⅵ：茶灰色土
Ⅶ：灰色土
Ⅶ′：炭化物（米等）多量混入灰色土
Ⅷ：灰多量混入緑灰色粘質砂層
Ⅸ：緑灰色土
Ⅹ：暗黄灰色砂質土
上層礫
中層礫
0
1
2 m

第57図　竪穴状遺構5



第58図　竪穴状遺構6・8

表13　竪穴状遺構一覧表

番号	平面形	規模（cm） 長径×短径×深さ	長軸方向	遺物	備考
1	不整長方形	(364)×278×74	N－2°－W	土器・鉄器・石器・古銭	北側未掘。竪2を切る。ピット2個伴う。
2	方形	(175)×168×75	N－63°－W	土器・鉄器	土壙5を切り竪1に切られる。ピット1個伴う。
3	長方形	328×192×45	N－88°－W	石器	
4	長方形	343×256×115	N－5°－E	土器・獣骨・木片・アスファルト塊	炉を有する。床大変堅い。ピット1個伴う。
5	方形	(325)×(237)×108	N－8°－E	土器・石器・炭化米	一部未掘。南壁中央張り出し。炭化米層がある。
6	方形	292×276×52	N－88°－E	土器	土壙14に切られる。ピット1個伴う。
8	長方形	165×140×29	N－90°－W		西北部に灰。土壙16、ピット3個に切られる。

※遺物欄の土器（陶磁器を含む）・鉄器・石器・古銭は図にあるもの

2）池状遺構

調査区東端より検出された本址は、当初竪穴状遺構として調査を進めたが、その内部構造が露呈するに及んで池状の遺構として扱うべきものであることが判明した。

他遺構との重複関係はないが、東側で導水部を介して溝（区画溝）と連結しており、一体となるものと考えられる。

主体部は東北部が未調査のため全形は不明だが、調査部分よりおおよその推定が可能である。平面形態は六角形ないし不正円形を呈し、南北長552cm、東西長526cmを測る。平面形が六角形とすれば、一辺の長さは約260cmとなろう。

覆土は３層からなり、平行に堆積している。いずれの覆土も粒子が均一であり、第III層は粘土層である。この様な状況は滞水中での堆積を示すものと受けとれ、本址を池状遺構とする傍証となろう。なお導水部の堆積も同様であり、溝、主体部との切合いは全く見られない。

遺構は二段に掘り込まれる。上段はゆるく中央に向って傾斜し、検出面からの深さ45cm前後を計測する。下段はすり鉢状に傾斜して掘り込まれ、最深部で深さ115cmを測る。上下段の底面は鉄分が沈澱し、非常に堅くしまっている。

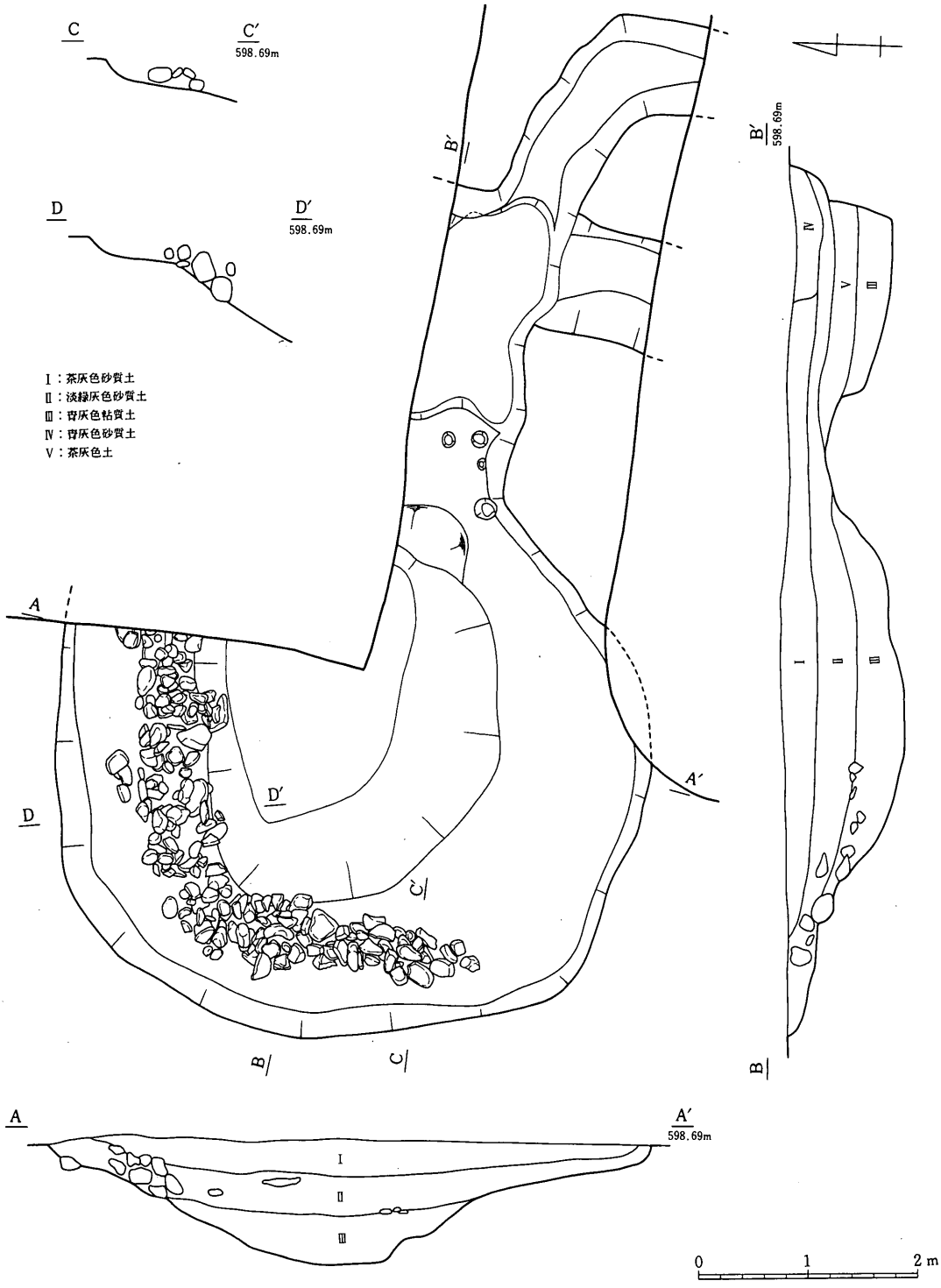
上段北半部には、下段の掘り込みに沿って礫堤状の石積が構築されている。石積は幅55cm前後を測り北東部でＬ字形に屈折、東側調査区外に延びている。南側は石積は見られないが、石組先端の状況や、内部に流れ込んでいる礫のあり方から見てもともと存在していなかったものと推察される。石材は角礫・円礫や石臼の破損品を用い、数段に積まれていたものと思われるが、上部は第IV層上に崩落し、基底部２～３段、高さ45cm前後を残すのみである。

導水部は北壁を未調査のため幅は不明だが１ｍ弱と考えられよう。深さは23cmで、溝底面及び主体部上段底面とほぼ同レベルである。溝との結合部は長軸長176cmの長方形に掘り込まれており、集水槽的な機能をなしたものと考えられる。掘り込みの東側には径10～18cmの円形ピットが南壁に沿って検出された。深さは10～20cmを計測する。

この他の施設として、溝および導水部の交点より一坦東にのび、曲折して溝と平行に走る別の溝状遺構が検出されている。幅80cm内外、深さ25cm程を測り、これも溝、池状遺構と同時存在するものと考えられる。

遺物は石積に使用された石臼、茶臼の他、覆土中より内耳土器、鉄釉陶器の破片、不明鉄製品が出土しているが石臼を除いてその出土量は少ない。

本址は方形区画の南東隅に位置し、竪穴状遺構６に近接している。いかなる機能をなしていたか類例もなく不明であるが、取水場的な用途もその機能の１つとして想定できよう。


C
C′
598.69m
D
D′
598.69m
Ⅰ：茶灰色砂質土
Ⅱ：淡緑灰色砂質土
Ⅲ：青灰色粘質土
Ⅳ：青灰色砂質土
Ⅴ：茶灰色土
A
A′
B
B′
598.69m
A
A′
598.69m
0
1
2 m

第59図　池状遺構

第60図　池状遺構遺物出土状況

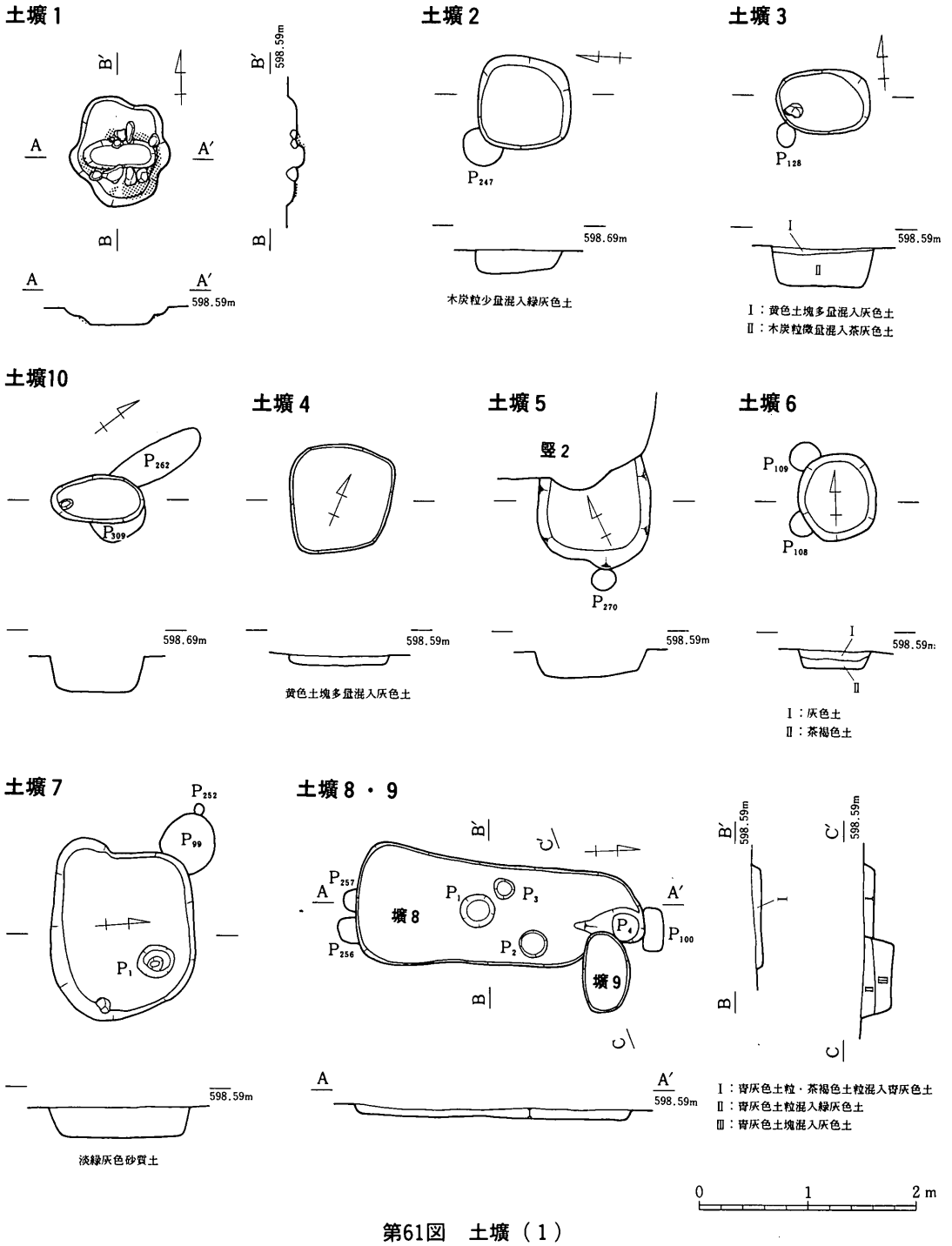
3）土壙

土壙の中にはピットまたは竪穴状遺構として分類可能なものもあったが、これらを含め総数16基を検出した。以下概要を簡単にふれてみたい。

1は火葬墓である。これのみが方形にめぐる溝の外側に位置していた。概形は南北に長く東西辺の中央部が突出する。底部は細い溝が作られ溝周囲に拳大以上の石が8個配置される。中央底面に被熱による焼土が見られ下層に灰と骨等があった。覆土全体には木炭がつまっていた。なお、土器、銭等は得られなかった。典型的な中世のものである。残りの土壙をその形状・覆土・遺物等によって分けてみる。これらの位置は、ピットや竪穴状遺構が密集する調査区中央東北寄りに集まっている。平面形は円形および楕円形の2つに分けられる。断面形は、壁がなだらかに落ち込み床面は起伏のないものが多い。ただ16は2段底になっており、小形の規模であることを考え合わせれば下段は柱の痕跡と思われる。17は袋状をなし、底部はわずかに凹みをなす。ほとんどの覆土が灰色を基調とする青味が強いものである。13では覆土中層から長さ40cm、巾3cm程の炭化材が出土した。礫の混入が見られたのは16のみで、上層に拳大程の礫が一面につまっていた。土壙内にピットを検出したのは7・8だけであるが、遺構との関係は不明である。遺物をみると全体で土器類は若干量の内耳片を出土したのみである。これ以外では2より古銭、7から石製の鉢と思われるもの、8より

表14　　**土壙一覧表**

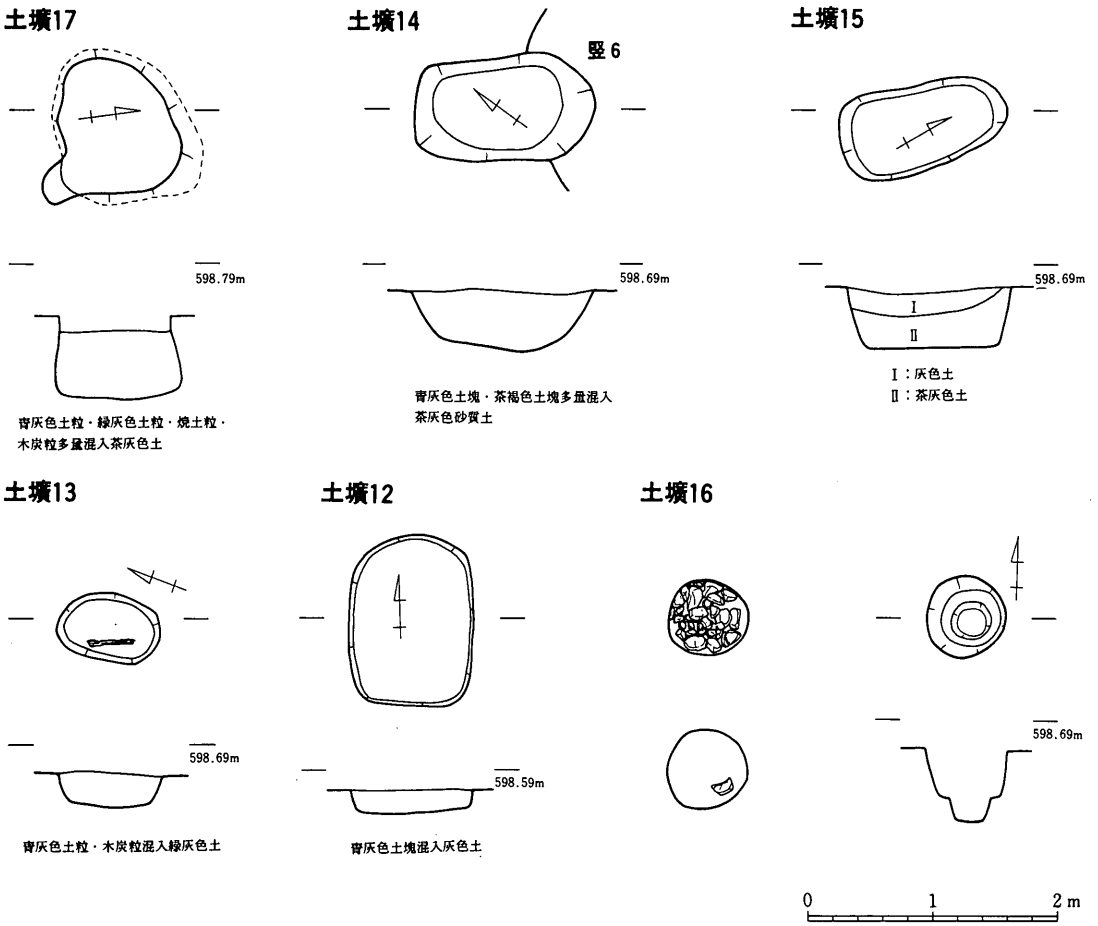
番号	平面形	規模(cm) 長径×短径×深さ	長軸方向	遺物	備考
1	不整形	100×142×16	N－0°		火葬墓
2	方形	83×83×12	N－3.5°－W	古銭	P247を切る
3	不整楕円形	86×57×34	N－85°－W		P128を切る
4	不整方形	105×95×9	N－62.5°－W		
5	方形	?			竪2に切られP270を切る
6	円形	79×70×16	N－0°		P108・109を切る
7	不整長方形	167×131×28	N－5°－E	石器	P99を切る
8	不整長方形	264×112×9	N－4.5°－E	石器	土壙9に切られP100・256・257を切る
9	楕円形	72×43×28	N－71.5°－E		土壙8を切る
10	不整楕円形	62×55×?	N－36°－E		P262・309を切る
11	欠番				
12	長方形	134×100×21	N－6°－E		
13	不整楕円形	78×64×26	N－4°－E		炭化材は中層に
14	不整長方形	120×101×45	N－35.5°－W		竪6を切る
15	不整楕円形	130×124×45	N－18°－E		
16	不整楕円形	58×48×9	N－15.5°－W	石器	石充塡　二段底
17	不整円形	119×112×52	N－8°－E	鉄器	



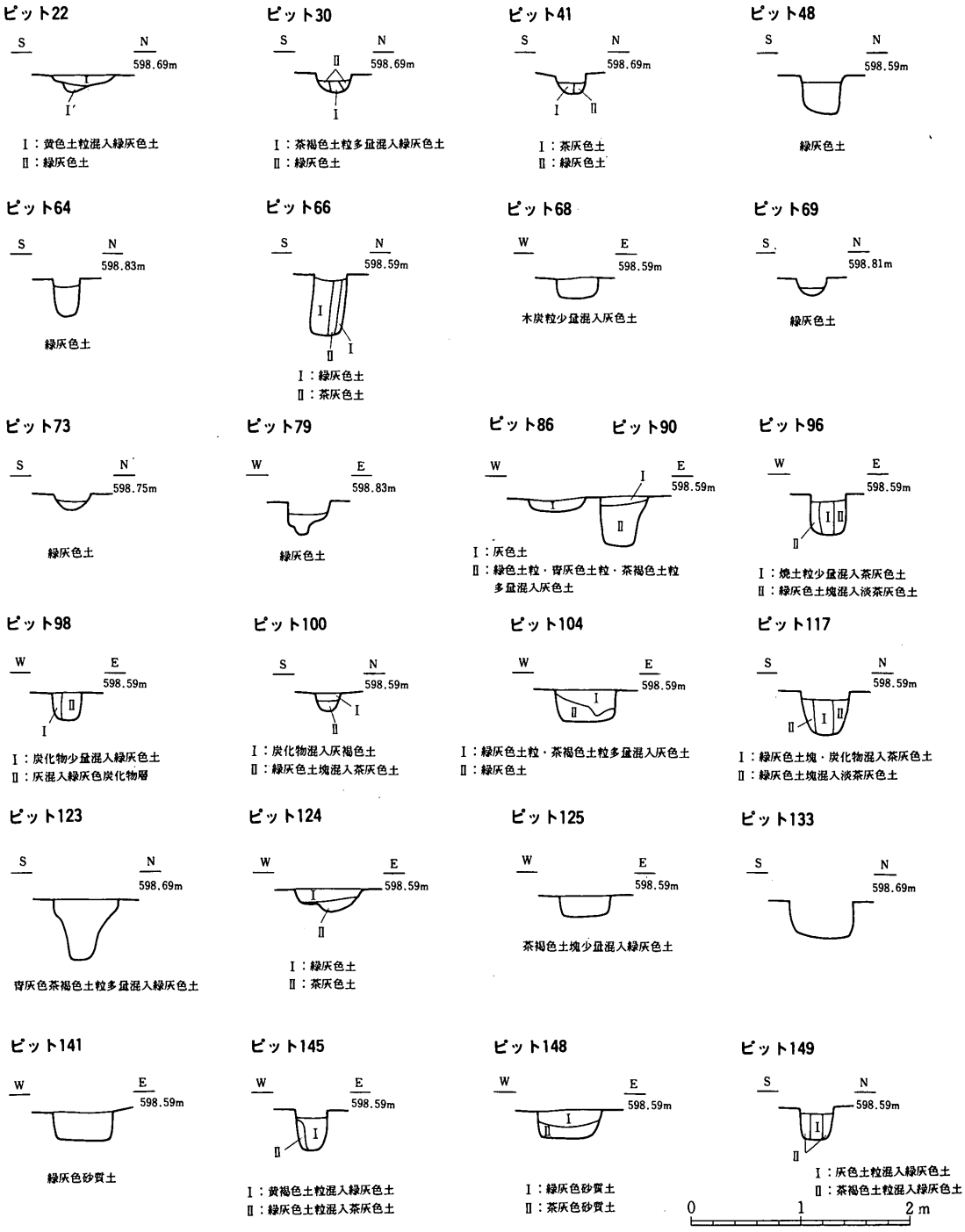
第61図　土壙（1）

ベニガラの付着した小さい石、16からは石臼、17より釘が出土した。切り合いは、大部分がピットまたは竪穴状遺構と前後関係にある。

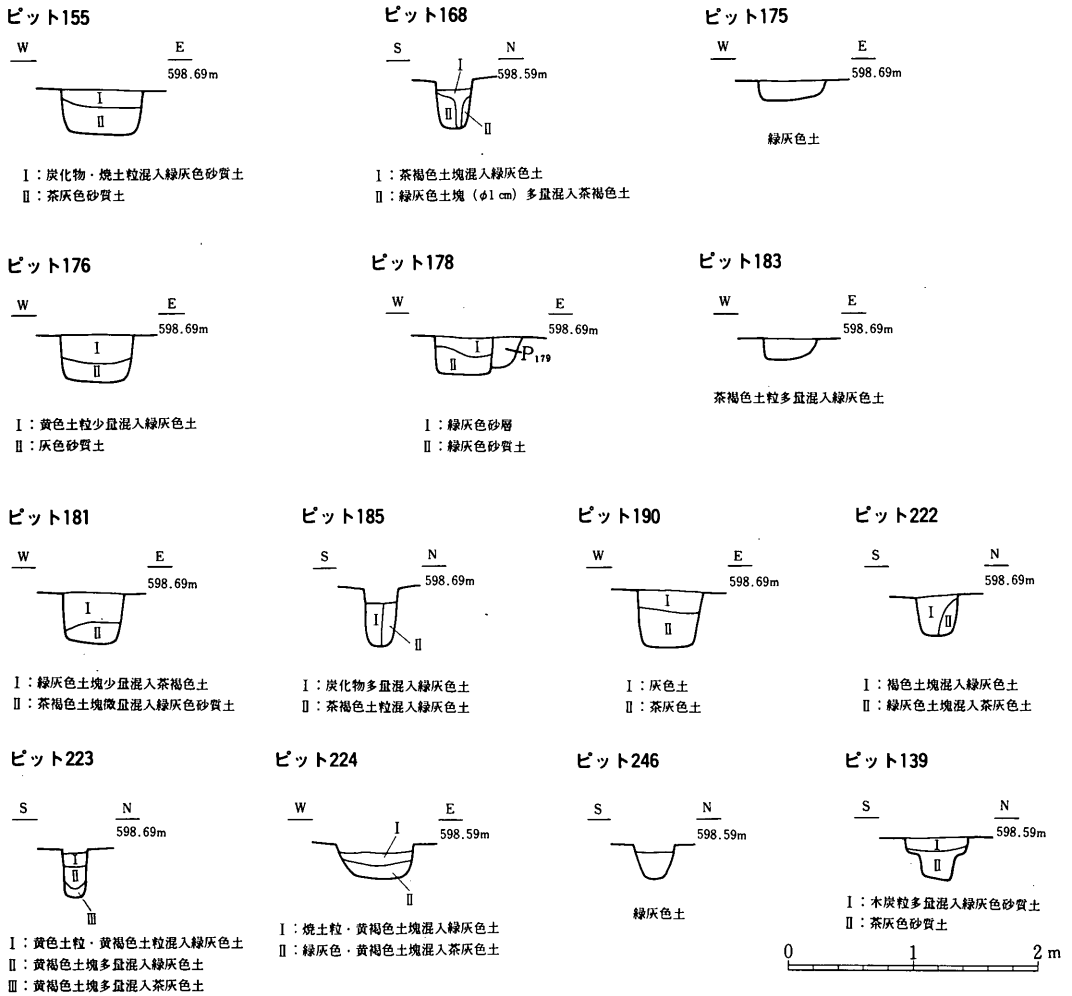
遺物・覆土・切り合いより土壙の時期は中世に属するものと考える。


土壙17
598.79m
青灰色土粒・緑灰色土粒・焼土粒・
木炭粒多量混入茶灰色土
土壙14
竪6
598.69m
青灰色土塊・茶褐色土塊多量混入
茶灰色砂質土
土壙15
598.69m
Ⅰ
Ⅱ
Ⅰ：灰色土
Ⅱ：茶灰色土
土壙13
598.69m
青灰色土粒・木炭粒混入緑灰色土
土壙12
598.59m
青灰色土塊混入灰色土
土壙16
598.69m
0
1
2 m

第62図　土壙（2）


ピット22
S
N
598.69m
Ⅰ：黄色土粒混入緑灰色土
Ⅱ：緑灰色土
ピット30
S
N
598.69m
Ⅰ：茶褐色土粒多量混入緑灰色土
Ⅱ：緑灰色土
ピット41
S
N
598.69m
Ⅰ：茶灰色土
Ⅱ：緑灰色土
ピット48
S
N
598.59m
緑灰色土
ピット64
S
N
598.83m
緑灰色土
ピット66
S
N
598.59m
Ⅰ：緑灰色土
Ⅱ：茶灰色土
ピット68
W
E
598.59m
木炭粒少量混入灰色土
ピット69
S
N
598.81m
緑灰色土
ピット73
S
N
598.75m
緑灰色土
ピット79
W
E
598.83m
緑灰色土
ピット86
ピット90
W
E
598.59m
Ⅰ：灰色土
Ⅱ：緑色土粒・青灰色土粒・茶褐色土粒
多量混入灰色土
ピット96
W
E
598.59m
Ⅰ：焼土粒少量混入茶灰色土
Ⅱ：緑灰色土塊混入淡茶灰色土
ピット98
W
E
598.59m
Ⅰ：炭化物少量混入緑灰色土
Ⅱ：灰混入緑灰色炭化物層
ピット100
S
N
598.59m
Ⅰ：炭化物混入灰褐色土
Ⅱ：緑灰色土塊混入茶灰色土
ピット104
W
E
598.59m
Ⅰ：緑灰色土粒・茶褐色土粒多量混入灰色土
Ⅱ：緑灰色土
ピット117
S
N
598.59m
Ⅰ：緑灰色土塊・炭化物混入茶灰色土
Ⅱ：緑灰色土塊混入淡茶灰色土
ピット123
S
N
598.69m
青灰色茶褐色土粒多量混入緑灰色土
ピット124
W
E
598.59m
Ⅰ：緑灰色土
Ⅱ：茶灰色土
ピット125
W
E
598.59m
茶褐色土塊少量混入緑灰色土
ピット133
S
N
598.69m
ピット141
W
E
598.59m
緑灰色砂質土
ピット145
W
E
598.59m
Ⅰ：黄褐色土粒混入緑灰色土
Ⅱ：緑灰色土粒混入茶灰色土
ピット148
W
E
598.59m
Ⅰ：緑灰色砂質土
Ⅱ：茶灰色砂質土
ピット149
S
N
598.59m
Ⅰ：灰色土粒混入緑灰色土
Ⅱ：茶褐色土粒混入緑灰色土
0
1
2 m

第63図　ピット（1）



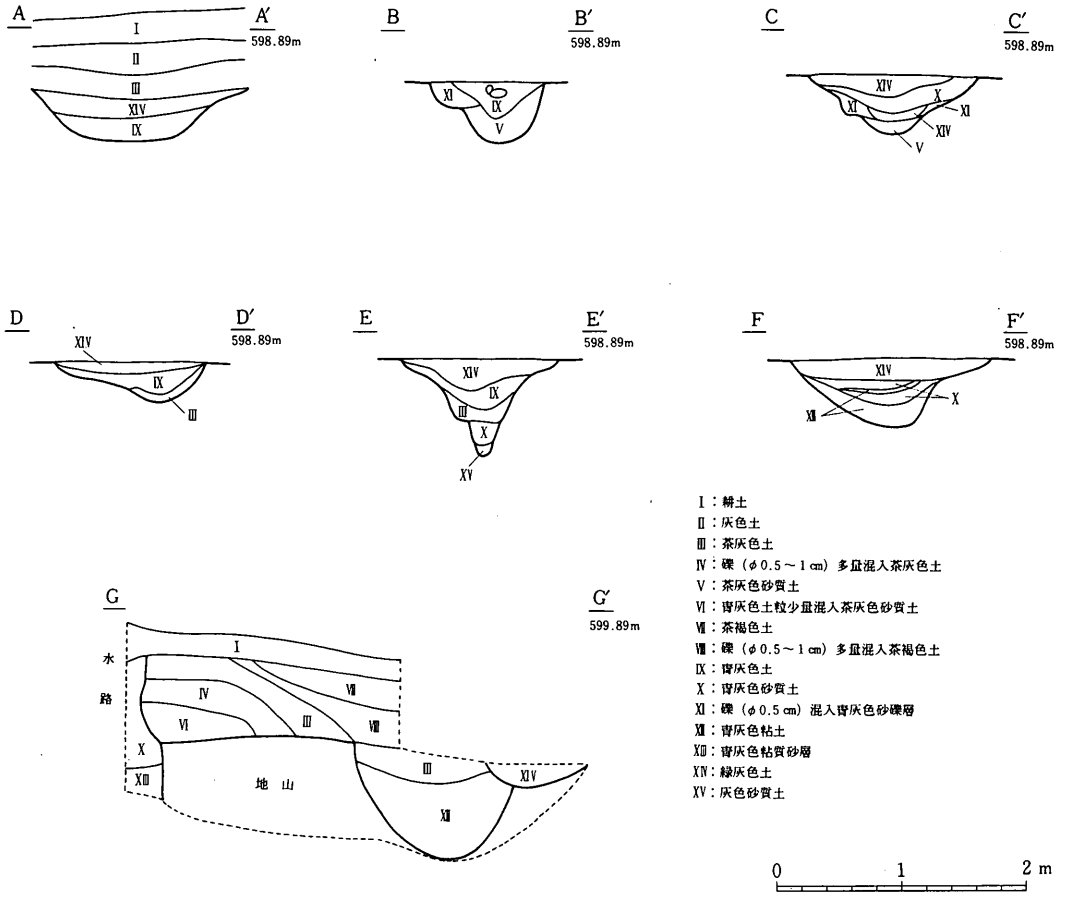
第64図　ピット（2）

4）ピット

これらは総数310基程あり、特に竪穴状遺構1、同3、同8の周囲に集中している。円形を呈し大形、小形のものが目につくがどちらも配置状況に規則性は見られない。大、小でやや異なった点に気がついたのでここに整理してみたい。なお付図をつけたので参考にされたい。

大形のものは直径50～60cm程で、深さも25～50cmと深く（ピットNo.104、123、133、141、148…など）堆積状況が上下二層となっている（ピットNo.104、124、139、155、176、178、181、190、224）ものが多い。小形のものは、直径20～40cm（ピットNo.省略）で、やや大きめのピットの中に柱痕跡を認めるものがあり（ピットNo.30、66、96、117、149、168）、又、竪穴状遺構1の南西に柵列のように並ぶようにも見えるのだが、切り合いと、間隔があり組合わせとしてとらえきれない。

ピットの中から得られた遺物は僅かで、内耳鍋の破片が数点である。概してピット間での切り合いも多いのであるが、覆土の色相などからみて時間差はほとんどなく又、北辺の溝までこの状況を考えると短期間の間にいくつも柵や、小屋を建て直したりした事がうかがえる。



第65図　溝　址

5）溝址

溝は方形に巡る1条を検出した。検出面は他の遺構と同様である。トレンチを入れてほぼ全体形を予想しうる事ができた。規模は東西31.0m、南北38.5mで、北辺内側に1条が、又東辺外側に池状遺構から1条が南へ分岐する。溝巾は1.0～1.6mで、検出面から溝底までの深さは30～80cm、断面形は半円形を呈する。溝底は鉄分が沈澱して固くなっている。溝底についてレベルを見ると西辺が高く、次いで南辺、そして東辺へ徐々に低くなり、東、西の比高差は約20cmである。又、西辺の北側部分（E－E′）は深くえぐられ、下部に礫層が残っている。現在、北には西から東へ堂沢が流れており、当時もこの部分で取水していた事が分かる。又G－G′には、現水路（堂沢）と北辺外溝との間に堆積土が認められる。沢の水位上昇による自然堆積か、人為的な防水の為の土手の為かは不明である。

3．遺物

1）陶磁器・土器

本遺跡の土器や陶磁器は主に竪穴状遺構から出土し、溝址や土壙などにもみられる。しかしその総数は決して多いものではなく、1個体の残存率も悪い。量的には内耳土器・土師質土器の皿がみられ、それらと大窯製品が遺構内で伴出しており、時期的には16世紀前半くらいでおさえることができよう。そのほかこれらの一群より先行する中世のものとしては、竪穴状遺構2から無文の青磁盤が1点、遺構外から口縁に雷文をもつ碗が1点出土している。中世の遺物とともに古代の灰釉陶器や、土師器、また18世紀以降の陶磁器が混入して存在するが、ここで合せて報告していくことにする。

古代のものとして、灰釉陶器碗と土師器杯がある。11は高台が低く、端部にやや丸みがある。釉は漬掛けで、底内面は回転ヘラ削りがみられる。大原2号窯式に比定される。12は深碗で、高台は細く高い。釉は漬掛けで、底内面には回転糸切りが残されており、虎渓山1号窯式に比定される。8は虎渓山期に伴なってみられる土師器杯で口径11.0cmを計る。

中世のものとしては先に記したように内耳土器、土師質土器の皿、大窯製品（天目茶碗・丸碗・丸皿・端反皿）、青磁盤・碗が出土し、このほかには4に図示した不明の陶器があるのみである。

13～16は内耳土器である。図示できなかったものも含めて、口辺部内側の整形技法がいずれも同一なため、時期的にもほぼ近いものである。その整形技法とは、口辺部を通常回転台によって横ナデを行なうが、特に内側には3か所を強くナデ締め、3段のくぼみを形成させているものである。県内の類例より15世紀後葉から16世紀中葉の間で考えることができる。

6・7・9・10は土師質土器の皿で、いずれも右回転によるロクロを使用し、整形痕が内外面に明瞭に残る。底外面には糸切り痕が観察され、底内面と体部の立ち上がりの付近に一周のナデを入れてやや凹みをもたせているのが特徴である。また法量は大小の2種類があり、それぞれはほぼ同様の法量をもつ。口径：底径は、大小の区別なく1：0.6の比となる。これはほぼ同一時期であることを示している。6はススの付着が顕著であり、燈明皿としての使用が考えられる。

大窯製品は、1が天目茶碗で、体部はほぼ直線的に開き、口唇部は直立して端部が外反する。茶色を呈する鉄釉を掛け、高台脇にはサビ釉が施されている。サビ釉部分では回転ヘラ削りが観察される。大窯期の第3段階あるいはその前段階くらいに比定されよう。竪穴状遺構7からの出土で、土師質土器の皿（9）、内耳土器、灰釉陶器碗（11）と伴出する。

2はヒダ皿で、1と同様に茶色を呈する鉄釉を掛けているが、光沢がある点で相違する。底内面には輪トチの跡が残っている。ヒダの部分は釉ムラを意識的に付け、文様を強調している。底外面はいわゆる内そぎ高台で、前記天目茶碗と同じ頃の所産と考えられる。

このほか大窯製品で図示できないものに、灰釉の掛かった丸碗・丸皿小片と、底内面に印花文を押印した端反皿がみられる。これらは遺構外の出土である。端反皿は大窯期でも古く第1段階に、

そのほかは1の天目茶碗と同じ頃のものであろう。

4は陶器であるが、器種などは不明である。古瀬戸の香炉II類の最末期の様相か、大窯期に属す香炉かとも考えたが、器高が低く、また無釉であり、類例を見出すことができない。あるいは近世以降の所産であろうか。

輸入陶磁器としては最初に触れた2点のみで、図示できるものはない。青磁の盤としたものは、時期的には龍泉窯系青磁碗Ⅰ－5類もしくはIII－2類に分類される鎬蓮弁文碗の時期（13世紀中葉から14世紀前半）と伴うものと考えられるが、小片のため判断は難しい。また雷文施文のものは14世紀後葉から15世紀前半の間で生産されたものである。

次に近世のものとして、3は肥前系磁器の輪はげ皿で、内面見込み付近の釉を一周フキ取り、削り出された高台内・底内面は露胎としている。5は瀬戸・美濃系陶器の丸碗底部で、内面には鉄釉が掛けられ、底部は削り出し輪高台となっている。同様の破片が2点みられる。3・5ともに18世紀代のものである。

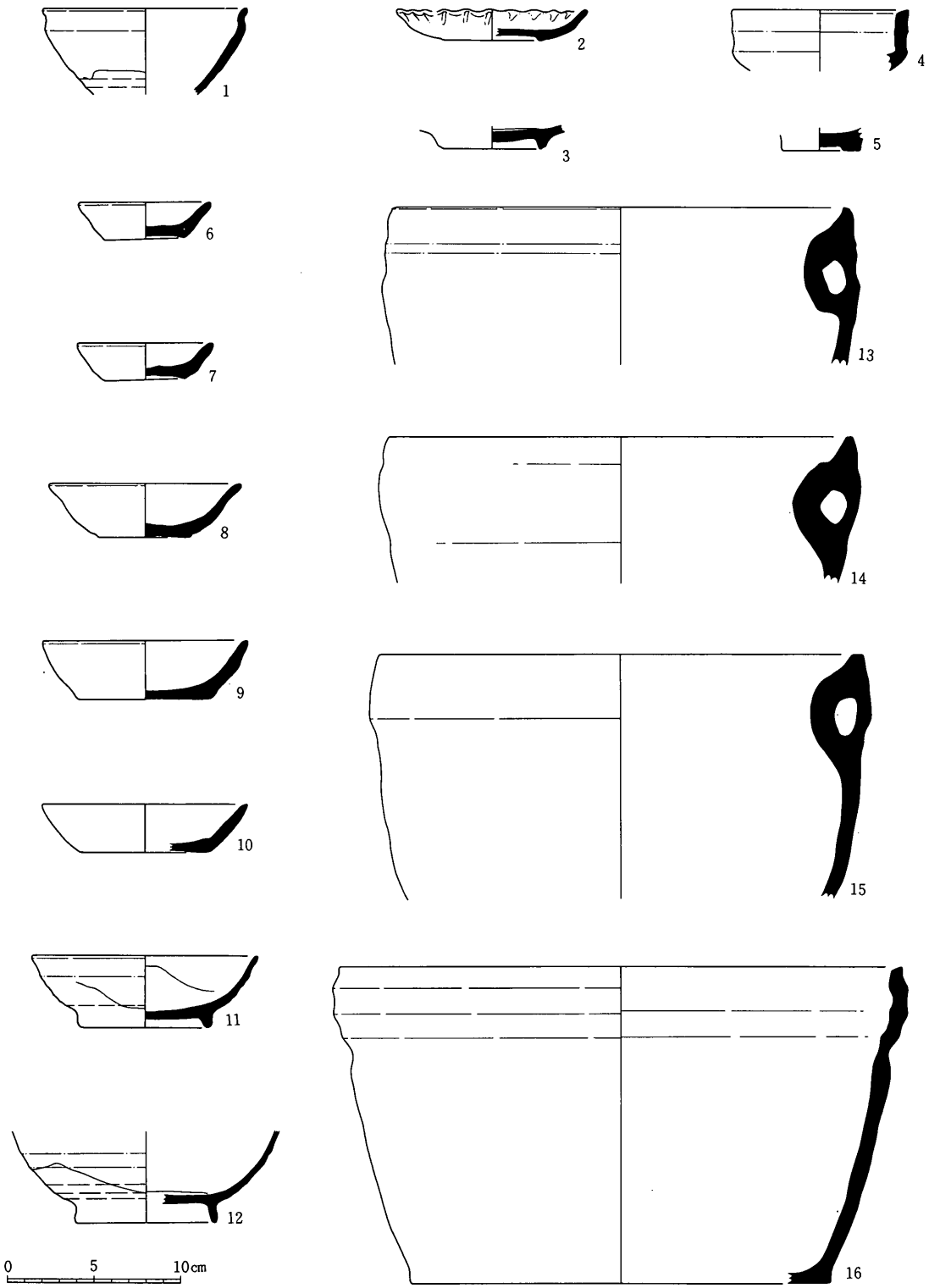
さらに時期の下るものとして、19世紀中葉から後葉に位置付けられる瀬戸・美濃系磁器碗がある。だみ筆によって文様が描かかれている。

このほかに、不明磁器として透明感のある白色の釉の掛かった白磁皿がある。貫入がみられ、素地は完全な磁器で緻密であり、硬質である。

以上のように、古代から近世（あるいは近代）までの土器・陶磁器をみてきた。中心となる中世所産のものは、ある一定の時間内におさまるものであり、その前後の時期の遺物がないことは興味ある内容といえる。

表15　陶磁器・土器一覧表

No.	種類	器種	遺構	口径	器高	底径
1	大窯製陶器	天目茶碗	竪穴7	11.6		
2	大窯製陶器	ヒダ皿	竪穴2			
3	肥前系磁器	輪はげ皿	竪穴2			5.7
4	?	香炉?	竪穴1	10.2		
5	瀬戸美濃系陶器	丸碗	竪穴1			4.5
6	土師質土器	皿	竪穴4	7.5	2.1	4.7
7	土師質土器	皿	竪穴6	7.8	2.1	4.7
8	土師器	杯		11.0	3.1	5.4
9	土師質土器	皿	竪穴7	11.8	3.35	7.6
10	土師質土器	皿	溝	11.8	2.8	7.6
11	灰釉陶器	碗	竪穴7	13.0	4.1	7.4
12	灰釉陶器	深碗	溝			
13	土器	内耳鍋	竪穴1	26.4		
14	土器	内耳鍋	Pit	26.8		
15	土器	内耳鍋	溝	28.0		
16	土器	内耳鍋	溝	32.5	18.2	24.4



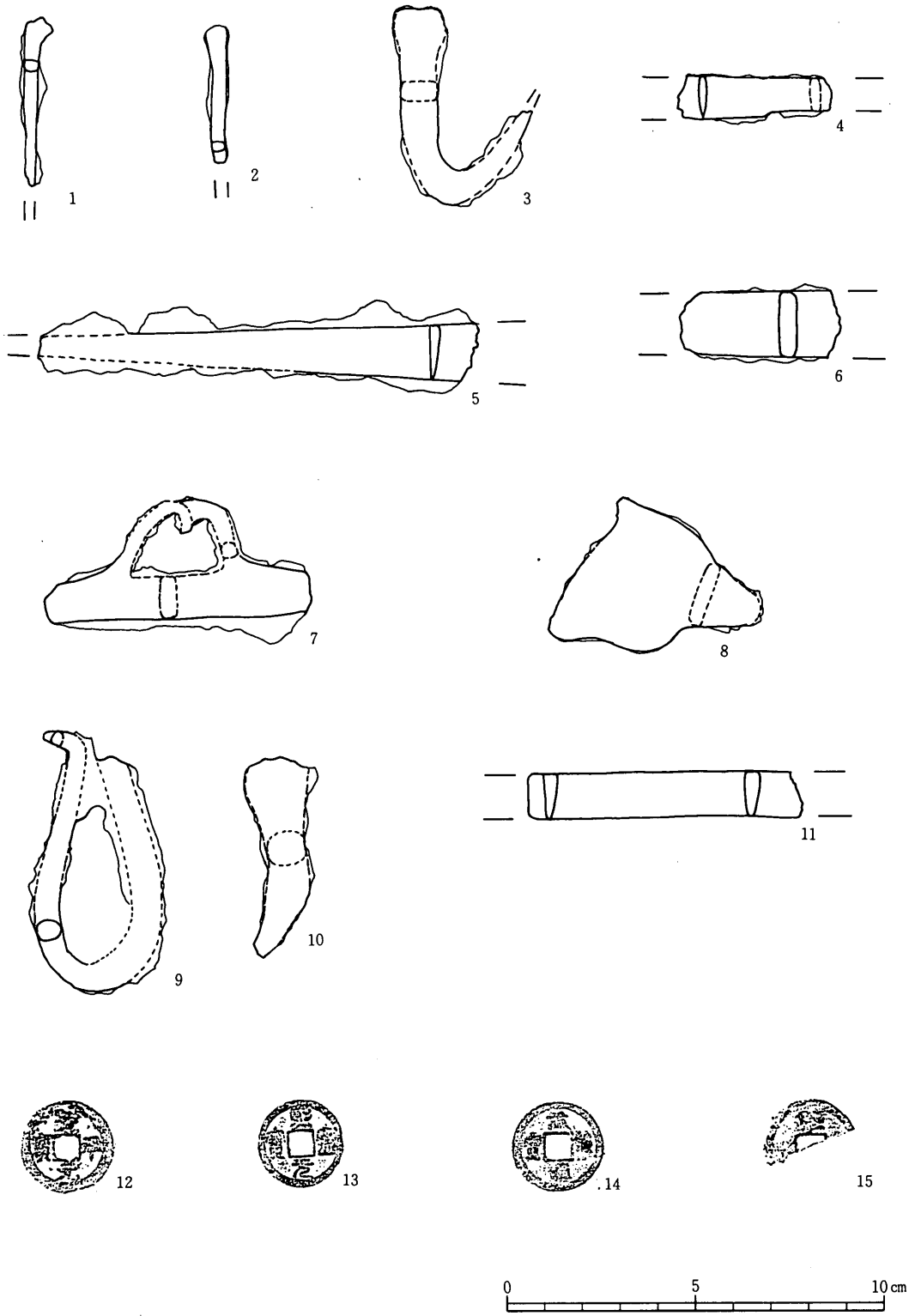
第66図　陶磁器・土器

2）鉄器・銅製品・古銭

11点と古銭4点を図示した。1・2は釘で1は完形で断面が四角を呈している。3はやや太いが釣り針と思われものである。上端は膨らみ断面は長方形、先端近くはほぼ円形を呈する。4～6は刀子で断面は鬆が入っている。7は片方に環状を有するもので、形態から見ると火打ち金具に類似している。8は三角形状の板ともいえる形状で器種不明である。9は環状で一方に角状の曲がりがある。10は品種・形状全く不明である。11は銅製品で刀子の柄の部分である。文様等は見当らない。古銭は12は咸平元宝、13は熙寧元宝、14は元符通宝、15は半欠のため不明。書体は12が楷書、13・14は隷書である。これらの出土地点別では竪穴1では1・9・10・11、古銭12・13で、竪穴2では4・5・7等が出ている。

表16　　鉄器・銅製品・古銭一覧表

No.	出土遺構	種別	寸法（mm）			重量	備考
			長さ	巾	厚さ	（g）	
1	竪穴状遺構1	釘	44	7	3	12.9	
2	土　　壙17	〃	36	5.5	2.5	2.3	
3	P　227	釣　針	52	14	5	12.9	
4	竪穴状遺構2	刀　子	40	11	3	4.3	
5	〃	〃	116	15	2.5	32.6	
6	溝　址　1	〃	42	17.5	5	2.5	
7	竪穴状遺構2	不　明	71	28	4.5	25.6	
8	竪穴状遺構7	〃	54.5	39	4	25.7	
9	竪穴状遺構1	環状鉄器	68	9	5.5	31.6	
10	〃	不　明	52.5	16	9	13.8	
11	〃	柄	72.5	12	4.5	12.5	
12	〃	古　銭	直径（mm）　24			3.55	咸平元宝
13	〃	〃	23			1.90	熙寧元宝
14	土　　壙2	〃	24			2.96	元符通宝
15	P　272	〃	24			1.25	



第67図　鉄器・銅製品・古銭

3）石器

9種34点である。特徴的なものについて見ることとする。

1は川原に見られるごく普通の平たい小さな石であるが、全面に赤褐色のベニガラが付着し、よく見ると、平坦面には擦った痕跡が残り、この石を利用して酸化第二鉄を溶いたものと考える。

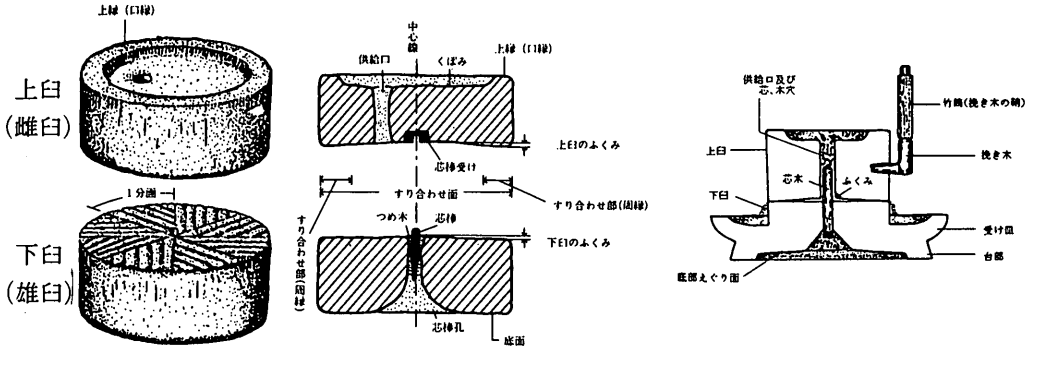
18はヒデ鉢である。内面は煤により黒変し、それは外部にまで広がっている。19は小片でよく分らないが石の器の高台の部分のように見える。加工の程度はすばらしく丁寧である。

凹石は、砂岩・安山岩製で、直径5～6cm、128gから直径20cm、55kgまで9点ある。凹部1ヶ（5点）2ヶ（3点）だが、20は計5ヶの凹部が見える。

22・23は、擂り鉢と、搗き臼である。広口の深い凹部を観察すると、22は内面が平滑化しており反対面は使用時に安定させる為か、浅い凹みを設けている。これらの事から本器は擂り鉢と判断した。23は前者より凹部広く、深いのであるが、内面は小さな起伏があり、コツコツとたたいたような感じで、この点凹石とよく似る。反対面は平坦になっているが前者に比べ不安定であり、作業時には横揺れを心配しなくてはならない。この為、こするより、上からたたく用途と考える。

今回数多いものは臼の類である。これらはすべて安山岩製で破損したものばかりである。茶臼は下臼2点と上臼1点である。26の上臼は表離2面に溝が切ってあるため、材料は少量ずつ中心へ入れて使用したのであろう。この片面と24のすり合わせ面は非常に滑らかとなっている。又、26のもう一方の面は上縁を故意に欠いた痕跡が見え、都合で新たに溝を切ったようである。粉挽き臼は、下臼1、上臼7点であるが、いずれもすり合わせ面はザラついて茶臼とは全く異なる。上臼で供給口、芯棒受けの大きさ、位置などが見えるものは、28～31、33の5点、又、挽手穴の見えるものが3点ある。その大きさは縦、横の長さは2.5～4.0cmであるが、深さにおいて29が1.3cm、30・32はそれぞれ4.5、5.0cmと違いが見えている。なお32はすり合わせ面に挽手穴が露出している。溝分割数で見ると8点中8分割が3点、6分割が2点、不明3点であった。ものくばりが明確に見えている1点が31である。

参考文献　『臼』　三輪茂雄　法政大学出版局



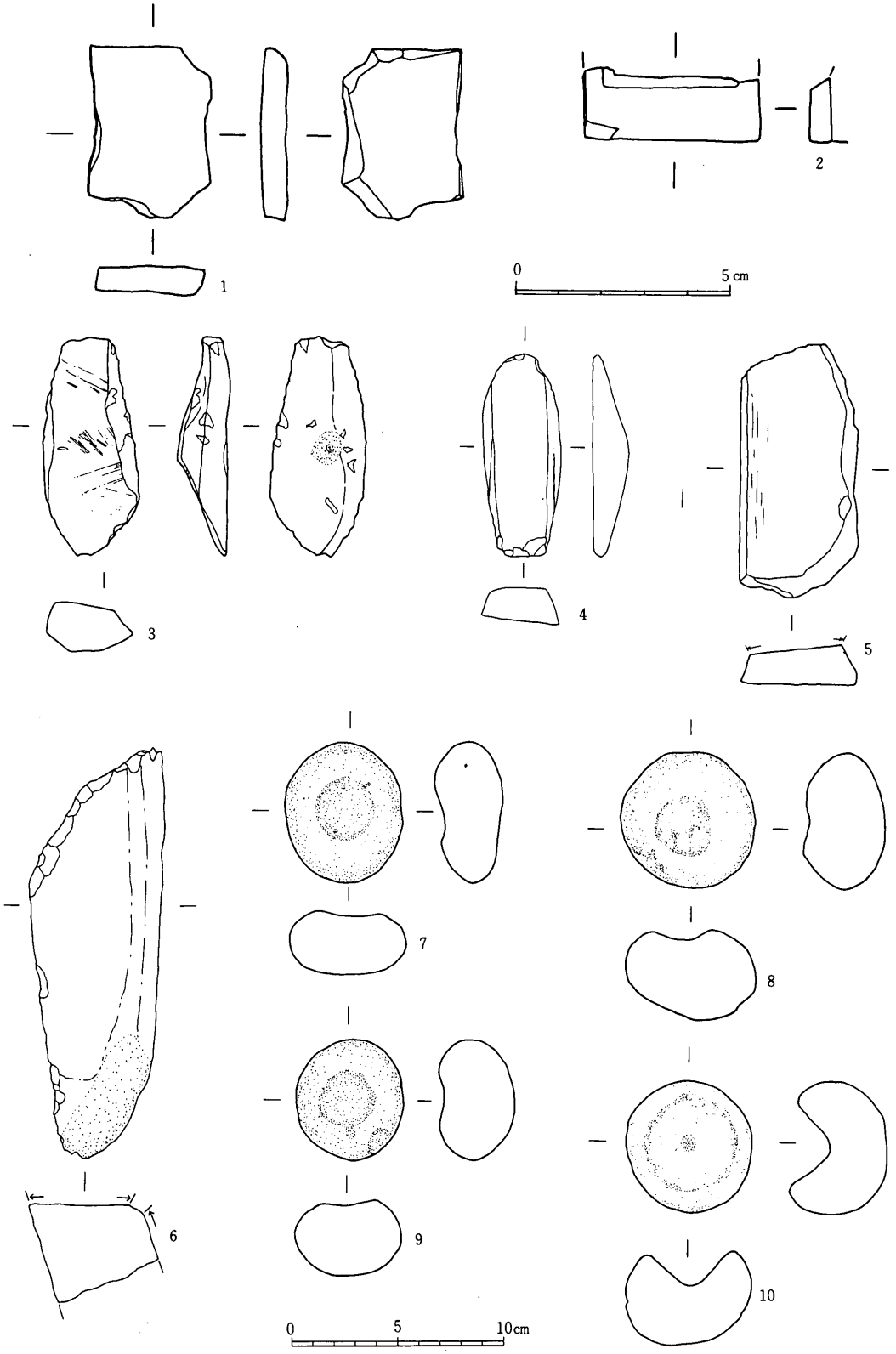
粉挽臼・茶臼各部の名称　三輪茂雄『臼』1978より転載

表17

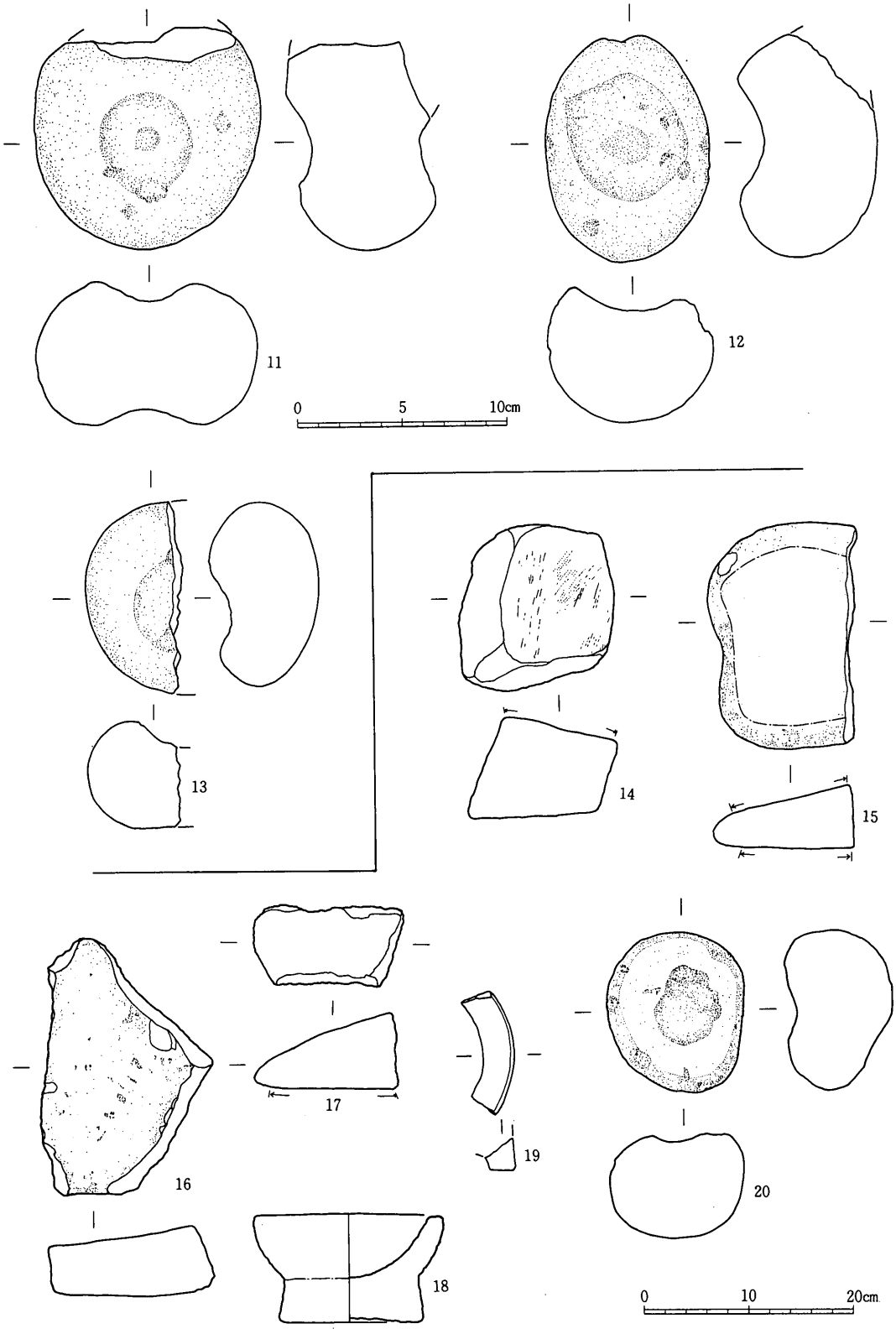
石器一覧表

図No.	品名	出土地	長さ (mm)	巾(直径) (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	石質	備考	
1	台石	土壙8	39	28	7	12.7	砂岩	全面ベニガラ付着	
2	硯	竪 1	(16)	41	(5)	6.4	粘板岩		
3	砥石	竪 1	111	42	23	93	粘土質岩	凹部あり	
4	〃	竪 3	95	37	16	67	〃		
5	〃	竪 5	116	56	19	198	花崗岩		
6	〃	排土中	174	63	(46)	663	砂岩		
7	凹石	竪 1	65	55	31	128	安山岩		
8	〃	竪 1	64	63	42	198	〃		
9	〃	竪 3	57	51	34	137	砂岩		
10	〃	池	62	60	52	172	安山岩		
11	〃	池	108	101	(72)	1,820	〃		
12	〃	竪 5	105	79	65	620	〃		
13	〃	池	(90)	(46)	52	253	〃		
14	砥石	池	154	148	96	3,250	砂岩		
15	〃	池	214	140	60	2,800	〃		
16	台石	池	245	157	63	3,150	安山岩		
17	〃	竪 5	143	77	75	933	〃	転用品か	
18	ヒデ鉢	土壙16	183	103		2,200	〃	竪5出土品と接合	
19	(鉢)	土壙7	118	33	29	96	〃	石の器の高台部分	
20	凹石	竪 5	155	130	96	2,800	〃		
21	〃	池	211	187	144	5,500	〃		
22	擂り鉢	竪 5	251	(249)	(157)	11,400	〃		
23	搗き臼	池		(252)	115	2,350	〃		
	↓	↓	復元直径	高さ	芯棒孔直径	↓	↓	溝分割数	
24	茶臼 下臼	竪 5	(360～70)	113	30	11,400	安山岩	8～(10)	竪7出土品と接合
25	〃 〃	池	(360)			283	〃		
26	〃 上臼	池	(200)	112		1,990	〃	8	挽手穴あり
27	石臼 下臼	竪 5	(310～20)	115		11,800	〃	8	
28	〃 上臼	竪 5	(260)	88		1,600	〃		“ものくばり”あろうか
29	〃	竪 5	(320)	98		4,100	〃	8	挽手穴あり
30	〃	池	(280～300)	104	20	4,700	〃	6	遺構内接合、挽手穴あり
31	〃	池	(320)	93		2,400	〃	8	“ものくばり”あり
32	〃	池	300以上	105		2,500	〃		挽手穴あり
33	〃	池	(300～310)	131		3,250	〃	6?	
34	〃	池	310以上	91		1,400	〃		

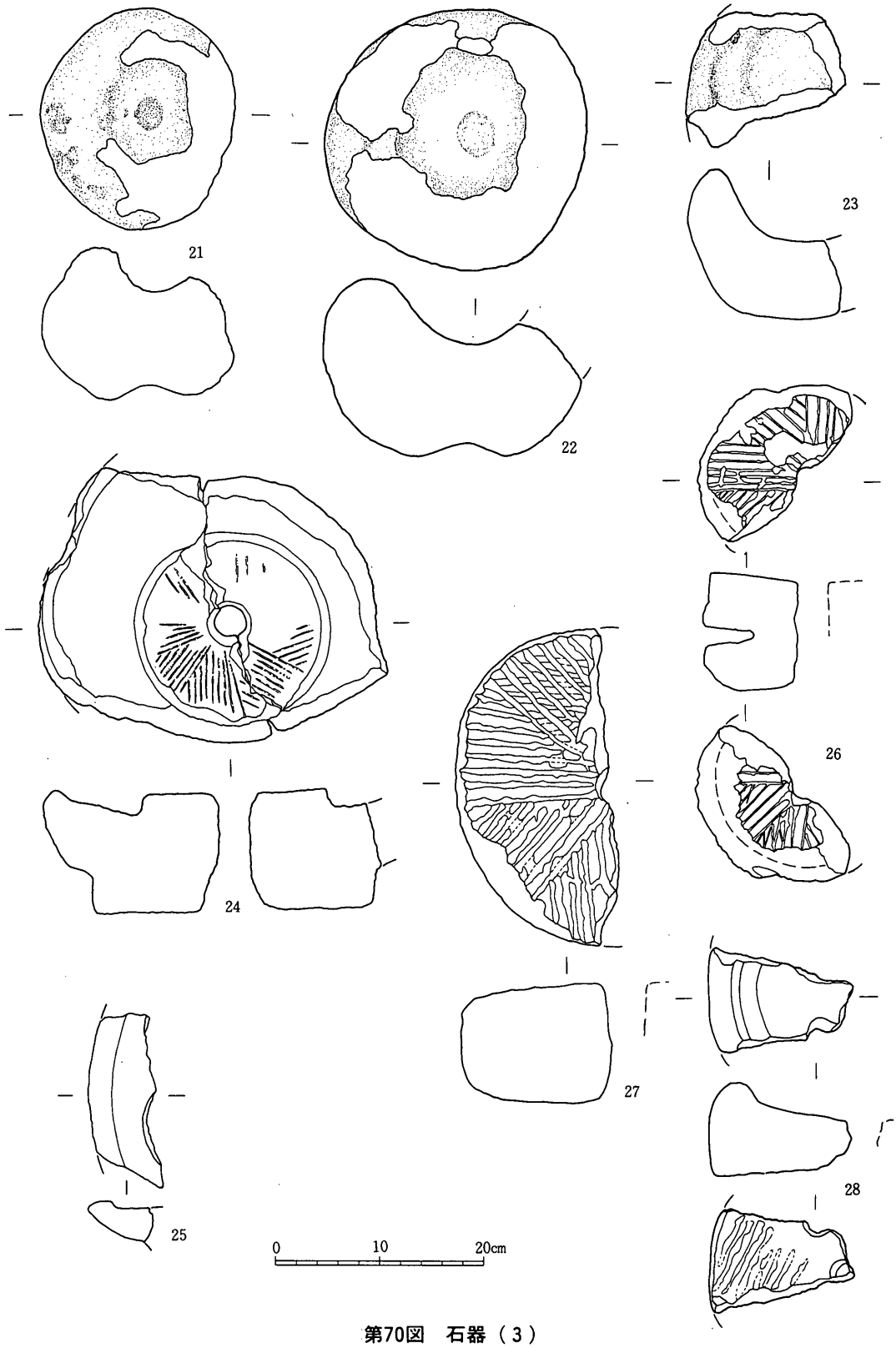
※池は池状遺構を示す。



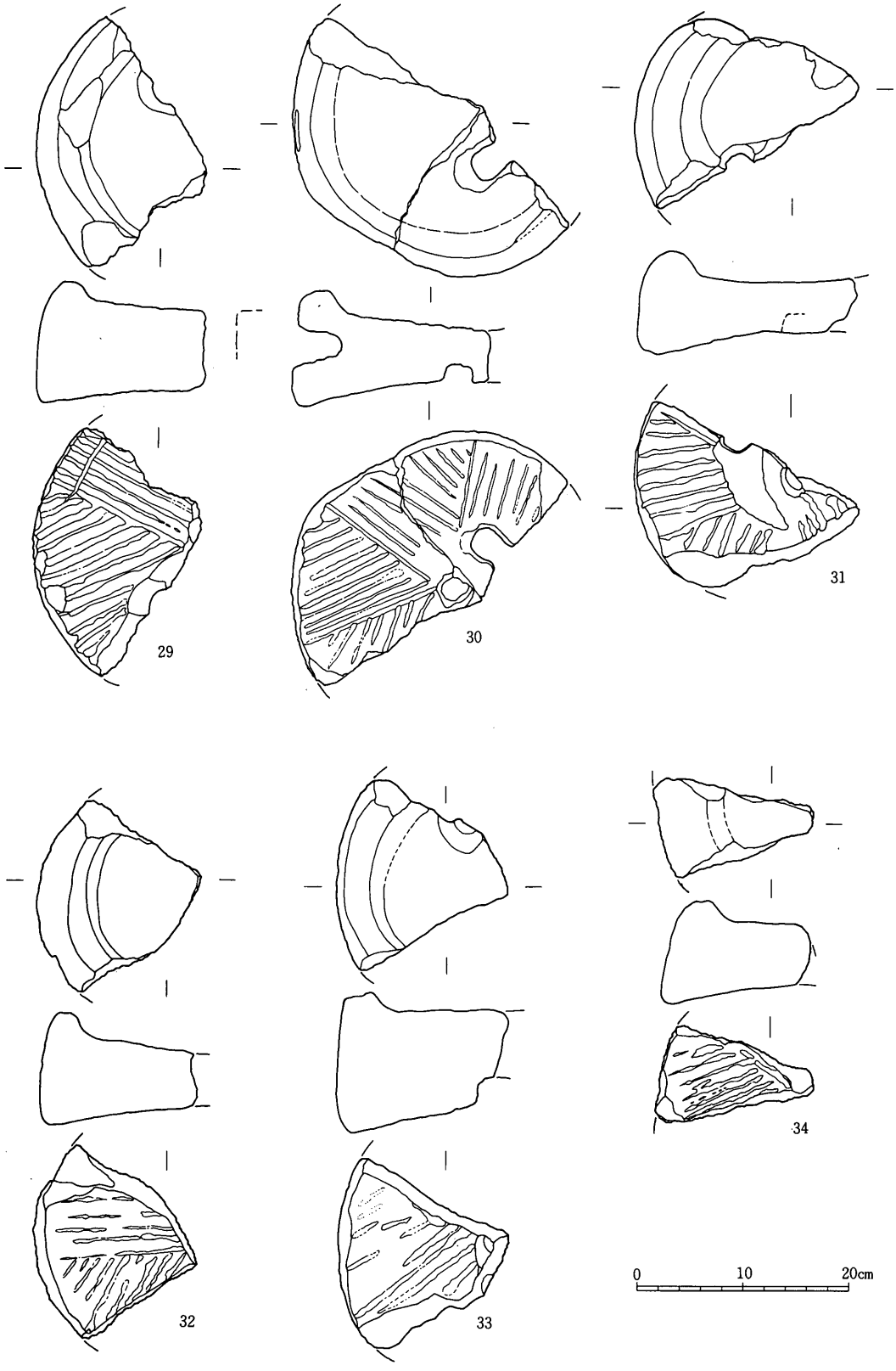
第68図　石器（1）



第69図　石器（2）



第70図　石器（3）



第71図　石器（4）

4．小結

今回の町区地内の調査は、圃場整備予定地内に元屋敷・永田屋敷の小字を残す水田が存在し、付近に島立氏屋敷の伝承もあることから、中世遺構の検出を目的として行ったものである。調査にあたっては永田屋敷、元屋敷の小字の残る水田のうち、元屋敷に当たる水田を調査区とした。その結果、現地割りに対応して方形に巡る溝と、その内部に多数の遺構を検出することとなった。区画北半については調査を行わず、「屋敷」の主屋となる様な建物の検出こそなかったものの、小字に関連するであろう遺構の有り方を示し、中世の集落を考える上で貴重な発見となった。

区画内の遺構については既に詳しく述べてきた通りであるが、まとめとして遺跡の性格について若干触れてみたい。まず長方形区画溝については、内法で南北38.5m、東西31mの長方形となるものであった。北西隅より、北に並走する堂沢から取水、水をはっていたものと考えられた。溝の幅、深さとも小さく、堀ないし濠とするには貧弱であるが、重要な点は、遺構のあり方がこの溝に規制される。即ち区画外には火葬墓１基を除き遺構が見られない点であろう。

区画内の遺構には竪穴状遺構、土壙、ピットがあり、溝より２～４mの空隙をおいた内側に分布する。遺物よりこれらの時期は16世紀前半にほぼ限定され、その前後のものは見られない。竪穴状遺構は竪１・２を除き切り合いがなく、適当な間隔をおいて位置している。各々が異なった構造をなしており、別々の機能をなしたものと考えられる。先にも述べたが、竪５は倉庫、竪４は何らかの作業場としての可能性を示すが、他については不明である。住居址としての可能性のあるものをしいて挙げるならば竪３・６が該当するが、柱穴、炉等全く見られず、生活遺物も少ない。

ピットは今回建物址に結びつけられなかったが、柱痕を時折残す径20cm前後のものが多く、竪１南方、東方付近に恐らく小規模な建物がくり返し建てられたものと考えられる。竪穴状遺構が固定的である点と全く対称的であり、半世紀という時間幅、ピットの大きさを考えれば、簡単な小屋様の、小規模なものしか想定できないであろう。島立地区内のこれまでの調査で見られた小径ピットの建物址と同様のものと考えられ、住居に結びつけるのは難しい。遺物は大変少なく、輸入陶磁は16世紀代のものは全く見られない。これもまた貧弱と言わざるを得ない。

このように方形区画とその内部に各種機能をなした施設が配置される点に居館址的な性格が見受けられるものの、「居館址」、「屋敷」とするには貧弱な構えと言えよう。今回北半の調査をなし得ず、全体の状況、主屋等明らかに出来なかったが、同様な方形区画溝は87年調査の三の宮遺跡にあり、“旧屋敷”という小字名、現地割と対応している。一応これらについては、屋敷的な居住域と考えておきたい。しかしその内部構造、居住人物の階層、性格、さらに島立氏との関連を考証するには不明な点が多く、今回の結果から論ずるのは困難である。長野道予定地内の調査成果等、今後の資料蓄積、さらに考古学、対献史学双方の知見の照合により島立郷の具体像が明らかにされよう。

第4章　調査のまとめ

今回の調査は、松本市が島立条里的遺構としてとらえている範囲の北部に当たる三ヶ所を調査した訳である。その結果小柴地内では遺構はほとんど検出できなかったが、現地形を形成した梓川の痕跡と、この地の開田が近世になってからであることを確認した。

永田地内では奈良時代から平安時代までの集落を調査した。これらは前年に実施した東際地区の遺構の時期範囲におさまり、さらに東側で行なった長野自動車道の発掘調査とも同様のものであった。又用地西部の溝1周辺は遺構もまばらでその西側は検出面が砂利層となり、恐らく古代の一集落単位のほぼ西限に近いものであろうと推測する。L字形に巡る溝は奈良時代以前のものであるが断面の所見からして用水路とはいえない。島立でも時期的に古いこの長い溝は一体何を区画したのであろうか。

町区地内では、当初からの予想通りというような結果であった。“元屋敷”という小字の区割の中に方形に巡る溝が出現した。溝の内側には中央部分に竪穴状遺構、土壙、ピット等が集中して検出され、これらはさほど多くない陶・磁器類から中世末期を中心としたごく短期間の遺構であると判断される。溝は北側に東へ流れる堂沢があり、ここからまず南へ入れて東側の池状遺構を通過させて、北東部分で再び堂沢へ落としていたものと思われる。北と東南に1条が分流するようすがみえるが、北側は土砂の堆積と西辺の溝のえぐられ深くなった様子から水を逃がす為のものと、東南も池の増水時の排水用のものと考えている。又溝は居住する空間を画するためと思うのだが、調査し得た南半部では居住に使用した可能性のある竪穴は見られない。多数検出したピットには確かに柱痕跡は残っており、これらから平地式掘立柱住居と考えたい。切り合った並びの悪いピットは何度も建て直したものと思われる。そして結果的には長期間とどまらなかったものである。

昨年の北栗遺跡調査では未報告ではあるが、溝巾1.5～3.5m、北側に2条北東隅で合流し1条となって東へ、そして南へ伸びる溝を確認している。西側は用地外の為不明であるが、南北の内法約40m、滞水の為か溝底は鉄分が沈澱し、遺物には内耳鍋と少量の陶・磁器類を得ている。全く町区地内の様相と異ならない。小字名では“屋敷添”は近くにあるが、“前田”という名称が付いている。島立には“屋敷”という名称がついた小字名が多数あり遺構との結びつきは注目しなくてはならない。

参考文献　『長野県埋蔵文化財センター　年報2・3』　1985・1986
『住居の歴史』　桑原　稔　　現代工学社

図　　版

小柴地内

近　景
東より

同
北より

同
調査中

第　1　図　版

永田地内

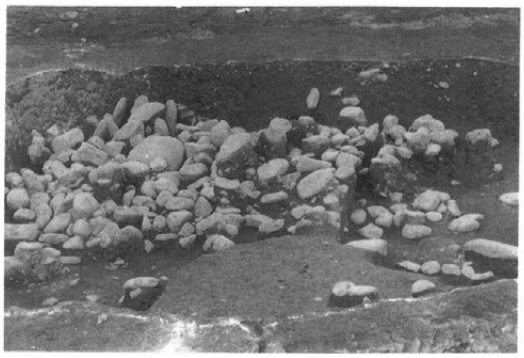
第4・5号住居址

同　上

第4号住居址カマド

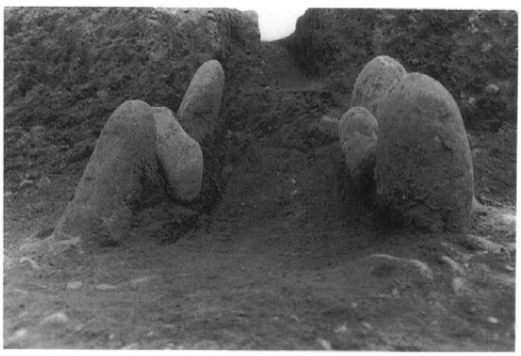
第　2　図　版

第５号住居址



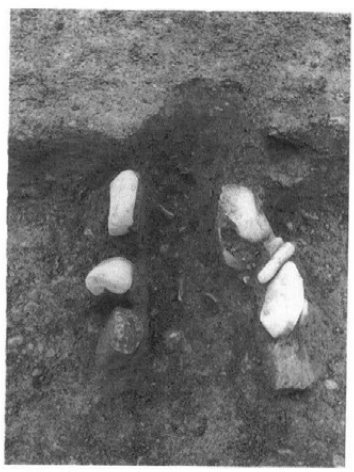
第５号住居址

第５号住居址カマド

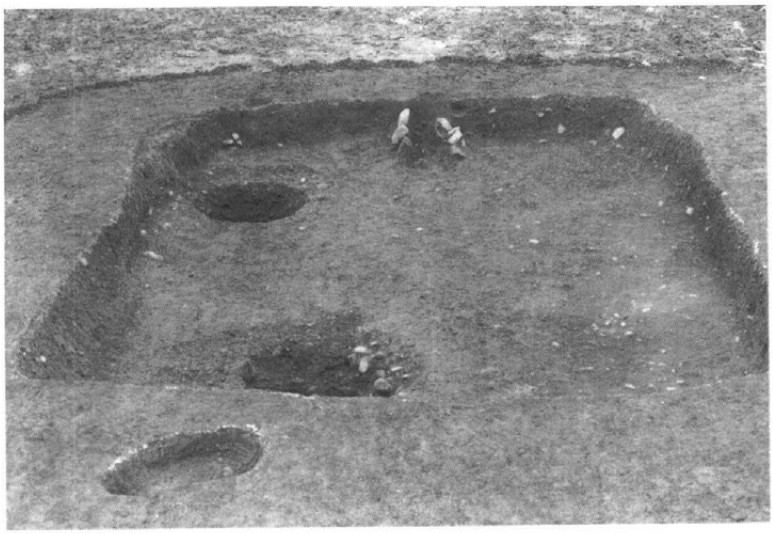


第５号住居址カマド

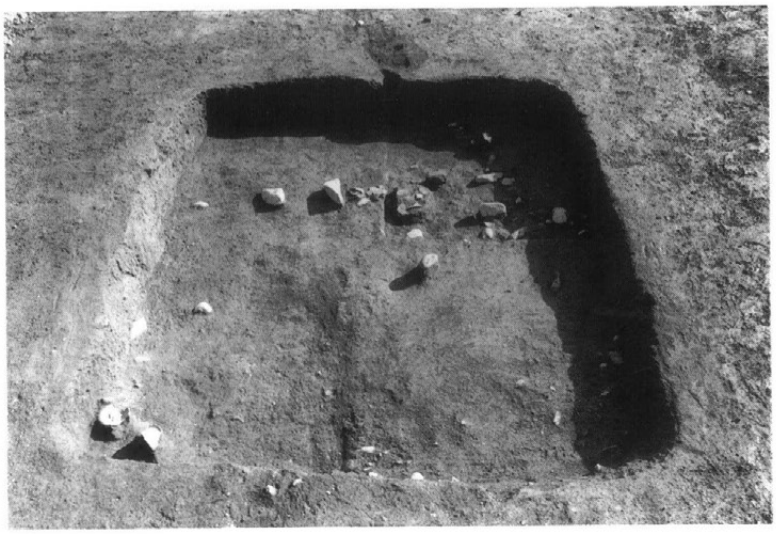
上：第６号住居址　右：同カマド



第　３　図　版



第 6 号住居址



第 7 号住居址

第 8 号住居址

第 4 図 版

第 9 号住居址

第10号住居址

第10号住居址カマド

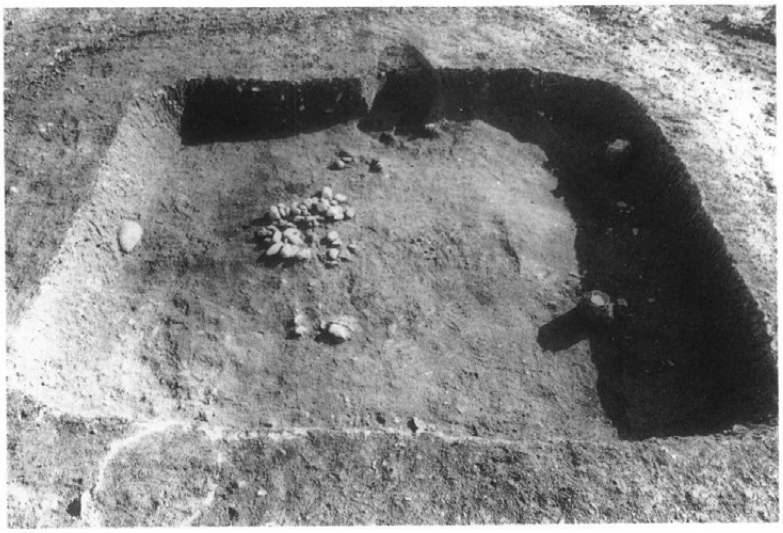
第　5　図　版

第11号住居址
土壙16

第12号住居址

第12号住居址カマド

第 6 図 版



第13号住居址

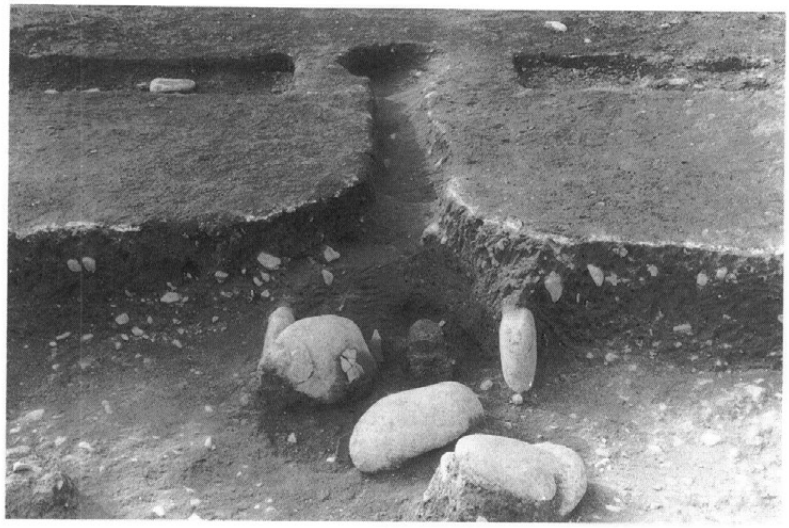
同カマド

第14号住居址

第 7 図 版

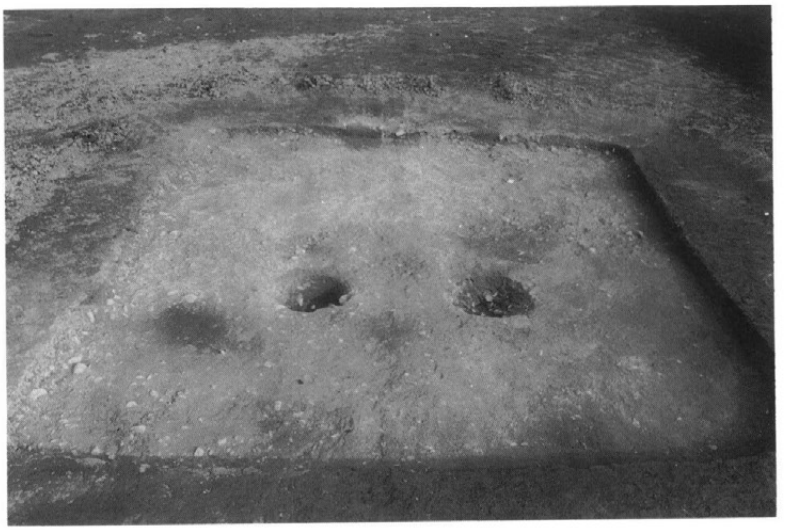
第14号住居址
カマド

第15号住居址



同カマド

第 8 図 版



第17号住居址

第19号住居址

第20号住居址

第 9 図 版

作業風景

建物址 1

建物址 3
柵列 3 ～ 5

第 10 図 版

建物址 5　土壙 5

柵列 1

建物址 6

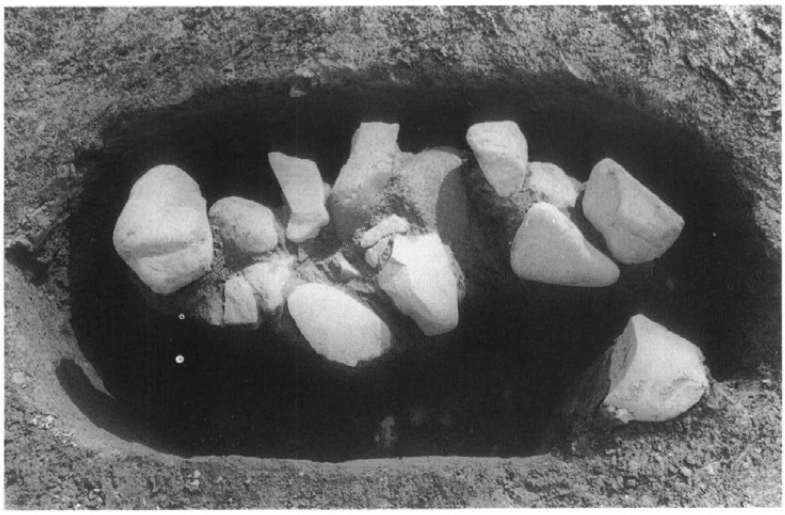
第 11 図 版

柵列３・５

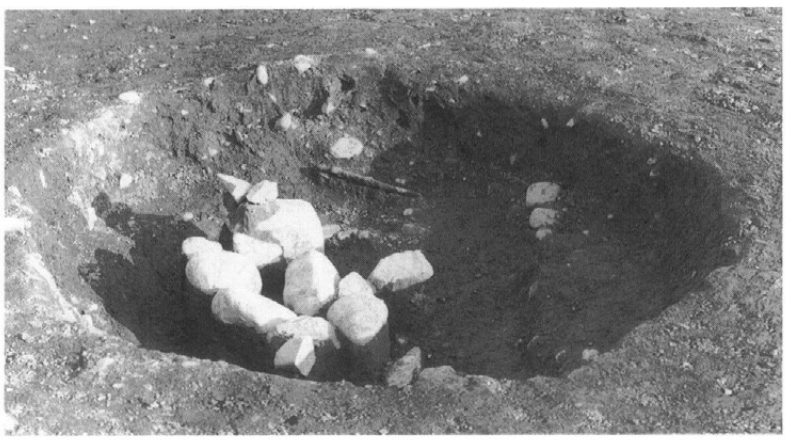
柵列４

土壙１

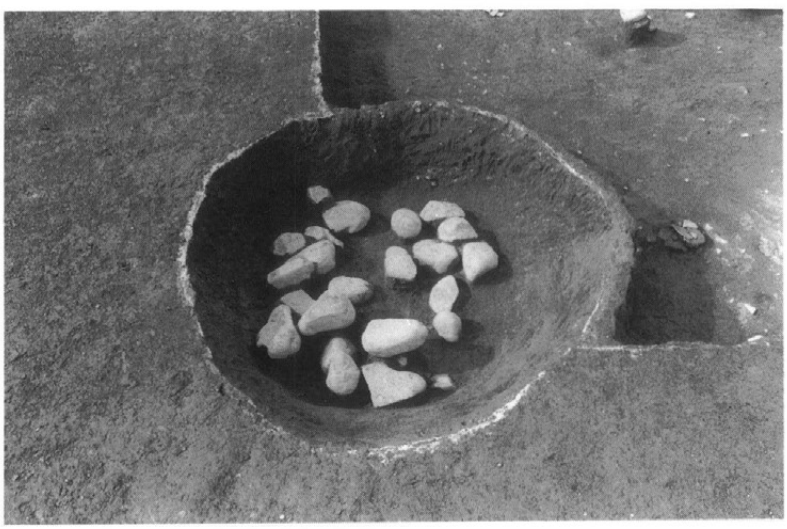
第 12 図 版



土壙 3



土壙 4



土壙 6

第 13 図 版

土壙 8

溝　1

溝　3

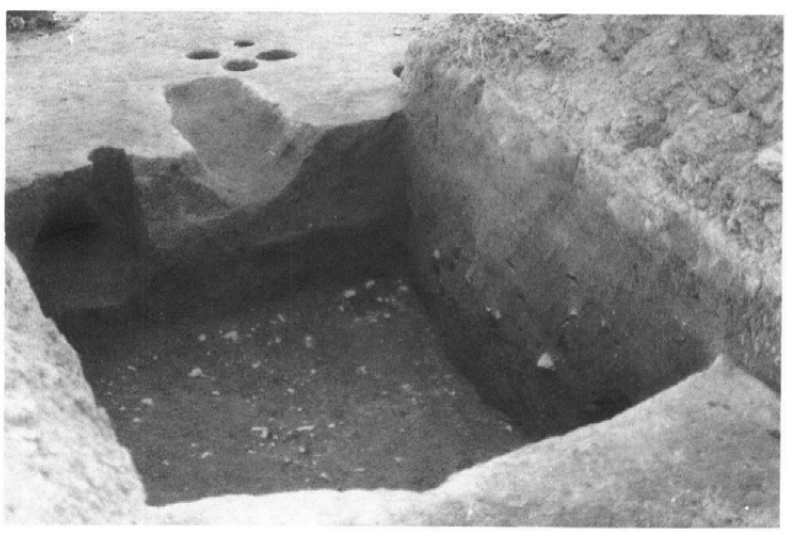
第 14 図 版

町区地内

竪穴状遺構 4

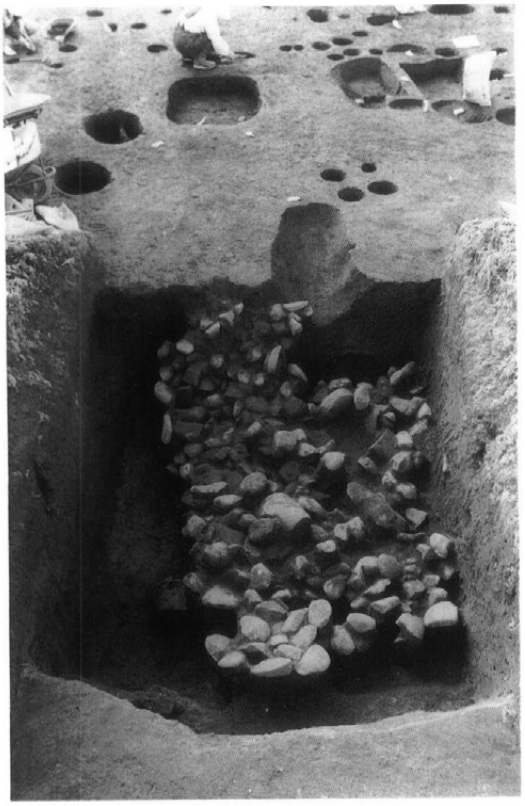
竪穴状遺構 6

土壙14

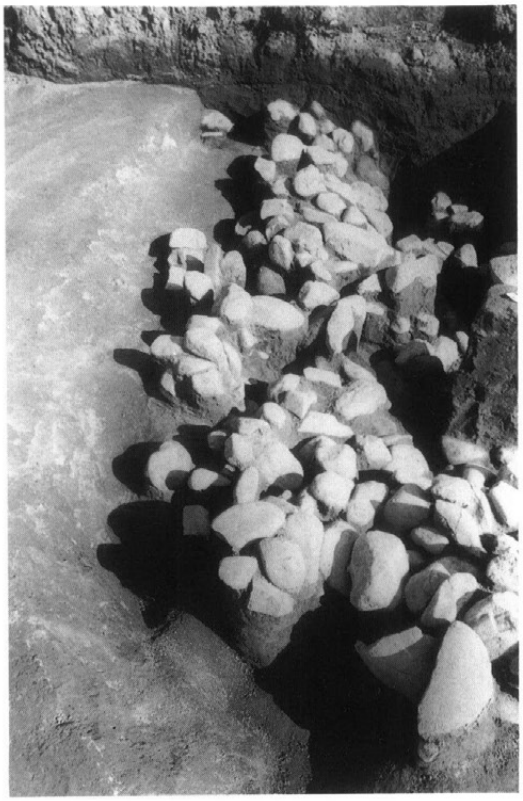


竪穴状遺構 5

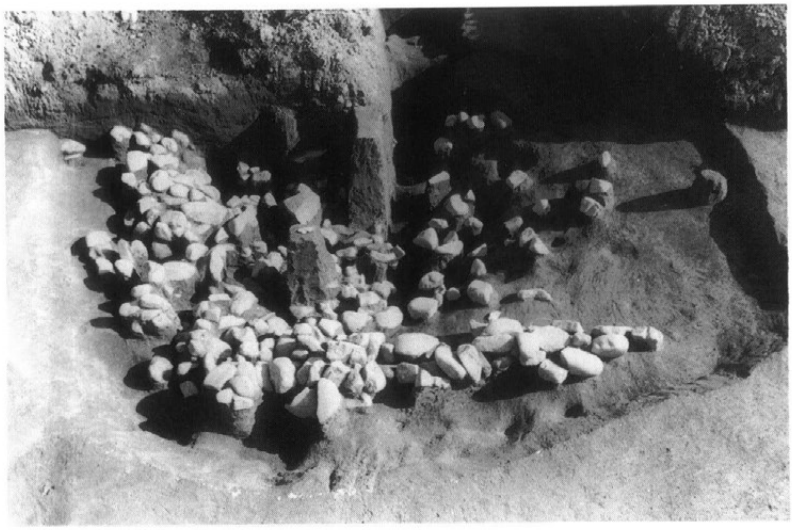
第 15 図 版



竪穴状遺構 5

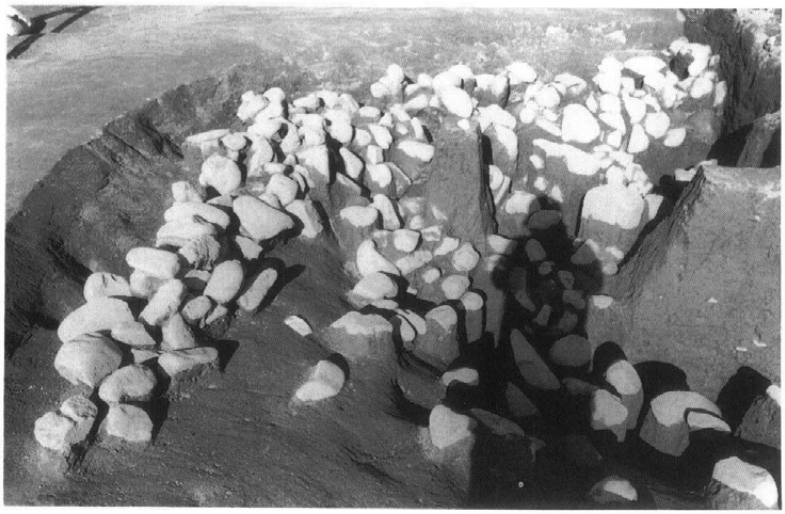


池状遺構

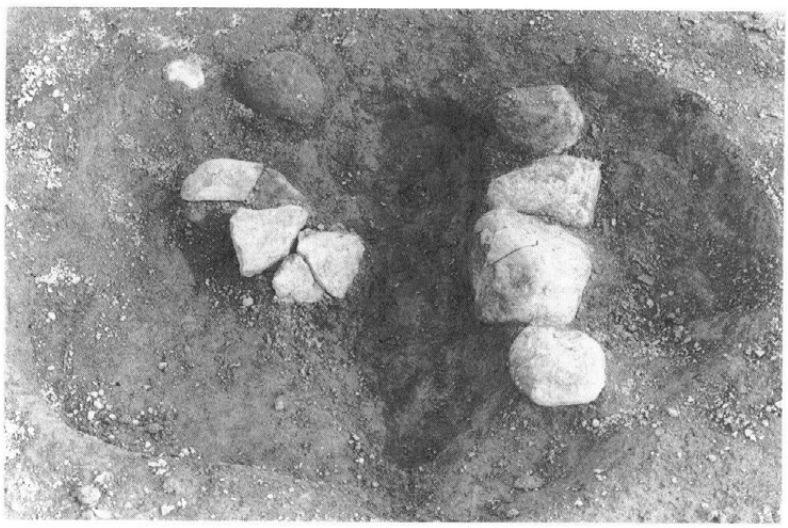


池状遺構

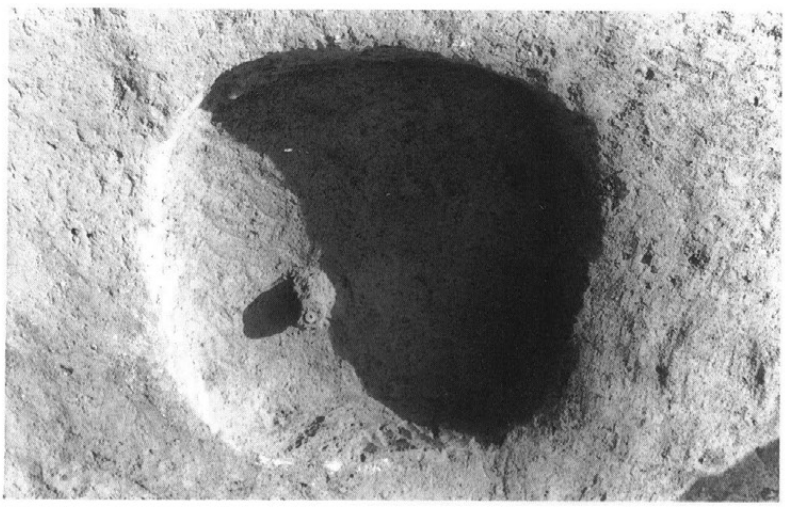
第 16 図 版



池状遺構

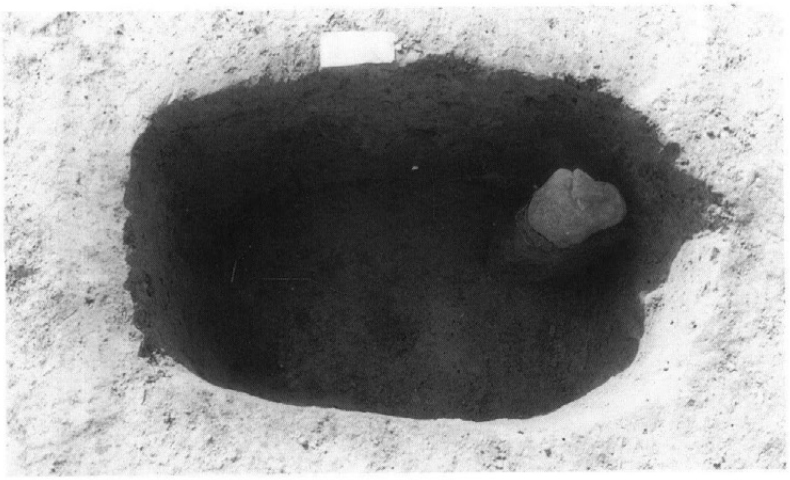


土壙 1

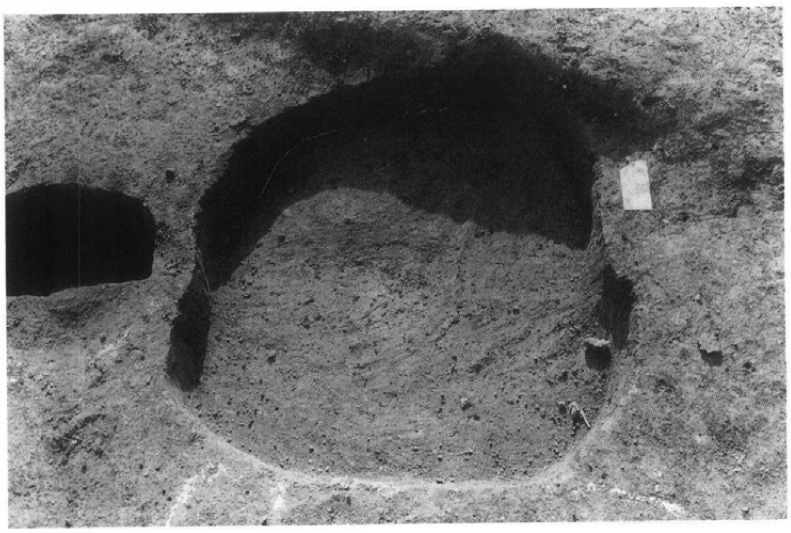


土壙 2

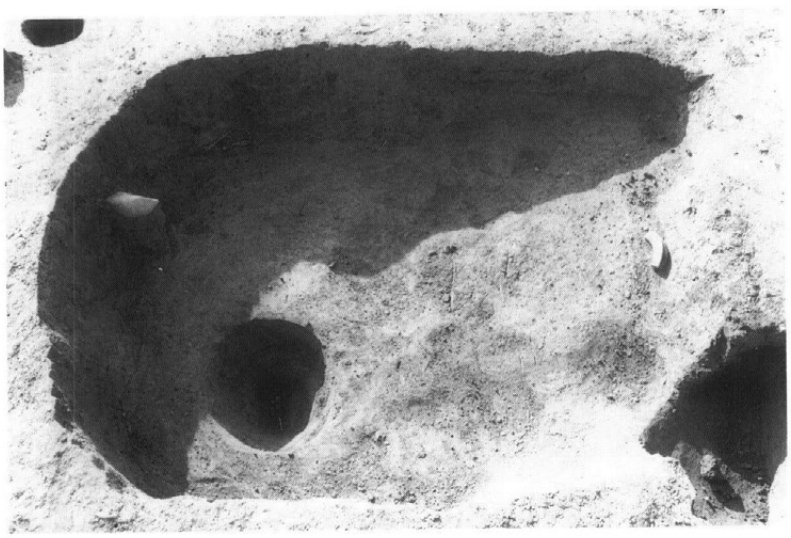
第 17 図 版



土壙 3

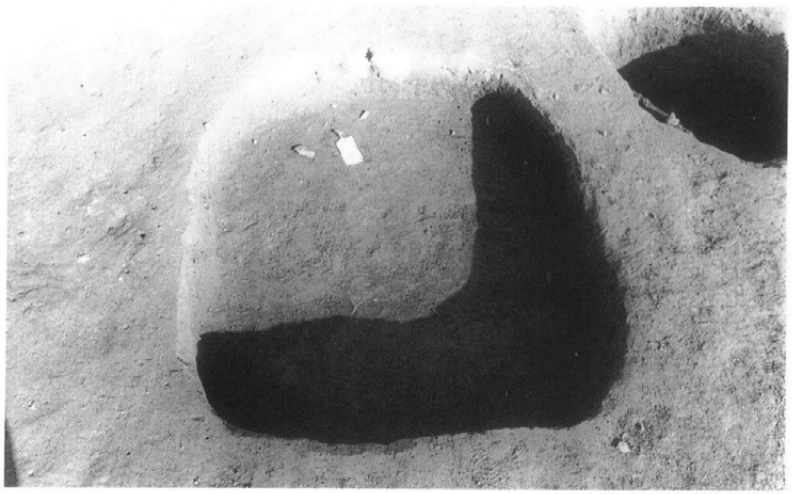


土壙 4

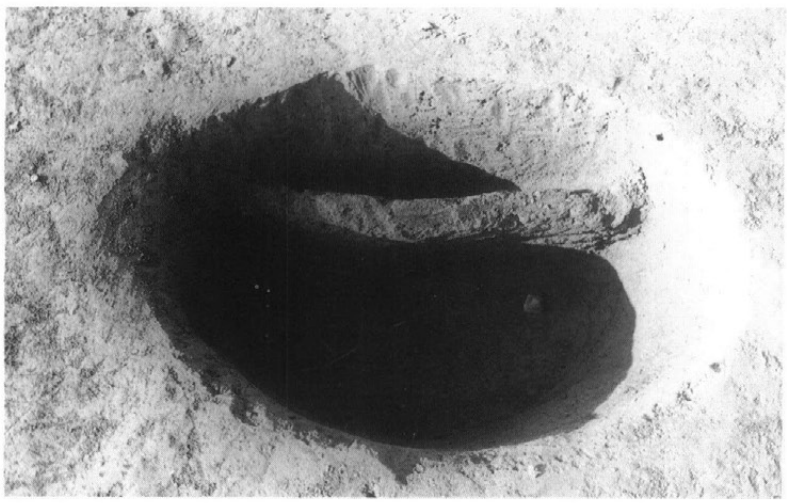


土壙 7

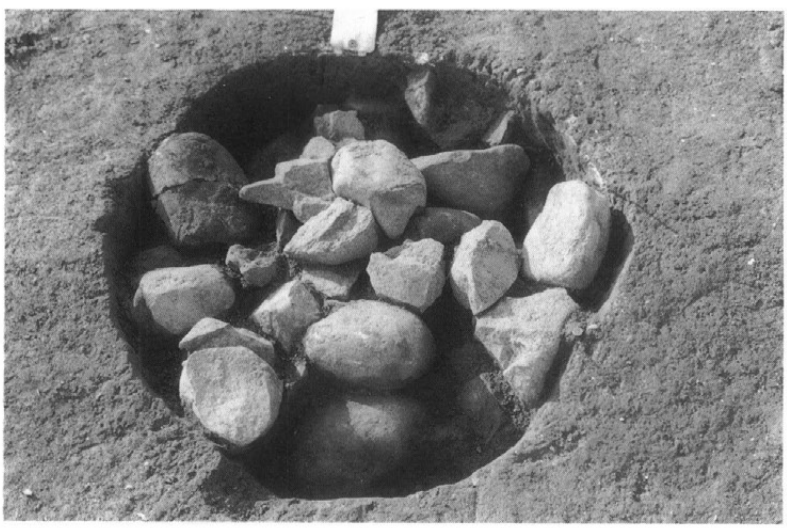
第 18 図 版



土壙12

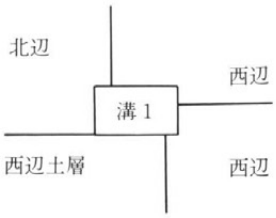


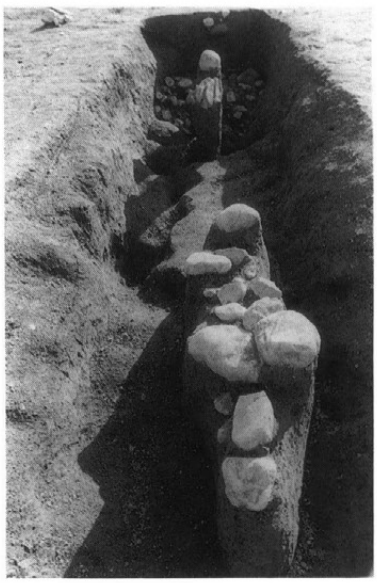
土壙13

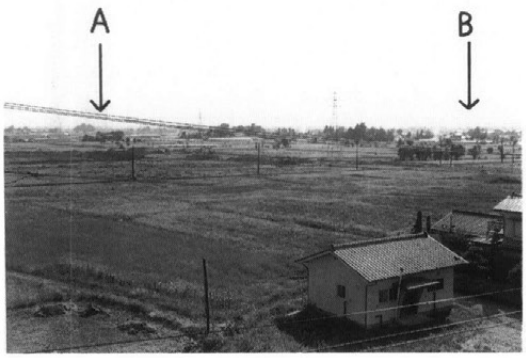


土壙16

第 19 図 版







遺跡遠景

A—永田地内

B—町区地内

第 20 図 版

永田地内

103

159

128

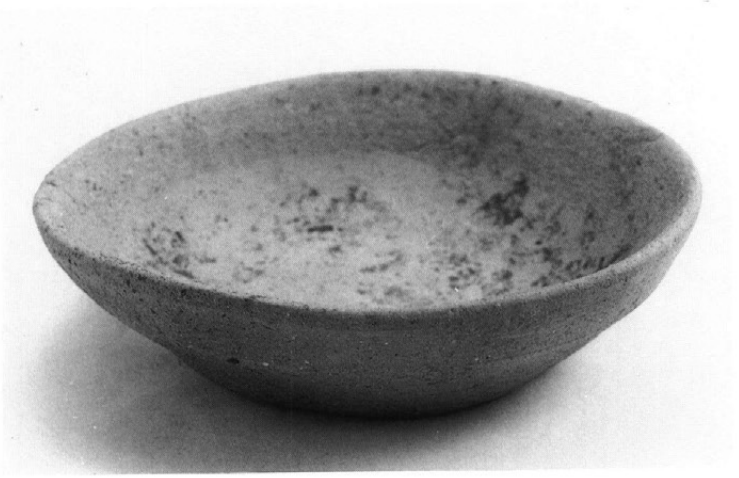
第 21 図 版

39

7

43

第 22 図 版



27

91

187

第 23 図 版

15

44

45

第 24 図 版

18

21

180

第 25 図 版

126

125

132

第 26 図 版

節足動物圧痕

墨書土器　89

墨書土器　11

刻書土器　79

第　27　図　版

6

16

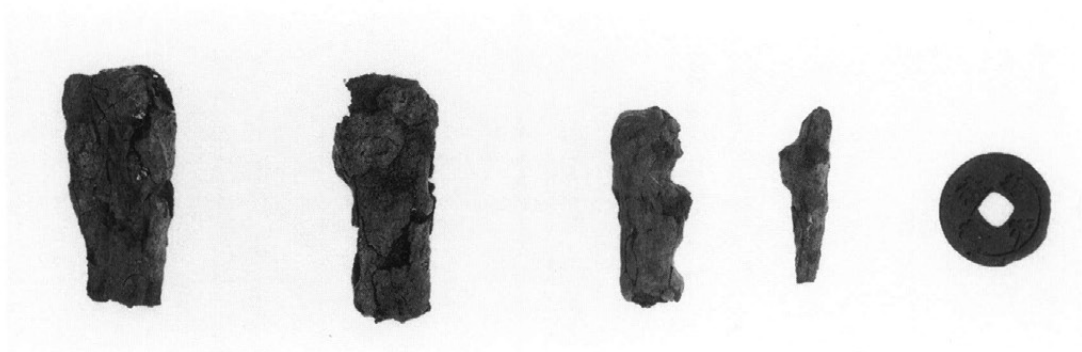
7

町区地内

9

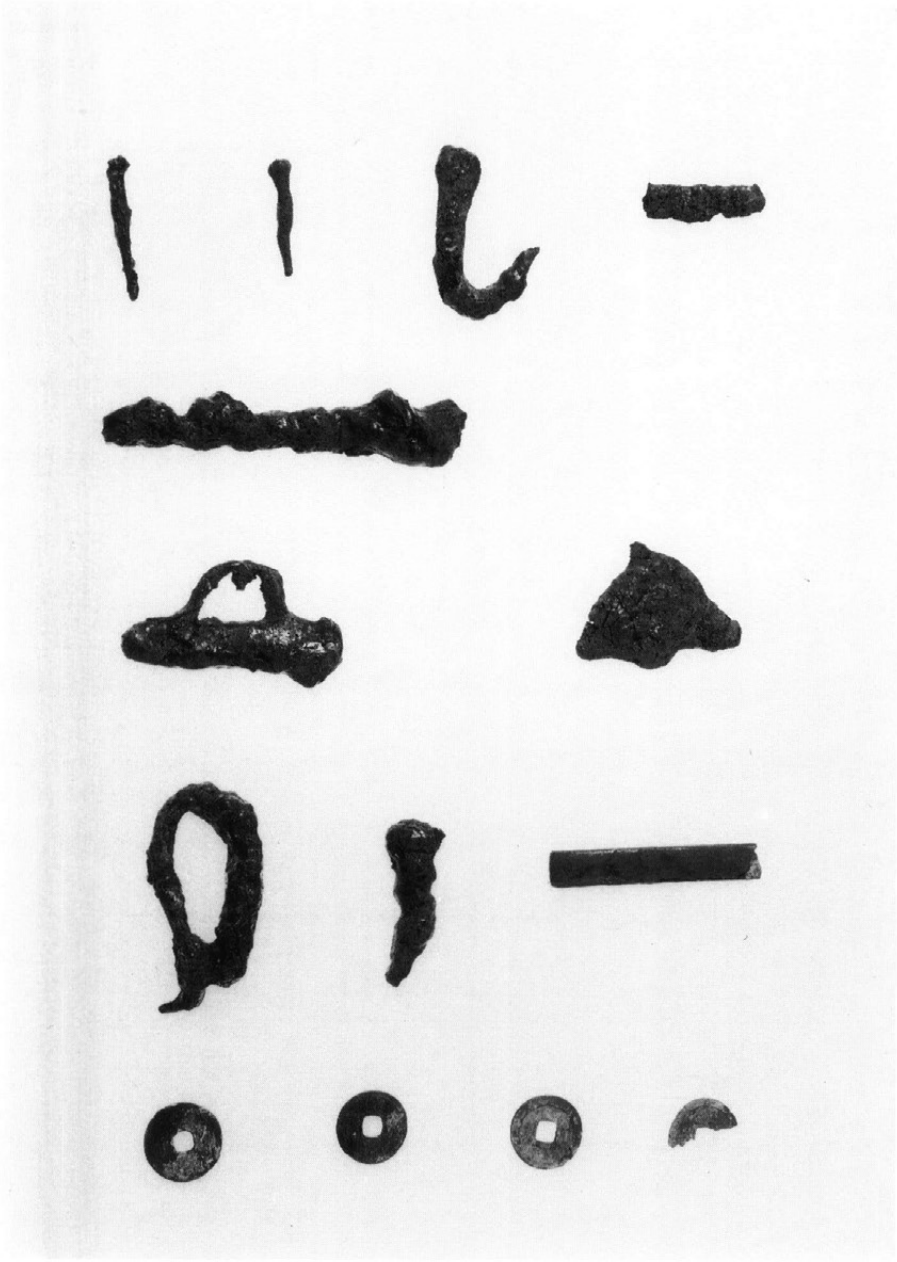
第 28 図 版

永田地内



小柴地内

第 29 図 版



町区地内

第 30 図 版

松本市文化財調査報告No.70

松本市島立条里的遺構 III

平成元年3月30日　印刷
平成元年3月31日　発行

発行　松本市教育委員会

印刷　電算印刷株式会社